

日本語 - 手話同時通訳の評価に関する研究

手話通訳の客観的分析および聴覚障害者の期待充足度に基づいて

**The evaluation of simultaneous interpretation between Japanese
and sign language :**

Based on objective analysis and deaf people's expectation

白澤 麻弓

目次

第1部 序論

第1章 研究の背景	2
第1節 手話通訳に関わる社会的背景	2
第2節 手話および手話通訳に関する基本的問題	7
第2章 本研究の前提となる先行研究	11
第1節 手話言語に関する研究の概観	11
第2節 音声同時通訳に関する研究	15
第3節 手話通訳に関する研究	22
第4節 手話通訳の評価に関する研究	26
第3章 研究の目的と論文の構成	32
第1節 本研究の目的	32
第2節 本論文の構成	33
第3節 用語の定義	35

第2部 本論

第4章 手話通訳の記述分析と客観的指標の抽出	38
第1節 目的	38
第2節 方法	38
第3節 訳出の量的側面	43
第4節 訳出の時間的側面	46
第5節 日本語から手話への変換	50
第6節 訳出された手話表現	64
第7節 音声同時通訳に比較した手話通訳の特徴	69
第8節 通訳事例ごとの手話通訳作業の特徴	72
第9節 手話通訳作業の客観的評価指標の抽出	76

第5章 聴覚障害者の手話通訳に対する期待	128
第1節 目的	128
第2節 方法	128
第3節 手話通訳の期待に関するインタビュー調査	129
第4節 手話通訳の期待に関する質問紙調査	133
第5節 手話通訳に対する期待の内容	141
第6章 期待充足度による手話通訳評価と客観的指標の関係	159
第1節 目的	159
第2節 方法	159
第3節 手話通訳に対する期待充足度尺度の構成	160
第4節 手話通訳に対する期待充足度の測定	163
第5節 期待充足度と通訳作業の客観的評価の関係	176
第3部 結論	
第7章 総合的考察	226
第1節 手話通訳作業の客観的評価指標	226
第2節 聴覚障害者の手話通訳への期待	228
第3節 聴覚障害者の期待の客観的指標による表現	229
第4節 手話通訳の養成に対する示唆	230
第5節 今後の課題	231
引用文献	234
参考文献	241
謝 辞	255

図表一覧

第I部 序 論

- 表 1 - 1 手話通訳士制度充実への取り組み
- 図 1 - 1 手話通訳の種類
- 表 2 - 1 手話の表記
- 図 2 - 1 形態素レベルの変化の例
- 図 2 - 2 類辞の例
- 表 2 - 2 各種通訳・翻訳における訳出時の情報量
- 図 3 - 1 本論文の構成

第 部 本 論

第4章 手話通訳の記述分析と客観的指標の抽出

第2節 方法

- 表 4 - 1 対象者のプロフィール
- 図 4 - 1 事例収集場面のセッティング
- 表 4 - 2 トランスクリプト表記上の留意点
- 図 4 - 2 トランスクリプトの例
- 図 4 - 3 タイムトランスクリプトの例
- 表 4 - 3 重要語の例
- 表 4 - 4 分析項目

第3節 訳出の量的側面

- 表 4 - 5 訳出率の算出方法
- 図 4 - 4 訳出語数と訳出率

第4節 訳出の時間的側面

- 図 4 - 5 2つ以上の文がまとめて表現されている時の文頭・文末の決定方法
- 表 4 - 6 総発話時間と総訳出時間
- 図 4 - 6 文頭・文末タイムラグの平均
- 図 4 - 7 文頭および文末タイムラグ
- 図 4 - 8 文章全体を通して見たタイムラグの推移
- 図 4 - 9 時間的側面から見た訳出パターン

第5節 日本語から手話への変換作業の記述

- 表 4 - 7 語レベルの変換作業
- 表 4 - 8 文レベルの変換作業
- 図 4 - 10 語レベルの変換作業
- 図 4 - 11 通訳者ごとの語レベルの変換作業
- 図 4 - 12 省略及び圧縮・統合の出現回数と訳出情報量
- 表 4 - 9 省略の種類
- 図 4 - 13 省略の種類と出現回数
- 図 4 - 14 各通訳者の用いている省略の種類
- 表 4 - 10 繰り返し部分の省略例
- 図 4 - 15 意図的省略を用いて訳出している例
- 図 4 - 16 脱落・訳出不可の例
- 表 4 - 12 言い換えの種類
- 図 4 - 17 言い換えの種類と出現回数
- 図 4 - 18 各通訳者の用いている言い換えの種類
- 図 4 - 19 各通訳者の用いている言い換えの種類ごとの比率
- 表 4 - 13 言い換える分類
- 表 4 - 14 言い換える正否
- 図 4 - 20 言い換える種類と成否
- 表 4 - 15 適切な言い換える例
- 表 4 - 16 不適切な言い換える例
- 表 4 - 17 付加の種類
- 図 4 - 21 付加の種類と出現回数
- 図 4 - 22 各通訳者が用いている付加の種類
- 表 4 - 18 原語借用の種類
- 図 4 - 23 原語借用の種類と出現回数
- 図 4 - 24 各通訳者が用いている原語借用の種類
- 表 4 - 19 圧縮統合の種類
- 図 4 - 25 圧縮・統合の種類と出現回数
- 図 4 - 26 各通訳者が用いている圧縮・統合の種類
- 図 4 - 27 文レベルの変換作業
- 表 4 - 20 通訳者ごとの分割の位置
- 図 4 - 28 各通訳者の文レベルの変換作業

図 4 - 29 省略パターンの例

図 4 - 30 言い換えパターンの例

図 4 - 31 圧縮・統合パターンの例

第 6 節 通訳者の用いた訳出表現の記述

表 4 - 21 各通訳者の用いている手話の分類

表 4 - 22 文中の区切れの表示についての分類

表 4 - 23 訳出の非流暢性についての分類

図 4 - 32 訳出表現内の手話の種類

図 4 - 33 各通訳者の用いている手話の種類

図 4 - 34 辞書形以外の異なり語の比率

図 4 - 35 通訳者ごとの文中の区切れの明確さ

図 4 - 36 訳出の非流暢性

図 4 - 37 通訳者ごとの訳出の非流暢性

第 5 章 聴覚障害者の手話通訳に対する期待

第 3 節 手話通訳の期待に関するインタビュー調査

表 5-1 聴覚障害者のプロフィール

表 5-2 手話通訳者のプロフィール

表 5-3 手話通訳に対する期待の内容

表 5-4 期待の内容を問う 55 項目

第 4 節 手話通訳の期待に関する質問紙調査

図 5-1 回答者の良耳平均聴力

図 5-2 回答者が用いているコミュニケーション手段

表 5-5 回答者の教育歴

図 5-3 手話通訳の利用頻度

図 5-4 手話通訳の利用場面

図 5-5 手話通訳に対する期待の全体的傾向

図 5-6 手話通訳の利用頻度による期待内容の違い

図 5-7 職場の研修場面での通訳利用有無による期待内容の違い

図 5-8 コミュニケーション手段による期待内容の違い

図 5-9 高等部段階における教育背景による期待内容の違い

図 5-10 一般大学経験の有無による期待内容の違い

第6章 期待充足度による手話通訳評価と客観的指標の関係

第3節 手話通訳に対する期待充足度尺度の構成

表6-1 回転後のパターン行列

表6-2 修正後のパターン行列

表6-3 期待充足度尺度項目と各項目の因子負荷量

表6-4 回転後のパターン行列

表6-5 因子ごとの相関マトリックス

表6-6 期待充足度尺度の内容

第4節 手話通訳に対する期待充足度の測定

図6-1 通訳事例の提示方法

表6-7 評価全体の流れ

図6-2 回答者の性別

図6-3 回答者の年齢

図6-4 回答者の聴力

図6-5 回答者の教育歴

図6-6 10～20代の回答者の教育歴

図6-7 30～60代の回答者の教育歴

図6-8 回答者の手話指導経験

図6-9 10～20代の回答者の手話指導経験

図6-10 30～60代の回答者の手話指導経験

図6-11 回答者の手話通訳利用頻度

図6-12 回答者の手話通訳利用場面

図6-13 10～20代の回答者の手話通訳利用頻度

図6-14 30～60代の回答者の手話通訳利用頻度

図6-15 10～20代の回答者の手話通訳利用場面

図6-17 30～60代の回答者の手話通訳利用場面

図6-18 回答者の手話通訳に対する期待内容

図6-19 年齢別に見た手期待内容の違い

表6-8 通訳事例ごとの総合評価と標準偏差

図6-20 通訳事例ごとの総合評価

図6-21 10～20代の回答者の各通訳事例に対する総合評価

- 図 6 - 22 30～60 代の回答者の各通訳事例に対する総合評価
- 図 6 - 23 通訳事例 A の下位項目得点
- 図 6 - 24 通訳事例 B の下位項目得点
- 図 6 - 25 通訳事例 C の下位項目得点
- 図 6 - 26 通訳事例 D の下位項目得点
- 図 6 - 27 通訳事例 E の下位項目得点
- 図 6 - 28 通訳事例 F の下位項目得点
- 図 6 - 29 通訳事例 A に対する年齢ごとの下位項目得点
- 図 6 - 30 通訳事例 B に対する年齢ごとの下位項目得点
- 図 6 - 31 通訳事例 C に対する年齢ごとの下位項目得点
- 図 6 - 32 通訳事例 D に対する年齢ごとの下位項目得点
- 図 6 - 33 通訳事例 E に対する年齢ごとの下位項目得点
- 図 6 - 34 通訳事例 F に対する年齢ごとの下位項目得点

第 5 節 期待充足度と通訳作業の客観的評価の関係

- 表 6 - 9 予測される期待充足度尺度と客観的指標の関係
- 表 6 - 10 期待充足度尺度得点と客観的指標の一致度
- 表 6 - 11 各通訳者の通訳作業と期待充足度の関係
- 表 6 - 12 聴覚障害者の期待と手話通訳作業の内容
- 表 6 - 13 若年層の聴覚障害者の期待と手話通訳作業の内容
- 表 6 - 14 中高年層の聴覚障害者の期待と手話通訳作業の内容

第 I 部
序 論

第1章 研究の背景

第1節 手話通訳に関わる社会的背景

1. 聴覚障害者のおかれた現状と手話通訳制度

聴覚障害は、一般的に「情報障害」であるとも言われる。つまり、聞こえないことそれ自体よりも、そこから生じる情報の不足、あるいは社会資源へのアクセス機会の不足の結果、社会生活を送る上で不利益を被ったり、障害者自身と周りの社会の間に情報のバリアが生じ、これが主たるハンディキャップとなっている現状があるということである。このような情報のバリアをとりはらうための方法には、聴覚や読話を活用すること、各種情報保障機器を使用すること、情報保障者によるサポートサービスを利用することなどが挙げられる。

上久保・比企・福田(1997)は、幅広い年齢層の聴覚障害者約 1700 人に対して行った調査を元に、口話や筆談、通訳の利用といった聴覚障害者の使用する言語媒体について、その使用傾向や有効性を分析し、特に式典や集会など言語使用の相手が多数になる場合は、口話や筆談といった言語媒体では有効性が低く、通訳者によるサポートが必要とされていることを明らかにしている。

太田(1997)は、こうした場面で使用可能な情報保障の手段として、手話通訳、速記型文字通訳、パソコン通訳、要約筆記通訳、ノート記録などを挙げ、それぞれを特性に応じて使い分けることが重要であるとしている。このうち手話通訳は 集団場面や即時性が求められる場面で有効であること、 話の内容を言葉のニュアンスも含めて忠実に伝えることが可能であること、 受け手である聴覚障害者の日本語能力に関係なく、多くの聴覚障害者に適用することができることなどの点で特徴的であるとされており(太田, 1997 ; 手話通訳認定基準等策定検討委員会, 1986 ; 全日本聾唖連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団, 1998)、さらに、手話通訳認定基準等策定検討委員会(1986)は、日本語を媒体とした各種情報保障の重要性を認めながらも、手話は多くの聴覚障害者にとって最も慣れ親しんだ言語であり、いわば母語とも言えることから、将来的に情報機器の開発が発展し実用化されたとしても、聴覚障害者にとっての手話通訳の重要性は失われることはない主張している。

約 26600 人を組織し(2001 年)、日本の聴覚障害者団体として最も規模が大きく、歴史も長い全日本聾唖連盟は、このような手話通訳を迅速かつ確実に得られるようにするための制度を確立するために、かねてより積極的な取り組みを行っている。その結果、1970 年に

手話奉仕員養成事業が身体障害者社会参加促進事業のメニュー事業として組み込まれ、それ以来、表 1-1 に示す通り、手話通訳設置事業の採用(1973 年)、手話奉仕員派遣事業開始(1976 年)、手話通訳士技能認定試験の実施(1989 年)、手話通訳養成カリキュラム開発・テキスト作成事業実施(全日本聾啞連盟, 1994 年から 1996 年)など、数多くの事業が展開されてきた(石原, 1994; 奥野, 1998; 全日本聾啞連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団, 1998; 全日本聾啞連盟, 1998)。この結果、現在では 47 都道府県すべてが手話奉仕員養成、派遣、設置事業のいずれかを実施するに至り(日本手話通訳士協会 手話通訳士実態調査委員会, 1994)、また手話通訳士の合格者数は約 1117 人(2002 年)、奉仕員の登録数が 6400 人を超える(1997 年)など一定の成果を上げるに至っている。

2. 現状における問題点と課題

前節で述べてきたように、過去 30 年余りの間に手話通訳制度にはかなりの躍進が見られた。しかしながら、現在においてもなお我が国における手話通訳制度は、質量ともに不十分な状況であると言わざるを得ない。すなわち、量的に見た場合、1989 年の手話通訳士技能認定試験実施以来、10 年以上経過した現在においても、手話通訳士試験の合格者数が、全日本聾唖連盟が 1985 年に掲げた目標数 4000 人(聴覚障害者 100 人に 1 人)の約 4 分の 1 に留まっているという実情がある。

また、このことは質的な面にも反映しており、全国手話通訳問題研究会(1996)は、1990 年と 96 年の 2 回にわたる手話通訳者に対する全国調査の結果から、通訳者の人材不足から、自分自身の通訳技術が不足している状態であっても、実際の通訳活動や後継者の養成に関わらざるを得ず、通訳者の多くが通訳の力量や技術不足に不安を感じていること、日々の業務に終わって学習時間が確保できないことなど、通訳者の質的向上の困難性を指摘している。

さらに近年は、高等教育機関に進学する聴覚障害者の数が増加し、ここ数年の差別法規撤廃運動ともあいまって、高等教育機関や各種専門分野など新たな通訳ニーズの高まりが顕になってきている。しかしこれまでの手話通訳制度の体制が在宅福祉サービスを基本に発展してきたことから、これらの要請に対する対応が立ち遅れ(全日本聾唖連盟手話通訳制度調査検討委員会, 1985; 奥野, 1998; 全日本聾唖連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団, 1998)、専門機関における情報保障のほとんどが、必要な養成を受けていないボランティアによってまかなわれている状態にある(野村, 1990 ; 大泉, 1994 ; 白澤・徳田, 1998, 1999a, 1999b)。

これに対して、手話通訳先進国といわれる米国では、1972 年から世界に先駆けて RID (Registry of Interpreter for the Deaf; 全米手話通訳者協会) が手話通訳資格試験を実施してきている。その内容も、資格の種類が 1 種類のみのが国とは異なり、使用手話や音声から手話、あるいは手話から音声といった通訳の方向、通訳場面等、各種状況に特化した通訳資格を発行するなど、さまざまな検討が加えられてきている。またわが国では、手話通訳者の養成のほとんどを地域で実施されるボランティア講座に頼っており、公的な養成機関が国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科および世田谷福祉専門学校手話通訳学科の 2 箇所しかないのに対し(2002 年)、米国では手話通訳養成プログラムを持つ大学および短期大学が 74 校あり、このうち大学院修士課程レベルで養成を行っている機関が 7 箇所、大学学部レベルが 53 箇所ある(Programs and Services for the

Deaf ,2001)など、短大や大学などの高等教育機関で正式なカリキュラムに則って行われている。このように質的な向上を目指すという視点から言えば、わが国の現状は立ち遅れていると言わざるを得ない。

このような現状に対し、手話通訳士育成指導者養成委員会(1998)も、手話通訳の量的・質的拡大に向け、これまでの手話通訳者の養成が通訳ではなく手話の学習に焦点をあててきたという現状を見直し、経験や個人の努力に頼る形の養成から、今後はより体系的な手話通訳学習の実施していく必要があること、そのためには前提となる理論研究や実践分析が不可欠なこと述べている。そして、1994年から96年にかけて実施された「手話通訳士養成カリキュラム開発・テキスト作成事業」の成果を改めて整理し、手話通訳技術が手話や音声の表現技術や翻訳技術などの「狭義の手話通訳技術」と、聴覚障害者への理解や問題状況への対応などを含む「手話通訳実践技術」に分けられること、手話通訳の客観的評価のひとつとして、「豊かな語彙とその選択」、「表情」、「主語の明確化」、「代名詞化」、「時間・空間表現」、「写像的表現」、「同時的表現」といった「7つのポイント」が有効であること指摘している(同上, 1998)。しかしながら、ここで取り上げられた評価方法は、評価の対象が訳出された手話表現のみに留まっており、日本語と手話の間の翻訳を含む通訳技術全体を包括するものではない、評価の観点も、ここ数十年来日本においても発展してきた手話言語学の知見をくむものではなく、日本手話に必要な文法等が十分に反映されていない、評価の方法が主観に頼らざるを得ないなどの問題点があると考えられる。また、通訳技術の養成方法として同委員会が提案している方法は、今のところ音声同時通訳で従来より用いられている練習方法を引用するのみに留まっており、手話通訳独自の通訳作業を反映した養成方法は十分に確立されていない現状にある。

さらに、通訳の受け手となる聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待の内容について明らかにする必要は言及されているものの、個々によって異なることへの留意をうながす程度の段階であり、全体的な傾向や聴覚障害者の背景による期待内容の違いについては明らかではなく、手話通訳の目指すべき方向性についてもまだ曖昧な状態である。

このような現状の打開に向けて、まず第1に手話通訳という作業自体を詳細に記述分析し、手話通訳に求められる作業内容を整理することが不可欠ではないかと考えられる。さらに、聴覚障害の手話通訳に対する期待内容を把握し、これらが通訳の場面や対象によってどのように異なるのかを明らかにすることが必要である。特に今後新たに求められるであろう通訳ニーズに対応するために、高等教育場面あるいは各種専門に特化した場面において、若い世代の聴覚障害者がどのような通訳を望んでいるか、またそれはこれまで実践

的に行われてきた生活場面での通訳とどのように共通し、また異なっているのかを具体的に提示することが必要である。それらの知見を元に、手話通訳の質的向上に結びつく通訳養成の方法を開発していくことが当面の課題であり、このことが聴覚障害者のさまざまなニーズに応える手話通訳制度の整備につながることを期待したい。

第2節 手話および手話通訳に関する基本的問題

第1節では、現状における手話通訳制度の問題点とこれから取り組むべき課題について述べた。本節では手話および手話通訳に関して議論を進める際に前提となる基本的問題として、手話の種類および手話通訳の種類について整理しておくこととする。

1. 手話の種類

日本で用いられている手話はすべて一様ではなく、使用する人や場面によっていくつかのバリエーションがあることが知られている。神田(1994)は手話の種類として、日本語とは別の言語体系を持つと考えられている「日本手話」(近年まで「伝統的手話」と呼称されていた)手話単語を日本語の語順に配列し、指文字などで助詞などを加える「日本語対应手話」あるいは「同時法的手話」、およびその混合である「中間的手話」「ピジン手話」などを挙げ、これらを混同することなく認識すべきであると述べている。本研究では、日本語とは別の独自の文法構造を持ち、古くから聴覚障害者によって用いられてきた手話のことを「日本手話」とし、音声言語との併用を前提とし、日本語の語順にそって手話単語を配列していく手話を「日本語対应手話」とする。さらに、これらの中間に位置し、両者の要素を取り入れた手話を「中間的手話」と呼ぶこととする。

また、日本手話やアメリカ手話(American Sign Language; ASL(以下 ASL とする))など各国に存在する音声言語とは別の独自の文法構造を持った手話を総称する語として「手話言語」という用語を用いる。また、単に「手話」としたときには、手話通訳者によって現実的に用いられている手話一般を指すこととする。

2. 手話通訳の種類

手話通訳には、図 1-1 に示すとおり日本語を聞いて手話に訳す「聞き取り通訳」と、手話を見て日本語に変換する「読み取り通訳」の2種類があり、それぞれについて聴取と訳出を同時に行う「同時通訳」と、一定の情報を聴取した後、訳出を行う「逐次通訳」が存在する。

このうち一般的には、音声で話されている情報を同時的に手話に変換していく聞き取り同時通訳の使用頻度が最も高いので、本研究でも単に手話通訳といった場合、日本語から手話への同時通訳をさすものとし、その他の手話通訳に言及する必要がある場合は、読み取り通訳や逐次通訳と明示して扱うこととする。

しかし手話通訳の場合、同時通訳方式の頻度が高いのに対して、音声言語間の通訳の場合、まず逐次通訳の能力をベースとして習得した後、同時通訳に移行するという順序を取

っており、手話通訳分野でも逐次通訳の重要性が見直されつつある。特に通訳の養成段階では、ひとつひとつの単語にとらわれず、意味のまとまりとして正確に伝えるためのトレーニングとして逐次通訳を導入する例も報告されていることから(鳥越,1996)、今後広がりを見せる可能性があると考えられる。

また、手話から日本語への読み取り通訳は、聴覚障害者自身の声を周りの聴者に伝える手段として非常に重要なものであり、特に聴覚障害者が日本手話で発信する場合は、十分日本手話に精通していることが必要不可欠である。しかし、現時点では通訳に支障をきたす通訳者が少なくないことから、近年聴覚障害者の中で読み取り通訳能力の向上を求める声が高まっているのも事実である。こうした読み取り通訳の困難性は、これまでの手話学習が手話の表出に重点をおいてきたことも影響していると考えられるが、読み取り通訳時の通訳者のエラー分析などを通して、読み取り通訳が困難になる原因を探っていく必要があるだろう。

米国を中心とする先行研究においては、手話通訳を音声言語と手話言語の間のコード変換を行う「手話通訳 (interpretation)」と、対応手話を用いて伝達モードのみを変換する「字訳 (transliteration)」にわけ、これらを区別して取り扱っている (Stewart, Schein, Cartwright, 1998; Siple, 1997; Solow, 1999; Frishberg, 1990 など)。しかしわが国においては、まれに「日本語対応手話による通訳」「日本手話による通訳」など、使用する手話によって注釈をつけて通訳を区別することはあっても、一般的にこれらを分けて論ずる土壌が備わっておらず、通訳の受け手や場面による使用手話の使い分けの実態なども現時点では明らかではない。そのため、手話通訳研究を進める際には、こうした通訳者の使用手話による区別が可能かどうかを含めて研究対象とするのが妥当であろうと考えられる。

表 1 - 1 手話通訳士制度充実への取り組み

厚生省	全日本ろうあ連盟	その他
		1953 手話学習会みみずく誕生 (1995年現在 手話サークル1687団体、会員数約40000人) 1969 「わたしたちの手話」第1巻発行
1970 「身体障害者社会参加促進事業」手話奉仕員養成事業	1972 手話通訳についての当面の方針	
1973 「地域活動促進事業」手話奉仕員養成事業 手話通訳設置事業	1973 手話通訳制度についての当面の方針	1973 手話協力員制度(労働省) 1973 東京都で手話通訳派遣事業開始 1974 全国手話通訳問題研究会 1974 静岡テレビ「ワイドイン静岡」に手話通訳挿入
1976 「地域活動促進事業」手話奉仕員養成事業 手話通訳設置事業 手話奉仕員派遣事業		
1979 「障害者社会参加促進事業」	1979 標準手話研究事業	
1981 国際障害者年		
1982 手話通訳制度に関する調査を要請	1982～1985 手話通訳制度調査検討委員会 1985 手話通訳制度調査検討報告書 1986～1988 手話通訳認定基準等策定検討委員会 1988 手話通訳士(仮称)認定基準等に関する報告書	
1989 手話通訳士技能認定試験(1998年現在約900名)		
1990 「障害者の明るい暮らし」促進事業 手話奉仕員養成事業 手話奉仕員派遣事業 手話通訳設置事業	1993 標準手話普及定着事業 1994～1996 手話通訳養成カリキュラム開発・テキスト作成事業	1990 国立身体障害者リハビリテーションセンター手話通訳課程設立 1990 NHK 手話ニュース開始
1995 「市町村障害者社会参加促進事業」市町村レベルの手話奉仕員養成事業 手話奉仕員派遣事業 手話通訳設置事業		1995 参議院比例代表選挙のテレビ政見放送に手話通訳設置
1997 手話奉仕員養成カリキュラム等検討会 (1997年現在手話奉仕員の登録数6400人)	1997 倫理規定の制定(手話通訳士協会) 1997～1998 手話通訳士育成指導者養成事業	(1995年現在 都道府県レベル手話講習会42箇所、受講生約14000人) (1995年現在 市区町村レベル手話講習会310箇所、受講生約28640人)

石原(1994)、奥野(1998)、全日本聾啞連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団(1998)等を元に作成

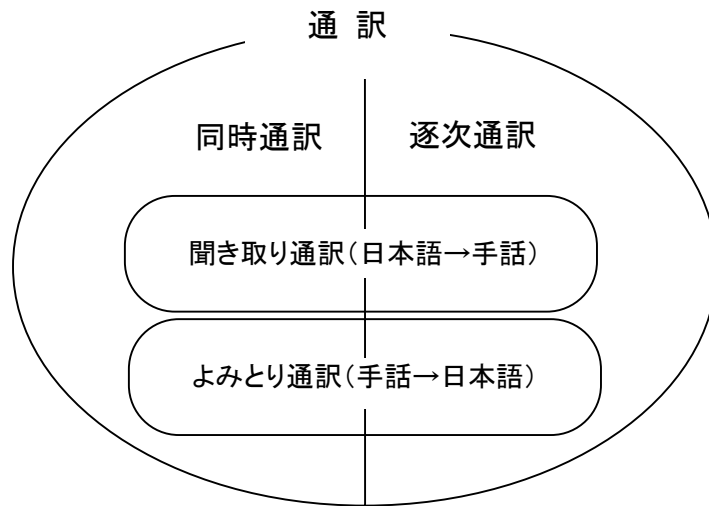


図 1 - 1 手話通訳の種類

第 2 章 本研究の前提となる先行研究

本章では、手話通訳に関する研究動向に先立ち、まず、手話の特性について触れ、ここ数十年来高まりを見せている手話研究の内容について簡単に紹介する。次に、通訳に関する研究として、手話通訳よりも以前から研究対象とされ、研究データの蓄積もなされている音声による同時通訳の研究動向について概観する。なお、ここでは日 - 英同時通訳など、音声の 2 言語間における同時通訳を、手話通訳と対比して「音声同時通訳」と呼ぶこととする。最後にこれらの内容を踏まえ、手話通訳研究でこれまで明らかにされてきた内容について述べ、現在の手話通訳に関する課題を解決するために取り組むべき研究課題を明らかにする。

第 1 節 手話言語に関する研究の概観

1. 手話の表記に関する研究

Stokoe(1960)は、聴覚障害者が日常的に使用している手話を世界で始めて言語学的に分析し、音声語における単語が音素によって構成されているのと同様、ASL における手話単語が「手の形」「位置」「動き」の 3 つの要素(ケリム)から構成されていることを発見している*。以来、手話を言語学的に分析する手話言語学は手話学と呼ばれ、世界各地に広がりを見せることになった。

手話学を構成する研究の 1 つとして、Stokoe 自身も積極的に取り組んだ表記法の開発が挙げられる。これは、手話の「音韻」の研究とともに発展してきたもので、現在のところ代表的なものとしてストーキー法(Stokoe, Casterline, Croneberg, 1965)やサットン法(Sutton, 1978)などが挙げられる。これらはいわば音声言語の国際音声字母にあたるもので、手話の表記の試みの第一歩であると言える。しかしながら、長年にわたる研究の成果をもってしても、未だ手話の表記法は十分に確立されている段階にはなく、我が国においても、日本手話の表記法についての研究が進められてはいるが(Kato, 1987; 本名・神田・小田・加藤, 1984 など)、一致した見解は得られていない。そのため、手話の文法研究などでは、一般的に手話単語の日本語訳のうち代表的なもの 1 つをこの手話単語の「ラベル」として用いて記述する方法用いられており(Baker & Cokely, 1980; 神田, 1994; 市田, 1998; Valli

* これに対して Battison (1978) は第 4 の要素として「手のひらの向き」を提案しており、現在では「手の形」「位置」「動き」「向き」の 4 つを ASL の単語を構成する要素と見る見方が一般的である。これらの要素は、音声言語における音韻と同様の機能を持つと考えられることから、手話学の中では手話の「音韻」と呼ばれている。

& Lucas, 2000 など)、本研究でもこの方法に則り手話の記述を行うこととする。このラベルは、通常日本語と区別するために手話単語ごとに / / でくられる。また手話には、手の動き以外に頭の動き、表情（眉の動き、視線、口形など）、上体の動きなどの手指以外の動きが重要な役割を持つことが指摘されており、これらは非手指動作（non-manual-signals ; NMS）と呼ばれ（市田,1997）、表記の際には通常補助記号を用いて表記される。本研究では Baker & Cokely(1980)、市田(1994; 1997)、神田(1994)、神田・藤野(1996)、Valli & Lucas, 2000 らにならって表 2-1 に示すような補助記号を用いた。なお、手話における単語の意味範囲は、日本語のそれと必ずしも一致しないため、手話単語につけられるラベルは、その単語を表記するために便宜的に用いるものであり、使用された手話の正確な意味を示すものではない。

2. 日本手話の文法研究

わが国における日本手話の研究は、文法研究を中心に進められており、その内容は音韻論、形態論、統語論など、従来の音声言語における言語学を基盤として発展してきている。この結果得られた知見として、まず音韻論的には手話単語は、1つの動きがあるかたまりとしてではなく、手型、位置、運動の構成要素単位の組みあわせとして分析的に処理されることが指摘されている(神田, 1994)。また、手話における形態素(意味を持つ最小の単位)の存在もかねてより指摘されており、形態素同士が同時に結合することで意味が変化する点では音声言語と同様である。しかし手話の場合、例えば/来る/という単語が、図 2-1 に示すように手型がそれぞれ/#男/や/#2人/に転換されることで、「男の人が来る」「2人来る」などの意味に変化するなど、手型と運動の組み合わせによって意味がさまざまに変化する点で特徴的である。ここで用いられる手型は「類辞」と呼ばれ、手話言語に特徴的な形態素であるとされている(Baker & Cokely, 1980 ; 市田, 1994, 1997; 神田, 1994 ; 神田・藤野, 1996 ; Valli & Lucas, 2000 など)。類辞は、日本語の類詞(「～枚」「～本」など)にあたるものであり、手型が物そのものの代理をするとともに、そのものの類型的特徴(形や大きさ、物の表面や輪郭、道具を扱うときの手の形など)を示すものである(神田, 1994 ; 市田, 1997)。類辞には手型が物そのものの形状を表す SASS(Size And Space Specifies)(日本手話では /#車/ を表す手型など、図 2-2 参照)や、物を取り扱うしぐさをまねる取り扱い類辞(handle)(運転する動作で表す /#車/ など)、棒状のもの、板状のものなど抽象的な形を表現する意味類辞(/読書/ の左手など)等があることが知られており、これらはいずれも、物の運動や存在を示す「動き」や存在場所、位置関係を示す「位置」をともなって 1つの手指動作を構成する(神田, 1994 ; 神田・藤野, 1996 ; 市田, 1994, 1997 など)。

また、手話においては話者の身体の前の空間が、人称や名詞句の存在位置を示すなど統語的に利用される。つまり、ある空間領域に名詞句が定位されると、その位置は保持され、後に同じ位置を指示した場合に先に示した名詞句を表すというように代名詞的に活用することができる(米川, 1984 ; 神田, 1994 ; 市田, 1997)。さらに、このように定位された位置と動詞の運動軌跡の始点、終点が一致することで、動詞の主語、目的語が表示される(/3 言う 1/ : 彼に言われたなど)といった活用もなされる。これらは「一致による変化」と言われるが、この他に動詞には、英語が *ing* 形により進行相を示すように、楕円運動や反復運動をともなって動詞を副詞的に変化させる「相(アスペクト)による変化」(/会話++/・/# 円運動/ いつも話しをしているなど)や、数による変化が生じることが指摘されている(Klima & Bellugi, 1979 ; 神田, 1994 ; 市田, 1994 など)。

さらに、手話の統語規則に関する研究から、手話の語順は基本的に日本語と同じ SOV であるが(/田中/弁当/食べる/ : 田中さんは弁当を食べます)、主語が話題化されるなど変化が生じた場合は語順が置換され、この際、語順の置換が生じているということを示すために、うなずきを始めとする非手指動作が文法マーカーとして表示される(/田中/食べる nod/弁当/ : 田中さんが食べるのは弁当です)ことなどが明らかにされている(市田, 1994; 1998)。

3. その他の研究

手話研究にはこのほか、乳幼児の手話言語獲得の様相を明らかにする発達的研究(武居, 1997; 武居・四日市, 1998; 武居・鳥越, 2000 ; 中野, 1999)や、手話言語使用時の大脳の反応や手話言語を使用している失語症患者の病巣を分析することで、音声言語と異なる手話言語の特徴を明らかにしようとする脳科学的研究(河内, 1998)、および個人や社会全体の手話の使用実態を探る社会言語学的研究(上久保・比企・福田, 1997 ; 乗富・赤堀・赤堀・津山・福田, 2000; 鳥越・島村・大湾, 1997)、各国の手話言語の違いや共通点を検討し、手話の同系性や普遍性を証明しようとする比較言語学的研究(宮本, 1999a; 1999b; 2000)などがある。

例えば、手話における脳科学研究では、手話を第一言語として獲得し、成人した聴覚障害者が言語野に障害を受けた場合、通常の失語症患者と同様に手話言語の使用に障害が生じ、パントマイムや絵の理解といった視空間処理は以前と変わらず保たれていながら、手話の読み取りが困難になったり、パントマイムは表出できるが手話言語の使用には困難をきたすなどの病巣を呈することが明らかにされている(河内, 1998)。

また、発達研究の成果から先天性の聴覚障害児は、生後しばらくして健聴児と同じ様に母音のみで構成される単純な喃語を発するが、この時期は持続せずに消失し、健聴児のような母音と子音を組み合わせたリズムカルな喃語へはつながらないこと(Oller & Eilers,

1988)。しかしながら手話環境にある聴覚障害児の場合、手話による喃語が観察され(Petitto & Marentette, 1991)、この手の動きは意味をとまなわない単純な動きから、音声言語に見られる境界喃語のようなリズムカルな繰り返し運動につながり、初語が出現する直前になると手話単語の形態に類似しているが意図的な意味をとまなわないジェスチャーへと変化し、これが手話の1歳前後に出現する初語手話へとつながっていくことなどが示唆されている(武居, 1997)。

これらの研究は、手指モダリティを使用する手話言語と音声言語のモダリティを超えた共通性を示しており、手話が音声言語と同様の言語的特性を持っていることを側面から証明している点で非常に興味深い。

一方、手話の使用状況には個人によって違いがあり、同じ世代の聴覚障害者であっても、教育背景によって使用手話が異なっていること(赤堀・赤堀・乗富・津山・福田, 2000)、同じ日本手話を用いる聴覚障害者の中でも、世代によって語彙あるいは統語レベルの違いが見られ、若者の方が/~ので//~ため/のような機能語と見られる手話単語を多く用いる傾向にあること(乗富・赤堀・赤堀・津山・福田, 2000)などが事例を通して明らかにされている。

よりよい通訳を行うためには、これらの聴覚障害者のもつニーズに合わせた手話の使用が必要となるが、現在のところ手話通訳を対象とした研究は非常に少なく、通訳者が受け手にあわせてどのように使用手話を使い分けているかといった実態については明らかにされていない。

第2節 音声同時通訳に関する研究

1. 音声同時通訳における研究の概観

音声同時通訳に対する研究は、1960年初頭から1970年代を中心に、主に実験心理学者の手によってなされており(Davidson, 1992 ; 水野, 1997a)、この時期の研究は Gerver (1976)によって包括的にレビューされている。表2-2に示されるとおり、同時通訳の特徴は聴取した談話(以下「起点談話」とする)を、その全体像が見えないうちに訳出し始め、次に訳出すべき情報を同時に聴取、理解するという作業の複雑さにあるが、初期の研究者の興味は、まさにこうした複雑な心理作業としての同時通訳がいかにして可能かという心理言語学的プロセスに集約されていた。そのため、起点談話の聴取と他言語(以下「目標言語」とする)への訳出という二つの作業を同時的に行うための方法や、絶え間なく続く一連の起点談話を切り分けて訳出する方法など、同時通訳の心理言語学的プロセスを解明しようとする研究が主流であった。

これに対して近年は通訳者自身による研究も増え、通訳の質や通訳中に用いられる技法など、より内容に踏み込んだ分析がなされるようになった。また、研究分野も通訳そのものから、通訳者の養成(ビュテル延増, 1997; 西村, 1996; 新崎, 1996; 鳥飼, 1996 など)、認定や外国語教育への応用など(染谷, 1996; 永田 1996 など)、実践的な方向へと広がりを見せている(Davidson, 1992)。

ここでは、手話通訳作業の分析のための手がかりを得るため、音声同時通訳に関する研究の中から、特に同時通訳を実証的に分析したものを取り上げ、この中で用いられている分析指標について検討するとともに、その結果明らかになった同時通訳の特徴について、「量的側面」「時間的側面」「起点言語から目標言語への変換作業」「訳出表現」の4つの側面から記述する。

1) 通訳作業の量的側面の分析

同時通訳の量的側面に関する分析では、通訳者によって訳出された語の語数や音節数、あるいは通訳者が通訳対象となる談話のうち通訳者によって訳出された部分の比率(以下「訳出率」とする)などが取り上げられており、特に訳出率の算出方法については、何を指標とするかについて議論がなされている。

Gerver(1971)は、フランス語 - 英語間の同時通訳について、起点談話を単語ごとに区切り、このうち目標言語に訳出されているものの比率を訳出率として表すとともに、起点談話の速さと訳出率の関係について分析し、訳出率は起点談話のスピードが速くなるほど減

少することを明らかにしている。しかし、語を分析単位とするこの方法は、基本的な言語構造が類似しているヨーロッパ言語間の通訳の分析としては適当であるが、助詞や助動詞が重要な役割を担っている日本語と、そのような語の存在しない英語など、言語構造が大きく異なる2言語間の通訳においては適用しにくいと考えられる。

一方、木佐(1997; 1998; 1999)は、海外のテレビ放送を通訳を通して伝える英語 日本語間の「放送通訳」を取り上げ、拍数を指標として訳出率の算出を試みている。彼は、起点談話の元になった原稿を一定のルール(通訳と同じく、「です」「ます」調を基本とする。

日本語として不自然にならない範囲でなるべく簡潔な直訳を心がけるなど)に基づいて直訳し、この訳文の拍数に対する通訳者の訳出の拍数の比率を訳出率としている。しかしながら、木佐自身も述べているように、この拍数による比較では、通訳者によって伝えられた情報の質や量については検討されず、起点談話の中の同じ単語を訳出しているにもかかわらず、これに対する訳語として拍数の大きい語を用いることで、訳出率が大きくなるという問題点が存在する。

これに対して小栗山(2000)は、木佐(1999)を批判的に検討し、特に通訳によって伝達された情報の量に焦点をあて、これを反映するための訳出率の算出方法について提案している。ここでは、起点言語テキスト(起点談話において話された内容)を、情報伝達の重要な要素とされる「5W1H」(who (誰が) what (何を) when (いつ) where (どこで) why (なぜ) how (どうやって))に区切り、 から のそれぞれが訳出の中に再現されているかどうかによって全体の訳出率を求めている。この結果、前もって通訳の原稿が存在し、ある程度訳出の準備を行うことができる時差通訳の場合、全体の訳出率が平均72.9%であるのに対して、同様の起点談話を原稿のない状態で即座に通訳した場合には44.5%、同様に事前に原稿を読むことができない場合でも、話し手が原稿を読まずにその場で話す自然発話場面では72.3%と、時差通訳と同等の値を示すことなどが明らかになっている。

水野(1993)は、訳出率と受け手にとっての「わかりやすさ」の関係について、起点談話に忠実であろうとすればするほど、訳出語数が多くなったり、目標言語として不自然な文になるなど、受け手にとってはわかりにくい通訳になってしまうという矛盾を指摘している。このことから、訳出率の算出にあたっては、起点談話との1対1の形式的な対応だけを求めるのではなく、小栗山(2000)のように実質的な意味や内容がどの程度伝達されているかを反映することが重要であることがわかる。また、岡野(1999)は、起点談話には受け手にとって重要な情報と重要度の低い情報が存在するため、より重要な情報を脱落せずに再現できているかといった、質的な側面についても検討することの必要性を指摘している。

2) 通訳作業の時間的側面の分析

同時通訳を時間的側面から分析した研究としては、 起点談話が通訳者に聞こえ始めてから、目標言語が産出されるまでの時間的な遅れである「タイムラグ」などを指標として、同時通訳の処理単位について検討したものと、 起点談話の聴取と訳出表現の産出の時間的な関係、特にその同時性について分析したものがあげられる。

(1) 処理単位に関する検討

同時通訳の処理単位、つまり継続的に入力される起点談話を、通訳者がどのように切り分けて訳出するのか、またその際に何が手がかりにされているのかを明らかにしようとした研究として、Barik(1969)がある。Barik(1969)は、起点談話を5秒間隔で区切り、それぞれの区間の最後に出現している単語が、訳出表現中のどこに現れているかを調べ、両者のタイムラグをストップウォッチで計測し、この大きさや推移について分析している。この結果、起点談話と訳出の間のタイムラグは、職業として通訳を行っている通訳者の場合で1.29秒から3.80秒と一定の幅を持っているが、これは起点談話に含まれる休止(以下「ポーズ」とする)を手がかりとして、ポーズの直前までをひとまとまりとして訳出しているためではないかと報告している。

Gerver(1971)は、通訳者が起点談話を切り分ける際に用いる手がかりをさらに明確にするため、通常の談話と抑揚やポーズを人為的に取り除いた談話を作成し、これらに対する同時通訳の訳出結果を比較している。この結果、いずれの通訳者も通常の談話の方がより正確な訳出が可能であること、また抑揚やポーズを削った題材であっても、通訳者は意識的にポーズを作り出していることから、起点談話のポーズや抑揚が起点談話の切り分けや解釈、訳出に貢献していると述べている。

また Goldman-Eisler(1972)も、タイムラグ*が起点談話の平均4語から5語に対応していたこと、これは平均的に見て起点談話のポーズで区切られた1単位(節や文)にあたることから、ポーズを手掛かりに意味単位を検出して、訳出しているのではないかとしている。

さらに、同時通訳の処理単位については、訳出する文章や内容による個人内変動があることや、通訳者のとる訳出上の方略によって差が生じることも明らかにされている。

永田(1997a)は、同じ通訳者の訳出の中でも、段落の冒頭で話題を提示する部分(「これがなぜ問題かという」と)などは、即座に訳出されることが多く、逆に抽象的でわかりにくい内容を訳出するときには、通訳のために深い処理が必要であるため、タイムラグが大きくなり、処理単位が長くなることを報告している。

* Goldman-Eisler 自身は、タイムラグという言葉は用いず、Ear Voice Span; EVS と表記している。

また、亀井(1998)は、通訳者の中には、タイムラグを大きくとって句や節などの単位で目標言語に変換する者と、語対応で直訳的に訳出していく者など、処理単位の異なるいくつかのタイプが存在することを指摘している。

以上のことから、同時通訳の際には通常起点談話のポーズや抑揚が手がかりにされ、節や文などの意味単位をひとまとまりとして訳出が行われていること、このような処理単位には、訳出しようとする文章の内容や通訳者によって、個人内および個人間の変動があること、処理単位の分析指標として多くの場合タイムラグが使われているが、単に起点談話の入力と訳出の時間的な差のみではなく、起点談話の内容や訳出表現についての質的な分析も行う必要があることがわかる。

(2) 聴取と産出の同時性に関する検討

同時通訳の時間的側面の分析では、起点談話の聴取と訳出表現の産出という同時進行の課題に対してどのように注意を分配しているのかという問題についても検討がなされてきた。

Barik(1973a)は、同時通訳者は聴取と産出を同時に行う負荷を避けるため、起点談話のポーズを利用して、この間に訳出表現の産出を終えるよう工夫しているのではないかという仮説を立てこれを検証している。一方 Gerver(1971)は、英語からフランス語への同時通訳を分析し、いずれの通訳者も全体を通して一定の速さで訳出を行っていること、聴取と産出が同時に出現している部分でも、訳の正確さは変化しないことなどから、聴取と同時に産出することが、同時通訳の結果に影響しないと指摘している。

実際の同時通訳の訓練においては、一般的には Gerver の主張が受け入れられており、聞くことと訳すことの両方に同時に注意を向けることが多い。

ただし、そうした中で Gile(1994)は、日本語から英語への同時通訳の方略について、日本語には「～ということになります」「～ではないかと思えます」など、新たな意味情報をほとんど加えることのない文末が、何文節にもわたって付加される傾向があることを指摘し、これを「予測可能文末(PSEs; Predictable Sentence Endings)」として、PSEs が通訳者にとっての情動的休止(Informational Pause)になり得ると主張している。すなわち、日本語にかなりの頻度で出現する PSEs の間は、表面上は聴取と訳出表現の産出を同時に行っているように見えても、実質的には起点談話の聴取に分配される注意の割合はかなり低く、訳出表現の産出が中心になるのではないかと主張する。

このことから、聴取と産出の同時性については、単純に起点談話の入力や訳出表現の産出の有無のみならず、意味的な側面からもさらに検討が必要であると言える。

3) 起点言語から目標言語への変換作業

起点言語から目標言語に変換する際、通訳者によって行われている作業について取り上げた研究には、主に語レベルで起点談話に含まれる語が訳出表現内でどのように訳出されたかを比較分析するものと、文や句のレベルで構文の変化を調べるものの二つがあげられる。

(1) 語レベルの変換作業の分析

Barik(1971; 1973b)は、起点談話と通訳者の訳出表現を語レベルで比較し、訳出表現内には本来通訳されるべき語の脱落や、起点談話にはない語の付加、あるいは語の置換など、起点談話の表現とは異なる箇所が存在することを指摘し、これを起点談話からの離脱つまり訳出上の誤りと位置付け、出現頻度や原因について分析している。

これに対して近藤(1994a, b)は、通訳中に生じる脱落や付加、置換の中には、言語から言語への変換の都合上必要なものもあり得るとし、これらをすべて誤りと位置付ける Barik の考え方を批判している。

同様に永田(1994, 1997a)は、訳出表現と起点談話の間に生じる差異の多くが、起点言語と目標言語の間の非等価性を解決するために通訳者が用いている方略の現れであると主張し、その上で、同時通訳に必要な変換作業として、「言い換え」「加訳」「解説と訳注」「減訳」などを挙げ、実際の日本語 中国語同時通訳の事例から、このような操作が行われている箇所を抽出して、前後の訳出表現や対応する起点談話の内容から、その出現理由や原因について考察している。

また岡野(1999)も、言語間の語彙範疇の違いによる調整だけではなく、通訳の受け手の聞き取りやすさのためにも、起点談話の内容を省略しながら伝える減訳が重要であり、むしろ積極的に活用しなければいけないという考え方を示している。

さらに亀井(1998)は、通訳上必要な変換作業の内容を実証的に示した上で、複数の通訳者の同時通訳を比較している。その結果、職業的に通訳を行っている通訳者は、省略や付加、言い換えといった操作を、訳出表現をわかりやすくするためにより効果的に用いていることが多いのに対して、通訳の訓練生の場合は、訳出の遅れから生じる脱落や、訳語が思い浮かばないことによる語の言い換えなど、通訳が十分にできないためにこのような操作が生じてしまう場合があることを報告している。

(2) 文レベルの変換作業の分析

同時通訳の文レベルの変換作業については、起点談話と訳出表現の比較から、起点言語から目標言語に変換する際、語順の入れ替えや文の分割・統合、構文の転換などが生じていることが事例的に報告されている。

具体的には、起点談話の1文を分割して2つの文として訳出したり、逆に2つの短い文を1文にまとめて簡潔に表現する(亀井, 1998; Nishio, 1986 など)、主語と目的語を入れ替えて訳出する(永田, 1997a ; Nishio, 1986 など)、起点談話で述部がなかなか表示されない場合に副詞句を用いて文頭から切り分けながら訳出する(船山, 1985;水野, 1993, 1995; Nishio, 1986; 八島, 1985 など)などである。

また、文レベルの変換作業は起点言語と目標言語の組み合わせによっても変化し、特に述部が文末に表れる日本語が起点言語となる場合、動詞の予測を可能にする手がかり(かかりうけの法則(佐伯,1975)、述部を前触れする語(坂倉,1966)など)をもちいて動詞を先取りして訳出し、その後展開にあわせて調整したり、逆に動詞の訳出を文末まで遅らせるために起点談話を文頭から副詞句として訳出するなどの例が報告されている(水野, 1993; 1995)。

しかし以上の研究はこうした操作が行われていることの事例的報告であり、変換作業としてのより詳細で総合的な分析はなされていない。永田(1997a)は、以上に挙げた文レベルの操作の例は、いずれも極度の時間的な制約の下、文全体を聞き終えないうちに入力される起点談話を継時的に処理しなければならないという同時通訳の特徴を反映したものであるとしている。翻訳や逐次通訳とは異なる同時通訳の特徴をさらに詳細に明らかにするためにも、こうした操作の出現位置や出現頻度、あるいはこれらを誘発する文脈の分析、通訳者ごとの共通点および相違点の分析といった、より多面的な研究が必要であると考えられる。

4) 訳出表現の分析

同時通訳の結果、通訳者によって産出された訳出表現について検討を行った永田(1997b)は、同じ起点談話を複数の通訳者が同時通訳した結果を比較して、「Ah-」「u-m」といった母音の引きずりや冗語、発音不明瞭、不自然な間、速さの極端な変化等が同時通訳を聞きにくくする要因となっていることを指摘している。

また、岡野(1999)は、同時通訳における訳出表現の「わかりやすさ」を構成する要素として、論理構造が明確なこと、同音異義語などほかの言葉に聞き間違えるような箇所が少ないこと、受け手にとって情報処理が容易であることの3点を挙げ、さらに「聞きやすさ」に関わる要素として、イントネーション、アクセント、発声、音質といった「音声表現の技術」の重要性を指摘している。

実際の同時通訳者の訳出表現を分析的に研究したものはまだ少ないが、NHK 放送文化研究所は、特に訳出表現の発話速度について、同時通訳を分析するとともに、大規模な受け

手調査を行い、客観的評価と通訳の受け手の反応の関係について分析している(木佐, 1997; 1999)。この結果、同時通訳者の発話速度は、通常のアナウンサーがニュースを読み上げる平均発話速度よりいずれも早く、通訳者によってはかなり早口になる者もいること、受け手の発話速度に対する感じ方はほぼ正確に発話速度を反映していること、訳出表現が速くなればなるほど聞きにくいと感じる人が増えること、さらに、訳出表現中の聞き取りにくい箇所は、いずれも訳出の発話速度が速くなればなるほど「気になる」とする人の割合が増えることなどが明らかになっている。

しかし、ここで取り上げられたスピードは訳出表現の評価の一部に過ぎず、今後さらに多方面から、特に受け手の評価との関係で分析を進めていく必要があると考えられる。

第3節 手話通訳に関する研究

目標言語に手話を用いる手話通訳について、音声同時通訳の場合と同様に「量的側面」「時間的側面」「変換作業」「訳出表現」の4つの側面からこれまでの研究を概観する。

1. 手話通訳作業の量的側面の分析

若松(1989a; 1989b)は、大学の講義における手話通訳について、講義者の話した起点談話と2名の手話通訳者による訳出表現、およびこれを読み取り通訳(逆通訳)を通して日本語に変換したものの3つのデータを比較し、手話通訳の訳出語数および訳出率について分析している。この結果、手話による訳出語数は通訳者間でほぼ同一であり、講義内容と読み取り通訳による訳出を比較して求めた訳出率は、講義全体と比較した場合で40%程度、冗語や反復表現を除き文章を整理した状態では60%程度、各文章の内容を伝えるために必要な用語を取り出した状態では80%程度となったとしている。また、講義内容と読み取り通訳の訳出の不一致を品詞別に集計したところ、助詞、助動詞の一致が相対的に低く、名詞、動詞の一致率が相対的に高くなったことから、手話通訳において助詞、助動詞を正確に伝達することの難しさが指摘されている。

しかしながら、若松自身も述べているように、この研究では大学講義をいかに忠実に手話によって視覚化するかという点に主眼をおいているため、起点談話と手話の間に厳密な一致を求めるなど、手話通訳の評価としては不自然な指標が用いられている。また、空間利用や同時結合、非手指動作といった手話における重要な要素についても分析されていないという点で問題が残る。

2. 手話通訳作業の時間的側面の分析

音声言語から手話への同時通訳を時間的側面から分析したものとして、若松(1990a)は、講義を手話に変換し、その手話を読み取って日本語へ変換する時の、それぞれの通訳のタイムラグについて分析している。ここでは、起点談話を訳出された手話単語に対応させて区切り、それぞれについて起点談話が発声されてから対応する手話表現が開始されるまでのタイムラグを測定したところ、平均が1.3秒であったという。この中にはタイムラグが0秒から0.5秒と極端に短い箇所も検出され、日本語に対応した表現で自動的に表出している部分や、意味の先取りがあることが認められた。

一方、若松(1990b)では、手話通訳の情報処理機構について検討するため、聴取された語と産出された語の関係から、通訳者の短期記憶の中に保存されている語の量を分析している。この結果、語の保存量は平均で2語、最大は6語程度であった。単語の中には、一定期間保存されてから出力されるものと、保存されずに即座に出力されるものの2種類があり、通訳者は保存型方略と即時型方略の二つの方略を即座に選択しながら訳出していると

推察している。また、起点談話の発話速度が上がり、一秒間に 3 語以上の発話が通訳者に入力されるようになると、これらを即時に訳出していくことができなくなり、保存型方略が採用されるようになること、さらに保存型方略を用いている部分では、冗語や重複表現が整理された形で訳出が行われていることなどが報告されている。

また、Cokely(1986; 1992)は、音声同時通訳における研究成果を手話通訳に応用し、主にタイムラグと通訳上の誤りの関係を通して、手話通訳におけるより詳細な通訳過程の分析を行っている。その結果、タイムラグが大きくなるほど通訳者の通訳上の誤りが減少することを明らかにし、タイムラグの大きい手話通訳者は、正しい処理を行うために時間を使っているのではないかとの主張をしている。

以上の結果から、手話通訳の時間的側面については、音声同時通訳と比較してタイムラグが若干短いこと、および語の保存量の違いから保存型方略と即時型方略の二つが存在していることが指摘された。音声同時通訳の研究においては、起点談話を語単位で逐語的に訳出するものと、句や文で訳出するものの処理単位の異なる二つの訳出方法が存在する事が報告されているが、若松の指摘する保存量の違いはこれと同等のものと考えられる。すなわち、即時型方略を用いている通訳者は、語レベルでの訳出を行い、保存型方略を用いている通訳者は句や文のレベルで処理を行っているものと考えられるが、手話通訳者の用いている処理単位については十分に検討されていないため、今後さらに確認していく必要があるだろう。

3. 起点言語から目標言語への変換作業

起点言語から目標言語に変換する際に生じている変化について、若松(1989b)は、起点談話と訳出表現を対応させ、「正しい」「誤り」「欠落」の 3 つに分類して分析を行っている。この結果、「誤り」より、起点談話に対して手話が「欠落」している部分の比率が大きく、同時通訳においては訳の間違いよりも、訳が行われないことの誤りの方が多いことを明らかにしている。

Cokely(1992)は、英語から ASL の同時通訳について分析し、起点言語から目標言語に変換する際に生じる誤りのタイプとして、必要な情報が訳出されない「省略(omissions)」、起点言語テキストに含まれていない情報が付け加えられる「付加(additions)」、起点言語から目標言語へ適切に変換されずに意味のずれが生じてしまう「置換(substitutions)」、起点言語である英語の影響で ASL では通常受け入れられない表現となる「侵入(intrusions)」、その他の意味の通らない表現や通訳上の誤りなどを含む「異常(anomalies)」の 5 つをあげ、それぞれの出現頻度や誤り方の特徴について分析している。

しかし、いずれの研究においても、これらは通訳上の誤りと位置づけられ、通訳上必要な言語間の調整作業という視点では見られていない。

これに対して Siple(1993; 1995; 1997)は、英語から英語対应手話への同時通訳(transliteration)を分析し、対应手話通訳者が用いる付加の中には、接続詞や指差しなどを用いて接続関係を明確にする「接続(cohesion)」や曖昧な語句やはっきりと明示されていない情報を言葉に代えて伝える「明確化(clarification)」など5つの種類があることを指摘している。ここでは主に通訳者による「付加」を中心に分析がなされているが、このほかに「省略」や「置換」といった作業の中にも同様に、複雑な通訳作業が潜んでいることが示唆され、今後より詳細な研究が必要とされている。

また、通訳作業そのものに関する研究ではないが、小田(1987)は、手話通訳者の手話を題材として取り上げ、日本語と手話の対照分析を行い、両者の相違点について検討している。この結果、手話では動詞を示す単語の運動を変化させて、継続や程度を示す意味が付加されることや(例:「ずっと立ちっぱなし」という日本語に対して、「立つ」に継続相を示す運動を付加して表示する)、主語や目的語を、空間を用いて表すことができること(例:「彼に言われた」という日本語を「言う」という手話の運動の起点と終点の位置を変化させることで示す)、などを日本語との違いとして明らかにした。これらはいずれも手話が要素を同時に結合することができる空間モダリティを使用している事の特徴があらわれたものであるが、手話通訳の際にこのような手話の特徴がどのように変換作業に影響しているのかについても、分析が必要であると考えられる。

4. 訳出表現の分析

手話通訳者が使用した訳出表現の分析には、訳出表現中の誤りを題材としてエラー分析を行ったものがみうけられる。Johnson(1991)は、大学の講義内での手話通訳について、通訳者あるいは話し手が伝達しようとした意味内容と聴覚障害があり通訳の受け手となっている筆者自身が受け取った意味内容の違いについて事例的に分析している。この結果、特に基点談話の中で空間や状況を描写した部分では、通訳者は類辞を用いて大きさや形を模写して表出することが多いが、その際基点言語である英語には欠落している情報で手話での訳出の際に必要なものが多く(例:「デッキの上に小さな小屋が建っていた」という文章を表現する際に、デッキの形状や小屋の大きさがわからないなど)、そうした情報を通訳者がおぎなって通訳するために、実際に伝達された内容が話し手の意図する内容と異なり、誤解が生じることが多いことを発見している。

また、Taylor(1993a, b)は手話通訳者が通訳時に使用した手話の文法的な誤りを中心に詳

細なエラー分析を行い、通訳時に生じやすい誤りの例を列挙し、通訳者が身につけるべき技術として一覧としてまとめている。

このほか、読み取り通訳の研究として Shaw (1992) は、ASL から英語への読み取り通訳の訳出表現について、発声時間、間の取り方、統語構造、イントネーション、語彙の選択の 5 つの側面から分析を行っている。この結果、通訳者の訳出は、起点談話の違いによってスピードや発音の明瞭さ、統語構造の複雑さが変化すること、通訳者によっては、間が大きくなったり、文頭の言い直し、不自然なイントネーションなどが見られることを明らかにしている。

また、若松 (1991) は、起点言語から目標言語に変換する際に、起点言語を聞いて即座に訳出するのではなく、一定時間入力情報を保存して訳出する通訳者の方が、手話が安定的に表示されており、即時に通訳する通訳者の場合、訳出表現が起点言語の速さによって変動し、手話の表出間隔にばらつきが生じておいたとしている。この点では Cokely (1992) も同様に、タイムラグの大きな通訳者ほど、目標言語として流暢な ASL が産出できていたと指摘している。

通常、通訳の受け手は起点談話を理解できないため、訳出表現のみに注意するものである。したがって、受け手の通訳に対する評価は直接的に訳出表現の影響を受けるものと考えられる。手話通訳の場合は、音声同時通訳以上に受け手である聴覚障害者のコミュニケーション手段に幅があることが指摘されており、個々の聴覚障害者が訳出表現された手話に対してどのような評価を行うかについても検討を行う必要がある。

また、手話通訳者の多くがあてはまるが、第 2 言語として手話を学んでいる手話学習者の手話の特徴についても近年研究が進められつつある。竹内・木村・池田・福田・市田(1999) は、手話学習者の手話文における非手指動作について、特にうなずきに注目してその特徴を分析し、下方向へ頭部を動かすうなずきは生起しやすいが、手話を第一言語として習得した人に見られるような始めに上方向に動かしたのち下方向へ動くうなずきについては学習されにくいことを明らかにしている。また池田・木村・竹内・福田・市田(1999)は、手話学習開始より 11 ヶ月後の学習者の手話について、文頭、文中に表示される/PT1/(1 人称を示す指差し)に位置の誤りが多く出現すること、その他の単語については位置や手型より、むしろ運動に関する誤りが多く見られたこと、さらに日本語の発話リズムによる干渉が見られることなどを報告している。

これらの特徴が、手話通訳を行う場合にどのように現れ、それが訳出表現に対する聴覚障害者の評価にどのように影響するかについても、今後検討していく必要があるだろう。

第4節 手話通訳の評価に関する研究

前節では音声同時通訳および手話通訳に関する実証的な研究を元に、通訳時に行われている作業の内容について明らかにしてきた。本節では、このような手話通訳に対する評価の方法を、客観的評価および主観的評価の二つの側面から整理していくこととする。

まず客観的な評価としては、先にも述べたとおり、量的側面、時間的側面、変換作業、訳出表現の4つの側面から評価が行われたものがあり、これらの結果、手話通訳の訳出率は約60%程度(若松, 1989a; 1989b)であり、この値は音声同時通訳の72.3%(小栗山, 2000)と比較して低くなっていること、タイムラグの大きさについては、手話通訳の場合平均1.3秒(若松, 1990a)、音声同時通訳の場合1.29から3.80秒(Barik, 1969)であり、手話通訳の方が若干タイムラグが短かく報告されていること、処理単位については、入力される語を一定時間保存して訳出する場合と、即座に訳出する場合の二通りの方略が存在し(若松, 1990b)、音声同時通訳と共通していると考えられること、起点言語から目標言語への変換の際には、音声同時通訳と同様、省略、付加、置換などの操作が行われていること(Cokely, 1992)などが指摘されていた。

しかしながら、これらの分析には訳出率の分析において非手指動作や空間モダリティの活用といった手話の特性が考慮されておらず、起点談話と訳出表現の間の厳密な一致が求められている、日本語対应手話の存在がタイムラグの大きさに影響を与えているものと考えられるが、これについては十分に検討されていないなどの問題点もあり、手話独自の特徴を十分に考慮に入れた評価指標の開発が求められる。

一方、実践的に手話通訳の評価を行う際、最も多く用いられているのは、いくつかの評価の観点に基づいた主観的評価方法である。手話通訳士育成指導者養成委員会(1998)はこの内容を概観し、これまでに用いられてきた評価の観点として「手話単語を正確に表現しているか」「情報の漏れはないか」「手話のリズム」「間」「流れ」「ろう者的表現」「伝統的手話表現」「状況描写・伝達度」「全体的な好感度」などがあったとしている。しかしこれらの観点は、いずれも基準が客観的に示しにくく、また評価の結果を養成に生かしくいという欠点がある。手話通訳士育成指導者養成委員会(1998)はこれを受けて、先に述べた手話通訳技術の7ポイントを提示しているが、これについても十分に客観化されたものとはいえない。

これに対して、実際の通訳データおよび手話学的知見に基づき、手話通訳を評価する際の観点や基準を網羅的に示したものとして、Taylor(1993a; 1993b)の業績が評価できる。彼女は経験の短い通訳者と長い通訳者の英語からASLへの通訳を比較し、初心者に生じやす

い誤りや通訳者間の能力の違いを見出すとともに、これを元に英語から ASL への通訳に求められる 59 の技術に言及し、これを診断的評価のための有効な観点として提示している。ここであげられた評価の観点には、「指文字」「数字」「語彙」「類辞」「空間の使用」「文法」といった訳出表現に関わるものの他に、「翻訳」や「落ち着きと全体的印象」が含まれており、それぞれについて 5 から 15 程度の下位項目が挙げられている。また個々の項目に対して、生じやすい誤りの例が例示されており、これを参考に個々の手話通訳における長所や短所を発見できる形となっている。

ここで示された評価の観点は、非常に体系化されており、特に手話通訳者の用いる手話評価や通訳者自身の自己点検、あるいは養成時のアセスメントといった場面には有効であると考えられる。しかし、音声を聞きながら手話に変換していくというダイナミクスを持った同時通訳の評価と言う側面では、処理の単位や文章の操作など、この指標のみではとらえきれない部分が残されている。また、文法的に正しい通訳を行うこと、あるいは情報の脱落のない通訳を行うことが、すなわち聴覚障害者のニーズを満たす通訳であるかどうかについては議論の余地があり、これを検証するためには通訳の受け手となる聴覚障害者による評価も欠かすことができない。

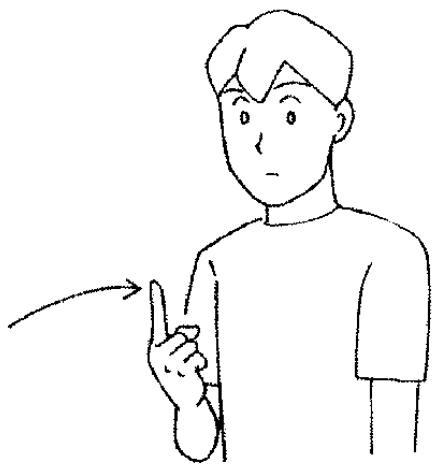
これに対して、Strong and Rudser(1992)は手話通訳の評価を行う際には、通訳作業の評価のみならず、訳出された通訳が受け手である聴覚障害者のニーズに合致するものになっているかどうかを確認する必要があるという考えに基づき、客観的評価と主観的評価の二つの側面から手話通訳を評価し、その関係を検討している。ここでは、「十分な手話の技術を持っているか」「読み取りやすいか」「通訳を受けていて快適であるか」といった 3 つの項目(5 段階評価)および総合評価(3 段階評価)からなる主観的評価尺度を利用し、これを用いて手話通訳事例に対する聴覚障害者の主観的な評価を評定するとともに、Strong and Rudser(1985)で作成された省略や言い換えの量などからなる客観的評価指標による評価結果との相関が求められている。この結果、客観的評価と主観的評価の間には有意な相関があり、客観的評価で高い得点を示した通訳者は通訳の受け手となる聴覚障害者の主観的評価でも高い値を示していることが証明されている。同様に、Stauffer and Viera(2000)は対応手話を用いた通訳について、通訳の受け手のニーズと、実際に通訳者によって行われている通訳作業、および養成機関でカリキュラムとして教えられている内容の関連性を文献的に考察している。

これらの研究では、用いられた指標の項目数が少なく大まかな内容のみしかとらえていない、実際の通訳評価に基づくものではないなどの問題点が存在するが、今後手話通訳の評価を行う際に欠かすことのできない重要な視点が提示されているものと考えられる。

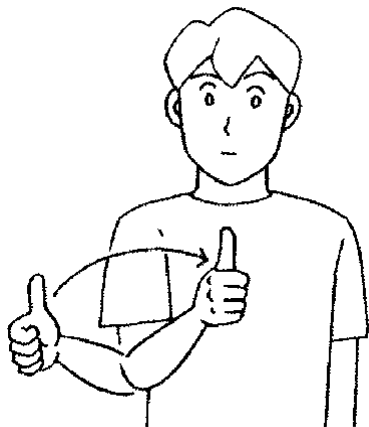
表 2 - 1 手話の表記

記号	説明
/ /	手話単語を示す
/ -----/	---の間、手話表現が持続している
CL:[]	類辞(手型が物そのものの代理をするとともに、そのものの分類を示すもの: p12 参照)を用いた表現
FS:[]	指文字で表されている表現
/L: / /R: /	両手を用いて表現されている部分で、L は左手、R は右手を示す
nod	うなずき
PT	指さし(後に続く数字は指さしが示している人称を表し、PT1 は 1 人称、PT2 は 2 人称、PT3 はの 3 人称を示す)
/ -PT/	接語代名詞(文末に表れる代名詞で、文の主語を表示している。指さしと同様、人称を表す数字をともなう)
/1- -3/	方向動詞(数字は人称を示し、この場合、主語が 1 人称で目的語が 3 人称であることを示している)
/ ++/	同一単語のくり返し
()	言いよどみや言い直された表現
/ 強調 /	単語に強調表示がかかっていることを示す
/ ^{Whq} / / ^{YNq} /	疑問文を表示する表情がかかっていることを示す(Whq は疑問視疑問文、YNq は肯否疑問文を表す)
/ 右 /	視線の方向を示す
{ } ー	()内に示した表情が付加されていることを示す
/# /	手話の形態素
・	要素が同時的に結合していることを示す
+	要素の継時的な結合を示す

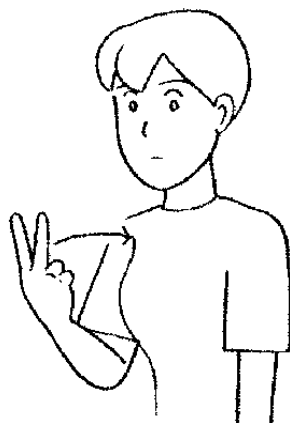
他に、手話単語に関する説明を付加する場合は[]でくくって表記した。



/来る/ 辞書形



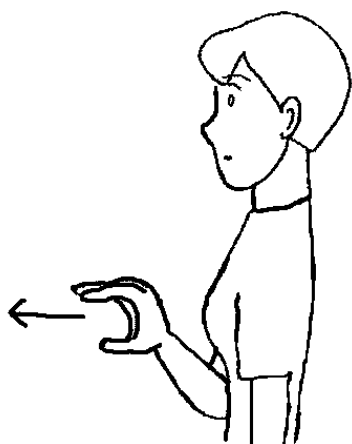
/#来る/・/#男/
男の人が来る



/#来る/・/#二人/
人が二人来る

(イラストは日本手話学研究所 (編)・米川明彦 (監) (1997) 日本語 - 手話辞典. 全日本聾唖連盟より転載)

図 2 - 1 形態素レベルの変化の例



【SASS】/#車/ を表す手型



【取り扱い類辞】車を運転する動作によって /#車/を表す



【意味類辞】/読書/ 左手は /#板状の物/を示す意味類辞

(イラストは日本手話学研究所 (編)・米川明彦 (監) (1997) 日本語 - 手話辞典. 全日本聾唖連盟より転載、一部修正)

図 2 - 2 類辞の例

表 2 - 2 各種通訳・翻訳における訳出時の情報量(永田,1997)

	翻訳	逐次通訳	同時通訳
単語			
句(情報単位)			
文			
パラグラフ			×
テキスト全体		×	×

: 訳出する時点までにほぼ得られている
 : 時によって得られる可能性がある
 × : 訳出する時点までに得ることは困難

翻訳：先にテキスト全体を見渡すことが可能、未知の情報がない。
 逐次通訳：一般にパラグラフごとに訳出。後続するパラグラフが未知のまま。
 同時通訳：情報単位ごとに訳出。一文の後半も未知のまま訳出を開始する。

第3章 研究の目的と論文の構成

第1節 本研究の目的

以上に見てきたような手話通訳に関する問題点と、手話通訳研究の課題を踏まえて、本研究では、手話通訳者の評価、養成に資するための基礎研究として、手話通訳作業の詳細な記述分析と、聴覚障害者の期待に対する充足度という両方の側面から手話通訳の評価を行い、これらの関連性を明らかにすることで、聴覚障害者の期待に応じた客観的かつ総合的な手話通訳の評価を可能にすることを目的とする。

具体的には、まず日本語から手話への通訳作業の内容を「量的側面」「時間的側面」「日本語から手話への変換作業」「訳出表現」の4つの側面から分析し、手話通訳の特徴を客観的に記述し得る指標を抽出する。次に通訳の受け手となる聴覚障害者が手話通訳にどのような期待を抱いているのかを調査し、期待の全体的傾向および聴覚障害者の属性による差異について明らかにする。さらに、この結果を元に聴覚障害者の手話通訳に対する主観的評価として、期待充足度を測定するための尺度を構成し、これを用いて聴覚障害者の手話通訳に対する期待充足度得点を測定する。最後に、聴覚障害者の手話通訳に対する期待充足度得点と手話通訳の客観的指標によって得られた評価を対比させることで、手話通訳作業の個々の要素と聴覚障害者の期待充足度との対応関係を明らかにする。

これらを通して、手話通訳作業の内容と聴覚障害者の期待内容、および実際の手話通訳に対する聴覚障害者の評価の実態を明らかにし、最終的に聴覚障害者の期待充足度を高めるための手話通訳作業の内容やその評価方法を探ることとする。ここで得られた内容は、今後の手話通訳の養成や評価の現場に有効な資料となるものとする。

第 2 節 本論文の構成

本研究は全部で 7 章から構成される。このうち 3 章までが序論であり、4 章から 6 章が本論、7 章が結論である。

まず序論では、第 1 章で手話通訳に関わる社会的背景として近年聴覚障害者にとっての手話通訳の必要性や手話通訳ニーズの高まりに応じて通訳制度が徐々に整備されてきていること、しかしながらその内容は現在でも質的量的に不十分であり、量的には国家資格としての手話通訳士の不足、質的には通訳という作業の内容が十分に分析されておらず、これが原因で養成や評価の方法が経験的にならざるを得ない状況を指摘した。また第 2 節で手話および手話通訳について議論を進める際に前提となる基本知識として手話の種類と手話通訳の種類について述べた。

次に第 2 章では、本研究の前提となる先行研究として、手話言語に関する研究について概観した後、手話通訳よりも以前から研究対象とされている音声同時通訳について、実証的な研究の成果を中心に分析し、これまで明らかになったことと今後取り組むべき課題についてまとめた。さらに、これを受けて手話通訳に関する研究を概観し、本研究で取り組むべき課題について明確にした。

最後に第 3 章では本研究の目的と論文構成について説明した。

次に本論として、第 4 章では手話通訳者によって実際に行われている作業の内容を明らかにするため、6 つの通訳事例を元に手話通訳者が行っている作業を「量的側面」「時間的側面」「変換作業」「訳出表現」の 4 つの側面から記述的に分析し、その内容を客観的指標によって示すこととする。またこれに基づき、通訳者ごとの作業の特徴や音声同時通訳に比較した手話通訳の特徴を明らかにし、こうした特徴をよりよく反映する客観的指標を抽出する。

第 5 章では手話通訳の受け手となる聴覚障害者の期待内容を調査によって明らかにする。まず第 3 節で聴覚障害者数名に対し手話通訳に対して抱いている期待の内容についてインタビュー調査を行い、この結果を基に本調査における質問項目を精選し、質問紙を作成する。次に第 4 節において、作成した質問紙を用いてより幅広い聴覚障害者に対して期待内容を尋ね、回答者全体の傾向および各回答者の属性による期待内容の差異や共通性を明らかにする。

第 6 章では第 5 章で行った質問紙調査の結果に対して因子分析を行い、得られた因子構造を元に手話通訳に対する期待充足度尺度を構成し、これを利用して実際の通訳事例に対する聴覚障害者の期待充足度を測定する。さらに、第 4 章で得られた客観的指標による記述結果と期待充足度による記述の関連を明らかにし、各通訳事例に対する期待充足度の程

度を客観的指標との関係で記述するとともに、期待充足度に貢献している通訳作業の内容を導くこととする。

さらに結論として第 7 章では本研究で得られた成果について概観し、これらを総合的に考察することで今後の手話通訳養成現場に対して示唆を得るとともに、今後研究的に取り組むべき課題について述べる。

本論文の構成を図 3 - 1 に示す。

第3節 用語の定義

1. 翻訳と通訳

ある言語(起点言語, source language; sL*)における考えや概念を他の言語(目標言語, target language; tL)に変換することを「翻訳」とし、翻訳のうち、起点言語の形態が音声か手話のどちらかであり、目標言語の形態もこのいずれかであるものを「通訳」とする。

2. 起点言語、目標言語

聴取、記憶、理解、変換、表出などの段階を経て通訳を行うことを「訳出」といい、訳出される元になる言語を「起点言語」、訳出に用いる言語を「目標言語」という。

また、通訳の元になる発言を「起点談話」と呼び、起点談話に含まれる文章の内容を「起点言語テキスト(source language text)」あるいは「原文(original text)」、さらに、訳出した後の通訳者の表出を「訳出表現」と呼ぶこととする。

3. 手話

わが国で用いられている手話には「日本手話」「日本語対应手話」「中間的手話」などいくつかの形態が存在するが、ここでは通訳者が手話通訳の際に現実的に用いている表現を「手話」と呼ぶこととする。

4. 手話通訳

手話通訳の形態には聞き取り通訳、読み取り通訳などさまざまであるが、本研究では単に手話通訳とした場合、日本語から手話への同時通訳をさすこととする。

* 音声同時通訳研究では起点言語のことを'SL'と表記するが、手話通訳研究において'SL'とした場合、通常'sign language'を意味するため、ここでは混同を避けるために Cokely(1992) にならって'sL'と表記することとする。これにともなって TL を'tL'と表記する。

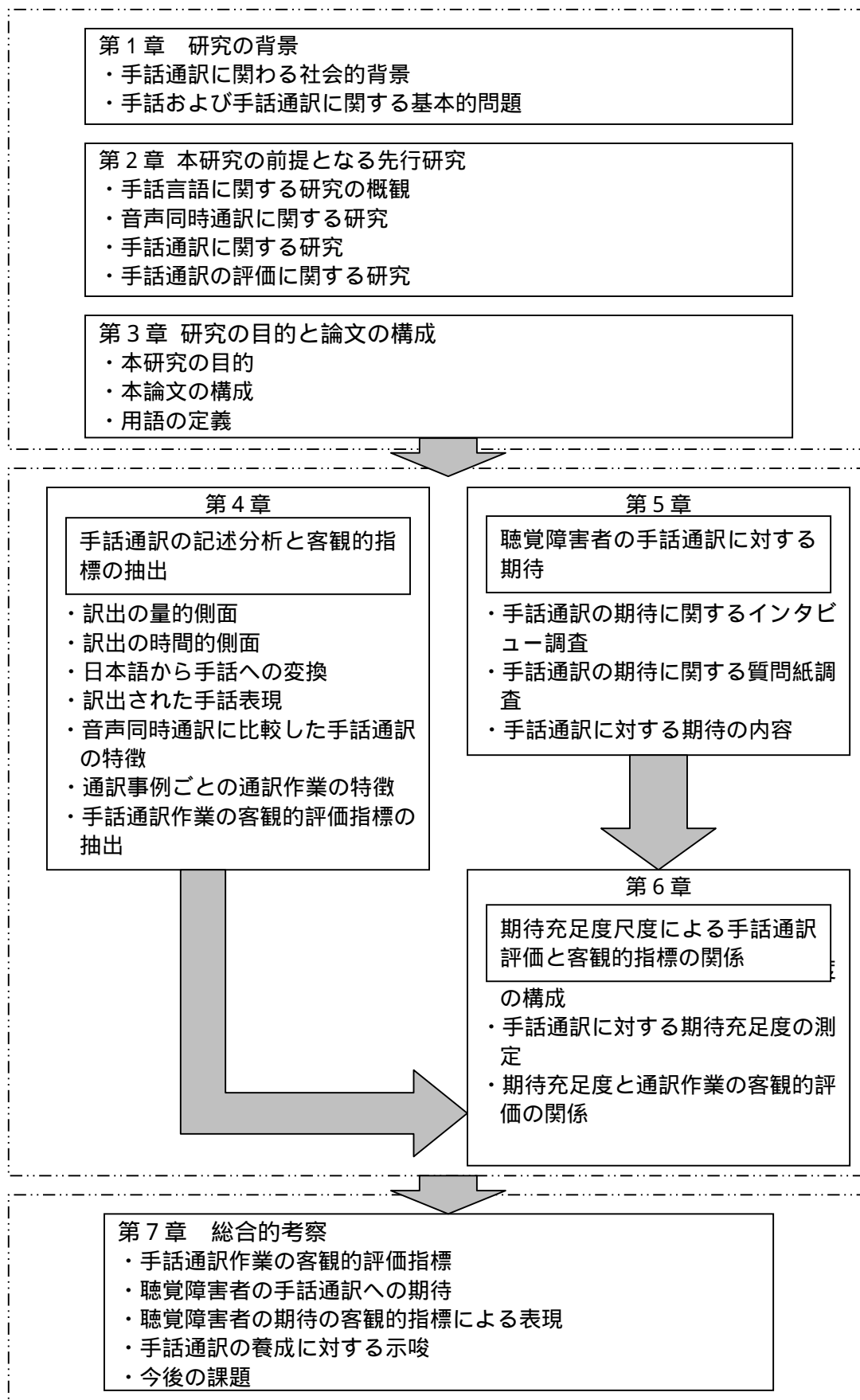


図 3 - 1 本論文の構成

第 II 部

本 論

第4章 手話通訳の記述分析と客観的指標の抽出

第1節 目的

本研究では、日本語 - 手話間の通訳作業に関する基礎研究として、一般的に手話通訳者によって行われている通訳の状況を観察し、そこで行われている通訳作業を多面的な指標によって記述・分析することで、手話通訳作業に含まれる各要素を抽出するとともに、要素間の関わりについて検討する。さらに、手話通訳経験の異なる通訳者ごとの作業の特徴を明らかにし、共通点及び差異を見いだすとともに、そうした差異を検出するために有効な客観的指標を抽出することを目的とする。

第2節 分析方法および分析資料の作成

1. 対象者

関東地方に在住し、現在通訳活動に従事している手話通訳者のうち6名を対象者とし、通訳事例を収集した。対象者の選出にあたっては、十分な経験を持たない手話通訳者も現場で活動を行っていかねばならないというわが国の手話通訳事情を反映し、できるだけ幅広い層の通訳者の協力を得たいと考えた。その結果、対象者の手話学習暦は3年未満～25年程度となり、経験の長いものから順にA、B、C、D、E、Fとした。このうち、A、B、C、Dの4名は厚生省認定手話通訳士の資格を有し、A、Cは特に手話通訳者としての活動経験も豊富であった。E、Fは、手話学習暦がともに3年未満で、手話通訳者として活動はしているものの経験は少なく、まだ学習中とのことであった。対象者のプロフィールを表4-1に示す。

2. 通訳時の使用手話

通訳者の自然な通訳の状況を観察したいと考え、通訳時の使用手話については特に限定せず、「手話と日本語の両方を理解している不特定多数の受け手に対して通訳する場面（講演会など）を想定して通訳を行ってください」とだけ教示を行った。その結果、いずれの通訳者もデータ収録時には日本語対応手話をベースとした中間的手話を用いて通訳を行っていた。中間的手話は、基本的には日本語の語順にそって手話単語を表出するが、必要に応じて空間を活用したり、うなずきなどの日本手話の文法を借用するものであり（Baker &

Cokely,1980) 一般的に手話通訳者によって広く用いられているとされている(小田,1987)。

3. 通訳対象談話

通訳の対象となる談話(以下基点談話とする)は、NHK「視点論点」より選択した。題材は通訳時の負担を減らすため、話の筋が理解しやすく、聞き取りやすい速さのものとした。また、原稿を読む形式のものは、情報密度が高くなりがちで、通訳が困難であることから、話者がその場で自分の言葉で話す形式のもので、ある程度冗語が含まれているものを選択した。

選択された談話は全体で8分50秒からなり、1人の話者が一方向に話す形式で、発話速度は324.2字/分であった。テーマは「ユーモアと金物屋さん」であり、身近なエピソードを交えながら、話者が自分の考えを話すもので、音声は明瞭で聞きやすいものであった。限られた時間の中でのスピーチであるため、通常の発話に比べて若干情報密度が高いという印象があったが、難解な語句などは含まれておらず、事前原稿などの特別な準備がなくても十分に通訳可能であると考えられた。

4. 手続き

通訳事例の収集にあたっては、まずあらかじめビデオテープに録画された基点談話を、通訳者の後ろに設置されたテレビによって放映した。通訳者が配置についた後、実際に訳出を行う前に、ビデオから流れる音声に慣れてもらうため、冒頭数十秒間を通訳者に聞かせ、聞きづらい場合は配置や音量を調節した。通訳者は日本語から手話への通訳を行ってもらい、その全体をビデオカメラ(SONY HANDYCAM TRV5)で収録した。通訳者に対しては、事前情報としてタイトルと講演会における通訳で内容は経験を伝達する日常的なものであることを伝えた。事例収集場面のセッティングを図4-1に示す。また収録後、通訳中、使用する手話や変換の仕方などについて特に気をつけたことがあるかどうか質問紙を用いてたずねた。

通訳という行為は、本来被通訳者との間で成立する双方向的なものであり、実際の通訳場面では被通訳者の反応を見ながら訳出方法を変更するとされている。しかしながら、本研究では、そうした被通訳者の要因により、通訳行為に変化が生じることを防ぐため、あえて被通訳者はおかずに通訳してもらうこととした。

5. 分析資料の作成

1) 作成方法

収録したビデオテープを元に、全体 8 分 50 秒のうち、約 5 分間を分析対象として取り出した。抽出にあたっては、はじめの数十秒間は通訳者がまだ十分に話の筋をつかんでいないと考えられることから除外し、残りの部分のうち、聞き取りづらかったり、論旨がわかりにくい部分を除いて、話者が日常的なエピソードを話している部分を選択した。この結果、取り出された箇所は、話者が自分の経験を語る二つのエピソードで、題材の 30 秒から 2 分 40 秒 (2 分 10 秒間) と 3 分 58 秒から 6 分 41 秒 (2 分 43 秒間) の 2 箇所、合計 4 分 53 秒 (25 文 / 396 文節) であった。

分析にあたっては、作業を容易にするため、通訳事例ごとに内容を表示するトランスクリプト (以下トランスクリプトとする) と時間を表示するトランスクリプト (以下タイムトランスクリプトとする) の 2 種類を作成した。以下にそれぞれの作成方法を示す。

(1) トランスクリプト

起点談話と各通訳事例における訳出表現をそれぞれ書記化し、水野(1995)を参考に同一の時間軸上に相互の時間関係がわかるような形で表記した。ただし、各文の文頭・文末の時間を基準にプロットしたため、文中の単語については表記の制約上多少ずれが生じている部分もある。起点言語テキストおよび訳出の表記にあたっては表 4-2 に示した点に留意した。ただし、手話の表記の問題で十分に記述しきれなかった部分に関しては、適宜収録したデータを見ながら分析を補完する形を取った。作成したトランスクリプトの例を図 4-2 に示す。

(2) タイムトランスクリプト

訳出に関わる時間的側面の分析のために、タイムトランスクリプトを作成した。起点言語テキストと各通訳者の訳出それぞれについて、各文の開始時間と終了時間を測定し、0.5 秒間隔で同一の時間軸上に表記した。詳しい作成方法は表に示したとおりである。タイムトランスクリプトの例を図 4-3 に示す。

2) 起点言語における重要語の判定

起点言語テキストを文節ごとに区切った後、5 名の大学生および大学院生に原文を読んでもらい、この話を人に伝えるために重要であると思われる部分に下線を引いてもらった。そして、5 名中 3 人以上が重要であるとした部分を、内容を伝えるために必要な部分 (以下「重要語」とする) と判定した。この結果、全 396 文節のうち 183 文節が重要語と判定された。重要語と判定されたものの例を表 4-3 に示す。

6. 分析項目

従来、音声同時通訳の研究分野においては、主に基点談話と訳出表現の間のタイムラグや起点談話に含まれる休止時間の利用方法といった通訳の時間的側面と、起点言語から目標言語に変換する際に通訳者が行っている変換作業の 2 つの側面から分析がすすめられてきた (Barik, 1969, 1971, 1973a, 1973b; Gerver, 1971; Goldman-Eisler, 1972; 永田, 1994, 1997a; Nishio, 1986; 水野, 1995 など)。これに対し、手話通訳の分野では Cokely(1986; 1992)がタイムラグを始めとする時間的側面と、変換作業および訳出表現の 3 つの分析観点を提示しており、若松(1989a; 1989b; 1990a; 1990b; 1991)は、訳出率および時間的側面の 2 つを主な指標としている。

本研究では、できるだけ包括的な視点から手話通訳の記述、評価を行いたいと考え、分析の観点として 訳出率、 時間的側面、 日本語から手話への変換、 訳出された手話表現の 4 つを取り上げた。

具体的な分析項目とその内容は表 4-4 に示す通りである。「訳出率」の分析では、若松(1989a; 1989b)などを参考に、「訳出語数」「訳出率」を指標として用い、原文のうちどのような語を訳出しているのかについて検討するために「重要語訳出率」の算出を加えた。また、「時間的側面」の分析は Barik(1969; 1973a; 1973b)、Gerver(1971)、Goldman-Eisler(1972)を元に、「総発話時間と訳出時間」「文頭タイムラグ」「文末タイムラグ」について分析した。「日本語から手話への変換」では、従来より Barik(1969; 1971)などによって検討されている「語レベルの分析」に加え、音声同時通訳研究において事例的に報告されている文レベルの操作についても分析したいと考えた。また、日本語から手話への変換作業については、目標言語である手話の特徴が反映される部分であると考え、手話学の知見(Baker & Cokely, 1980; 市田, 1994, 1997, 1998; 神田, 1994; 神田・藤野, 1996; Klima & Bellugi, 1979; Liddell, 1980; Valli & Lucas, 2000; 米川, 1984; Wilber, 1979 など)を基により詳細な考察を行った。さらに「訳出された手話表現」については、永田(1997b)や手話学の知見を参考に、「訳出された手話の種類」と「句や文の区切りの表示」「訳出の非流暢性」について分析した。各下位項目ごとの分析方法の詳細については、以下の各章で結果と合わせて述べる。

7. 分析の信頼性

分析の信頼性を検討するために、「訳出率」「日本語から手話への変換」「訳出された手話表現」の各項目の分析にあたっては、手話通訳士の資格を持ち、手話の読みとり技術をもつ 2 名によって独立に評定を行い、その一致度を算出した。また、「訳出された手話表現」

のうち「句や文の区切りの表示」においては、下位カテゴリーへの分類の際にネイティブサイナー*であるろう者によるチェックを受けた。一致度の算出方法と結果については以下の各章で述べる。

* 狭義には両親がろうで幼少期より日本手話を用いてきた者、広義には小から中学校時代を聾学校をはじめとするデフコミュニティにおいて生活し、手話を中心としたコミュニケーションを行っている者を指すが、本研究では後者の立場に立っている。

第3節 訳出の量的側面

1. 分析の方法

通訳者の訳出表現のうち、量的な側面について検討するため、「訳出語数」「訳出率」「有意味訳出情報」の3項目について分析を行った。

1) 訳出語数

各通訳者がどのくらいの語を産出しているかを明らかにするため、目標言語として訳出された手話単語の数を算出した。市田(1998)は手話の分析において、うなずき、首振り、頭の動きなどの非手指動作への着目が不可欠であることを指摘しているが、現時点においてはこれらを定量的に分析するための基準が定まっていないため、今回は手の動きのみを対象とした。また、強調や数表示のための同一手話のくり返しは、そのひとまとまりで1つとカウントし、類辞動詞などは意味単位ごとに切り分けて数えた。さらに、両手でそれぞれ異なった単語を表出している場合は、表出されている単語数を算出することとし、指さしも1つの単語としてカウントした。しかし、文頭などで通訳者が表出を誤って言い直したり、表出を中断している語については訳出語に含めなかった。

2) 訳出率

原文に含まれる内容が通訳によってどの程度訳出されているのかを検討するため、起点言語テキストを構成する全文節のうち、目標言語として訳出されている部分の比率を算出し、「訳出率」とした。河野・黒川(1998a,b)は日本語と手話を比較分析する際の単位として、ほぼ手話の単語と対応している文節が最適であることを述べている。手話は類辞の転換や空間の一致など形態素レベルで変化することによって意味が付加されるため、手話と日本語の厳密な対応関係を調べるには、形態素レベルでの分析が必要であると思われるが、本研究においては厳密な訳出率を提示すること自体が目的ではないので、先行研究と同様単位として文節を採用した。

また、若松(1989)は手話通訳者による訳出率を測定するために、原文と単語や助詞レベルの厳密な一致を求めているが、内容をよりよく伝えるために原文を言い換えることも通訳の重要な方略であると考えられるため、本研究では各文節で示された内容が訳出表現の中に表示されている場合は、必ずしも語として1対1で対応していなくても訳出されているとみなしている。これには、非手指動作により表されている部分や、手話の文法特性上省略されているが、語順やイントネーションによって同等の意味が表現されていると考えられる部分も含んでいる。訳出率の算出方法の例を表4-5に示したが、例では原文でくり返し表示されている部分(「なんか理想のこういう男性がいいとかああいうタイプの人がいいとか」)をやや簡略化して表示した後(男[複数]/姿/PT3/良い^{強調}/PT3/PT3/良い^{強調}/：こういう男

性がいいとか、ああいう人がいいとか)、 /会話/ という手話単語に「くり返し」や「継続」の意味を付加することによって(/会話++・#円運動/)、「このようないろいろなおしゃべりをいつもよくやっている」という内容を示し、原文の「よく」「なんか」「いろんな」などの文節に含まれる意味を伝えている。これに対して例 では、原文に表示されている語を忠実に手話単語によって再現している。そのため、両者の訳出語数には 11 語と 19 語で差が生じているが、本研究においてはいずれも原文に含まれる内容を 100%訳出しているとみなしている。

3) 重要語訳出率

原文に含まれる重要語が、通訳によってどの程度訳出されているのかを検討するため、起点言語テキストに含まれる重要語のうち、目標言語として訳出されている部分の比率を算出した。算出方法は訳出率と同様である。

4) 分析の信頼性

各文節が目標言語によって訳出されているかどうかの判定において、手話通訳士の資格を持つ評価者 2 名によって独立に評定を行い、一致率を算出することで信頼性の検討を行った。各通訳事例ごとに全体の 20%について一致率を求めたところ、通訳事例 A については 87.2%、通訳事例 B については 91.7%、通訳事例 C については 95.4%、通訳事例 D については 92.7%、通訳事例 E については 89.0%、通訳事例 C については 90.8%であった。

2. 結果と考察

それぞれの通訳事例について、訳出語数、訳出率、重要語訳出率を算出した結果を図 4-4 に示す。図中通訳事例ごとの 2 本の棒グラフが、それぞれ訳出率、重要語訳出率を表しており、原文に含まれる文節(あるいは重要語)すべてが手話に訳出されている状態を 100% と示している。ただし、通訳者によって独自に付加された情報については検討しておらず、あくまでも原文の内容がどれだけ表示されているかについて検討した。また、訳出語数は右軸に目盛りを取り、通訳事例ごとに点で示すとともに、見やすさのためそれぞれの値を直線で結んだ。

それぞれの訳出語数と訳出率は、通訳事例 A、C、D が訳出語数約 400 語、訳出率約 90%、通訳事例 B、E は訳出語数約 330 語、訳出率約 80%、通訳事例 F は訳出語数約 240 語、訳出率約 50%程度であり、訳出語数、訳出率はいずれも、その量によって 3 群に分かれる傾向が示された。ここから、熟達した通訳者で今回のような経験を伝達する場合、原文に含まれる内容の約 90%程度は伝達する能力があることがわかるが、同時に手話通訳がいても 50%程度の内容しか伝わっていない可能性もあることが明らかにされた。

また、これらの訳出語数、訳出率は、いずれも通訳者の手話経験年数とは比例しておらず、手話経験が長くなればなるほど訳出率が大きくなる訳ではないことも示された。しかし、どの通訳事例も訳出率よりも重要語訳出率の方が大きな値を示していた。このことから、すべての通訳事例が重要語を選択的に訳出していることが示唆された。同時に訳出率と重要語訳出率の差は、全体の訳出率が少なくなるほど大きくなっており、訳出率の少ない通訳事例ほど原文の枝葉末節を省略し、重要な部分のみをひろい上げる傾向が強くなっていることが考えられる。逆に全体的な訳出率の多い者は、重要な部分のみでなく、それ以外の発話に含まれる要素をより原文に近い形で再現していると言える。

さらに、訳出語数と訳出率の関係は、通訳事例間で必ずしも同様ではなく、通訳事例 A や E は同程度の情報を伝達している他の通訳事例に比較して、訳出語数が少ないにも関わらず、多くの情報を伝達していた。これらの通訳事例がどのような訳出方法を採用しているのかは明らかではないが、少ない語数でより多くの情報を効率的に伝えるための方略が存在することが推察されよう。

第4節 訳出の時間的側面

1. 分析の方法

手話通訳における訳出の時間的な側面を明らかにするために、総発話時間、総訳出時間、平均文頭タイムラグ、平均文末タイムラグの各項目について以下の方法で分析した。

1) 総発話時間と総訳出時間

作成したタイムトランスクリプトを元に、全体の4分53秒のうち、話者により発話が行われている時間数と各通訳事例が訳出を行っている時間数を0.5秒単位でカウントした。訳出については手話の開始動作^{*}、終了動作、および文中の意味のない休止は対象に含めず、実質的な訳出時間のみを算出した。

2) 平均文頭タイムラグ

起点言語が聞こえ始めてから訳出が始まるまでの時間を文ごとに算出し、平均を求めた。ただし文頭の言いよどみや手話の開始動作は訳出に含めず、手話動作のみを対象とした。

また、通訳者が2つ以上の文を1つにまとめて表現している場合については、図4-5に示したように、2つ目以降の文に含まれる語で、始めに訳出された語の訳し始めをその文の文頭とみなした。訳出されなかった文については欠損値とし、平均タイムラグの算出には含めなかった。

3) 平均文末タイムラグ

起点言語が終了してから通訳者の手が止まるまでの時間を文ごとに算出し、平均を求めた。ただし手話の終了動作は訳出に含めず、手話動作のみを対象とした。また、訳出表現内には通訳者が2つ以上の文を1つにまとめて表現している部分があるが、この場合は、図に示すように、2つ目以降の文に含まれる語で始めに訳出された語の直前の語の訳し終わりを文末とみなした。訳出されなかった文については欠損値とし、平均タイムラグの算出には含めなかった。

^{*} 鳥越・小川(1997)は一つの手話発話の内部に含まれる手の動作を 膝の位置から手を動かしはじめ、手話を算出するまでの動作(In-transition)、 意味を担っている手話の実質的部分の動作(Sign)、 手話の実質的部分の動作終了後、そのままの位置で手の運動を静止し、手話の形を保持している動作(Hold)、 次の手話を算出するための手の移動動作(Transition)、 手話の発話の終了後、手を下ろすまでの動作(Out-transition)の5つに分類している。本研究では、 を手話の開始動作、 を手話動作、 から を休止、 を終了動作とし、手話動作のみを分析対象とした。

2. 結果と考察

1) 総発話時間と総訳出時間

原文の総発話時間と各通訳者の総訳出時間を表 4-6 に示した。この結果、原文の総発話時間 278.5 秒(分析データ全体 293 秒の 95%)に対して、総訳出時間は通訳事例 F を除いてともに約 280 秒程度(全体の約 95%、総発話時間の約 100%)であり、いずれも話者が原文を話すのとほぼ同じ時間を訳出に費やしていた。通訳事例 F は、経験が十分でないところから、訳出が行われず手が止まっている時間があり、結果的に訳出時間が短くなっていた。

Barik(1973a)は、A 言語(母語)から B 言語(母語でない言語)への通訳の場合、総訳出時間が総発話時間に比べて同等か 10%程長くなることを見いだしている。今回の結果は、通訳経験の少ない通訳事例 F をのぞいて、ほぼこれと一致した結果が得られていると言える。

2) 文頭および文末タイムラグ

図 4-6 に原文と訳出の間のタイムラグの平均を示した。タイムラグは、どのくらいの時間原文を聞いてから訳出を始めているのかを示す指標であり、ここから通訳者がどのようにして原文を切り分け訳出しているのかが推察される。

各通訳事例の平均文頭タイムラグは 2.4 秒であり、文末タイムラグは 2.5 秒であった。これは原文の 3 から 4 文節にあたり、おおよそ一つの句ごとのまとまりを単位に通訳していることがうかがえる。音声同時通訳および手話通訳の先行研究の結果、タイムラグは 2 から 4 秒であり、訳し始めのほとんどが、節の末尾部分か、次の文や節の始まる部分であったことが確認されており(Goldman-Eisler, 1972 ; Barik, 1973a ; Cokely, 1986)、今回の結果もこれに準ずるものであると言える。

これを通訳事例ごとにまとめた結果が図 4-7 である。ここから、文頭タイムラグは通訳事例によって約 1 秒から 4 秒、文末タイムラグは約 1.5 秒から 3 秒とかなり幅があることがわかった。また、経験年数が短くなるほどタイムラグが大きくなる傾向にあった。これは経験が長くなるにつれて聴取した日本語を自動的に即座に手話に変換できるようになるためであると考えられるが、この結果が経験年数のみによるものであるかどうかについては明らかではなかった。

タイムラグについては、Barik(1973a)が、音声同時通訳の研究の結果からタイムラグが小さいほど脱落が少なくなることを指摘している。しかし、脱落以外の誤りとタイムラグの間に相関は見られなかったことから、Barik 自身はタイムラグは大きすぎても小さすぎても正確度が落ちるのではないかと結論づけている。また、Cokely(1986)は、英語-ASL 間の

通訳について分析し、タイムラグが長くなるほど訳出中の誤りが減少することを指摘し、通訳はできるだけ原文から遅れずに行わなければいけないという誤解に対して異議を唱えている。しかし、いずれも経験年数との関係については明確にしていない。

そこで、ここで得られた結果についてさらに詳しく検討するために、各文の文頭タイムラグおよび時間的側面から見た訳出パターンについて通訳事例ごとに分析を加えた。その結果、個々の通訳事例の訳出には次のような特徴が見いだされた。

まず、通訳事例 A は、図 4-8 に示すとおり、文章全体を通してタイムラグが短く、ほとんどが 2 秒以下であった。つまり、原文を聞いて即座に訳出を始め、ぴったりとこれに追従する形で訳出を行っていた。通訳事例 B もこれに類似する方略を用いていたが、ところどころ追従できずに遅れる部分が見られた。また、A、B とも日本語対应手話による直訳的な訳出を行っており、このことから、文をあるまとまりとしてではなく、単語かそれと同等のレベルで通訳していると考えられた。同時に、このような直訳的な通訳が可能になるのは、手話の中に日本語と同じ文法体系を借りて表示する日本語対应手話が存在している効果であると考えられ、音声同時通訳とは異なった現象といえるのではないかと考えられた。

一方、通訳事例 E は全体を通してタイムラグが大きく、原文から 1 から 5 秒程度の間隔をあけてついていく方法を取っていた。訳出中には文あるいは句レベルで大きく言い換えたり、語順を入れ替える箇所が見られ、句や文レベルのまとまりで処理していることが推察された。

通訳事例 C、D には明確な傾向は見いだせなかったが、どちらかという C は E に近いパターンがあり、D は前半と後半で明らかにタイムラグの大きさが異なっていた。このうち前半は A と非常によく類似したパターンを示しており、やはり日本語対应手話でぴったり追従する形であった。しかし、後半はタイムラグが大きく変動しており、全体的には原文と幅をとってついていく形になっていた。

また、通訳事例 F は全体的にタイムラグが大きく、文全体を通して変動も大きかった。

このため、タイムラグの大きさについては経験によって手話への変換が自動化されることと、通訳者が用いている処理単位の両側面によって変化するものであると考えられた。

若松(1990b)は、手話通訳者の中には、タイムラグが大きく原文を一定時間保存して手話に変換する通訳者と、入力情報を即座に訳出しようとする通訳者の 2 通りのタイプが存在することを指摘している。本研究によって得られた結果も、処理単位の異なる 2 通りのタイプの存在を示唆しており、若松の主張を検証するものとなっている。若松(1991)は、さらにこのような 2 通りのタイプの通訳者について、タイムラグの大きい手話通訳者のほうが

手話表現が読みやすいという点を指摘し、この理由として手話が安定的に表現されているためではないかと推察している。今後この点についてより明らかにしていくために、通訳者の処理単位の違いと、受け手である聴覚障害者の評価の関係について、さらに検討が必要であると考えられる。

また、図 4-9 には、タイムラグの面で特に特徴的な A、E、F について、時間的側面から見た訳出パターンを示した。図中、上部には実際のタイムトランスクリプトを掲載し、下部にはこれを単純化したモデルを示している。ここから、先に述べたとおり、通訳事例 A はよりタイムラグが短く、通訳事例 E はタイムラグが大きい様子が見て取れる。また、通訳事例 F にはタイムラグの変動が見られることは先に述べたが、図に示したタイムトランスクリプトから、文末タイムラグが大きくなると、文 17 番、22 番のように、訳出すべき文が途中でとぎれたり、省略され、次の文の始めから訳出が開始されていることが明らかになった。こうした処理パターンは文章全体を通してくり返し出現しており、このことが全体としての訳出率低下に結びついているものと考えられた。

第5節 日本語から手話への変換

1. 分析の方法

1) 語レベルの変換作業

起点言語から目標言語に変換する際に行われている操作を明らかにするために、起点言語に含まれる各文節が目標言語上でどのように訳出されているかを分析した。語レベルの変換作業については、Barik(1969)が「脱落」「付加」「置換」をあげ、これらを同時通訳における原文からの乖離としてその詳細を明らかにしている。永田(1997a)は日中同時通訳の記述分析から、起点言語テキストで潜在的に含まれる情報を顕在化する「加訳」と、曖昧な表現に補足説明を行う「解説と訳注」、目標言語内では明示しなくてもよい場合にこれを表示しない「減訳」の3つに分類し、これらを音声同時通訳に必要な変換作業であるとしている。

本研究ではこれらが通訳上必要な作業であるのか、あるいは不要であるのかといった解釈は加えず、起点言語から目標言語に変換される間にどのような操作が加えられているのかを忠実に記述することし、カテゴリーとしては従来より検討されてきた省略、付加、言い換えの他に、日本語から手話への変換の際に生じ得る原語借用、圧縮・統合、同等を加えるものとする。取り上げた変換の種類を表4-7に示した。

2) 文レベルの変換作業

音声同時通訳の研究においては、これまで文レベルの変換作業について実証的に分析されたものは少ない。しかし事例的には、暫定的に短文として訳出し、その後の展開にあわせて補足・修正する形で訳をつなぐ(水野, 1995)、日本語の一語一語を訳すのではなく、その意味内容を一般化して、短い文で簡潔に処理したり、複数の文を簡潔な1文で訳出する(亀井, 1998)などの方略を持っていることが発見されており、このような作業が手話通訳にも同様に表れるものと考えられる。

ここでは、このような作業を定量的に明示するために、起点言語と目標言語を比較し、文レベルで行われている操作を分割、統合、語順の入れ替え、圧縮、言い換え、省略の6つのカテゴリーに分類、記述した。表4-8にカテゴリーの詳細を示す。

3) 分析の信頼性

手話通訳士の資格を持つ評価者2名によって独立に評定を行い、以下の式により観察者間の一致率を算出することで、信頼性の検討を行った。

$$\text{一致率(\%)} = \text{一致数} / (\text{一致数} + \text{不一致数}) \times 100$$

「語レベルの変換作業」は、下位カテゴリーへの分類において、各通訳事例ごとに全体の20%について一致率を求めたところ、通訳事例Aは70.6%、通訳事例Bは78.6%、通訳

事例 C は 73.4%、通訳事例 D は 81.7%、通訳事例 E は 81.7%、通訳事例 F は 89.0%であった。

「文レベルの変換作業」は、出現位置および下位カテゴリへの分類において、全体の 20%について一致率を求めたところ、80.7%の一致率が得られた。

2. 結果と考察

1) 語レベルの変換

起点言語から目標言語へ変換する際に、通訳者によって加えられた語レベルの作業を分類したところ、図 4-10 のような結果が得られた。ここでは、起点言語テキストの各文節がどのような形で訳出されているかを検討しているため、母数は起点言語テキストに含まれる 353 文節となっている。また、非手指動作については、「なるほど」「ためらう」などそれぞれ自体が単語として単独で用いられている場合は手話単語と同等の扱いをしたが、手話単語に付随するものあるいは文法マーカーとして機能しているものは、単語への同時結合ととらえ圧縮・統合として分類した。

図 4-10 に示すとおり、日本語に対応した手話単語を用いて訳出する「同等」が 177.3 回と最も多く、全文節の 43.4%はこのような形で表されていた。次に多く用いられたのが省略、圧縮・統合であり、ともに全文節の 20%程度であった。付加、原語借用はそれぞれ 19.3 回(4.7%)、10.5 回(2.6%)と出現回数は少なかった。

図 4-11 はこれらの結果を通訳事例ごとに分けて表したものである。ここから、同等については全体的に出現回数が多く、付加、原語借用は全体的に少なくなっているが、省略や圧縮・統合は通訳事例間のばらつきがかなり大きいことがわかる。そこで、各通訳事例ごとの省略と圧縮・統合の量的関係を明らかにするために、図 4-12 に両者の出現回数と訳出率との関係を示した。図中、上部には通訳事例ごとの圧縮・統合の出現回数を示し、下部には省略の出現回数を提示した。また、訳出率を点で記入し、見やすさのためにそれぞれを直線で結ぶとともに、これに対応する目盛りを右軸に設けた。この結果、全体の訳出率が高い通訳事例ほど圧縮・統合の出現回数が多く、逆に訳出率の低い通訳事例ほど省略が多くなる傾向にあることが示された。圧縮・統合は、起点言語テキストにおいて複数の語で表現されている部分を、より少ない単語で訳出するものであるが、動詞の運動軌跡の起点・終点を変化させることで主語や目的語を表示したり(/言う/ /3-言う-1/: 彼に言われる)、非手指動作を同時的に結合することで副詞的な意味を付加する(/持っていく/ /^(一生懸命)持っていく/: 一生懸命持っていく)など、手話に特徴的な文法的要素を用いた表現が多く含まれている。このことから、全体の訳出率の高い通訳事例は、そうでない通訳事例が省略として訳出し

ない部分についても、こうした手法を活用することで時間的制限をクリアし、同時に訳出効果を高めているのではないかと考えられた。

以下、個々の変換作業のうち、特に特徴的な省略、言い換え、付加、原語借用、圧縮・統合についてより詳細に分析を行った。

(1) 省略

原文に含まれる文節のうち、訳出が行われていない部分について詳細に分析したところ、これにはくり返しや、あまり重要でない語句で通訳者の判断によって省略される「意図的省略」と、時間的遅れによる「脱落」、手話表現が思いつかない、原文が聞き取れない等の理由で表せなかった「訳出不可」の3種類が検出された。省略の下位カテゴリーの詳細を表4-9に示す。

このうち「脱落」と「意図的省略」は、第三者が厳密に分類することは困難ではあるが、本研究では直前の文あるいは句の訳出が遅れ、間に1単位以上の句や文が入ってしまったとき、その部分をまったく表示せずに次に現れた文や句の訳出を始めたものを脱落とし、同じく遅れによるものであっても単位内の一部が表示されているものは、それ以外の部分を通訳者の判断によって意図的に表さなかったものと考え、「意図的省略」に分類することとした。分類にあたっては、手話通訳士の資格を持つ2名の評価者によって独立に評定を行い、各通訳事例ごとに全体の20%について観察者間の一致率を求めたところ、通訳事例Aは81.0%、通訳事例Bは87.0%、通訳事例Cは81.8%、通訳事例Dは77.8%、通訳事例Eは81.8%、通訳事例Fは84.3%であった。

図4-13には、省略の種類ごとの出現回数を検討した結果を示した。この結果、意図的省略に分類された語が最も多く、その平均出現回数は42.5回(47.6%*)であった。次いで、遅れによる脱落が37.2回(41.6%)であり、手話表現が思いつかない、原文が聞き取れない等の理由により表せなかった語は9.7回(10.8%)と少なかった。

これらを個々の通訳事例ごとに見たところ、図4-14に示した結果が得られた。ここでは、意図的省略を通訳上必要な変換技法として捉えてグラフの上部に表示し、時間的遅れによる脱落および訳出不可を通訳上の失敗と考えマイナス要因としてグラフ下部に表示した。

この結果、通訳事例間の意図的省略の出現回数の幅が31から60回(全文節の8.8から17.0%)であるのに対して、遅れによる脱落は4から122回(1.1から34.6%)、訳出不可は0から39回(0から11.0%)と通訳事例によってかなり幅が見られることが確認された。意図的省略の出現回数は、通訳事例A、C、D、Fは30から40回(全文節の約10%)とほぼ

* 省略は語レベルの変換全体の21.5% (平均出現回数87.8回)であった。

同じ値を示していたが、通訳事例 B、E は 50 から 60 回(約 15%)で若干多く出現していた。これは、訳出速度あるいは手話能力などの何らかの制限により、すべてを訳することが困難であるために、省略を技法的に用いることで時間的調整を図っているためではないかと推察される。

脱落および訳出不可は、通訳事例 A、C、D、E が 5 から 20 回(1 から 5%)程度であるのに対し、通訳事例 B は両者をあわせて約 65 回(全文節の約 20%)、通訳事例 F は約 160 回(約 45%)と多く出現していた。これに対して通訳事例 B と同様、意図的省略の出現回数が多かった通訳事例 E にはあまり出現していなかった。

また、「意図的省略」として省略された語句には、通訳事例ごとに共通した傾向があった。特に省略の出現頻度の少ない 3 名の通訳事例の場合、その多くが表 4-10 に示したような繰り返し部分を簡略化して表示するものであった。本研究で用いた基点談話には、同じ意味を言葉を使い換えて説明する部分で、特に早口になる傾向が認められた。そのため、通訳事例は訳出の時間的制限からこのような重複表現を意図的に省き、簡略化して訳出を行ったものと考えられる。

次に、「意図的省略」の出現回数が比較的多い通訳事例 2 名の場合、先に述べた繰り返し部分の省略に加えて、表 4-11 に示すような副詞や修飾表現を省いて訳出する傾向にあった。これらは、ニュアンスを伝えるためには訳出したいが、省略しても起点談話の大筋を伝えるためには影響の少ない語であると考えられ、訳出の遅れや通訳事例の持っている手話言語力の限界など、何らかの制約が加わったために省略せざるを得なかったのではないかと推察される。また、これらの通訳者が訳出上のどの位置で「意図的省略」を用いているかを、トランスクリプトおよび実際の収録データで確認してみたところ、図 4-15 に示すように、訳出が追いつかなくなる部分で、多く省略を用い(二重下線部)、原文を簡略化して伝える場面が 2 名の通訳事例に共通して何箇所か認められた。これは、訳出の遅れによる情報の脱落を防ぐために、省略を技法的に用いている例であると考えられる。

以上に述べた「意図的省略」に対して、訳出の遅れ等の著しい制約が生じてしまったことにより、通訳者自身の意図に反して、「脱落」や「訳出不可」が生じてしまう場合も存在する。この例を図 4-16 に示す。この例は通訳経験がもっとも短い通訳事例のものであるが、ここでは、1 箇所の訳出に時間がかかってしまったため、それに続く 1 節が脱落したり(図中)、訳出しようとしたが、訳語が思いつかなかったためか結局訳出せずに次の句の訳出に取り掛かる様子(図中)などが見て取れる。

手話通訳にはいくつかの技法があると考えられ、省略の量が即通訳の質とつながるものではないと考えるが、本分析で得られた結果と各手話通訳事例の通訳に対する全体的印象

を結び付けて鑑みたところ、本研究で用いた題材においては、通訳の際、ある一定数の省略が生じ、これらは通訳上必要なものであると考えられた。また、こうした意図的省略の量は通訳事例によって差はあるものの一定の範囲に収束していた。しかし、訳出の遅れや手話言語力など、この状態に何らかの制約が加わることによって意図的省略の量が増加し、さらに制約が大きくなると遅れによる脱落・訳出不可が出現、増加していくのではないかとこの兆候がみられた。しかしながら、通訳の習熟度という側面から考えて、これらの結果が果たして一直線上に並ぶものなのか、それとも異質のものなのかについては明らかではない。また、同時処理能力や手話言語力、通訳経験の長さなど、通訳の質に関係する要素はたくさんあると考えられるが、それらのうちのどの制約がこれらの結果に結びついたのかについても不明であるため、今後日本手話をすでに身につけた CODA*の通訳者との比較など、条件を限定してより深く検討していく必要があるだろう。

(2) 言い換え

基点談話を目標言語である手話に訳出する過程において、基点談話中に用いられている表現が別の語に置き換えられる「言い換え」が生じている箇所についてさらに詳しく分析したところ、表 4-12 に示す通り、指示語や曖昧な語句の内容を説明的に明示するタイプと、手話と対応していない語について言い換えるタイプの 2 つが見られた。さらに、後者のタイプは、訳出の際同等の語で代用する「類似代用」、説明的に表示する「説明」、言い回し自体を変える「変容適合」の 3 種類に分類された。分類にあたっては、2 名の評価者によって独立に評価を行い、無作為に抽出した全体の 20% について観察者間の一致率を求めたところ 87.2% であった。

これらのカテゴリーに基づいて種類ごとの平均出現回数を求めたところ、図 4-17 のような結果となった。ここから、全体的には変容適合が多く 9.8 回(41.0%*)、次に指示語の内容を明示するものが 6.3 回(26.4%)で、説明、類似代用はあまり出現していないことが示された。ただし、通訳事例内で同じ語をくり返し同じ言葉に言い換えている場合は、すべてを合わせて 1 回とし、また句レベルの言い換えが生じている箇所は、後の文レベルの変換において詳細に分析するため、ここでは分析対象から除いている。

図 4-18 には、各通訳事例が用いている言い換えの種類を整理した。ここから、通訳事例 C、D、E、F は変容適合が多く、通訳事例 A、B には少ないこと、通訳事例 F は変容適合以外の言い換えがほとんど出現しておらず、説明はまったく生じていないことが明らかにされた。これを通訳事例ごとに比率で示したところ、図 4-19 のような結果が得られた。こ

* Children of Deaf Adults の略。聴覚障害のある両親を持つ子どもで母語として日本手話を身につけ、使用していることが多い。

* 言い換えは語レベルの変換全体の 9.3% (平均出現回数 38.2 回) であった。

ここでは、経験の比較的短い通訳事例に「変容適合」が多く見られ、もっとも経験年数の短い通訳事例 F にはこれ以外の言い換えがほとんど出現していなかった。「変容適合」は、先に述べた通り、単純には手話に対応していない語に対して、起点談話の言い回しそのものを変えて表現する方法で、例えば「～に始まって」「ことばをはける」「冗談をとばせる」「年ごろのお嬢さんたち」などの言い回しを、それぞれ「～と同じように」「ことばを言える」「冗談を言える」「若い女性」と言い換えるような例が見られた。本研究の範囲では、こうした変容適合は特に手話に翻訳しにくい日本語独特の表現に多く適用されていた。一方経験の長い通訳事例は、このような文章をさまざまな手話の文法を活用することで、できるだけ日本語のニュアンスを残したまま翻訳していた。ここから、経験の短い通訳事例は、基点談話中の日本語表現をより自分自身の持っている手話語彙の範囲で表現しやすい方向にシフトさせて表現しているのではないかと考えられた。

ただし、ここでみられた通訳事例ごとの違いは、経験年数以外に手話の表現能力や語彙力、通訳の際の使用手話の違いなどによってもたらされているとも考えられるため、この点についてはさらに追求が必要であろう。

基点談話から手話に訳出する際に生じる言い換えについては、先に述べた技法としての違い以外に、言い換えの前後での語の変化についても検討可能であった。そこで、言い換え全体をより一般的な語への置き換え（「上位概念への言い換え」）と、より具体的な語への置き換え（「下位概念への言い換え」）、および、どちらにもあてはまらないもの（「同等な言い換え」）の3種類に分類した。同時にそれぞれについて、言い換えた結果、より明確に内容を示すようになるものと、原文のニュアンスやふくらみが失われてしまうもの、あるいはどちらとも言えないものの3種類に分類することができた。これらの判断は、いずれも主観的で曖昧なものではあるが、同じ「言い換え」の中でも、通訳事例によって言い換え方や語句の選択が異なる傾向がみられたため、これを数量的に検討するため、試験的に以下の分析を行った。

まず言い換え全体を、表 4-13 に示した基準に従い、上位概念への言い換えと下位概念への言い換え、同等の3種類に分類した。この結果、158 種類の言い換えるうち、上位概念への言い換えが 51 種類、下位概念への言い換えが 92 種類、同等が 15 種類に分類された。次に、上位概念への言い換え、下位への言い換えに分類されたものについて、さらに表 4-14 の基準に従い、言い換えられた結果が適切であるものと不適切であるものに分類した。分類にあたっては、2 名の評価者によって独立に評定を行い、無作為に抽出した全体の 20% について観察者間の一致率を求めたところ、上位、下位、同等の3種類への分類は 92.3%、言い換える適切・不適切の判断は 79.5%であった。

図 4-20 に、これらの結果を示した。グラフ上側には言い換えた結果が適切であるもの、下側には不適切であるものを提示し、それぞれ色の濃い部分が上位概念への言い換え、薄い部分が下位概念への言い換えの数を示している。表 4-15 および 4-16 には、それぞれ言い換えた結果が適切あるいは不適切であると判断されたものの例を示した。

ここから、言い換えが適切と分類されたものの中には下位概念への言い換えが多く、逆に不適切とされたものの中には上位概念への言い換えが多く含まれることが明らかにされた。また、同程度の量の言い換えを用いている通訳事例であっても(C と E など)、一方は言い換えた結果原文がより明確に伝えられるのに対して、他方は伝えるべき内容があいまいになり要約的な訳出になってしまう可能性が示唆された。

このような言い換えによって生じる訳出の違いは、単に情報が省略されている場合などと異なり、通訳の受け手である聴覚障害者にとって、もっとも見えにくく、また指導しにくい部分ではないかと考えられる。そのため、今後より聴覚障害者のニーズを満たす通訳者を育てていくためにも、通訳者の行っている作業をもっと目に見える形で記述・提示し、聴覚障害者とともに議論していかなければならないだろう。

(3) 付加

起点言語テキストに含まれていない情報で、目標言語として訳出されている「付加」を、その機能によって分類したところ、起点談話で省略されている語を、訳出中に顕在化させる「省略された語の顕在化」、接続詞などを付加し、文章構造を明確にするために整理・修正する「文の整理・修正」、語を訳出する前や後に、それが何を示すのかを表示するために上位概念を提示する「上位概念の提示」、ある語に対してその内容を言い換えて説明を付加する「説明の付加」の 4 つの下位カテゴリーが得られた。表 4-17 に付加の下位カテゴリーの詳細を示した。分類にあたっては、2 名の評価者によって独立に評定を行い、無作為に抽出した全体の 20% について観察者間の一致率を求めたところ、90.5% であった。

図 4-21 には、これらの出現回数を通訳事例ごとに分析し、平均を求めた結果を示した。起点言語テキストでは省略されている語を、訳出中に顕在化させるものが最も多く、平均 13.0 回(66.7%*)出現していた。また接続詞などを付加し、文章構造を明確にするために整理・修正するものが 4.0 回(20.5%)であった。これに対して、ある語に対してその内容を言い換えて説明を付加するものや、語を訳出する前や後にそれが何を示すのかを表示するために上位概念を提示するものは、それぞれ 1.5 回(7.7%)、1.0 回(5.1%)と少なかった。

このうち、顕在化や整理・修正は、文章の流れの中で起点言語である日本語と目標言語

* 付加は語レベルの変換全体の 4.7% (平均出現回数 19.3 回) であった。

である手話の構造上の違いにより生じるものであり、説明の付加、上位概念の提示は、通訳者がより情報を正確に伝えようとして、原文以上の内容を自ら付加するものであると言える。しかし、後者は主に原語借用にともなって出現していることから、ある程度出現位置に制約があり、このことが全体的な量の少なさに関係しているものと考えられる。

これらの内容について、通訳事例ごとに再整理した結果が図 4-22 である。全体の出現回数が多かった顕在化はどの通訳事例にも出現しており、全通訳事例を通して一番多く用いられていたが、これ以外の 3 種類については用いていない通訳事例いた。

付加の使用頻度が高い通訳事例 C、D は、用いている種類も多く、B、A はこれより若干少なかった。また、E は付加の使用頻度が C、D に次いで多く、B と並んでいたが、用いている種類は少なく、説明の付加、上位概念の提示といった原語借用にともなう付加は現れていなかった。さらに、F には顕在化の 1 種類しか見られなかった。

このうち、説明の付加や上位概念の提示は、手話通訳事例の養成の中でもよく指導される通訳独特のスタイルであり、手話通訳の経験年数の短い E、F はこれらの手法を十分に身につけていないのではないかと考えられた。

(4) 原語借用

訳出表現中で原文の日本語が借用されている部分について、さらにその機能の違いについて検討したところ、表 4-18 に示すように「原語表示」「手話なし」「代用」の 3 種類に分類することができた。分類にあたっては、2 名の評価者によって独立に評定を行い、無作為に抽出した全体の 20% について観察者間の一致率を求めたところ、87.5% であった。

図 4-23 には原語借用の種類ごとの出現頻度の平均を示した。最も多く出現しているのが、手話がない場合に用いられる借用で 4.8 回(58%*)であった。これは外来語や固有名詞、複合語などで、一般的に広く用いられているような対応表現がない場合に、原語がそのまま借用されるものであり、特に元の原語が長い場合は、語頭の数文字のみを指文字で表示する省略形や、これに原語の口形を付加するものなどが見られた。

次に多かったのが他の手話と併用され、そのみでは伝わりにくい部分について、日本語を表示する目的で用いられる原語表示であり、2.5 回(30%)出現していた。原語表示の中には、一度手話で表した語に対する補充として用いられたり、あるいは逆に原語で表示したのに対して手話で説明が加えられたりしており、いずれも原語を借用する際に口形や視線による強調がともなうことが特徴的であった。また原語で表示した後、手話で説明が加えられているものの中には、その後繰り返し同じ用語が出現した時に、初回に用いた指文字が、2 度目以降強調表示がなくなり、語彙化してそのまま用いられる場合と、初回は指

* 原語借用は語レベルの変換の中でも最も少なく、平均出現回数 10.5 回 (2.6%) であった。

文字で表示し、あわせて手話表現を表示しておくことで、2回目以降その手話表現を用いる場合の2通りが見られ、後者は特に手話の表出時間の短縮に寄与しているものと考えられた。このように、原語と訳語をあわせて表示するという方法は、訳出された手話表現と起点原語テキストに含まれる日本語とを、うまくつなぐための仲介の役目をしているものと考えられ、話し手と受け手である聴覚障害者の間で日本語を共有していることの効果であると考えられた。

最後に通訳者自身が手話が思いつかなかったり、知らなかったりする際に用いられる代用があり、これには言いよどみやためらいの表情をともなっていた。

通訳事例ごとに見てみると、図4-24に示した通り、対応する手話表現のない語に対して用いられる原語借用が多い傾向は変わらなかったが、他に通訳事例Bを除けばD, E, Fと経験の少ないものほど代用が多くなり、同時に原語表示が少なくなるという関係が見られた。つまり、通訳事例A, Cは日本語を伝える手段として指文字を用いているのに対して、E, Fなどは手話が思いつかなかった時の代替手段として指文字を用いている傾向が強いということであり、通訳事例によって指文字の機能が異なっているのではないかと考えられた。

(5) 圧縮・統合

起点言語テキストにおいて複数の語で表現されているが、目標言語ではより少ない語で訳出されている部分についてさらに詳しく分析したところ、表4-19に示すように複数の語が統合されているもの、語形変化によって意味が付加されているもの、非手指動作が同時に結合していることによって手話単語で表した以上の意味が表示されているもの、句と句の関係や文のまとまりを表示する言葉が非手指動作による文法標識に置き換えられているものの4つに大別された。分類にあたっては、2名の評価者によって独立に評定を行い、各通訳事例ごとに全体の20%について観察者間の一致率を求めたところ、通訳事例Aは85.0%、通訳事例Bは76.9%、通訳事例Cは95.5%、通訳事例Dは94.7%、通訳事例Eは100.0%、通訳事例Fは100.0%であった。

図4-25には、圧縮・統合の種類ごとの出現回数を示した。最も多く出現していたのは非手指動作による文法標識の表示で30.8回(42.0%*)であった。これには、例えば原文において名詞句を作成するために用いられている「～ということ」などの言葉を、/いう/+/こと/といった手話単語に置き換えるのではなく、あご引きなどの非手指動作で表示しているものや、「～あるいは・・・」「～であるとか、・・・であるとか」という並列関係を示す言葉を、単語にともなううなずきで表示するものなどがみられた。しかし、通訳事例によって

* 圧縮・統合は語レベルの変換全体の18.4% (平均出現回数75.3回)であった。

用いられていた文法標識は、より形態の単純なものであり、ネイティブサイナーの表現に見られる逆接や条件節といった複雑な標識は、非手指動作ではなくほとんどが手話単語に置き換えられていた。また、本研究で用いた起点言語テキストの中には、接続や文末の表示のために、冗語とも取れるような必要以上の語が用いられる箇所が(「～しているっていうことなんです」など)頻繁に出現しており、このことも本カテゴリーの出現回数の増加に影響しているのではないかと考えられた。

次に出現回数の多かった語形変化は、平均して 21.0 回であり、全体の 28.6% を占めていた。これは手話単語を構成する手型・位置・運動の 3 つの要素のうち、いずれかを変化させることによって意味を付加するものであり、例えば空間を代名詞的に活用することによって「彼が私に言った」「金物屋のおじさんが私の娘に言った」などの原文を /3-言う-1/ /3-言う-3/ などの 1 語で表示するものが含まれていた。

また、非手指動作による同時的結合は 15.3 回(20.9%)生じていた。これには非手指副詞や視線による主語の表示(ロールシフト*)などが見られた。

語形変化や非手指動作による表現は、いずれも構成素の同時的結合という空間モダリティの重要な特徴を活かした表現である。手話言語は、こうしたモダリティ特性を効率的に利用した文法構造を有しているが、音声言語から手話言語への変換の際には、このような手話言語の特性が、時間的制限を減少させる役目を持っているものと考えられた。

これに対して、統合はくり返し部分を 1 つにまとめるなど、原文の日本語に操作を加えることで、より簡潔に必要な内容を伝えるものであるが、出現回数は 6.2 回(8.2%)と多くはなかった。

これまで述べてきた 4 種類の圧縮・統合について、通訳事例ごとの使用状況をまとめた結果を図 4-26 に示した。全体的には、やはり非手指動作による文法標識の表示が多く、次いで多少のばらつきがあるものの語形変化、非手指動作の同時結合、統合の順に少なくなる傾向にあった。通訳事例 D のみが、語形変化よりも非手指動作の同時結合が多いという結果が得られたが、そのほかには特に目立った傾向は得られなかった。

2) 文レベルの変換

文レベルの変換には、1 つの文を 2 つ以上に区切る分割や、2 つ以上の文を 1 つにまとめる統合、語順の入れ替えなどの文の操作と、語レベルの変換でも見られた圧縮、省略、言

* 本来話し相手におかれるべき視線を、他の任意の空間にシフトさせることで、その発話が現在の話し手自身のものではなく、他者や、過去や未来の発話を直接引用したものであることを示すもの(市田, 1997)。いわば、間接話法から直接話法への転換であり、手話通訳においては、ロールシフトの利用によって、主語や「～と言った」などの間接話法を表示する語句の省略を可能にしている。

い換えを語よりも大きい単位、つまり句レベルで行うものが見られた。

これらを表に示した分類カテゴリーにそって平均出現回数を調べたところ、図 4-27 のような結果になった。

ここから、句レベルの省略が最も多く出現していることが明らかになった。句レベルの省略は、あらかじめ起点原語テキストを句ごとに区切り、そこに含まれる内容が訳出表現の中にまったく現れていないもの数をカウントしたものであり、結果的に語レベルの省略において脱落と分類された部分とほぼ重なっている。通常、通訳の際は、このようなひとまとまりの情報をすべて省略するのではなく、たとえ訳出が追いつかなくても、手話を表現しながら流れてくる原文を聞き、そこに含まれる内容を何らかの形で訳出しようとする。そのため、これらがすべて省略されているということは、そこで伝えられるべき内容が、まったく表示されていないということになり、訳出率や通訳の受け手の理解に与える影響は大きいと言える。

次に多く出現していたのは分割で、平均して 8.2 回(26.6%)であった。これは、原文では 1 つの文として表されているものを、2 つ以上の文に分割するものである。主に原文で複文構造をなしている部分に出現し、「～ということになったんですが・・・」を「～ということになりました。しかし・・・」とするように、分割した後に接続詞を付け加えるという方法も頻繁に出現していた。日本語は「～なんですが・・・」と文を重ねていくため、1 文が長くなる傾向がある。本研究で用いた題材の話者も同様の特徴があり、通訳の際には、このようにして表示された複文を短文に切り分けながら訳出していることがうかがえる。

また、分割が生じた位置を通訳事例ごとに示したところ、表 4-20 のように分割の現れた 25 箇所のうち、2 人以上が共通して分割を行った部分が 16 箇所、3 人以上が共通している部分は 8 箇所あり、通訳者間で共通のストラテジーが存在していることが示唆された。これらの文には複文構造をなしている以外に共通する事項が見あたらず、文の長さも一定でないことから、通訳者が何を手掛かりに分割を行っているのかは定かではない。考えられる理由として、目標言語である手話の構造上要求される分割であること、起点言語発話のポーズを利用していることなどが挙げられる。音声同時通訳の研究から、通訳者が原文のポーズを目安に、これをひとつのまとまり(チャンク)と捉え、訳出を行っていることが指摘されているが(Gerver, 1971)、文章を切り分ける際にも同様の作業を行っているのかもしれない。

次に、語順の入れ替えであるが、これには 疑問文における疑問詞と動詞の語順の転換(例:何に使うの? /使う^{Whq}/何/, なにするの? /する^{Whq}/何/)、「言う」「聞く」などの動詞の倒置(例:娘が～と言った /娘/言う/~/, 彼女に～と聞いた /聞く 1-娘/~/)などがあり、ま

た通訳事例 C には 手話に変換すると時間がかかってしまう語を訳出せずに保留し、後続の内容を聞いて展開にあわせて表示する(例:センスオブユーモア) ものも見られたが、語順の入れ替え全体の出現回数は平均して 2.7 回と少なかった。

日本手話の基本文型は SOV であり、日本語と同じであるが、主語が焦点化されたり、分裂文が形成される際には、うなずきなどの一定の文法標識をともなって語順の入れ替えが生じることが知られている(市田, 1994; 1998)。しかし、今回の通訳事例には、語順におけるこうした特徴はほとんど現れておらず、ほぼ日本語に対応した語順で表出されていることが明らかになった。この理由として、本研究で分析の対象となった通訳事例が、日本語対応手話をベースとした中間の手話を用いているためであることも挙げられるが、むしろ、聞こえてくる日本語を継時的に処理していくため、大きな語順の入れ換えが困難なのではないかと考えられる。英語から日本語に翻訳する場合、通常自然な日本語にするために文末から文頭へ訳出を行うことが多いが、同時通訳の場合は時間的制限のために文末からではなく文頭から順に訳出していく手法があることが確認されている(Nishio, 1985; 船山, 1985; 水野, 1995)。これと同様、手話通訳の場合も通訳者にとって負荷の大きい語順の入れ替えではなく、言い換えなどの他の手法を利用することで、起点言語と目標言語の間の文法的な違いをクリアしているのではないかと推察される。

句レベルの圧縮は、出現回数が 1.3 回(4.3%)と少ないが、これも分割と同様、出現位置が被験者間でほぼ共通していた。特に、原文内で動作を引用し説明している部分で顕著に現れ、「こうやっておっきな竹ぼうきを、引きずるようにして持っていこうとしたんですね」などは、句レベルの圧縮が見られる通訳事例 A、B、C、D、E すべてに共通して同様の表現(両手 O 手型によりぼうきを示し、これを小脇に抱える動作に、一生懸命を意味する非手指動作用同時的に結合するもの)が用いられていた。このように、言語構造の違いにより、起点言語では長い説明を要するが、目標言語内ではごく短い時間で表現できると言う現象は、いずれの言語間の同時通訳においても見られるものと考えられるが、本研究の結果より、日本語 - 手話同時通訳の場合、こうした現象が動作や形、位置などを示す場合により顕著に現れることが示唆された。しかしながら Johnson(1991)は英語から ASL への同時通訳について、特に物の形を説明する箇所、英語では不要な情報が ASL で表現する際には必要になる場合が多く、通訳者が情報を補完して伝えるために、誤解が生じやすいことを指摘している。本研究においても、先に示した箇所で特に「かかえる」と言う語句に対応する表現が、各通訳事例ごとに少しずつ異なっており(小脇に抱える、胸の前で抱えるなど) 効果的に情報伝達が可能な反面、目標言語である手話の特徴が困難性を引き起こす箇所であるとも言えよう。

以上の内容を通訳事例ごとに再整理したところ、図 4-28 に示すような結果となった。分割、統合、言い換え、圧縮はいずれも通訳事例間の差がほとんど見られなかったが、語順の入れ換えは通訳事例 C、E に多く出現していた。また、句レベルの省略には通訳事例間の違いが顕著に現れ、通訳事例 B、F が他の A、C、D、E に比較して明らかに出現回数が多く、情報の脱落があることが示唆された。先に述べた通り、通訳事例 B と通訳事例 E は表出語数はほとんど同じだったが、訳出率は通訳事例 E のほうが大きくなっていった。これは、句レベルの省略の出現回数が示す通り、各句に含まれる内容をうまく要約しながら訳出している E と、これらの情報全体を落としてしまう B の訳出方略の違いではないかと考えられた。

3) 変換と時間の関係

以上「省略」「言い換え」「付加」「原語借用」「圧縮・統合」の各変換作業について、その使用のされ方を個々に検討してきた。ここでは、以上で述べてきた変換作業のうち、各通訳事例ごとに特徴的な部分をトランスクリプトに記入し、これらが生じる位置とこれに関わる要因を継時的に分析し、事例的に取り上げることとする。

まず図 4-29 には、省略が多く見られた通訳事例の例を示した。これは先にも挙げた例であるが、1 語 1 語の訳出に時間がかかってしまうため、遅れが生じ、この遅れを回復するために、途中単語レベルで「省略」しながら訳出を進めていた。しかし、間に 1 から 2 つ以上の句が入ってしまうと、基点談話に追従することができずに「脱落」が生じていた。その後、次の文が始まるが、すぐに訳出が開始できずに、「訳出不可」となる部分が生じていた。これは、途中脱落した部分の内容がつかめていないために、話の流れを聞いているためだと考えられる。また、手話の代用として原語を指文字で表示している部分が何箇所も見られ、このことも時間的な遅れを誘発する原因となっていた。

次に、脱落は少ないが意図的省略や上位概念への言い換えが多い通訳事例の事例を図 4-30 に示す。この通訳事例の場合、遅れが生じた箇所で、その間の情報を簡潔に伝えようとするときに「意図的省略」や「言い換え」を用いた要約的な表現が生じるという特徴があった。これにより、情報の脱落を回避することが可能になっている反面、訳出が要約的になり、細部まで伝えることができないでいた。

これに対して、全体的な訳出率の高い通訳事例の場合（図 4-31）、訳出中に大幅に遅れたりする箇所は見られず、必要に応じて言い換えたり説明を付加したりしながら、基点談話の内容を伝えていた。特に、高い訳出率を保ちながら、訳出語数が時間的制約をクリアする方略として、ロールシフトや語形変化による意味の付加など、手話の文法を活用して少ない語数で原文の内容を圧縮的に表示する「圧縮・統合」が有効に活用されていた。訳出

表現に日本手話を用いた場合、こうした表現はさらに増加すると考えられ、手話言語学や対照言語学からえられる知見をあわせて今後さらに検討すべき課題であると考えられる。

第6節 訳出された手話表現

1. 分析の方法

訳出された手話表現の分析指標としては、手話表現そのものに対する分析と、訳出の見やすさに関する分析の2点が考えられる。

1) 訳出された手話に対する分析

各通訳事例の用いた手話表現の豊かさについて分析するために、使用語彙の種類を取り上げ、分析を行った。使用言語の構造分析には、語レベルのほかに、音韻、統語レベルの分析も必要であるが、通訳事例の用いている中間的手話は、日本手話とは異なり文法構造の詳細が明らかにされておらず、音韻、統語レベルの特徴の抽出は困難であると考え、本研究では本研究では語レベルの分析にとどめた。

分析にあたっては、各通訳事例が訳出表現内で用いている語について、その種類の数を分析した。ただし、手話単語は一定の規則に従って語形変化を生じるため、変化をとめない辞書形のみではなく、変化形のバリエーションについても検討した。分析にあたっては、表4-21に示したカテゴリーに従って訳出された手話単語を分類し、さらにそれぞれについて異なり語の数を算出した。

2) 訳出表現の見やすさに関する分析

訳出表現の見やすさに影響を与える要因として、訳出文中の区切りの表示および訳出表現の非流暢性の2点について分析を行う。

(1) 句や文の区切りの表示

日本手話では、句や文の間の区切れや句と句の関係などの統語構造を示すために、非手指動作が用いられる。中でも、頭部の動きは最も重要な役割を果たしており、これには動きなし/うなずき/あご上げ/首振りなどがあり、それぞれについて普通の動き/小刻みにくり返す動き/ゆっくりとした動きの3種類が存在することが明らかにされている(市田, 1994, 1998)。ここでは、これらの区切りの表示が、訳出表現の見やすさを構成する要因になっていると考え、表示の明瞭さについて分析した。

各通訳事例の訳出表現のうち、句や節、文を構成する単位で、区切れとして表示されるべき部分に切り分け、これら1つ1つについて、表4-22に示したとおり「明確に表示されている」「表示が曖昧である」「本来表示が必要であるが脱落している」の3段階に分類し、評価を行った。

(2) 訳出表現の非流暢性

永田(1997b)は日中同時通訳研究において、同じ原文を複数の通訳者が同時通訳した結果を比較検討することで、同時通訳を聞きにくくする要因について分析し、母音の引きのば

しや冗語の割合、助詞の分離などの文中の不自然な休止、発音の不明瞭さなどを挙げている。手話通訳の場合、手の動きの迷いや表現の中断などの言いよどみ、文中の不要な間、手型の不明瞭さがこれにあたると考え、本研究ではこれらを訳出の非流暢性成分として出現回数を分析した。詳細な分類カテゴリーについては表 4-23 に示す。

3) 分析の信頼性

「訳出された手話に対する分析」は、各通訳事例の用いている手話の下位カテゴリーへの分類において、手話通訳士の資格を持つ評価者 2 名によって独立に評定を行い、一致率を算出した。各通訳事例ごとに全体の 20% について一致率を求めたところ、通訳事例 A は 93.1%、通訳事例 B は 96.7%、通訳事例 C は 92.5%、通訳事例 D は 98.2%、通訳事例 E は 98.0%、通訳事例 F は 96.4% であった。

「訳出表現の見やすさに関する分析」のうち、「句や文の区切り」については、ネイティブサイナーで手話言語学の知識を持つ評価者 1 名と手話通訳士の資格を持つ評価者 1 名の計 2 名によって独立に評定を行い、各通訳事例ごとに全体の 20% について次の計算式によって評価者間の一致率を算出した。

$$\text{一致率(\%)} = \text{一致項目数} / (\text{一致項目数} + \text{不一致項目数}) \times 100$$

この結果、通訳事例 A は 75%、通訳事例 B は 75%、通訳事例 C は 81%、通訳事例 D は 77%、通訳事例 E は 79%、通訳事例 F は 83% の一致率が得られた。

また、「訳出表現の非流暢性」については、出現位置および下位カテゴリーへの分類において、手話通訳士の資格を持つ評価者 2 名によって独立に評定を行った。全体の 20% について以下の計算式によって評価者の一致率を求めた。

$$\text{一致率(\%)} = \text{一致項目数} / (\text{一致項目数} + \text{不一致項目数}) \times 100$$

この結果、評価者間一致率は、87.3% であった。

2. 結果と考察

1) 訳出された手話に関する分析

通訳者の用いている手話表現について、そのバリエーションを検討するために表に挙げた7つの分類項目に従い、その種類数について分析を行ったところ、図4-32のような結果が得られた。

ここから、辞書形の出現回数が112.7回(73.8%)であり、他と比べて非常に多く出現していることが明らかになった。手話は、類辞の転換や一致による動きの変化など形態素レベルの変化をともなうことによって、様々な意味を負荷することが知られているが、辞書形とはこうした変化をともなう前の基本的な形のことである。

これに対して辞書形の異形は、辞書形とは意味的な違いはないが、片手がふさがっている、前に同じ表現を使った等の何らかの制約が加わったために、手型や位置が変化したり、非利き手が脱落したりしたものをさしている。一般的にネイティブサイナーによって自然に表現された日本手話の中では、絶えず辞書形が用いられていることは少なく、同化、弱化、置換、融合などといった変化が頻繁に生じることが指摘されているが、本研究において分析対象となった通訳事例の手話には、これらの異形はほとんど出現していなかった。

また、複合語化は手話単語や指文字を組みあわせて新たな語を形成するものであり、方向の変化、相による変化はいずれも手話表現にともなう運動や位置を変化させることによって、意味を加えるものであるが、出現回数はいずれも10回以下(4から6%)とやはり多くはなかった。

次に示した類辞は、先述(第2章/第1節/2)のように日本語の「～枚」「～本」などにあたるもので、そのものの代理をするとともに、そのものを直接連想させる機能を持つ形態素である。訳出表現内に用いられた類辞の種類は16.0(10.5%)であったが、このほとんどが/ほうき//くぎ/など形態を模写し名詞的に用いられるものや、これに簡単な動きがともなった、いわゆる写像性の非常に高い表現のみであり、類辞の中でも抽象度が高く日本手話の中でもよく用いられる意味類辞については、/#2人[両手G手型]・#行く/のように、ごく頻繁に使用されているもの以外はほとんど見られなかった。

一方、図4-33には、これらの項目について通訳事例ごとに整理した結果を示した。ここから通訳事例A、Cは辞書形以外のバリエーションが他と比べて多く見られること、Dは用いている辞書形の種類は最も多いが、他のバリエーションが少ないため、総表出語数に比べて全体の種類数が少なくなっていることが明らかにされた。また、これらを図4-34に比率で表示したが、ここから明らかなように、通訳事例A、Cは辞書形の比率が約65%であ

るが、これ以外の4名は約80%であり、ほとんど同じ値を示していた。しかし、通訳事例B、D、E、Fと経験が短くなるにつれて、類辞を用いる表現の割合が少なくなっていた。

通訳事例の使用する手話については、一般的に辞書形以外の手話表現のバリエーションが貧弱であること、類辞を効果的に用いることができないことなどが指摘されている。本研究においても、これらの傾向が一部認められたが、本研究の範囲では、これが手話通訳場面に特有のものなのか、それとも第二言語として手話を学習している手話学習者の特徴であるのか、あるいはネイティブサイナーの手話にも共通するものなのかどうかについて言及することはできない。そのため、今後手話通訳者の用いている訳出表現の特徴についてより明確にするために、他の通訳者の通訳時の訳出表現や、通訳者自信の通訳時以外の自己表現、およびネイティブサイナーの手話などとの比較において、さらに詳細に検討する必要があるだろう。

2) 訳出表現の見やすさに関する分析

(1) 句や文の区切りの表示

手話の見やすさに影響を与える要因として、文の区切りの明瞭さを通訳事例ごとに評価したものが図4-35である。ここでは、訳出表現を区切りによって表示されるべきまとまりごとに切り分け、それぞれについて区切りが明瞭に表示されているかどうかを、表4-22の基準にしたがって評価した。図中、上部には明確に表示されたものを、下部には曖昧、あるいは脱落しているものを、それぞれ全体数に占める割合で表示している。

通訳事例A、C、Dはいずれも明確な表示が約90%の値を示しているが、Bは約25%が曖昧もしくは脱落であり、E、Fは70%以上が曖昧になっていた。ここから、通訳事例A、C、Dには句や文の区切りがほぼ明確に表示されているが、Bは時々抜け落ちたり曖昧に表示されていることがわかった。Bにはときどき、原文に追いつかない部分で訳出表現が極端に速くなったり、逆に原文の流れを聞くために遅くなったりする部分が見られ、特に速くなる部分で区切りを示す、間やうなずきが脱落する傾向が見られた。これは、原文との時間的關係が訳出表現に影響している例であり、手話が安定的に表現できていないことの表れであると言える。また、通訳事例E、Fはともに表示が出現してはいるものの、曖昧になることが多く、文全体として明確な区切れがない単調な表現になっていた。

句や節、文の切れ目を表示するために、うなずきなどの非手指動作を用いるという方法は、日本手話における文法標識の1つである。しかし本研究においては、通訳事例の中にはこのような文法標識を取り入れることで、よりはっきりと文の区切れや句と句の關係を示している者もいることが明らかにされた。しかし、区切れの明瞭さは個人による差が大

きく、用いている者と用いていない者で明らかな違いがあることが指摘された。一般に、このような区切れが明瞭でない、単調に続く訳出表現は、通訳の受け手にとって文章の意味を理解しにくく、読み取る際の負荷が大きいことが指摘されていることから、区切りの明瞭さにおける差が、受け手の印象にどのような影響を与えるかについて、今後さらに追求する必要があると言える。

(2) 訳出表現の非流暢性

訳出された手話表現のうち、言いよどみ、手型不明瞭、不要な間などの非流暢性につながる要素について、平均出現回数を分析したところ、図 4-36 のような結果となった。言いよどみ、不要な間はともに 7 回程度(約 40%)出現しており、曖昧な表現は 3 回以下(16.8%)であった。

これらを個々の通訳事例ごとに整理した結果が図 4-37 である。ここから、全体的な出現回数が多かった言いよどみについてはどの通訳事例にも現れているが、同じく出現回数の多かった不要な間については通訳事例 A、B、F のみにしか出現していないことが明らかになった。また、通訳事例 B と F にはよく似た傾向にあり、特に不要な間が他の通訳事例と比べて多く出現していた。不要な間には、文中に生じる通訳のつまずきと、文章間に生じる必要以上の休止が含まれているが、文の流れを聞くために止まっているもの、うまく手が動かない等の理由でつまずきが生じているものなどが両者ともに見られた。さらに、通訳事例 F には、手話単語が思いつかないために訳出できずにいるものもあり、これには手話自体の未熟さが影響していることも示唆された。

永田(1997b)は、音声同時通訳について、ある程度通訳者の技術が同じである場合、聴き手の印象を左右するのは、訳出が逐語的か意識的か、要約的か全訳的かといった起点言語から目標言語への変換の方法ではなく、音声表現の技術、つまり聞きやすさであり、特に発音の不明瞭さは大きな要因となりうることを指摘している。手話通訳においても、ここで得られた結果が被通訳者の印象とどのように関係しているかは非常に興味深い点であり、今後検討する必要があると言える。

第7節 音声同時通訳に比較した手話通訳の特徴

本研究では、手話通訳の通訳作業そのものに焦点をあて、通訳の過程において手話通訳者がどのような作業をしているのかという側面から、手話通訳という作業の特徴および、個々の通訳事例の違いについて明らかにしてきた。この結果、手話通訳の訳出率は平均して77.4%であり、多い者で90%程度の訳出が可能であることが明らかにされた。また、本研究で分析対象となった通訳事例は皆、重要語を選択的に通訳しており、この傾向は全体的な訳出率の小さい者ほど強くなっていた。原文と訳出表現の間のタイムラグは、通訳事例によって1秒から4秒と差があり、タイムラグの小さい者は単語レベルでの処理をしていると考えられた。これには、日本語対应手話の存在が関与しているものと考えられ、使用手話との関連でより深く分析する必要性が認められた。同時に、タイムラグの大きい者は句や文などより大きい単位で訳出しており、このことは起点言語から目標言語変換の際に生じる言い換えや圧縮の量の違いに表れていた。

また、手話通訳事例が用いている変換の方略を省略、言い換え、付加、原語借用、圧縮・統合、同等の6種類の項目から分析したところ、省略、言い換え、付加などは音声同時通訳と共通して出現しているが、手話通訳の特徴として日本語対应手話などを用いて表す同等が最も多く見られることが明らかになった。また、圧縮・統合や省略の量は訳出率と深く関係していることが示唆され、さらに、原語借用として原語である日本語と手話を交互に表示することで、両者を結び付ける手法が見て取れた。

それぞれの通訳作業における特徴としては、どの通訳事例にもある一定数の意図的省略が見られるが、これに何らかの制限が加わると意図的省略の量が増加し、さらに訳出の遅れによる脱落や訳出付加が出現するようになること、経験の浅い通訳事例の場合、日本語独特の言い回しをより通訳しやすいことばに変換して訳すことが多いこと、下位概念への言い換えは、言い換えによって原文の内容をより明確に表す事が多いのに対して、上位概念への言い換えは、言い換えた結果、基点談話のもつニュアンスやふくらみが失われたりあいまいになることが多いこと、付加には省略された語を顕在化するもの、文の整理修正をするもの、上位概念の提示（指文字をあらわす前に「名前」「テーマ」などをつけるもの）、説明の付加（ことばを表したあと説明を加える）などがあり、顕在化が最も多く用いられているが、上位概念の提示や説明の付加は経験の浅い通訳事例には表れていないこと、日本語を伝える手段として指文字や漢字の借用を行っている者と、手話が思いつかなかったときの代用として指文字を用いる者など、通訳事例によって指文字の機能が異なることなどが明らかにされた。

文レベルの言い換えとしては、音声同時通訳において従来より指摘されてきた、文の分割や統合が数量的に示された。特に、時間的制限のため文末の述部を待って訳出するのではなく、文頭から原文のポーズを手掛かりに短い文に切り分け、同時に接続詞等を補って修正を加えることで、継時的な訳出を可能にしていることが明らかにされた。

訳出された手話表現については、十分に分析を行うことはできなかったが、相による変化、方向による変化、類辞の活用など、一部日本手話で用いられる空間モダリティを活用した表現が出現していた。しかしながら、ここで見られたものはいずれも形態の単純なもののみであり、より複雑な文法的要素は出現していなかった。また、通訳事例の手話の中には文や句の区切れの表示が曖昧であったり、言いよどみや不要な間が頻繁に生じるものもあり、これらが訳出表現の見やすさに影響を与えているものと考えられた。

以上のことから、音声通訳と比較した手話通訳の特徴として以下の3点が挙げられる。

1) 日本語対应手話の存在

まず、手話のバリエーションとして言語としての手話のほかに日本語に対応して手話単語を配列する日本語対应手話が存在するという点があげられる。日本語対应手話の手話単語は、日本語の単語と意味範囲がほぼ等価であるため、日本語から手話へ変換する際には、聞こえてくる日本語を自動的に単語レベルで変換することができる。このため、原文と時間的に接近して訳出を行うことが可能となっていた。Barik(1969)は音声同時通訳において、通訳訓練校に通う学生の訳出が、プロの通訳者のものと比較して、極端にタイムラグが小さい部分があったが、この部分は往々にして単語に促した直訳的な訳出になっており、まったく意味のつかめないものになっていたと述べている。しかしながら、手話の場合、日本語対应手話というバリエーションの存在が、こうした直訳を可能にしている点で特徴的であると考えられる。ただし、このようにして訳出された手話は、日本語で言うと助詞を表示せずに単語をならべたようなものであり、被通訳者にとって読み取ることが困難であることも想像できるため、利用に際しては議論が必要であると考えられる。

2) 日本語の共有

また、手話通訳の大きな特徴として、話し手と受け手である聴覚障害者の間で、多くの場合日本語を共有しているという点があげられる。本研究において、経験の短い通訳事例が手話に置き替わりにくい語を指文字等を用いて原語のまま表示している様子が見うけられたが、これも日本語を共有していることを前提とした訳出法であると言えよう。また、通訳事例の中には、訳出の間に手話で表した語に原語で説明をつけたり、逆に原語で表した語に手話をあてはめるといった方法を用いている者もいた。音声同時通訳の訳出方略の

中には、訳語が思いつかないときにまず原語で表示し、この後で説明を加えたり、対応した表現がないときに原語をそのまま借用するという方法がある(小林, 1999)。しかし、手話通訳の場合、こうして表示された原語を受け手が理解できるという理由で、機能が異なっており、受け手の中で通訳された手話と日本語を結び付けるための独特の方略であるといえる。

3) 空間モダリティの活用

最後に、目標言語が手話であることの影響として空間モダリティが活用できるという点があげられる。音声モダリティと空間モダリティの最も特徴的な違いは、音声モダリティが要素(音素)を継時的に配列するのに対して、空間モダリティでは要素の同時的結合が可能であるという点であると考えられる。手話言語はこうした空間モダリティを活用した洗練された文法構造を持っているが、通訳事例の訳出中にも不完全ではあるにしろ、このような同時結合を活用することで効率的に情報の伝達を行っている様子が認められた。また、特に原文において動作を引用している部分では、音声言語では長い説明が必要であるが、手話の場合短時間にシンプルな表現で訳出が可能となっていた。

若松(1989a; 1989b; 1990a)は、日本語対应手話では、特に助詞や文と文の関係を示す語が表示できないこと、また手話は構音動作が大きく、伝達効率が悪いことなどを挙げ、より多くの情報を正確に伝えるためには、日本語対应手話をさらに日本語に近づけ、無駄のない動作で助詞レベルまで表示できるよう改良を加える必要があると主張している。

しかしながら、本研究の結果は、原文の内容すべてを音声に対応した手話で表示することは、手話と日本語の構音動作にかかる時間の違いから、むしろ限界があり、通訳事例はこの制限を空間モダリティを活用することでクリアし、伝達を可能にしていることが明らかにされた。このことは、日本語から手話への同時通訳において、原文の内容をより多く伝えるためには、手話を日本語に近づけるのではなく、逆に日本手話の文法的要素を取り入れる必要があることを示唆するものである。

本研究においては、起点言語テキストとして経験を伝達する内容を選択し、経験の異なる6名の通訳事例の訳出表現を資料として手話通訳の特徴について分析した。これらのことが、手話通訳一般に適用できるものであるか検証するために、原文や通訳者の異なる状況において、さらなる検討が必要とされる。

第 8 節 通訳事例ごとの手話通訳作業の特徴

各通訳事例ごとの訳出率の差を分析したところ、90%から50%程度とかなりの差があることが明らかになった。このような技術的な差はやはり手話通訳士の有資格者からボランティアまでという幅広い基盤をもつ手話通訳の1つの特徴であると言えるだろう。ここでは、得られた結果に基づき個々の通訳事例ごとに特徴を記述する。

まず通訳事例 A は全体で90%程度の情報を伝達しており、同じ程度の情報を訳出している者の中では最も少ない手話で多くの内容を伝えていた。タイムラグは文頭が1.18秒、文末が1.40秒で6名の中では最も短くなっていた。全体を通してタイムラグの変動も見られず、多くの文において文頭の1から2語を聞いたところから訳出を始めていた。また、句レベルの言い換えや圧縮はほとんどなく、語順の入れ替えもまったくなかったことから、文をほぼ単語レベルで処理していることがうかがえた。しかしながら、まったく単語に対応してそのまま忠実に表現しているだけではなく、文を分割し修正しながら訳出したり、より圧縮性の高い表現を語レベルで取り入れることで、より少ない手話で無駄のない効率的な訳出を可能にしていた。また、辞書形以外の語のバリエーションが非常に多く、「冗談をとばす」などの原語に対して、適切な語形変化を与えることでニュアンスを伝えていた。同時に必要に応じて指文字などで原語を表示することで、日本語と手話を結び付けながら提示している様子も見られた。

通訳事例 B は、Aと同様タイムラグが小さく、文頭から原文を追うように訳出している様子が見られたが、追いつかずに訳出すべき内容が脱落してしまう傾向があり、この結果訳出率は約7割と、経験の長い通訳事例の中ではやや少なかった。この理由として、訳出スピードそのものの違いと、方向の変化や非手指動作といった空間モダリティをほとんど利用せず、単語に対応した手話と、言葉の言い換えや意図的省略によって対応していることの2点が考えられた。また、訳出表現内にはつまずきや言いよどみが頻繁に出現していたが、文の区切りの表示は比較的はっきりしていた。辞書型の異なり語の数は多く、類辞を用いる表現の割合も比較的大きかった。

通訳事例 C は訳出率が86%であり、タイムラグは文頭が2.15秒、文末が2.5秒で平均に近い値を示していた。語レベルの変換作業における言い換え、付加、圧縮・統合や、語順の入れ替え、句レベルの言い換え、句レベルの圧縮が非常に多く出現しており、6名の中では最も原文から離れた自由な訳出を行っていた。そのため、途中タイムラグに幅が見られる箇所があったが、そのために脱落が生じることは少なかった。また、言い換えにおいて原文の日本語を忠実に表現するのではなく、手話として訳出しやすい方向に原文をシフトさせる箇所が何回も見られたが、こうした言い換えるの多くは適切と考えられ、言い換えた結

果原文をより明確に伝えるものとなっていた。訳出表現内には辞書形以外のバリエーションが非常に多く、同時に原語と結び付けながら訳出しており、こうした点では通訳事例 A とよく類似していた。

通訳事例 D は 90%近い情報を訳出しており、有意味訳出率は 92%と 6 名の中で最も大きな値を示していた。タイムラグは文頭・文末ともに 2.5 秒前後であったが、文章の前半はタイムラグが小さく、後半になって大きくなるといった他の通訳事例とは異質なパターンを示していた。変換作業としては付加や圧縮・統合が多く、通訳事例 C と同様言い換えも効果的に活用されていた。しかし、同程度の訳出率を伝達している A、C に比較して辞書形の割合が高く、表出語数が多いことからやや煩雑な印象を受けた。

通訳事例 E は訳出率が 80%程度であり、訳出率が同程度の通訳事例 B に比較して、少ない手話で多くの情報を訳出していた。タイムラグは文頭が 2.86 秒、文末が 3.16 秒で文章全体を通して 3 秒程度のタイムラグを取っていた。訳出方略としては特に言い換えと意図的省略が多く、これらを利用して文を要約的にまとめながら通訳している様子が見られた。脱落や句レベルの省略が少なく、意図的省略と同程度の回数で圧縮・統合も出現していることが、効率的な訳出につながっているものと考えられたが、原文を自分が表現できる手話の範囲にシフトさせているために、日本語のニュアンスが失われ、表層的な通訳になってしまう箇所も見られた。訳出表現内にはつまずきや言い直し等はほとんど見られなかったが、語のバリエーションが少なく、手話が思いつかないときに指文字で代用する箇所が多く見られた。また時折手型が曖昧になる箇所が見うけられ、文や句の切れ目の表示が不明瞭であるため、全体的に抑揚のない単調な通訳になっていた。

通訳経験の最も短い通訳事例 F は、訳出率が 51%であり訳出語数は 241 語でともに最も小さかった。また、総訳出時間が他の通訳事例に比べて短く、訳出を行わずに手がとまっている時間が長かった。タイムラグは平均して文頭が 3.89 秒、文末が 3.07 秒であったが、各文語との変動が 0 秒から 7.5 秒と非常に大きかった。また、F には文末タイムラグが大きくなると文を省略し、次の文に移るといったパターンがあり、このことが全体的な訳出率の低下につながっていた。さらに、このパターンは文レベルのみでなく、より小さい単位においても見うけられ、訳出全体にわたって訳出に遅れると、その部分は省略して次の部分に移るという方略を取らざるを得ないことが明らかになった。また、省略して次に移る際、これまでの文章とのつながりがつかめないため、一定時間原文を聞いた後に訳出を始めており、ここから同時通訳に必要な聞きながら訳出するという同時処理の技術はまだ十分身についていない段階にあると推察された。また、訳出表現内には言いよどみや不要な間、曖昧な手型が多く見られ、文や句のまとまりを表示する区切れの曖昧な箇所も多かった。

以上の結果をもとに、各通訳事例の特徴を総合的にまとめると、通訳事例ごとの差異は以下の側面、すなわち訳出率、処理単位、変換方略、手話表現の 4 つの側面において顕在化すると考えられる。

1) 訳出率

各通訳事例の訳出を、伝達された訳出率の側面から分析したところ、訳出率が 90%程度の高訳出率群、70%台の中程度群、50%程度の低訳出率群の 3 群に分かれる傾向があることが明らかにされた。これらの違いは主に、省略の出現回数によって規定されており、特に時間的遅れによる脱落や訳出不可、句レベルの省略の量が大きく影響していると考えられた。

2) 処理単位

訳出における処理単位として、文節レベルでの訳出が中心になる通訳事例と、句や文など、より大きい単位で訳出していると思われる通訳事例の 2 つのタイプに分けることができた。

このことは、タイムラグの大きさ、句レベルの言い換えや圧縮、語順の入れ換えの出現回数などに表れており、処理単位が小さいものほど、タイムラグが小さく、原文で使用されている語に忠実に訳出していた。逆に処理単位が大きくなると、タイムラグも大きくなり、原文の 1 つ 1 つの言葉よりも単位内で伝えられている意味内容を伝達しようとしており、その結果原文からの距離が離れ、より自由な訳出がされる傾向にあった。

また、処理単位が小さい通訳事例の中で、途中時間的遅れによる脱落が生じやすい傾向が見られた。このことから、原文とのタイムラグが大きくなると文節レベルの処理では対応が困難になるものと考えられた。逆に大きい単位で処理している通訳事例は、多少タイムラグが大きくなってもそこで話されている大まかな内容は伝達できるが、この結果訳出が要約的になり、原文のニュアンスが伝わりにくいという問題もあることが指摘された。

3) 変換方略

各通訳事例が用いている変換方略のうち、特に同時通訳における時間的な制限をクリアするために用いている方略が通訳事例ごとに異なり、これらは「脱落」「言い換え」「圧縮・統合」の 3 タイプに分類することができた。

脱落タイプの通訳事例は、遅れが生じると、この部分を訳出することができないまま次の部分に移らざるを得ない様子が観察され、このことは時間的側面から見た訳出パターンや、脱落、句レベルの省略の量、および変換と時間の関係に顕著に表れていた。

これに対して、言い換えタイプの通訳事例は、同じく時間的遅れが生じた場面で訳出でき

ない部分を、より短い言葉に言い換え、大まかな内容のみを伝えることで処理していることが明らかにされた。

さらに、圧縮タイプの通訳事例は、原文の内容をすべて手話単語によって対応的に表示するのではなく、くり返し部分を統合したり、空間モダリティを活用することで圧縮性の高い表現を用いるなど、常に効率的な通訳を行っているため、大幅に遅れが生じるような場面は見られなかった。

このうち、特に脱落タイプと言い換えタイプの違いは、同時処理能力の差によってもたらされるものであり、さらに、言い換えタイプと圧縮タイプの間には、空間モダリティの活用の程度の違いがあるものと考えられた。

4) 手話表現

最後に従来より指摘されてきた、手話の習熟度が挙げられた。これは、訳出表現内で用いられている語の種類や手話表現の非流暢性、区切りの明示といった項目に規定されるものであり、より用いている語のバリエーションが多く、区切れも明確で流暢なタイプと、異なり語彙の種類が少なく、区切れも明瞭でないために単調な印象を受けるタイプに分かれた。

第9節 手話通訳作業の客観的評価指標の抽出

本研究では、手話通訳における作業内容を記述し、さらに通訳事例ごとの差異を明確に検出することが可能な指標を抽出するために、訳出率、訳出の時間的側面、手話から日本語への変換、訳出された手話表現の4つの側面から分析を行った。以下に、本研究の結果から指摘された各指標の有効性について述べる。

まず、訳出率について、本研究では原文を文節ごとに切り分けそれぞれの文節が訳出文中に表れているかどうか検討する方法を用いた。これにより、手話単語として表示されている内容のみでなく、非手指動作や語形変化によって訳出されている部分も訳出率に含めることが可能になった。

また、訳出語数の量は訳出率の大小とほぼ対応しており、訳出率を示す大まかな指標となることが明らかにされた。

次に、時間的側面として総訳出時間とタイムラグについて検討した。総訳出時間は各通訳事例間で1名を除いてほぼ同等の値となっており、明らかな差異以外は検出できなかった。また、タイムラグの大きさは、句レベルの言い換えや語順の入れ換えなどの指標との関係で、処理をどの単位で行っているかを示す指標となっており、タイムラグの小さいものは語レベルの処理、大きいものは句や文などより大きな単位で処理していることが示唆された。同時に、本研究においては経験が長い通訳事例ほどタイムラグが短くなっていたが、これについてはさらに検討する必要があるだろう。

日本語から手話への変換においては、省略、付加、言い換え、原語借用、圧縮・統合、同等の6種類に分けて分類する方法を用いた。この結果、訳出率の多いものほど、圧縮・統合が多く省略が少ないことが明らかにされた。また、省略の中でも特に、脱落、訳出不可、句レベルの省略は、訳出率にと密接な関係があり、手話通訳の際には通常10%程度の省略が生じるが、何らかの制限がかかると意図的省略が増え、さらにこれで対応できなくなると脱落や訳出不可が出現し、これが増加していくという順序性も示唆された。これとは逆に、訳出率を高めるための手段としては、初めは時間的な遅れによる脱落や句レベルの省略が多く出現しているが、原文を聞きながら訳出するという同時処理が可能になると、訳出しながら原文を言い換えることで時間の調整を図ることが可能になり、さらに、時間的制約をクリアするために日本手話の文法を借用し、より少ない語で多くの情報が伝達できる技術を習得するようになることも明らかにされた。このことから、圧縮・統合の出現回数、脱落、訳出付加、句レベルの省略の量は、いずれも訳出の訳出率だけでなく、通訳事例の用いている変換方略の違いを示す指標としても有効であることが証明された。

訳出された手話表現の分析には、語のバリエーション、句や文の区切りの明瞭さ、非流

暢性の 3 点を利用した。手話表現そのものの分析のために異なり語の数をういたが、今後は通訳事例の用いている中間的手話をより細部まで検討できる指標の開発が必要であろう。一方、手話表現の見やすさを示す指標としては、1 点目に句や文の区切れの明瞭さを取り上げ、これらの明瞭性について 3 段階で評価を行い、2 点目に非流暢性には言いよどみ言い直し、文中の不要な間、手型不明瞭の 3 点を指標として分析を行った。これにより、いずれも通訳事例ごとの明らかな差異を検出することができた。

表 4 - 1 対象者のプロフィール

	通訳資格	手話経験年数	通訳頻度
A	手話通訳士	25 年	週 5 回
B	手話通訳士	20 年	月 2 回
C	手話通訳士	18 年	週 3 回
D	手話通訳士	5 年	週 3 回
E	なし	2 年	週 1 回
F	なし	1 年	年数回

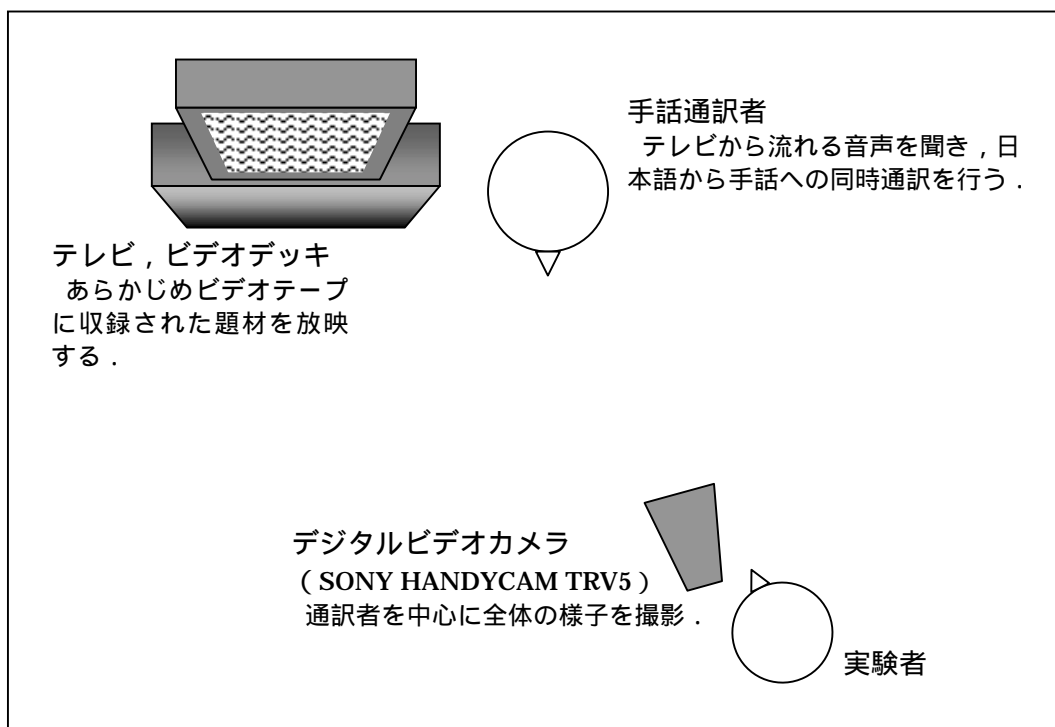


図 4 - 1 事例収集場面のセッティング

表 4 - 2 トランスクリプト表記上の留意点

ト ラ ン ス ク リ プ ト	起点談話の表記	音声で話されている事柄のうち、意味のない指示代名詞（あの、そのなど）、母音の引き延ばし（え～など）で、こう、まあなどの冗語は除いて書記化した。
	訳出表現の表記	収録したビデオテープを元に、通訳者が表出した手話表現を日本語のラベルを用いて単語レベルで書記化した。その後、非手指動作などの手話単語以外の各要素で、通訳上特に意味があると考えられるものについて、必要に応じて補助記号を用いて記述した
タ イ ム ト ラ ン ス ク リ プ ト	時間の表記	<p>起点言語、目標言語それぞれにおいて各文の開始時間と終了時間を測定し、0.5 秒間隔で同一の時間軸上に表記した。</p> <p>起点言語の時間測定においては、ビデオテープ上の各文の開始点と終了点に手がかりとなるマーカーを挿入し、デジタルビデオ上に記録されたタイムカウンターのフレーム数を元に各文の発話時間をそれぞれ算出した。</p> <p>目標言語は同様にタイムカウンターのフレーム数を元に算出したが、手話の開始動作、終了動作は訳出時間に含めず、手話動作のみを対象とした。</p> <p>ただし、0.5 秒以下の発話および休止は通訳上意味のないものとして記述対象から外した。</p>

Baker and Cokely(1980)、市田(1998)、Valli and Lucas (2000)等を参考に作成

	0	1	2	3	4	(秒)
原文	少し前のことなんです けれども まだ 娘が小さいころの 話です					
A	/少し/以前-----/経験/しかし/		/PT1/娘-----/年齢/小さい---/時/ /L:PT 娘 _{nod} /			
B	/少し/過去---/ある/しかし _{nod} /			/PT1/娘/小さい-----/時 _{nod}		
C	/少し/以前 _{nod} /		/娘-----/時/ /L:小さい--/			
D	/少し---/以前----- _{nod} /経験-----/過去--/		/PT1/娘-----/ /L:PT1 _{nod} /			/R:小さい/
E	/少し/以前--- _{nod} /			/PT1/娘-----/小さい---/		
F						
	5	6	7	8	9	(秒)
原文	ある時 彼女が 私に ほうきを 買って 欲しい					
A	/或---/時---/娘-----/ほうき---/買う /L:PT 娘---/PT1-----/					
B	-----/説明/あげる _{nod} /			/R:娘-----/ /L:PT 娘+-----/		
C	/話し[G型]/提供 _{nod} /		/娘-----/ /L:PT 娘----- _{nod} /3-言う-1/			
D	/時 _{nod} /		/PT1 _{nod} /娘-----/ /R:PT1/ /PT1/			
E	/時-----/		/娘--- _{nod} -----/言う娘- 1 / /L:PT 娘-----/			
F	/娘-----/ () /			/小さい----- ^{強調} /時/ /L:PT 娘/		
	0	1	2	3	4	(秒)
原文	と いったんですね おかしいなあ「うちにもほうきがある					
A	--/欲しい/娘-----/		/不思議/ほうき/ある/理由/何/1-尋ねる ^{Whq} -3/ /L:PT 娘/3-言う-1---/			
B	/言う 3-1---/ほうき/買う-----/3-言う-1----- _{nod} /			/ ^{Whq} 何/ / ^{Whq} 不思議/PT3/		
C	/ ^右 呼びかけ/ほうき-----/買う/お願い/3-言う-1/			/ほうき/家----- ^{Whq} /R:ある/		
D	/PT1/ほうき/買う/欲しい/娘-言う-1/-PT 娘/			/ ^{Whq} 疑問/PT1/家-----/ほうき/ /R:中/		
E	/ほうき--- _{nod} /買う-----/欲しい-----/娘-言う- 1 /			/不思議/家-----/		
F	/娘-----/ほうき-----/R:PT ほうき--/買う/欲しい/娘----- /L:PT 娘---/3-言う-1 _{nod} / /L:(言う)/					

図 4 - 2 トランスクリプトの例

表 4 - 3 重要語の例

起点談話	重要語
<p>少し前のことなんですけども、まだ娘が小さいころの話です。ある時彼女が私に、えーほうきを買って欲しいといったんですね。で、おかしいなあ、「うちにもほうきがあるのになんで?」と思ったら、「ペタンコのほうきじゃなくてもっと大きなほうきが欲しい、立派なほうきが欲しい、竹のほうきが欲しい」って言うんですね。で、いわゆるあの大きな竹ほうきのことだったんですね。私は竹ほうきを買って何するのかなあとおもって、「どうするの?」って聞いたら、彼女が、一瞬こうためらったんですけども、「んー空飛ぶ練習したい」って言うんですね。</p>	<p>少し/前の/ことなんですけれども/まだ/娘が/小さい/ころの/話です//ある時/彼女が/私に/ほうきを/買って/欲しいと/いったんですね//おかしいなあ/「うちにも/ほうきがあるの/に/なんで?」と/思ったら/「ペタンコの/ほうきじゃ/なくて/もっと/大きな/ほうきが/欲しい/立派な/ほうきが/欲しい/竹の/ほうきが/欲しい」って/言うんですね//いわゆる/大きな/竹ほうきの/ことだった/んですね//私は/竹ほうきを/買って/何するの/かなあと/おもって/「どうするの?」って/聞いたら/彼女が/一瞬/ためらった/んですけども/「空/飛ぶ/練習/したいんだ」って/言う/んですね//</p>

/ ……文節の切れ目, // ……文の切れ目, ___ ……重要語

表 4 - 4 分析項目

訳出率	訳出語数(語)	目標言語として訳出された手話単語の数を算出する
	訳出率(%)	起点言語テキストを構成する全文節のうち、目標言語として訳出されているとみなされる部分の比率を算出する
	重要語訳出率(%)	起点言語テキストに含まれる重要語のうち、目標言語として訳出されているとみなされる部分の比率を算出する
時間的側面	総発話時間と訳出時間	起点言語における総発話時間と通訳者によって訳出が行われている時間数を求める
	文頭タイムラグ(秒)	原文が聞こえ始めてから訳出が始まるまでの時間を文ごとに算出し、平均を求める
	文末タイムラグ(秒)	原文が終了してから通訳者の手が止まるまでの時間を文ごとに算出し、平均を求める
日本語から手話への変換	語レベルの変換作業	トランスクリプトを元に、原文と訳出表現を比較し、文節レベルでの操作を以下のカテゴリーに従って記述する(省略、付加、言い換え、原語借用、同等、圧縮・統合)
	文レベルの変換作業	トランスクリプトを元に起点談話と訳出表現を比較し、文レベルでの操作を以下のカテゴリーに従って記述する(分割、統合、語順の入れ替え、句レベルの圧縮、句レベルの言い換え、句レベルの省略)
訳出された手話表現	訳出された手話の種類	各通訳者が訳出表現内で用いている語について、その種類の数を分析する
	句や文の区切りの表示	各通訳者の訳出表現のうち、区切れとして表示されるべき部分の明瞭さについて以下の3段階に分類し評価する(明確、曖昧、脱落)
	訳出表現の非流暢性	訳出表現内で非流暢性を引き起こす箇所について、以下のカテゴリーに従って分類する(言いよどみ言い直し、不要な間、手型不明瞭)

表 4 - 5 訳出率の算出方法

	例文	訳出語数 訳出率
原文	よく/女の/人たちが/集まると/なんか/理想の/こういう/男性がいいと か/ああいう/タイプの/人がいいとか/いるんな/おしゃべりを/します ね//	16 文節
例	$\begin{array}{c} \text{右} \text{-----} \text{左} \\ /女[複数]/集まる_{+nod}/男[複数]/姿/PT3/良い_{強調}/PT3/PT3/良い_{強調}/ \\ /会話_{++} \cdot \#円運動/同意_{nod}/ \end{array}$	11 語 100%
例	$\begin{array}{c} \text{右} \text{-----} \\ /女[複数]/人[複数]/集まる/時/いつも/何/理想[FS:[リ]+想像]/男[複数]/ \\ \text{-----} \text{左} \text{-----} \\ /良い/PT3/または/PT3/タイプ/男[複数]/良い/似ている/会話/いろいろ/ \\ /ある/同意_{nod}/ \end{array}$	20 語 100%

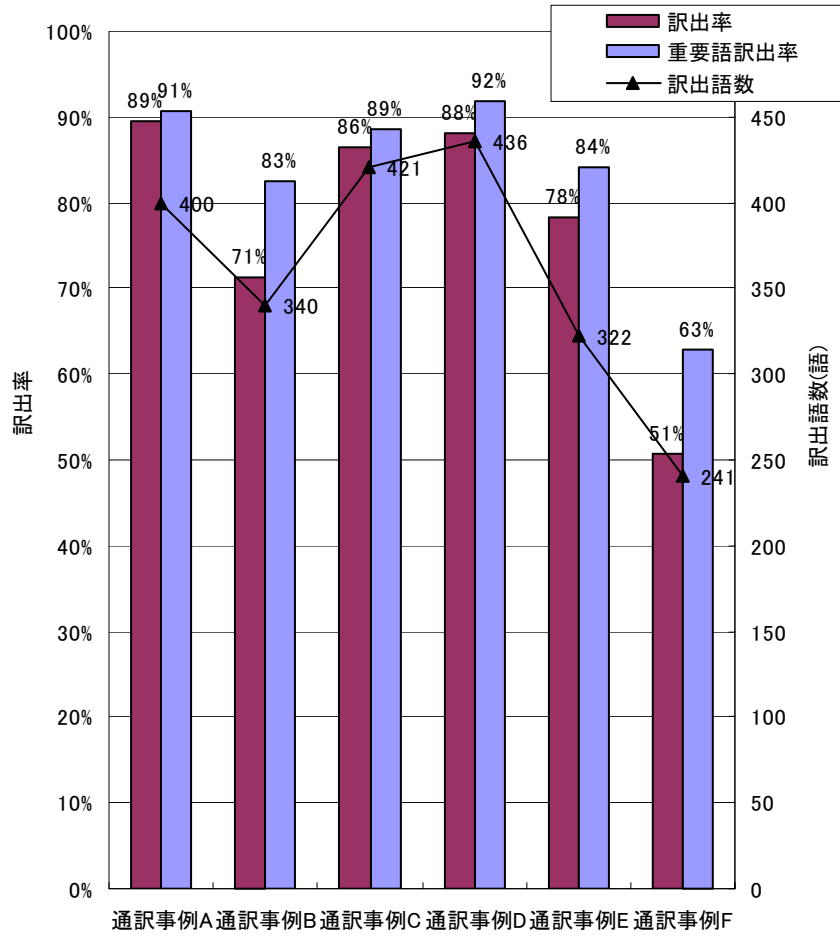


図 4 - 4 訳出語数と訳出率

表 4 - 6 総発話時間と総訳出時間

原文の総発話 時間 (秒)	総訳出時間 (秒)					
	通訳事例 A	通訳事例 B	通訳事例 C	通訳事例 D	通訳事例 E	通訳事例 F
278.5	280.5	280.0	277.5	279.5	281.0	253.5

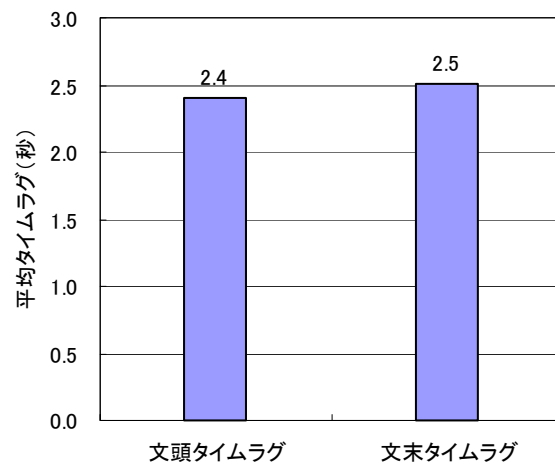


図 4 - 6 文頭・文末タイムラグの平均

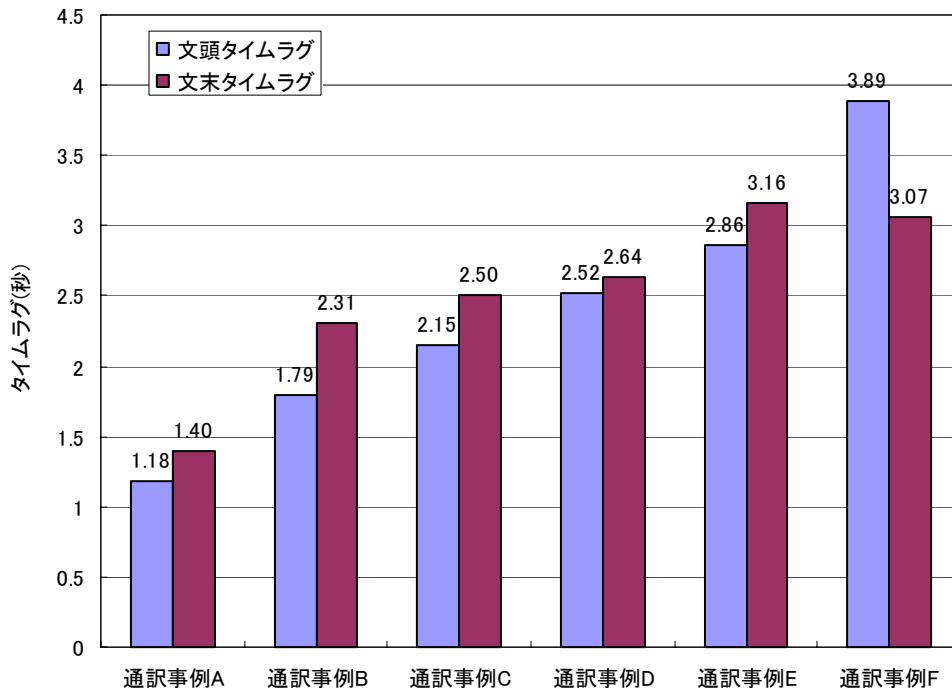


図 4 - 7 文頭および文末タイムラグ

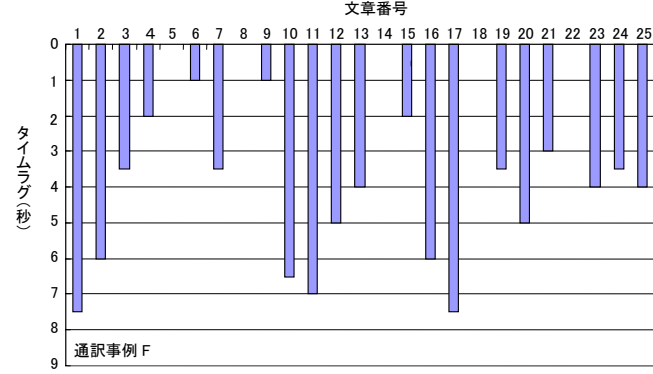
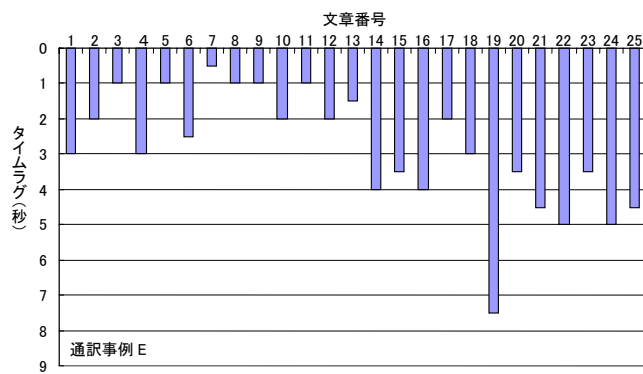
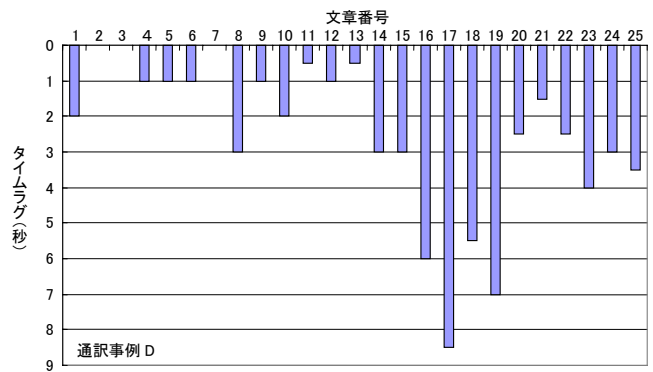
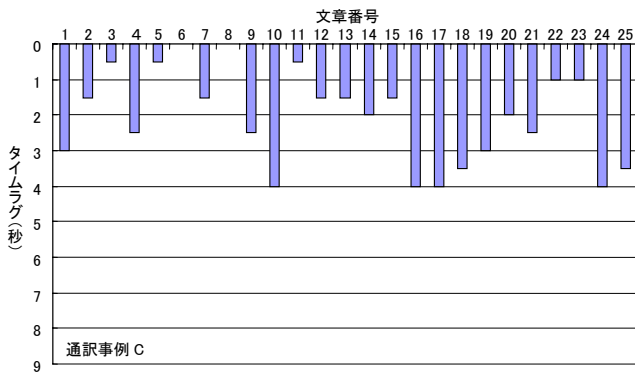
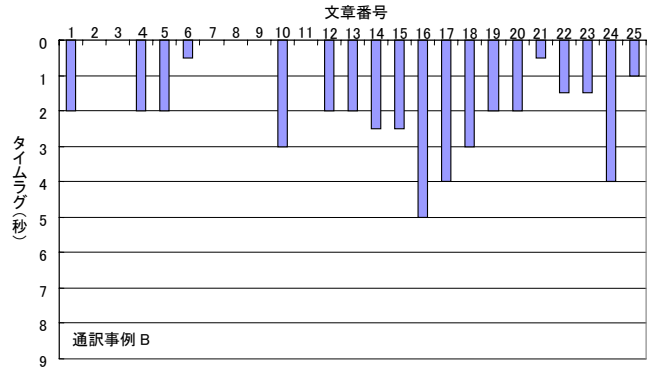
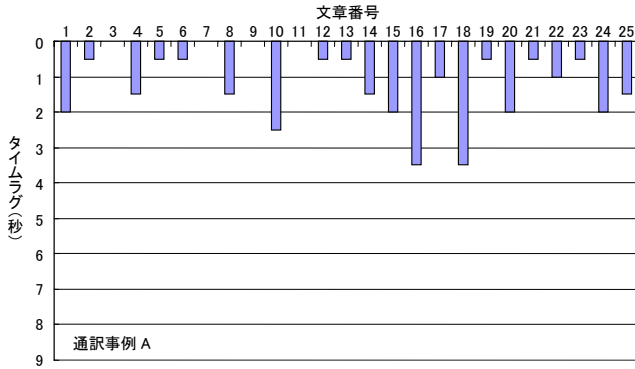
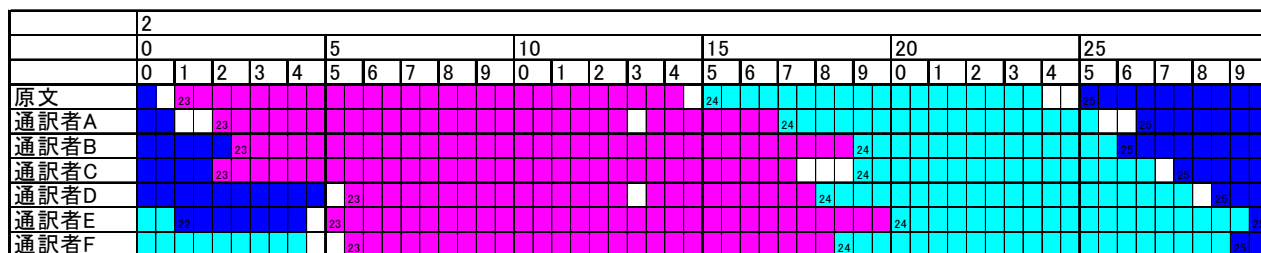
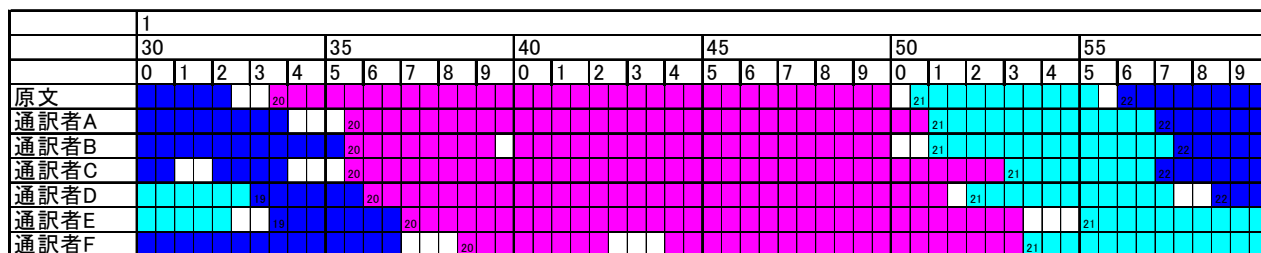
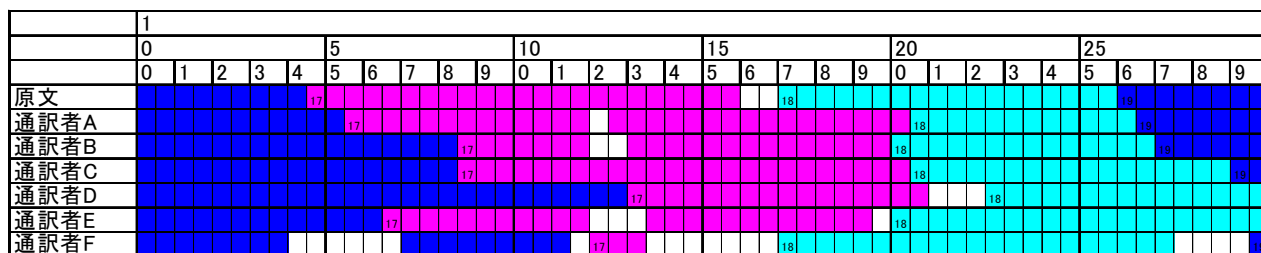


図 4 - 8 文章全体を通して見たタイムラグの推移



通訳者の訳出が行われている部分を、文ごとに色を変えて示している。
各文の文頭には番号を振っており、横軸は時間で、1カラムは0.5秒を示している

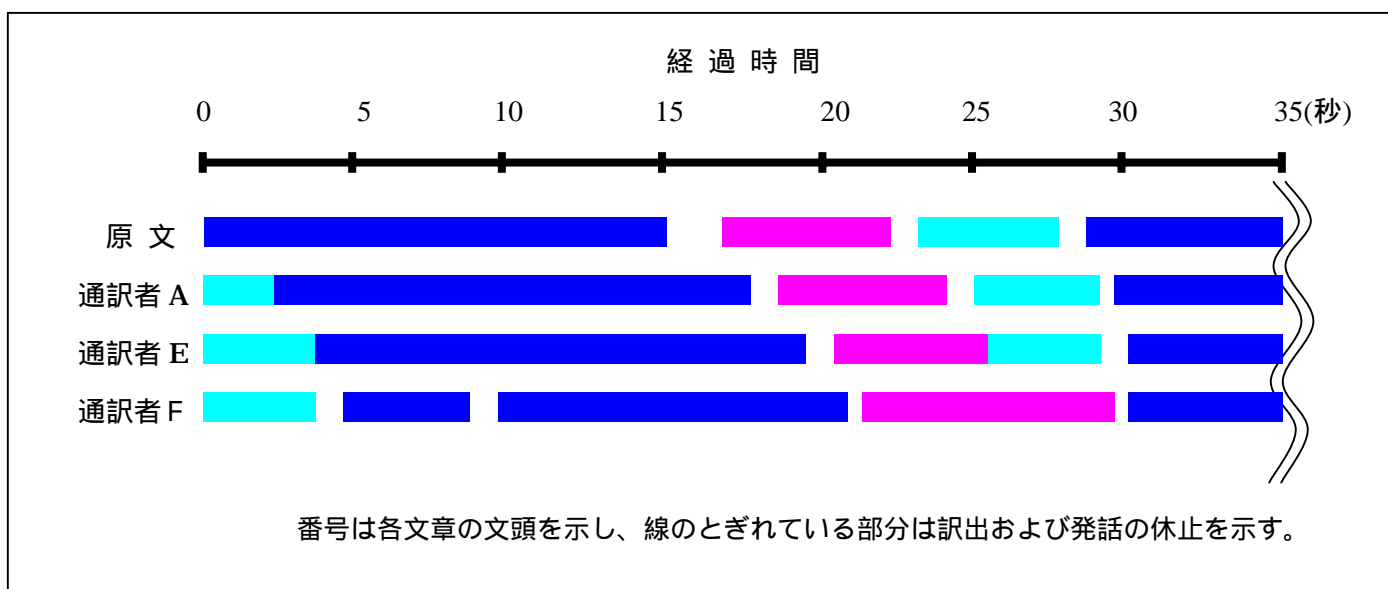


図 4 - 9 時間的側面から見た訳出パターン

表 4 - 7 語レベルの変換作業

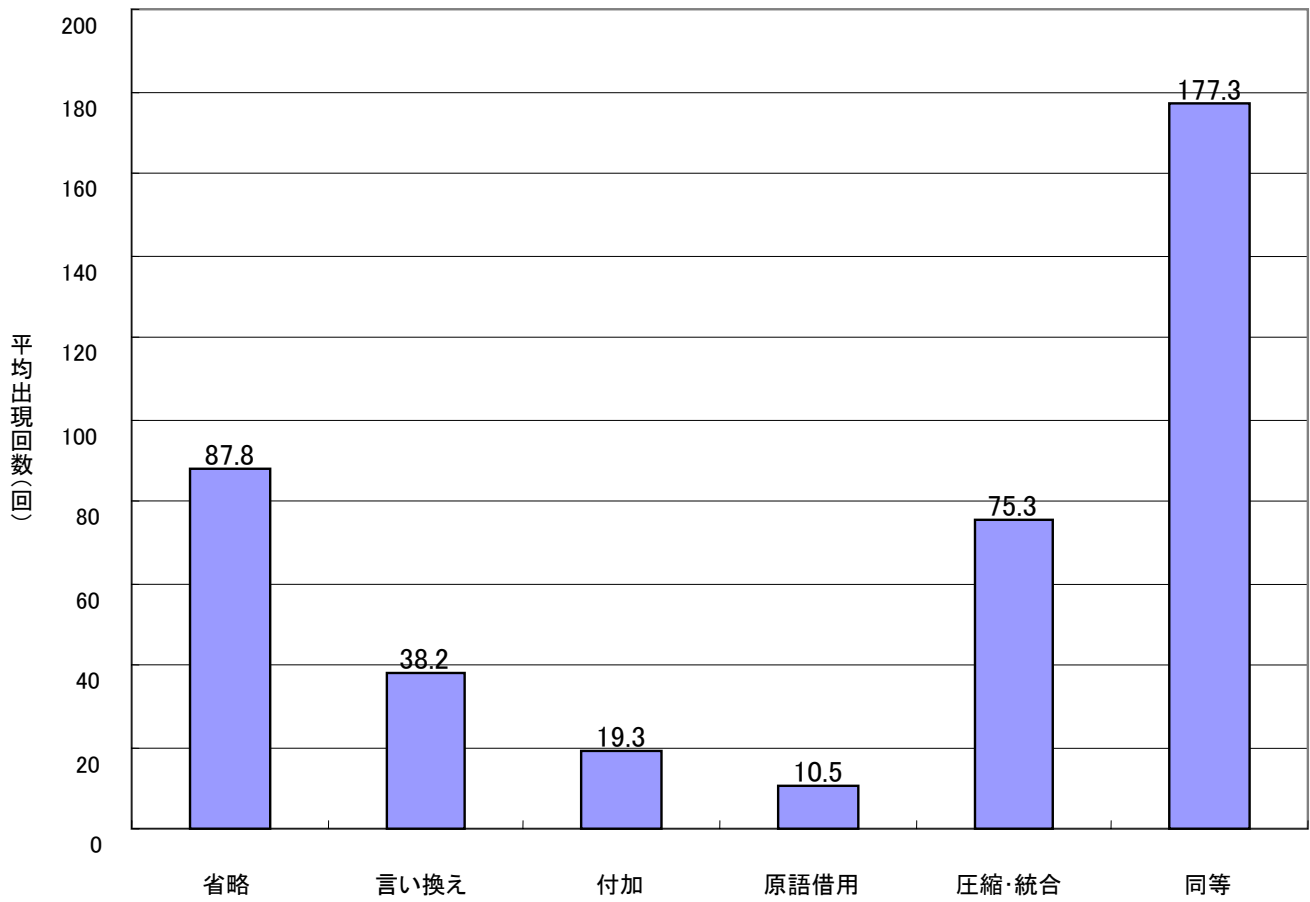
省略	起点言語テキストに含まれる情報で、目標言語として訳出されていないもの
付加	起点言語テキストに含まれていない情報で、目標言語として訳出されているもの
言い換え	起点言語テキストに含まれる語で別の語に言い換えられているもの
原語借用	指文字や口形、漢字に対応した手話を用いて原語をそのまま表しているもの
同等	日本語に対応した手話単語などを用いてほぼ等価に訳出されているもの
圧縮・統合	起点言語テキストにおいて複数の語で表現されている部分を少ない語で訳出しているもの

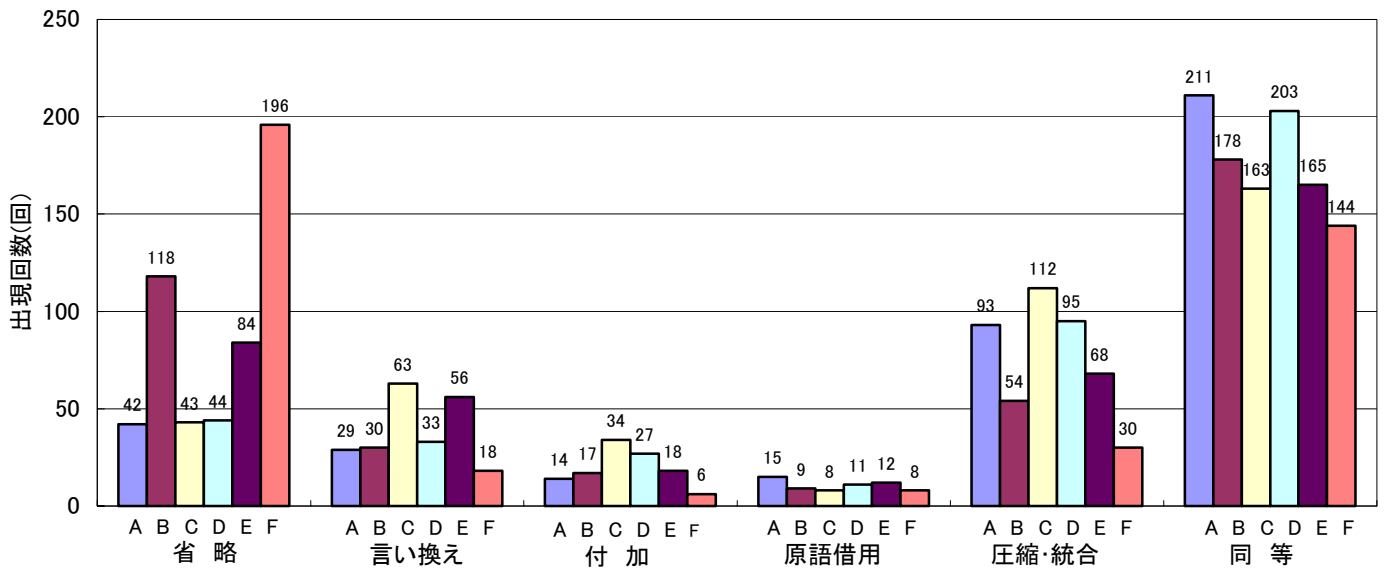
表 4 - 8 文レベルの変換作業

カテゴリー	説明	例
分割	1つの文章を2つに区切って訳出しているもの。	少し前のことなんですけども、まだ娘が小さいころの話です 少し前のことです。まだ娘が・・・
統合	2つ以上の文章を1つに統合しているもの	ユーモアのセンスがある男性であるということなんです。これはみんなほとんど一致しているわけです。ユーモアのセンスがある男性ということは、みんな一致しているわけです。
語順の入れ替え	日本語と語順が入れ替わっているもの。手話の特質が要求する入れ替えも含む。	何に使うの？ /使う/何/ ^{Whq} なにをするの？ /する/何/ ^{Whq} 娘が～と言った /娘/言う/~/
句レベルの圧縮	句レベルで圧縮が行われているもの。ロールシフトを含む。	みんなほとんど一致している訳です /同じ・#円運動/ (円運動を付加することでみんなに共通している意を表示)
句レベルの言い換え	句レベルで言い換えが行われているもの	デカプリオがいいと言ってみたり、ロバートレッドフォードがいいと言ってみたり デカプリオがいいとか、 <u>誰か他の人がいいとか</u> それでどこで買ったらいいいのかわからないので、あれこれあれこれ探していたんですけども、バス通りの向こうのほうに～ それでどこで買ったらいいいのかわからなくて・・・バス通りの向こうに～

*なお、原文は全部で 104 の句に区切られた

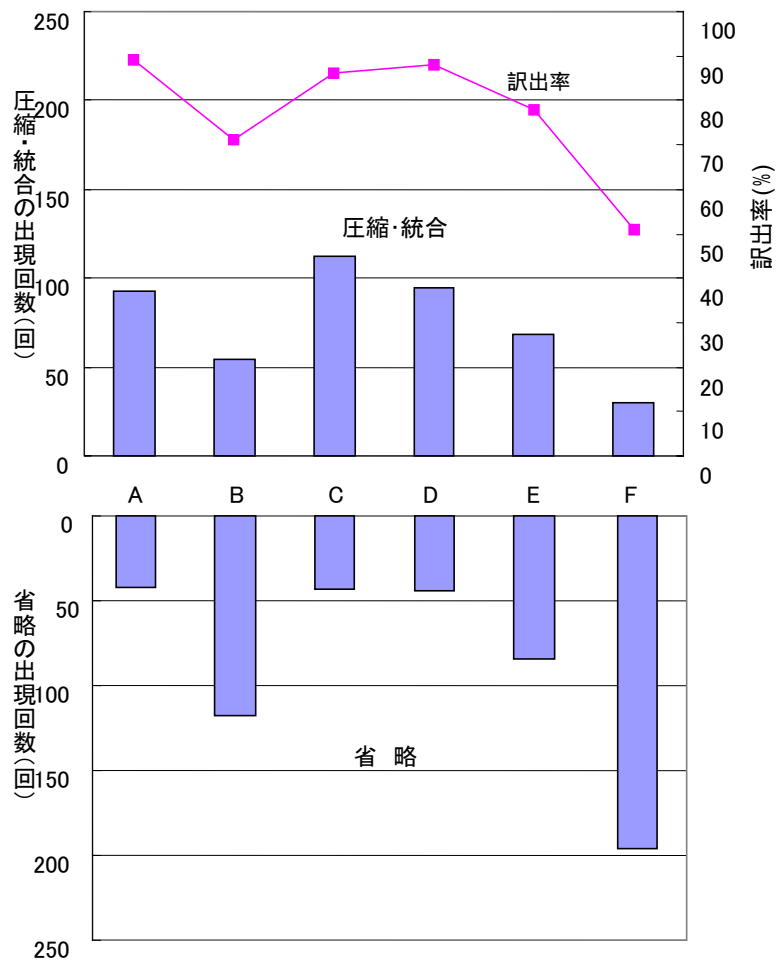
図 4 - 10 語レベルの変換作業





A からFは通訳事例を示す

図 4 - 11 通訳者ごとの語レベルの変換作業



A からFは通訳事例を示す

図 4 - 12 省略及び圧縮・統合の出現回数と訳出率

表 4-9 省略の種類

カテゴリー	説明
意図的省略	繰り返しやあまり重要でない語句で、通訳者の判断によって省略されたと考えられるもの
脱落	時間的遅れによって訳出できなかったもの
訳出不可	手話表現が思いつかなかつたり、原文が聞き取れない、意味が把握できないなどで訳出できなかったもの

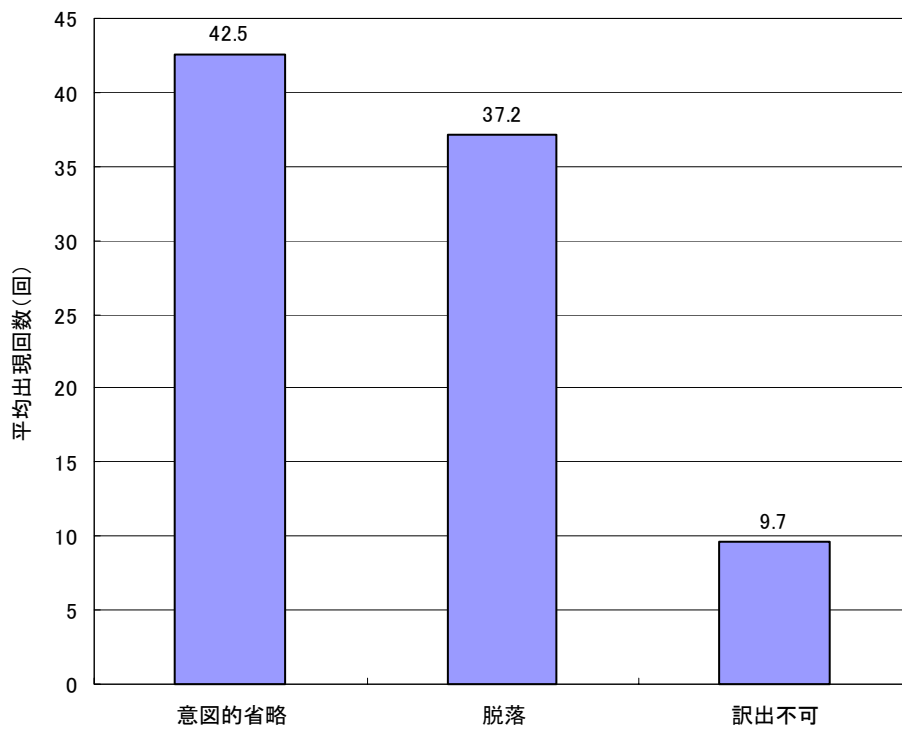


図 4 - 13 省略の種類と出現回数

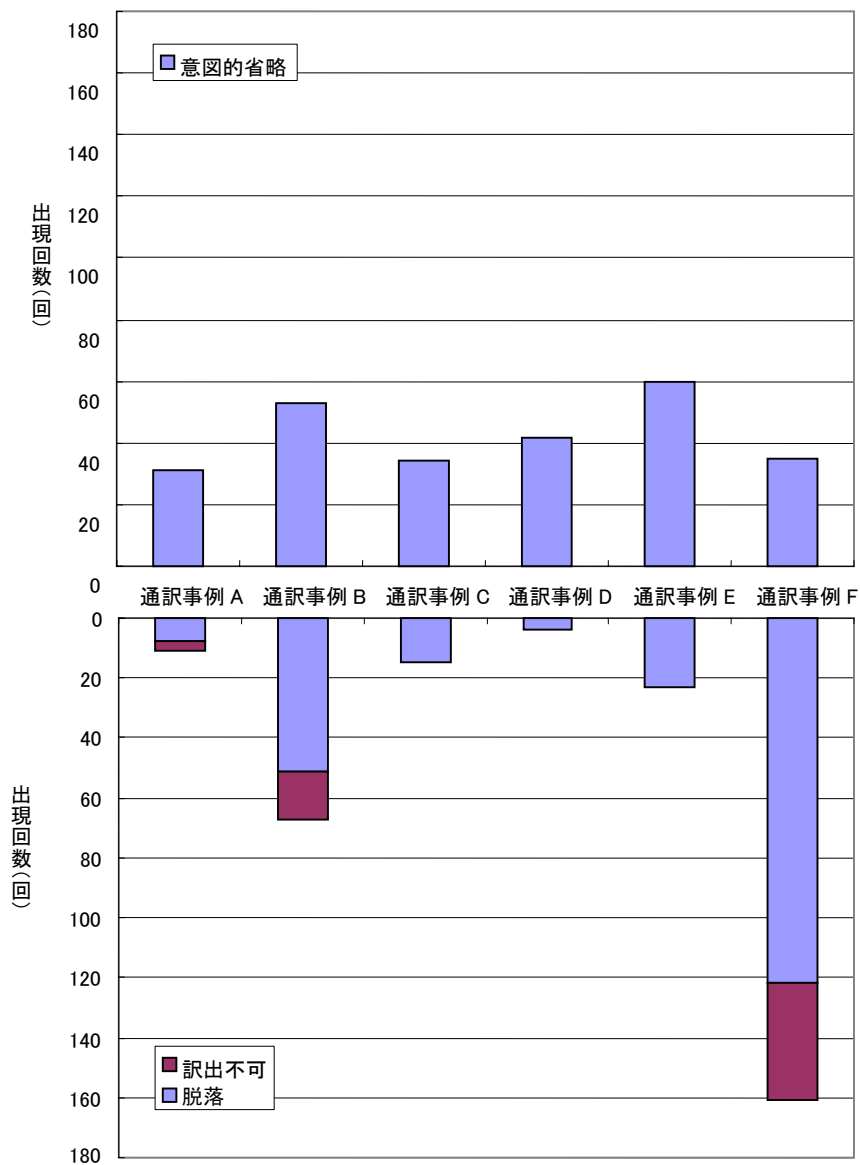


図 4 - 14 各通訳者の用いている省略の種類

表 4 - 10 繰り返し部分の省略例

基点談話	訳出例
共通している共通項	共通項
センスオブユーモア、つまりユーモアのセンスがある	ユーモアのセンスがある…
知性のあらわれ、人間性の豊かさの現われだって言うことになって	人間性の豊かさの現れということになって
センスをもっている、感覚をもっている	センスをもっている
大きなほうきがほしい、立派なほうきがほしい、竹のほうきがほしい	大きなほうきがほしい、竹のほうきがほしい

表 4 - 11 省略された副詞の例

省略された語句
よく、いろんな、特に、さんざん、たった、ほとんど、やはり、つまり、大げさに言うと、そのときに、非常に、まだ、あるとき、もっと、大きな、丁度そのとき、わりと、それで、一生懸命、おっきな、うん、あの、そうとう、やっぱり

原文	ペッタンコのほうきじゃなくて <u>もっと大きなほうきが</u>
訳文	/言う娘-1-----/
日本語訳	娘が私に
	<u>欲しい 立派なほうきが欲しい 竹のほうきが欲しい</u> って言うんですね
	/CL:[ぺったんこ]/ほうき/ない/CL:[大きなほうき]-----/竹-----/
	ペッタンコのほうきじゃなくて、 大きなほうき、 竹の
	<u>いわゆる 大きな竹ぼうきのこと</u> <u>だったんです</u> ね 私は
	/CL:[大きなほうき]-----/欲しい-----/言う娘-1/ /竹/FS:[ぼうき]
	大きなほうきがほしいって言うんです。 竹ぼうきのこと

図 4 - 15 意図的省略を用いて訳出している例

ある人は <u>デカプリオがいいわと いったり</u> いやロバートレットフォードだと
/若い/女[複数]-----/ /L:女-----
/R:PT 女#-----/ /R:PT 女#-----
若い女の人たちは、
<u>いったりいやいややっぱりキアヌリ - ブスよといったり</u> いやハンサム
-----/ / ()/
FS:[デカプリオ]-----/良い-----/いろいろ-----/
デカプリオが良いとか、 本当にいろいろ・・・
じゃなくて <u>渋い感じの男っていい</u> <u>と言ったり</u> ジャガイモのような
/本当/ /FS:[渋い]-----/似る/男----/良い/
渋い感じの男の人が良いとか、
<脱落> 「デカプリオ・・・」の部分の訳出に時間がかかってしまい、それに続く一節が脱落している。
<訳出不可> 「ハンサムじゃなくて」の部分で、訳出を行おうと手が動いたが、手話表現に戸惑いが見られ、結局訳出できずに次の句に移っている。

図 4 - 16 脱落・訳出不可の例

*二重下線部は省略された部分を表す。

表 4 - 12 言い換えの種類

カテゴリー	説明	例
指示語の内容	指示語や曖昧な語(「～こと」など)の内容を説明するもの	そんなことを いろいろな会話を ～ことなんですね ～の表れです
対応する手話表現がない場合の言い換え	説明	ハンサム /顔/きれい/ ためらっている 答えられない
	類似代用	同義語へ置き換えるもの 重要 必要 ただ しかし
	変容適合	言い回しを変えて表現するもの ～に始まって ～と同じで 冗談をとばせる 冗談を言える

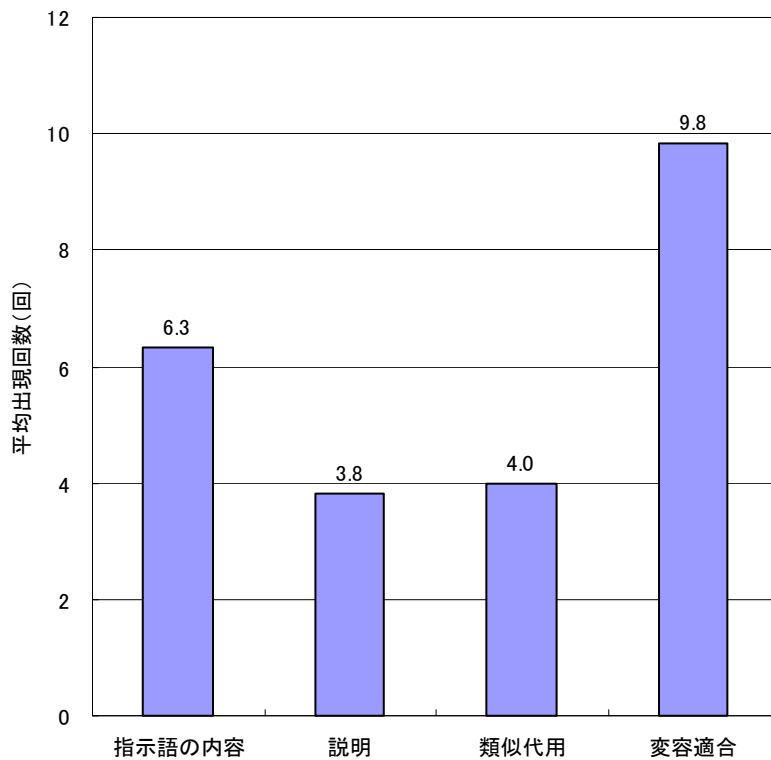


図 4 - 17 言い換えの種類と出現回数

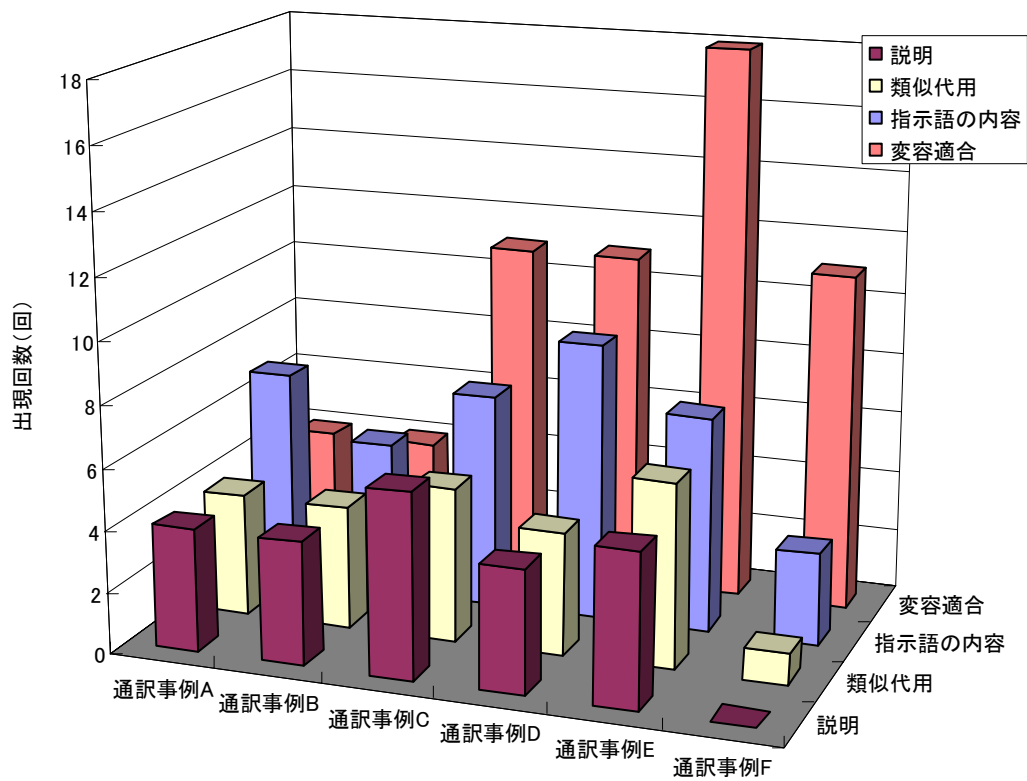


図 4 - 18 各通訳者の用いている言い換えの種類

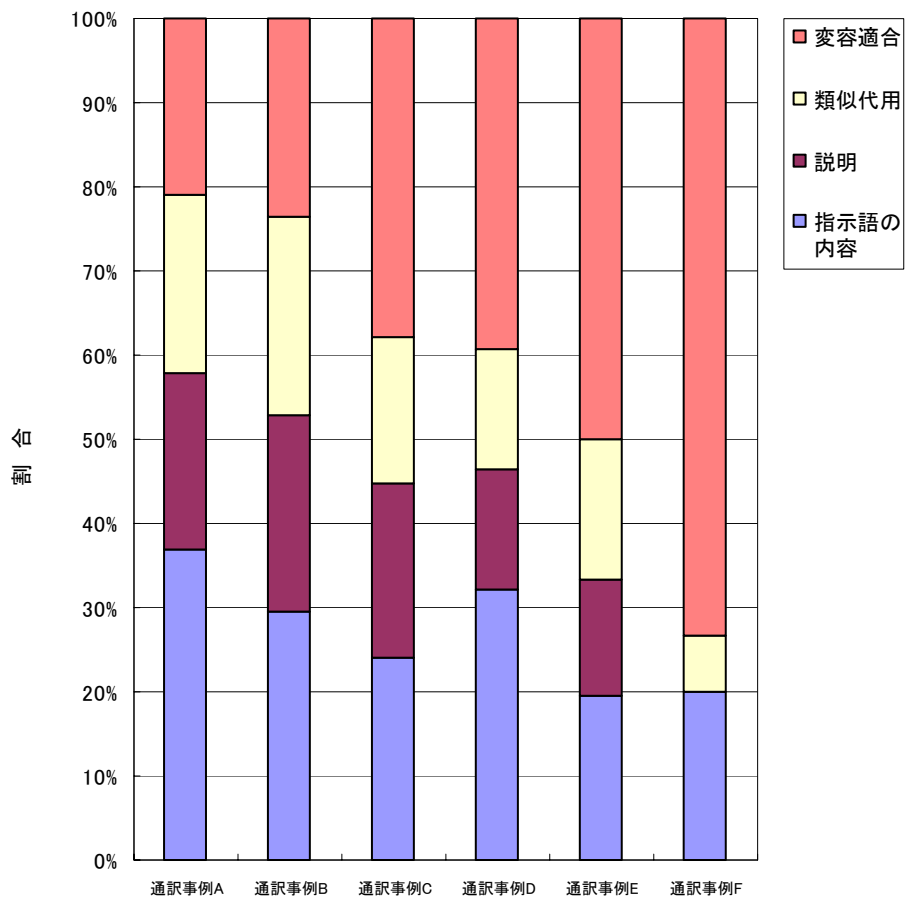


図 4 - 19 各通訳者の用いている言い換えの種類ごとの比率

表 4 - 13 言い換えの分類

上位	上位概念やより一般的な表現への言い換え、あるいは言い換えた結果意味の広がるもの	年ごろ 若い
下位	下位概念やより具体的な表現への言い換え、あるいは言い換えた結果意味が限定されるもの	言う 会話する
同等	ほぼ同等の語に言い換えられており、特に概念的な変化が生じないと考えられるもの	重要 必要

表 4 - 14 言い換えるの正否

適切	言い換えが適切であったり、言い換えの結果より明確に言い表されるもの	日本でもそうですが 日本でも同じですが
不適切	言い換えが不適切であったり、言い換えた結果、意味が変わったり、内容が限定されたりぼやけたりして十分に表されなくなるもの、	冗談がとばせる 冗談を言う

特に変化していないと考えられるものは適切に分類している

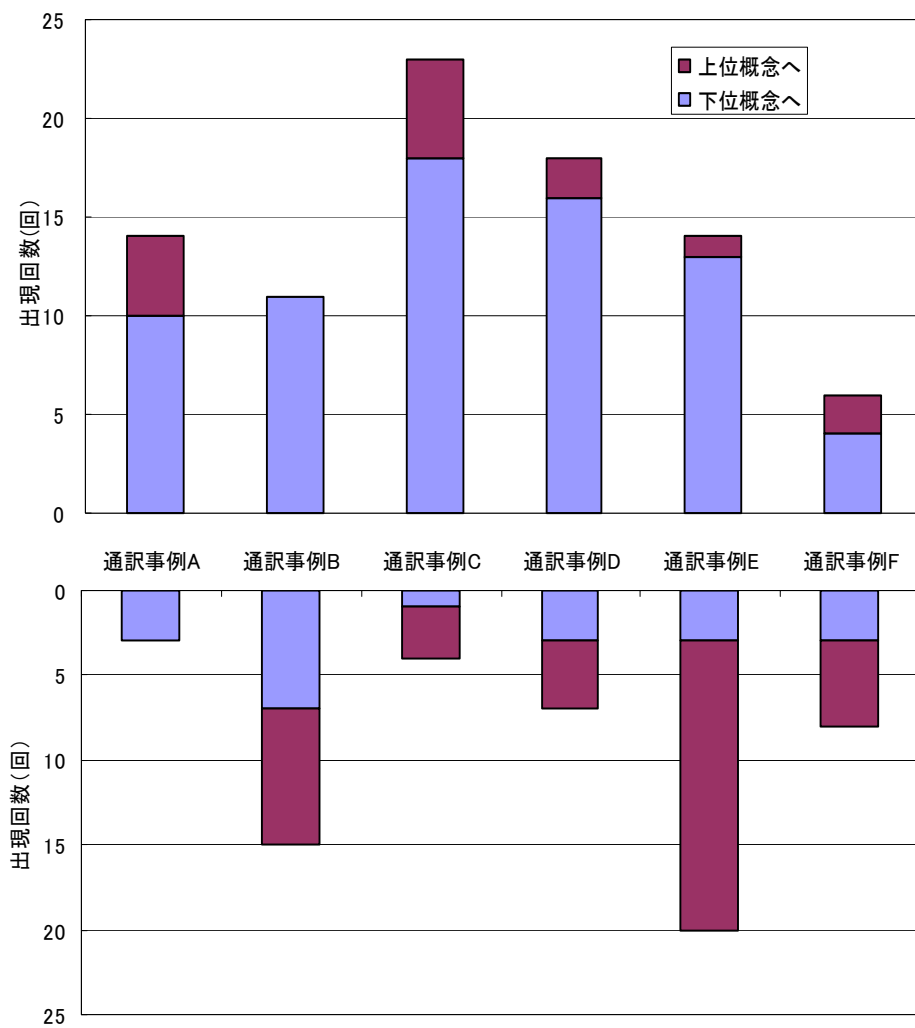


図 4 - 20 言い換えの種類と成否

表 4 - 15 適切な言い換えの例

	基点談話	言い換え後	日本語訳	備考
適切な言い換えの例	偏差値とか学歴ということではなく	/頭いい/悪い/nod/卒業/経歴/関係ない/	頭のよしあしやどの学校を卒業したかといったことは関係なく	説明
	「あった」って言うんでそれを買うことにしました。	^{強調(目を見開く)} /ある/PT3/うれしい/買う/決める/	「あった」というので、それを買うことに決めました。	明確化 あいまいな語句の内容を明示
	ユーモアというのは、冗談が飛ばせるとかって言うのもありますが・・・	/FS:ユーモア/意味/何?/ ^(考えなしに) /冗談/使う++/だけ/違う/	冗談が飛ばせるなどということだけではなく	変容適合 言い回しを換えてより明確に
	みんなのその場を	/みんな/集まる/場/	みんなの集まった場を	明確化 指示語の内容をより明確に
	日本でもそうなんですけども、 ~ということなんです。	/日本/同じ/ /言う/意味/nod	日本でも同じだと思いますが、 ~という意味なんです。	あいまいな語句を明確に あいまいな語句を明確に

表 4 - 16 不適切な言い換えの例

	基点談話	言い換え後	日本語訳	備考
不適切な言い換えの例	偏差値とか学歴ということではなく	/頭がよい/nod/勉強/nod/違う/ /	頭が良いとか、勉強ではなく	説明の失敗
	「あった」って言うんでそれを買うことにしました。	/ある/PT3/ /PT3/買う/完了/	あったのでそれを買いました。	言い回しの一般化
	なんか理想の、こういう男性が良いとかああいうタイプが良いとか話をしますよね。	/複:[FS:リ+想像]/男[複数]/関連/会話/ /複:[FS:リ+想像]/男[複数]/誰?/似る/会話/ある/	理想の男性について話をする。 理想の男性は誰かというような話をする。	言い回しの一般化 言い回しの一般化
	ほとんど全員一致しているわけです。	/みんな/意見/同じ/	みんな同じ意見です。	言い回しの一般化
	私の友達で、年頃のお嬢さんたちは	/PT1/友達/若い/女[複数]/	私の友達の若い女性は	言い回しの一般化
	ユーモアのセンスがある男性であるということなんです。	/FS:[ユーモア]/FS:[センス]/ある/男[複数]/好き/	ユーモアのセンスのある男性が好き。	言い回しの一般化

表 4 - 17 付加の種類

カテゴリー	説明	例
省略された語の 顕在化	原文では省略されている語を顕在化させ表示するもの	竹のほうき 竹で作ったほうき うちのは うちのほうきは
文の整理・修正	接続詞や文末表現などを付加することによって、文を整理・修正するもの	しかし、つまり、例えば、だから
上位概念の提示	主に原語借用の前に用いられ、これから表す語の上位概念を示し、枠組み知識を提供するもの	デカプリオ /名前/FS:デカプリオ/ 魔女の宅急便 /映画/魔女/宅急便/
説明の付加	主に原語借用の後に用いられ、原語で表示した後、語の内容についての説明を付加するもの	金物屋 /金/物/店/鍋/やかん/いろ いる/売る/店/ 渋い /渋い/年配/かっこいい/魅力/

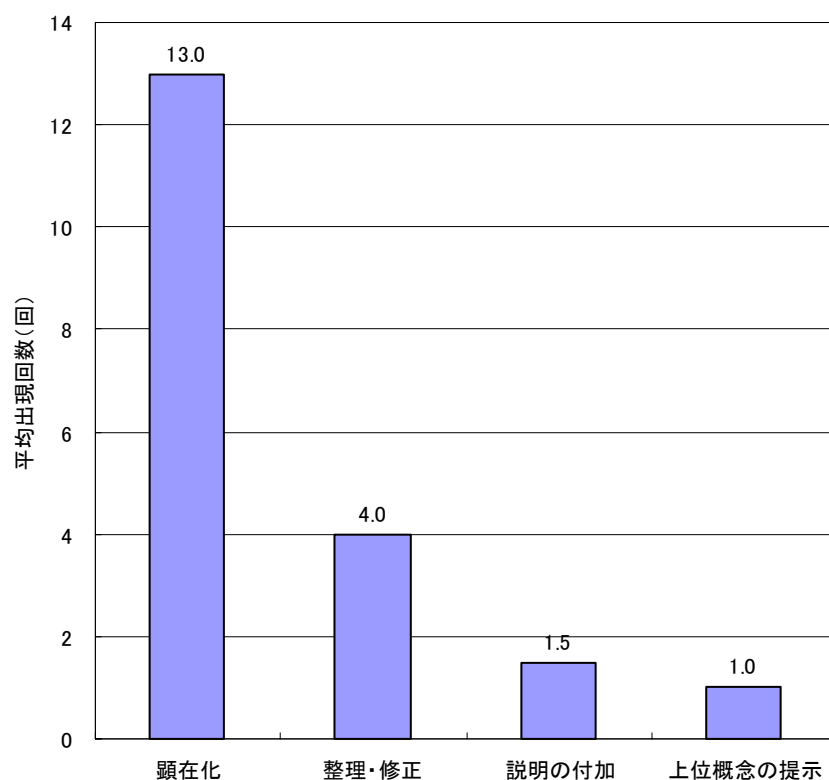


図 4 - 21 付加の種類と出現回数

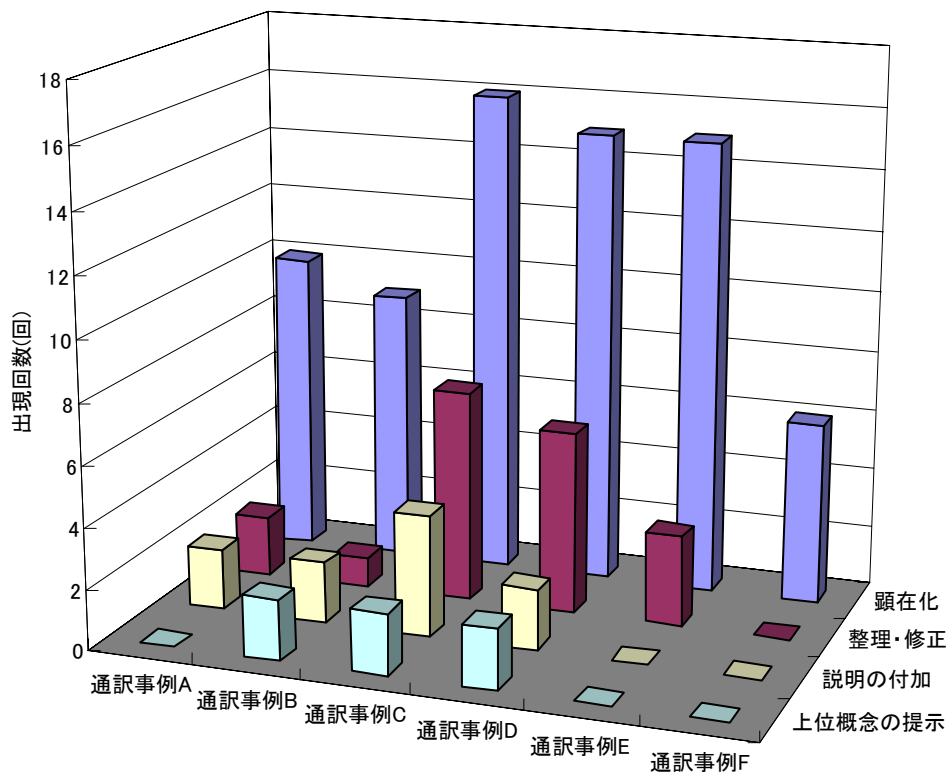


図 4 - 22 各通訳者が用いている付加の種類

表 4 - 18 原語借用の種類

カテゴリー	説明	例
原語表示	日本語として伝えたいもの、日本語を確認しておきたいもの（視線・口形などの強調をとまなう）	ユーモア、センス 指文字で表示 金物屋さん 漢字の借用
手話なし	固有名詞やカタカナ語、複合語など手話表現に対応していない語句に用いられるもの	デカプリオ、ロバートレットフォード 指文字で表示 人間性 漢字の借用
代用	手話表現が思いつかなかつたために用いられるもの（いいよどみやためらいの表情をとまなう）	宅急便 /持ってくる/+/FS:[びん]/ 渋い、魔女 指文字で表示

通訳者によって、同じ表現方法を用いていてもそれにとまなう口形や非手指動作の違いによって違う項目に分類していることもある

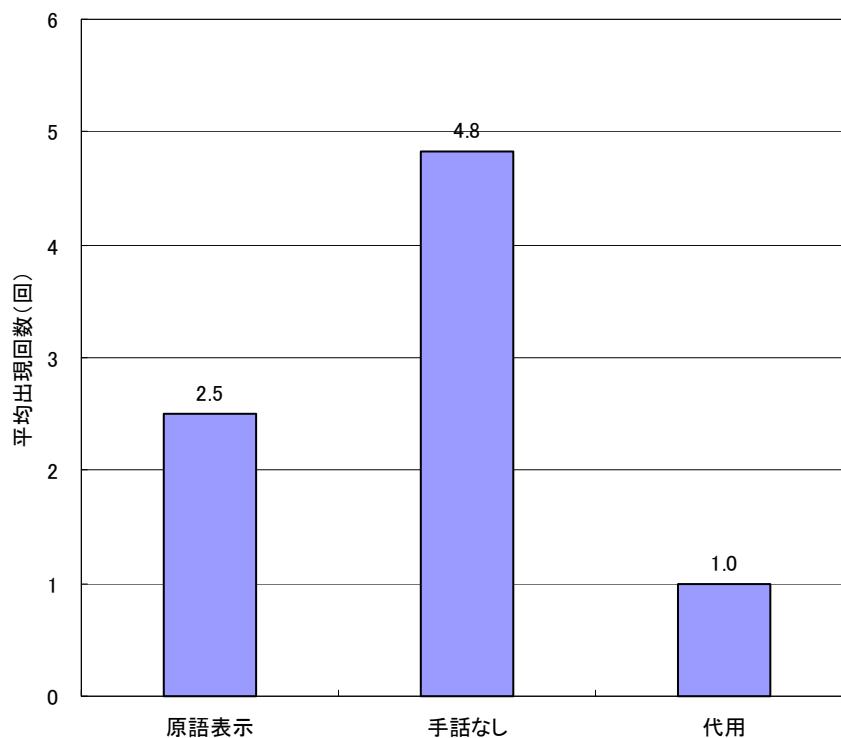


図 4 - 23 原語借用の種類と出現回数

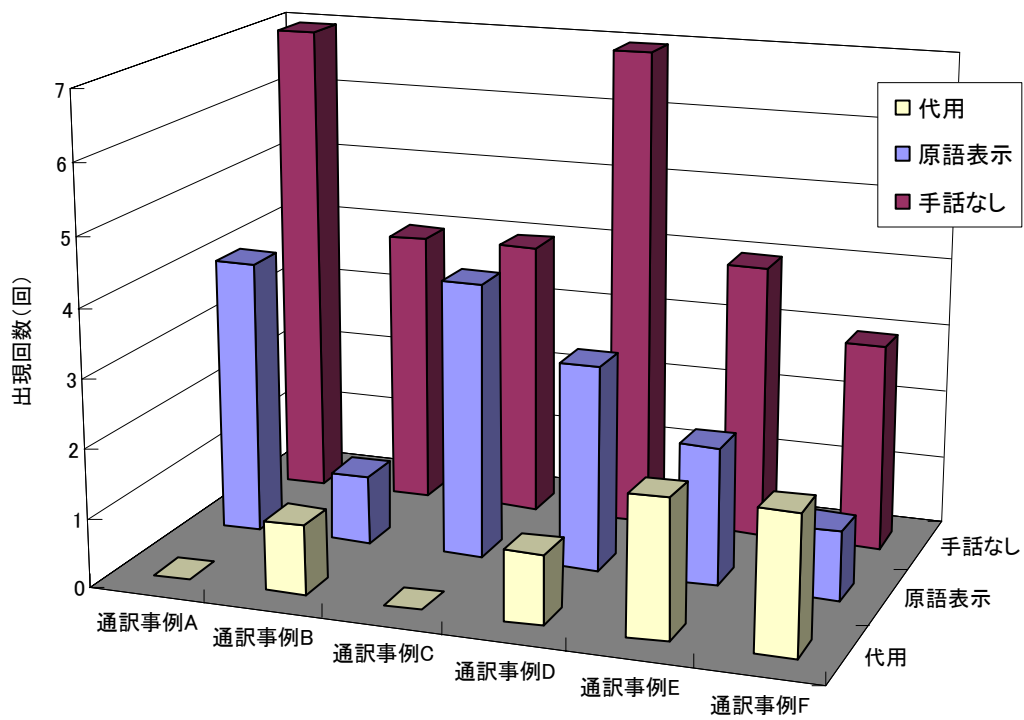


図 4 - 24 各通訳者が用いている原語借用の種類

表 4 - 19 圧縮統合の種類

カテゴリー	説明	例
複数の語の統合	繰り返し部分を一つにまとめて表示するもの	大きなほうきが欲しい、立派なほうきが欲しい 大きなほうき、立派なほうきが欲しい
語形変化による意味の付加	手型・位置・運動軌跡の変化によって意味を付加するもの(方向動詞、相による変化、類辞の転換、数の表示などを含む)	彼女が私に~と言った /いう 3-1/(方向の変化により主語、目的語を表示している)
非手指動作による同時的結合	手話単語と同時的に結合した非手指動作により意味を付加するもの(副詞的な非手指動作、視線による主語の明示を含む)	彼は <u>そうとう</u> 驚いたと思う (目を見開く) / 驚く /思う/-PT3/
非手指動作による文法標識の表示	句と句の関係(順接、逆接、並列など)や句や文のまとまりを非手指動作を用いて表示するもの	<u>偏差値であるとか</u> 、 <u>学歴であるとか</u> /偏差値 nod/学歴 nod/

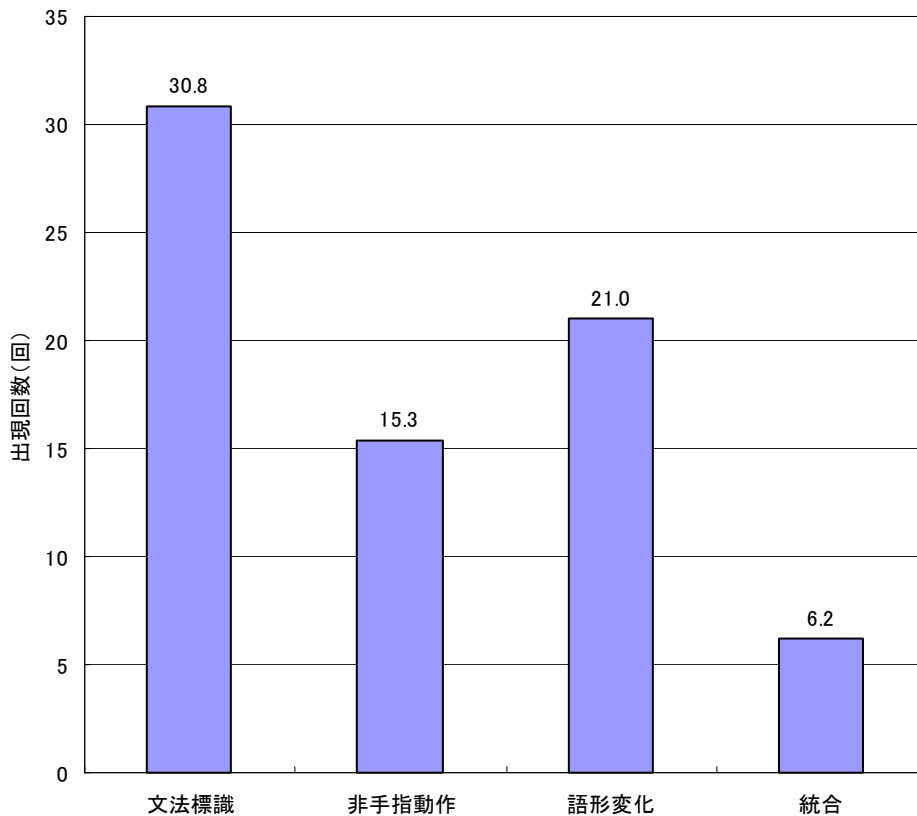


図 4 - 25 圧縮・統合の種類と出現回数

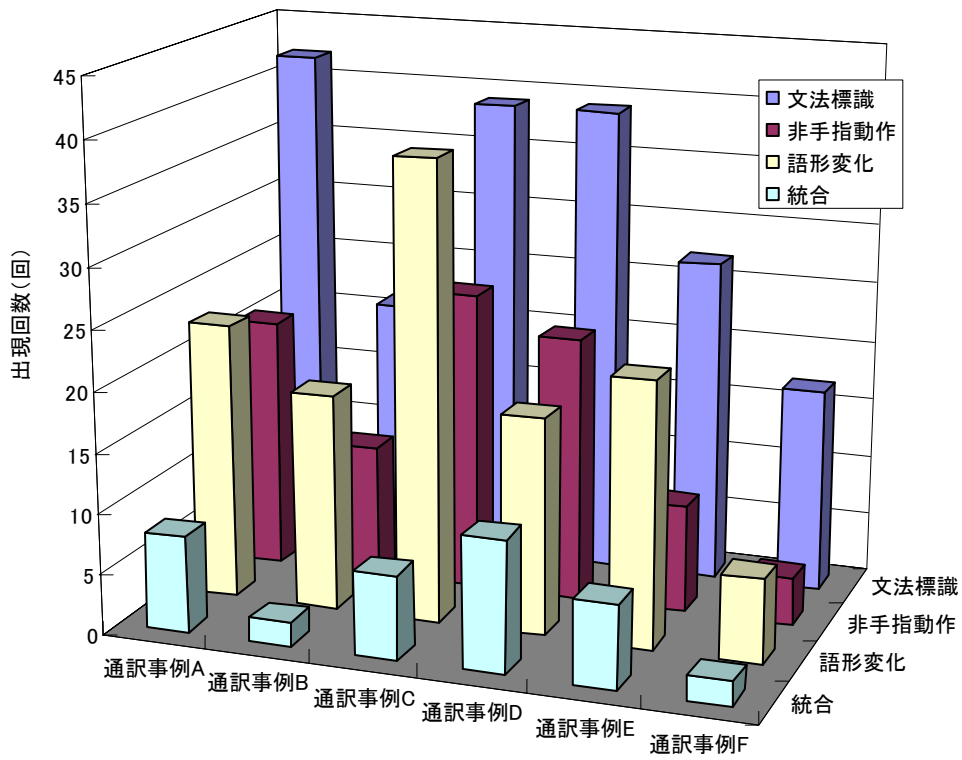


図 4 - 26 各通訳者が用いている圧縮・統合の種類

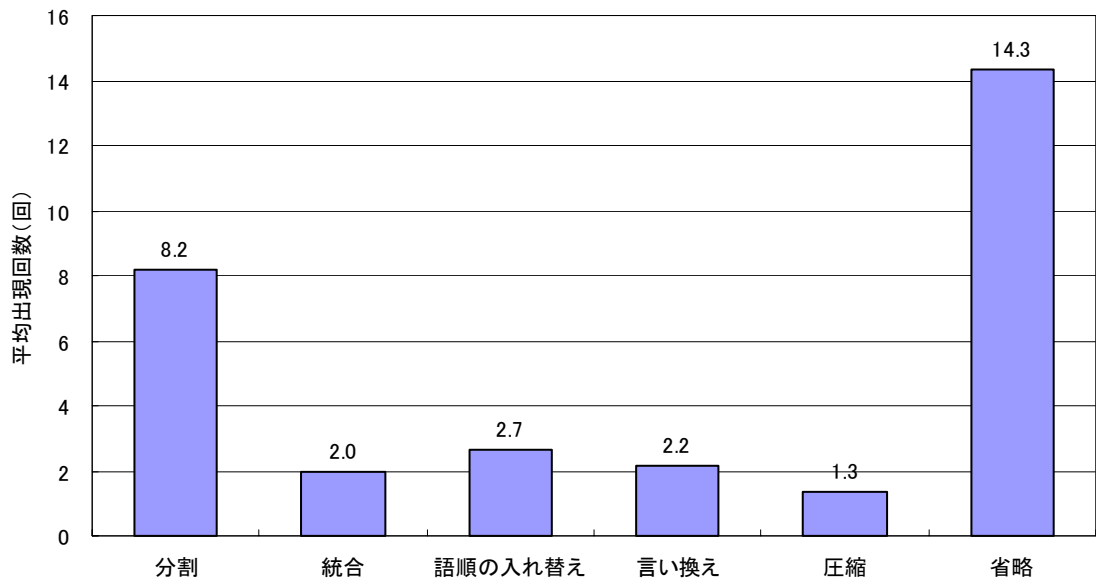


図 4 - 27 文レベルの変換作業

表 4 - 20 通訳者ごとの分割の位置

文番号	分割の生じた箇所	通訳事例					
		A	B	C	D	E	F
4	ハンサムじゃなくて						●
5	自分のことは棚にあげておいて		●				● ※
6	彼女達の好みがいろいろなんです						●
9	冗談がとばせるとかって言うこともありますけども	●	●			●	● ※※
9	言葉をはけるって言う			●	●		※
10	学歴と言うことではなくて			●			● ※
10	感覚を持っていると言うこと自体が			●			● ※
10	豊かさのあらわれだって言うことになって	●		●	●	●	※※
11	少し前のことなんですけれども	●	●	●	●	●	※※
13	なんで?と思ったら	●	●		●	●	※※
15	どうするのって聞いたら		●		●	●	※※
15	ためらったんですけれども				●	●	※
16	飛びたいって言うのがありますし					●	
16	そういう影響なんだろうなあとと思って		●			●	※
16	買いにいいこうって言うことになったんですが	●		●	●	●	● ※※
17	どこで買ったらいいいのかわからないので	●					
12	あれこれ探していたんですけれども	●	●			●	※※
18	売っているんですけれども					●	
19	大きな竹ぼうきが逆さまに置いてあって	●		●			※
20	支払いをして		●				● ※
23	練習するのって言ったら	●			●	●	※※
23	驚いたと思うんですけれども	●					
25	にこって笑って			●			
25	帰ったっていう						●

● : 2人の通訳者が同じ箇所で分割を行ったもの
 ※ : 3人以上の通訳者が同じ箇所で分割を行ったもの

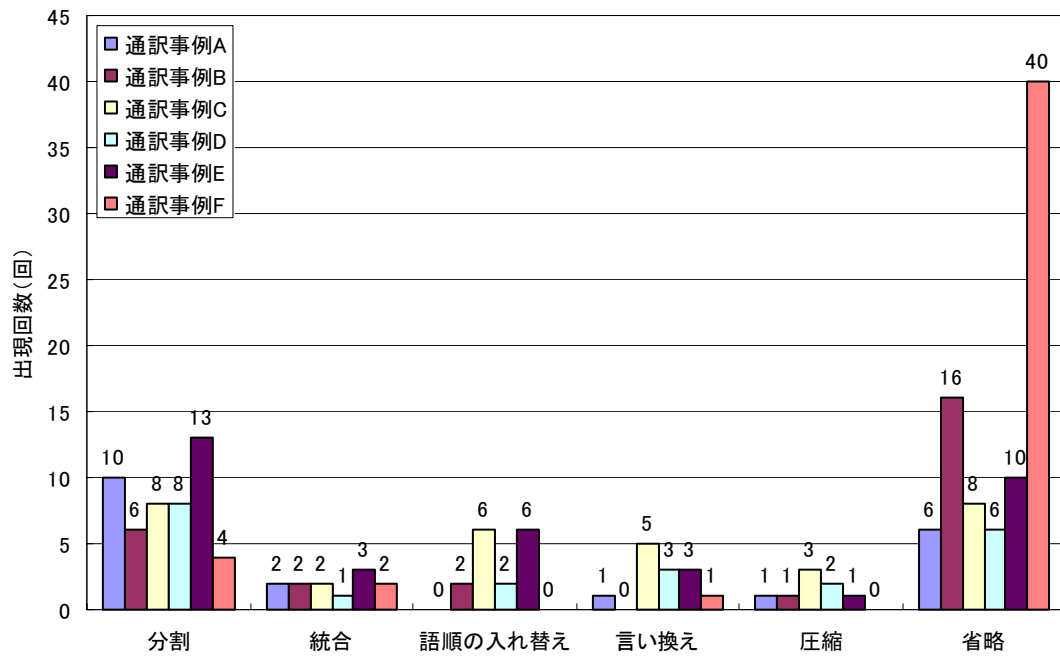


図 4 - 28 各通訳者の文レベルの変換作業

ある人は ~~カプリオがいわと~~ ^{脱落} ~~いって~~ みたり いや ロバートレッドフォード だわと
 -----/会話-----/多い/ある/過去/ /女-----FS:[ロバートレッドフォード]
 /L:PT 女++/

いって みたり 言い換え いやいや やっぱり キアヌ リ - ブス よ と い っ て み た り 省略しながら訳出 いや ハンサム
 -----/良い-----/ない-----/
じゃ な く て 渋 い 感 じ の 男 っ て い う の が い い と 言 っ て み た り ~~ジャガイモのよう~~
 /誰/男-----/別---/男-----/良い/ /かっこいい/男-----/良い/
 /L:PT 男/ /L:PT 男/ /L:PT 男/

~~人がいいなあ~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~っ~~ ~~た~~ り い ろ い ろ な ん で す ね 自 分 の こ と は 棚 に あ げ て
 /FS:[シブイ]/男-----/良い-----/まちまち-----/
 /L:PT 男/

お い て さん ざ ん い ろ い ろ 自 分 の 好 み を 言 う わ け な ん で す け ど も
 /自分-----/問題-----/身:[横におく]/PT1---/好き---/男[複数]-----/

-----: 省略しながら訳出
 -----: 脱落
 []: 言い換え

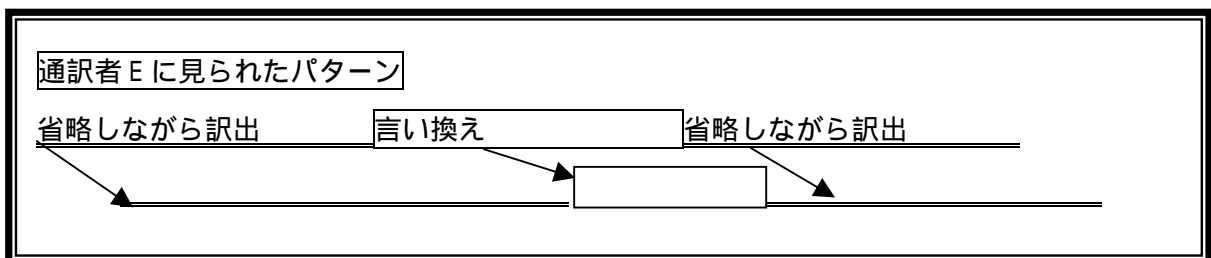


図 4 - 30 言い換えパターンの例

基点談話と同等の手話表現

ロールシフトを用いることにより圧縮的に表示

ある人は デカプリオがいいわと **いってみたいり いや** ロバートレットフォード **だわと**

付加(上位概念の提示)

(ロールシフト)

/例えば/劇-----/FS:[デカプリオ]-----/男-----/身:[そんなことない]/

/R:男/

/L:良い/

ロールシフトを用いることにより圧縮的に表示

いってみたいり いや いや やっぱり キアヌリ - プスよと **いってみたいり いや** ハンサム

(ロールシフト)

/FS:[ロバート]-----/ /身:[そんなことない]/FS:[キアヌ]-----/良い/ /会話++

/L:良い/

ロールシフトを用いることにより圧縮的に表示

じゃなくて 渋い感じの男っていうのがいい **とってみたいり** **ジャガイモのような**

(ロールシフト)

-----/ /顔/きれい/男/違う[片手]/渋い--/PT3-----/年配/興味----/ /違う[片手]/

渋いと原語のまま表示後、説明を付加

/L:良い/

/会話/に継続相を付加することで圧縮的に表示

人がいいなあと **いったりいろいろなんですね** 自分のことは棚にあげて

説明的な言い換え

/顔[1型]/悪い[ダサイ]/ /体----/身:[たくましい]/良い/会話+/ある/ /PT1/顔/

/L:しかし+/

句レベルの圧縮

おいて **さんざん いろいろ** 自分の好みを言うわけなんですけども

/かたずける-----/ /男[複数]-----/姿-----/会話+-----/同意//

/R:すき+/

□ : 言い換え

■ : 圧縮

----- : 付加

通訳者 C にみられたパターン

基点談話と同等の手話表現

必要に応じて圧縮的に表示

基点談話と同等の手話表現

図 4 - 31 圧縮・統合パターンの例

表 4 - 21 各通訳者の用いている手話の分類

カテゴリー	説明	例
辞書形	語形変化がともなわない基本形	男、ほうき、空
辞書形の異形	辞書形に手型や位置などの音韻的变化が加わったもの	違う (本来は両手で表現するが、非利き手の脱落により片手で表示)
複合語化	二つ以上の手話単語の逐次的な結合、あるいは形態素の同時的結合により新しい語を形成したもの(日本語の借用を含む)	理想 /FS:リ+/想像/ 学歴 /学校+/歴史/
一致による変化	方向動詞で空間を代名詞的に使用することで運動軌跡の起点、終点が変化したもの	娘が私に～と尋ねた /3-尋ねる-1/
相(aspect)による変化	動詞の運動軌跡を変化させることによって副詞的に意味を付加したもの	よくそんなことをしていました /会話++・/#円運動/ (/会話/という表現を持続することで、習慣的に行っていたことを表示)
類辞(Classifiers)による表現	音声語の類詞(「～枚」「～本」など)にあたるもので、手型がそのものの代理をするとともに、そのものを直接連想させる機能を持つもの 名詞的に用いられるもののほか、特定の運動などと同時に結合しているものを含む	一緒に行く /# 2 人[両手 G 手型]・#行く/

カテゴリーの作成にあたっては神田(1994)、神田・藤野(1996)、市田(1994)、市田(1998)等を参考にした。また、複数のカテゴリーにまたがる表現が同時的に結合している場合は、両方のカテゴリーに重複してカウントした。

表 4 - 22 文中の区切れの表示についての分類

明確	頭部の位置と末尾の頭の動きなどといった、区切れを形成する非手指動作が明確に表示されているもの
曖昧	区切れが表示されてはいるが、これを構成する非手指動作が不適切であったり、一部が欠落しているもの。
脱落	必要な非手指動作が不適切であったり、欠落しているため、区切れが明示されていないもの

表 4 - 23 訳出の非流暢性についての分類

カテゴリー	説明	例
不要な間	文章中、あるいは文章間に生じる間で、文法上不要あるいは不適切なもの(手話表現が思い浮かばないときや原文を聞いているときに生じ、ためらいの表情をとともなう)	ユーモアのセンスというの は評価の高い~ /面白い/.../FS:[セン ス]/.../FS:[ヒョウカ]/高い/
手型不明瞭	文中に単語として表示されているが、通常手話単語としては受け入れられない表現	印象がある (/感覚/の手型が FS:[イ/ に置換)
いいよども 言い直し	表現の途中でやめたり、言い直したもの 手の迷いなど	彼女たちの好みがいろいろ なんですが~ /女[複数]/興味/好き/姿/ひ とつ(しばらく間)/いろいろ /ある/

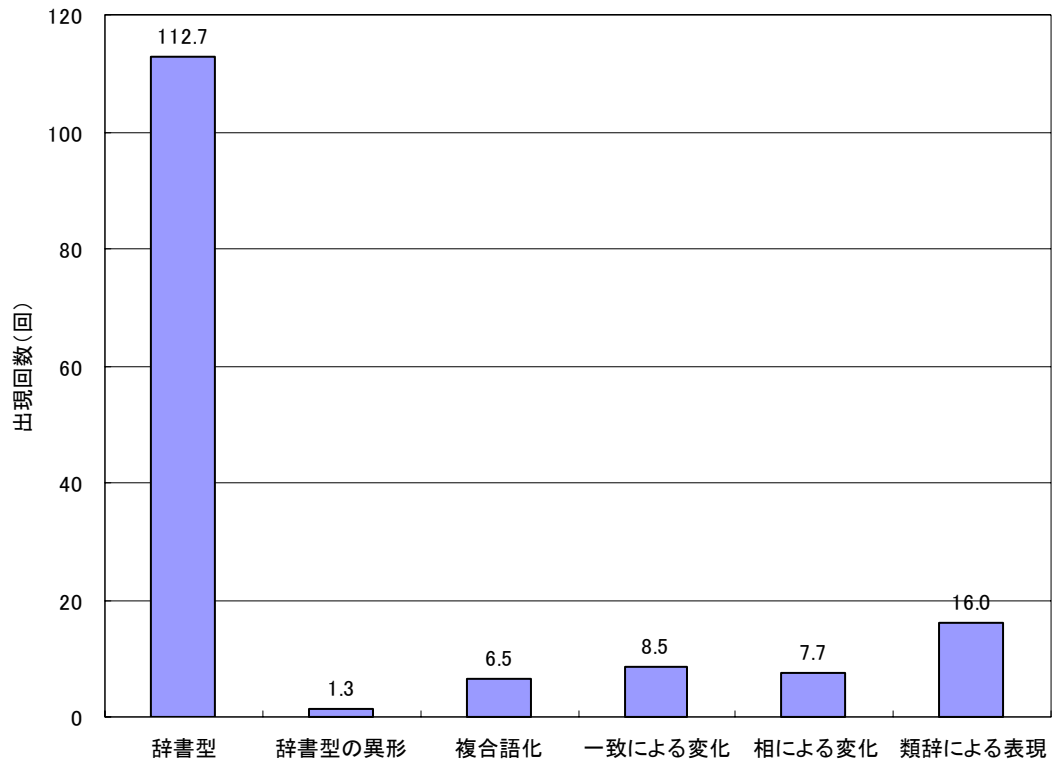


図 4 - 32 訳出表現内の手話の種類

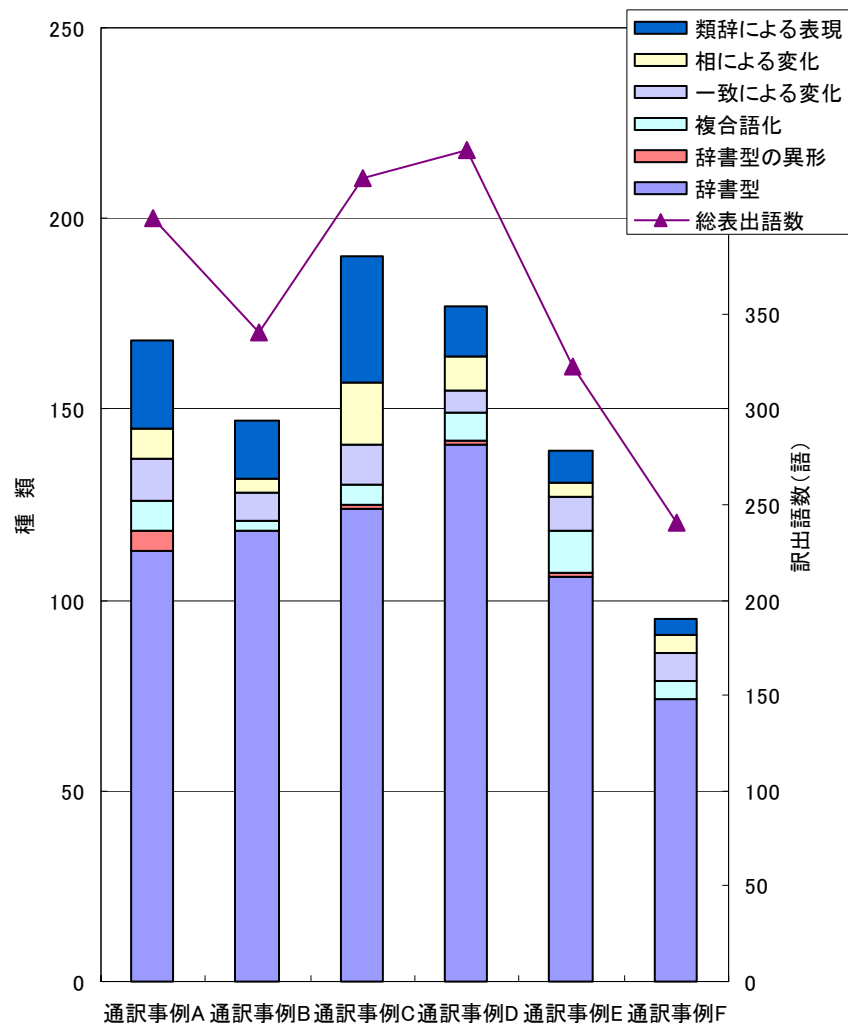


図 4 - 33 各通訳者の用いている手話の種類

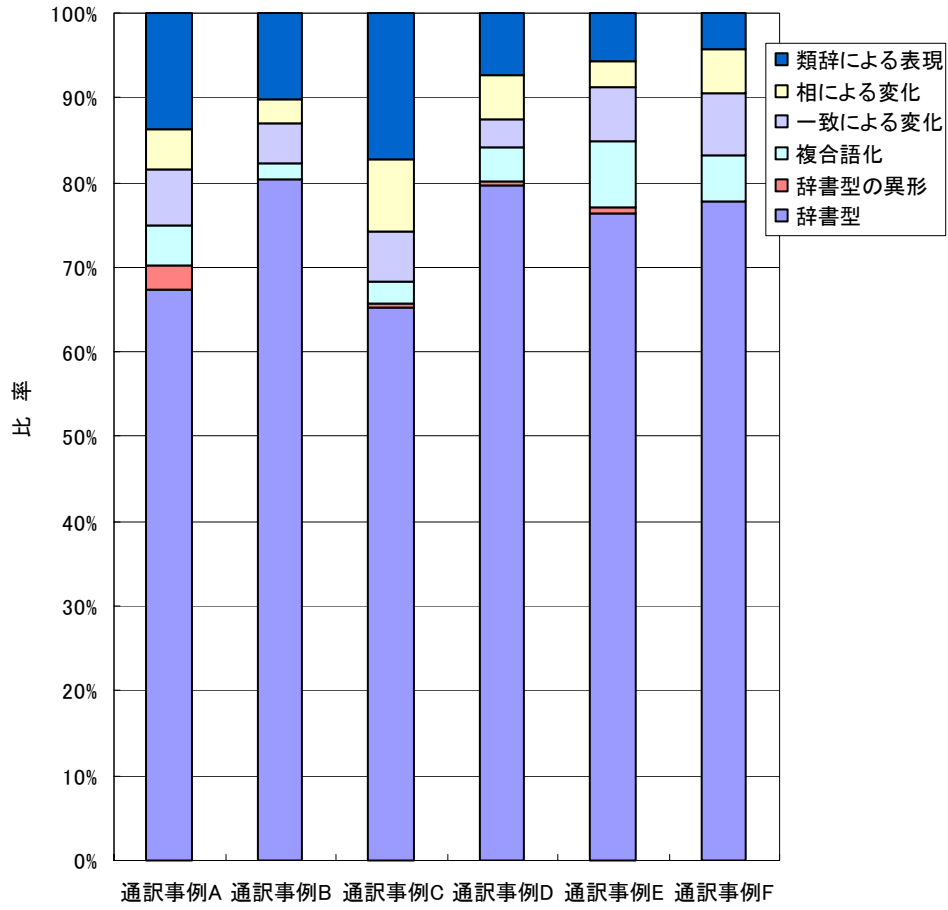


図 4 - 34 辞書形以外の異なり語の比率

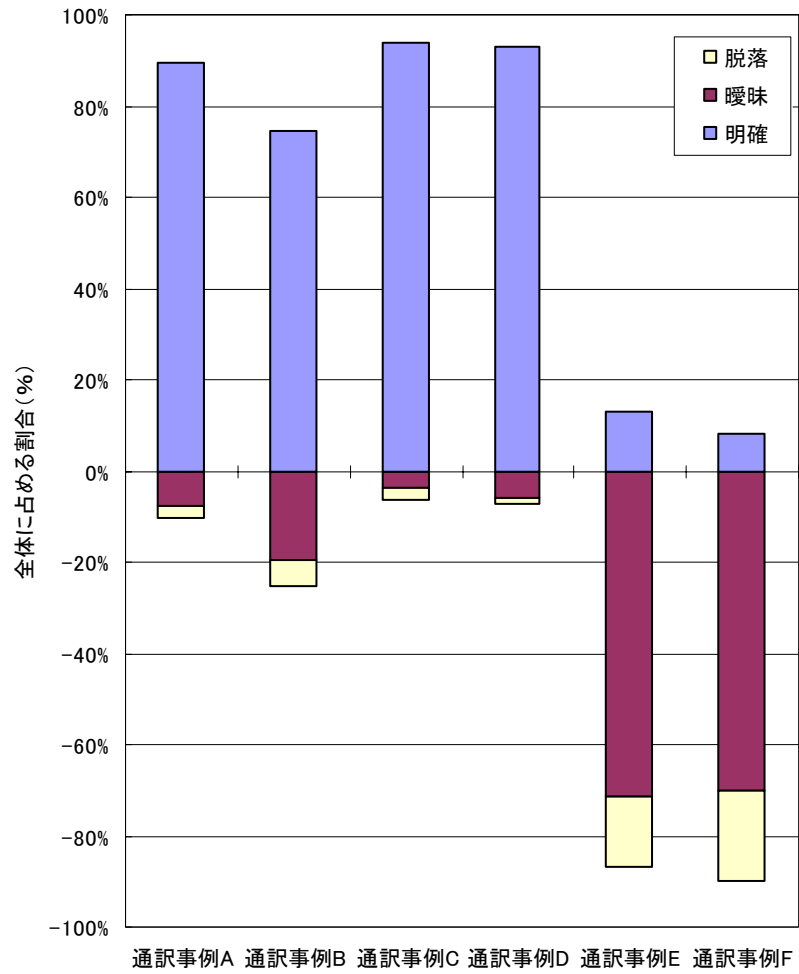


図 4 - 35 通訳者ごとの文中の区切れの明確さ

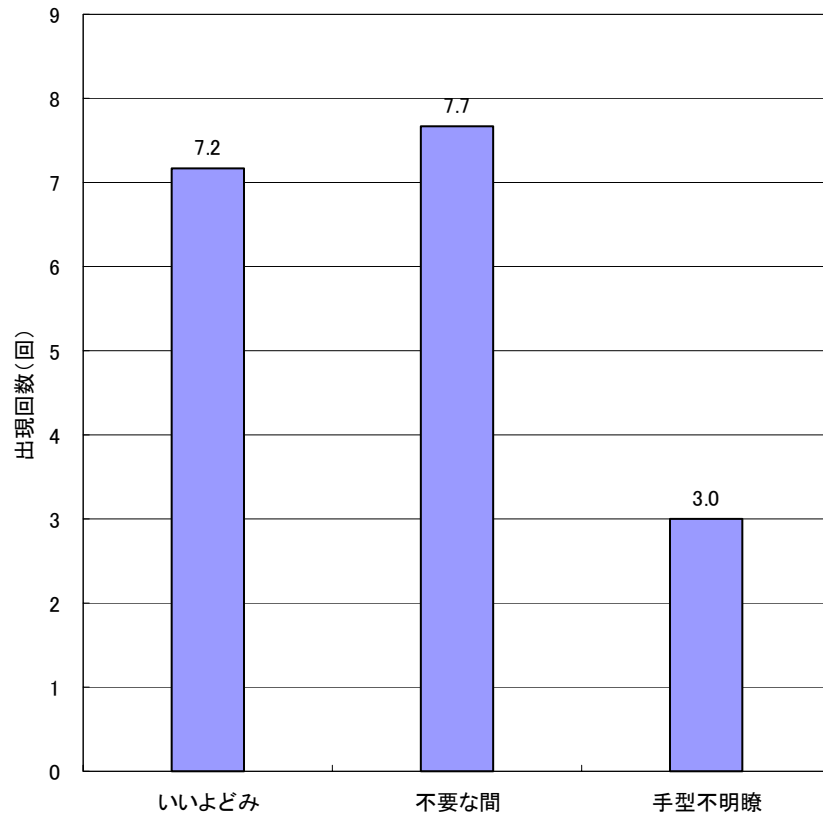


図 4 - 36 訳出の非流暢性

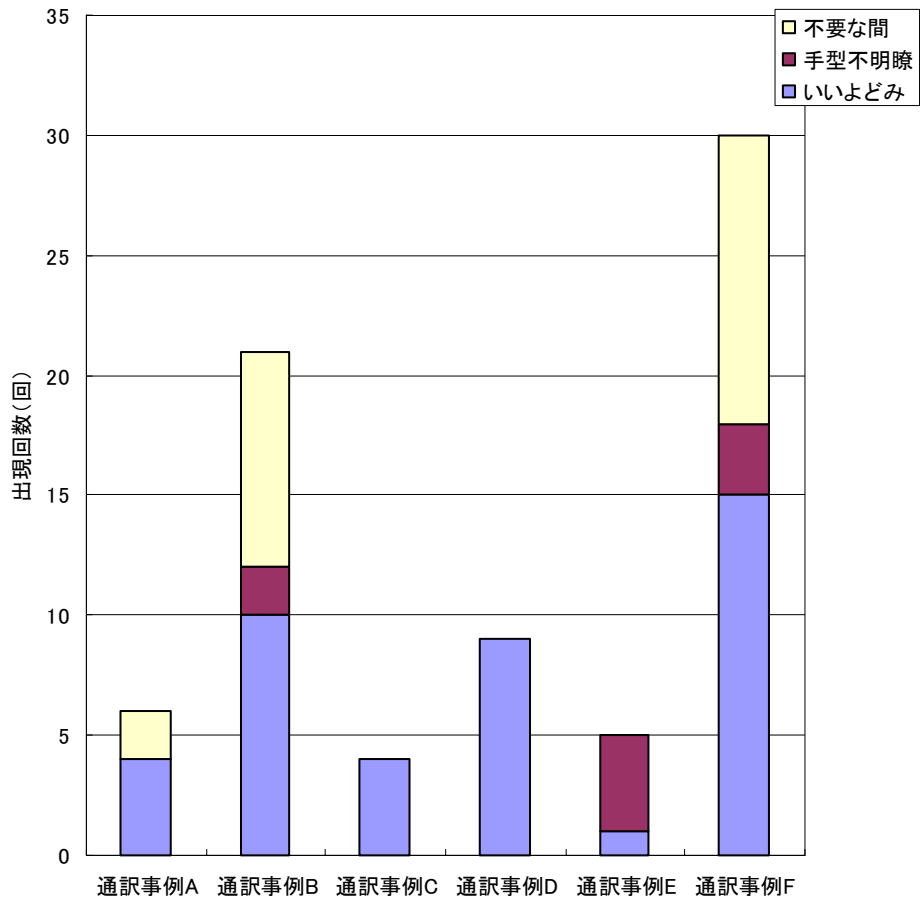


図 4 - 37 通訳者ごとの訳出の非流暢性

第5章 聴覚障害者の手話通訳に対する期待

第1節 目的

手話通訳の評価のためには、通訳の受け手となる聴覚障害者からの評価が重要であることは言うまでもない。しかし、現在のところ聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待の内容については、個人間で異なるという事実以上には明らかになっておらず、期待の全体的傾向や個人間の差異の実態については明らかになっていない。

また、現状の手話通訳が聴覚障害者の期待をどの程度充足しているかなど、手話通訳の受け手である聴覚障害者からの評価については、評価法も未整備であり、上手下手などの印象評価や、数人の通訳者の相対評価が行われている程度である。聴覚障害者の期待を反映した手話通訳の評価方法にはいくつかの方法があるが、現在の手話通訳に対する客観的な期待充足度を測定することは、これからの手話通訳の質の向上に方向性を示す資料となりうるものである。そこで本研究では、手話通訳に対する聴覚障害者の期待充足度という視点から、手話通訳を分析的に評価するための方法を開発し、その適用を試みたい。

まず本章では、聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待の内容を把握するため、インタビューおよび質問紙調査を実施し、期待の全体的傾向や聴覚障害者の背景の違いによる差などについて検討する。さらに次章において、手話通訳に対する期待の構成因子を抽出し、期待の充足度を測定するための尺度を構成するとともに、作成した尺度を手話通訳事例に適用し、実際に充足度を測定することとする。

第2節 方法

まず、予備調査として聴覚障害者数名に対してインタビュー調査を実施し、手話通訳に対する期待の内容を収集する。この結果をもとに質問紙を作成し、本調査として聴覚障害者約350名に対して質問紙調査を実施し、聴覚障害者の手話通訳に対する全体的傾向と背景による期待内容の差異について検討する。

第3節 手話通訳の期待に関するインタビュー調査

1. 目的

インタビュー調査を通して、聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待について幅広く意見を収集し、その内容を把握するとともに、本調査における質問紙を作成する。

2. 方法

1) 対象者

(1) 手話通訳の受け手(聴覚障害者)

関東地方に在住する聴覚障害者4名。聴覚障害が手話通訳に対して抱く期待の内容は、その属性や背景によって変わってくることが予想されるが、本研究ではこれまで聴覚障害者を対象に手話通訳に対する期待内容を調査した研究がほとんどなかったことを踏まえ、まずは手話通訳に対するニーズが特に高く、かつそれを明確に表現できる聴覚障害者を対象にしたいと考えた。そのため、職場や大学講義等などで頻繁に手話通訳を利用しており、かつ手話通訳者の養成や派遣にかかわりを持っている者で、手話通訳に対する期待やニーズを明確に提示できることを基準に対象者を選択した。対象者のプロフィールを表5-1に示す。

対象者のうち、1名は聾学校出身で、残りの3名は小学校もしくは中学校以降地域の学校にインテグレートしてきている。いずれの対象者も、それぞれ自分の専門に関わる分野で頻繁に手話通訳を利用しており、通訳者の技術不足のために自分に必要な情報が十分に得られなかったり、本人に対する評価が不当に低くなるといった経験を持っている。そのため、手話通訳技術に対して非常に敏感であり、同時に手話通訳に対する不満も感じている。実験実施者とは日常的に交流があり、通訳技術に関する意見を率直に話し合える関係にあったが、一部の対象者同士は初対面であったため、自己紹介をするなどしてラポールを形成してから意見の収集に入った。

(2) 手話通訳者

本研究の目的は聴覚障害者自身の期待の内容を把握することであるが、通訳される元の情報を受け取ることができない聴覚障害者にとって、実際の通訳現場での通訳の実態を完全には把握しきれないと考えたため、予備調査では手話通訳者4名の意見も参考にした。手話通訳者のプロフィールを表5-2に示す。手話通訳者はいずれも県の登録手話通訳者資格を取得しており、日常的に通訳活動に関わっていた。また、うち3名は厚生省が認定する

手話通訳士資格を保持しており、通訳経験も特に豊富であった。残りの1名は通訳経験は長くはないが、週3回以上と頻繁に通訳を行っており、自身通訳研究に携わっていることから、手話通訳技術を分析的に観察できると判断した。手話通訳者の4名には通訳技術について対象者に尋ねたい内容を考えてきてもらい、議論の中でも積極的に聴覚障害者の意見を引き出してもらうよう依頼した。

2) 手続き

聴覚障害者、手話通訳者が一同に会し、自由討論によって手話通訳への期待に関する意見を収集した。その際、初めから期待の内容を列挙することは困難であると考えたため、討議材料としてまず通訳事例を提示し、視聴後に「通訳事例に対する印象」や「そのように感じた理由」などを話してもらい、これをきっかけとして「自分だったらどのような通訳をしてほしいか」を尋ねる形とした。また、ビデオから得られた印象以外に、日常的に感じていることがあれば、補足して話をしてもらった。

各対象者にはビデオの中で通訳されている起点談話を書き起こしたトランスクリプトを事前に配布したが、この使用方法については個々の判断にゆだねた。その結果、4人の聴覚障害者のうち1名は事前にトランスクリプトを読み、内容を頭に入れてから通訳事例を視聴したが、残りの3名は通常に通訳場面に近づけるため、まずはトランスクリプトは読まずに通訳のみを見て意見を述べ、すべての通訳事例を視聴した後にトランスクリプトを読んで再度気づいたことがあれば述べるという形を希望した。

また、聴覚障害者、通訳者双方に、他人の前では言い出しにくい意見もあると考え、発言をする以外に質問紙を配布して感じたことがあれば自由に記入してもらうよう教示したが、これを利用した者はいなかった。

意見の聴取はすべて手話を用いて行われ、話し合いの様子はデジタルビデオカメラ (SONY HANDYCAM TRV5) を用いて収録された。調査は2001年4月に実施し、ビデオの視聴や自己紹介等を含めて約5時間に渡って意見を聴取した。

3) 通訳事例

ここでは研究1で収録したデータを用いた。いずれの通訳者も同じ起点談話を聞いて手話に訳出しており、ビデオ自体は8分程度であったが、対象者には事例ごとにはじめの2分間程度を提示した。ビデオデッキの操作は実験者が行い、各事例ごとにビデオを見終わった後、自由に意見を出し合ってもらった。また、必要に応じて他の事例と通訳作業の内

容について比較検討したり、同一箇所を繰り返し見るなどの調整を行った。

3. 手話通訳に対する期待の内容

得られたデータを元に、手話通訳の評価に関わる意見を抽出したところ、全体で 207 件の意見を収集することができた。これを手話通訳士資格を持つ通訳者 2 名で内容の類似したもの同士を分類した結果、「手話表現に関する意見(58 件)」、「通訳上の技法に関する意見(53 件)」、「全体の印象に関する意見(34 件)」、「通訳のわかりやすさに関する意見(28 件)」、「情報量や信頼性に関する意見(31 件)」、「雰囲気や伝達に関する意見(11 件)」の 6 つに分けることができた。分類後の結果を表 5-3 に示す。

ここから、まず第一に手話通訳に対する期待の内容は非常に多岐にわたっており、手話表現に対する評価も多いが、それ以外の異なった要素を多分に含んでいるということが明らかになった。すなわち聴覚障害者にとってもっとも目に付きやすい手話表現に関する意見が最も多く、全体の約 30%を占めていたが、同程度の割合で聴覚障害者には見えない「通訳上の技法に関する意見」も多く挙げられていた。手話表現に関する内容としては、従来より通訳養成場面で指摘されてきた「手話表現の工夫」に関する意見は 9 件と少なく、むしろなすきなどの「非手指動作」に関する意見や手話表現の無駄な「癖」に関する意見が多数述べられ、これら二つで手話表現に関する意見の半数を占めていた。このことから、一つ一つの語をどう表すかといった手話表現の技術ももちろん必要であるが、これ以上に文章の統語構造を示す非手指動作や手話自体の見やすさといった部分が重要な評価観点となっていることが示唆された。

通訳上の技法に関する意見の中には、原文の日本語にこだわらずに適度に文章をアレンジしてほしいといった「文章のアレンジ」や、省略すべき情報を省略し、強弱をつけて訳出してほしいといった「ポイントの強調」に関する意見が多くあげられていた。しかし、これらについてはインタビューの際に「特に学会など話されている内容を正確に聞きたい場面ではむしろない方がよい」との意見も聞かれており、場面によって要望が変わってくる項目であることが推測された。

他に、「頭の中で日本語に翻訳しなくても自然と内容が入ってくる通訳をしてほしい」、「そわそわせずに自然に安心してみられる通訳をしてほしい」、「大事な語句を省略せず、細かい部分まで伝えてほしい」などといった意見も複数の聴覚障害者から多く挙げられており、手話通訳を評価する際に聴覚障害者自身が重視しているポイントであることがうかがえた。

4. 質問項目の作成

本研究で得られた 207 項目にわたる結果を、調査者と手話通訳士資格を有する手話通訳者の 2 名で、内容が重複していたり、類似しているものを整理したところ、101 項目に集約することができた。その後、さらに聴覚障害関係の研究者 3 名（うち 1 名は手話通訳士）により手話通訳に対する期待を問う項目として適当であるかを検討し、最終的に 55 項目を本調査の質問項目として使用することとした。これらの項目を表 5-4 に示す。

第4節 手話通訳の期待に関する質問紙調査

1. 目的

聴覚障害者に対する質問紙調査を通して、手話通訳の受け手となる聴覚障害者が、手話通訳に対して抱いている期待の全体的傾向を把握するとともに、個々の聴覚障害者の背景の違いによる差異について検討する。

2. 方法

1) 対象者

手話通訳に対する期待は、聴覚障害者のもつ背景によって異なることがかねてより一般的に指摘されており、そのすべてが今後明らかにされていく必要があると考えられるが、本研究では特に手話通訳に対するニーズが強く、またその内容を明確に述べることができるであろう聴覚障害者を対象にしたいと考えた。そのため、職場の会議や大学の講義等で、手話通訳を日常的に使用していることが多い、20~40代の聴覚障害者で、高等教育機関に在籍した経験のあるものや職業的に手話通訳を必要とする可能性の高い聴覚障害者群を想定し、T大学附属聾学校同窓会 130名、T技術短期大学同窓会 101名、全国聴覚障害教職員連絡協議会 82名、T技術短期大学学生 44名の計 357名に回答を依頼した。

2) 手続き

インタビュー調査の結果に基づいて作成された質問紙を、本研究の対象者に郵送し、回答を求めた。質問紙は手話通訳に対する期待を問う55項目と、回答者の属性を尋ねる項目の2種類に分かれ、このほかに挨拶文と返信用封筒を添えて郵送した。

手話通訳の期待に関する項目では、それぞれについて「とてもよくあてはまる」「あてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5段階評定を採用した。また、回答者の属性については聴力、コミュニケーション手段、教育歴、通訳利用頻度、通訳利用場面をとりあげた。

なお、調査実施期間は2001年7月から9月であった。本研究に用いた質問紙を資料1として巻末に添付する。

3) 分析方法

手話通訳に対する期待の内容に関しては、各項目における5段階評定のうち「とてもよ

く「あてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点として得点化し、対象者全体の平均および対象者の属性による違いを分析した。また、対象者の属性による回答の差を検討する部分では、ピアソンの χ^2 検定を用いて有意差検定を行った。詳しい分析方法は各結果とともに以下の各章で述べる。

3. 結果と考察

1) 回答者のプロフィール

回答を依頼した357名のうち166名より有効回答が得られ、回収率は46.5%であった。回答者のプロフィールは以下のとおりであった。

(1) 聴力

回答者の聴力の状態を把握するため、左右の平均聴力を尋ねた。この結果を図5-1に示す。なお、左右の聴力が極端に異なる対象者は特になかったため、良耳の平均聴力としてグラフ化した。ここから、対象者の中には80dB以下の中等度難聴者が数名存在するものの、約85%の対象者が聴力90から110dBの間にあり、ほぼ全体的に重度の聴覚障害があり、社会生活上手話通訳の利用を必要としている層であることがわかる。

(2) コミュニケーション手段

日常的に使用しているコミュニケーション手段として、相手が聴覚障害者同士の場合と手話のわかる聴者、手話のわからない聴者に対する場合の3つの場面に分けて、それぞれ用いる手段を3つまで尋ねたところ、図5-2に示すとおり、聴覚障害者同士の場面では日本手話を用いるとした者と日本語対应手話を用いるとした者がほぼ同程度(約30%)存在した。また、発声や読話、身振りを使用するとした者もあり、手話を主軸としてその他のコミュニケーション手段を組み合わせながら用いていることが推測される。

手話がわかる健聴者に対しては、やはり日本手話や日本語対应手話を用いるとする意見が半数を占めているが、聴覚障害者に対する場面と比較して日本手話を使用すると回答した者の割合が減っており、発声や読話を用いるとする意見が増加している。このため、通常日本手話を用いる聴覚障害者であっても、健聴者に対しては日本語対应手話やその他の手段にコードスイッチング(コミュニケーションに使用するコードの変更)を行い、相手にわかりやすい手段を選んでコミュニケーションを図っていることがわかる。

また、手話がわからない聴者に対するコミュニケーション手段としては、発声、読話、

筆談を用いるとする者がほぼ同程度ずつおり、少数ではあるが手話も用いると回答している者もいた。

(3) 教育歴

回答者の教育歴を明らかにするため、教育相談から大学の各課程において、どのような教育機関で教育を受けてきたのかを尋ねたところ、表 5-5 に示す結果が得られた。対象者のうち約 33～38%は小学部から高等部にかけて地域の学校でインテグレーションを経験しており、難聴学級に在籍していた者を加えると、小学部および中学部段階では聾学校出身者とそれ以外の者でほぼ同程度の比率となっていた。

また、短期大学や筑波技術短期大学(聴覚障害者のための短期大学)を含む何らかの高等教育機関に在籍していたものは、全体の約 60%と比較的多く、一般の 4 年制大学で教育を受けたものは 19.3%であった。なお、大学段階でその他と回答した者の多くは、聾学校の専攻科や一般の専門学校を卒業していた。

(4) 手話通訳の利用状況

回答者の手話通訳の利用状況として、ここでは通訳の利用頻度および利用場面を尋ねた。まず、各回答者が主催者団体等で手話通訳が準備されている場合を含めて、どの程度の頻度で手話通訳を利用しているかを尋ねたところ、図 5-3 に示す結果が得られた。この結果、月数回利用すると回答した者がもっとも多く 30.1%で、週数回、週 3 回以上を含め、月に 1 回以上は通訳を使用していると回答した者が全体の約 60%を占めていた。また週 3 回以上通訳を受けている者が全体の 11.4%おり、この多くが職場の会議や研修でほぼ毎日通訳を必要としていると回答していた。

ただ、年数回しか用いないとする者も 30%程度おり、今回の対象者のように比較的多く手話通訳を使用していると考えられる聴覚障害者群であっても、手話通訳の利用率はあまり高くはないことがわかった。

次に手話通訳の利用場面として、福祉交渉、PTA、面接、電話、式典、講演、学会、大学の講義、職場などの会議、職場などの研修、医療場面のそれぞれの場面で手話通訳を日常的に使用しているかどうかを尋ねたところ、図 5-4 に示すとおり、講演会や式典など、あらかじめ主催者側で通訳が用意されていると考えられる場面での利用頻度が特に高く、特に講演場面では 60%の回答者が使用するとしていた。このほかに通訳を利用する場面としては、職場などの会議や研修、福祉交渉などが比較的多くあげられていた。

また、通訳の利用頻度ごとに通訳を利用している場面を調べたところ、通訳をよく利用している対象者は、あまり利用しない者に比べて、職場の研修や会議、大学講義、学会といった学術的な場面で通訳を用いているとする割合が比較的高かった。

2) 手話通訳に対する期待の内容

手話通訳に対する期待の全体的傾向を明らかにするため、各項目への回答の平均値および標準偏差を算出したところ、図 5-5 のような結果となった。この結果、どの項目に対しても平均 3 以上の得点が示されており、いずれの内容も通訳作業にとっては必要であるとみなされていることがわかった。また、標準偏差の値はいずれも 0.83 から 1.29 と低く、全体的にばらつきは少なかった。

その上で、「安心してみていられる通訳をしてほしい(4.28)」「見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい(4.21)」といった全体的な見やすさ、わかりやすさに関する項目では高い値が示されていた。また、「見ていて疲れない表現をしてほしい(4.04)」「ひとつひとつの表現をはっきりと表わしてほしい(3.86)」など手話が与える印象に関する項目でも安定して高い値が得られており、受け手に不安を与えないはっきりとした見やすい通訳が求められていた。

一方、非手指動作や手話の表現技術に関する項目では、項目によって若干の差があり、「手話にあわせて日本語に対応していない口形を用いてほしい(3.27)」で他に比較して低い値が取られていたが、それ以外ではおおむね 3.8 程度の中程度の期待が示されていた。

これに対して、「文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい(3.24)」、「文の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい(3.29)」といった、通訳上の技法のうち通訳者による文章のアレンジに関わる項目では、全体の中でも比較的低い値が示されており、通訳者による言い換えや省略の少ない忠実な通訳を望んでいるように見受けられた。しかし、同じ通訳上の技法に関する項目であっても、「忠実に訳したり、まとめながら訳すなど臨機応変に使い分けてほしい(3.78)」、「話の要点を強調して伝えてほしい(3.98)」などのポイントの強調に関しては比較的高い得点が示されていることから、完全に起点談話を逐語的に手話に変換することを求めているものではなく、起点談話のうち重要な部分では、その内容を強調しながら、かつ忠実に訳し、そうではない部分は必要に応じて省略や言い換え等を用いながら訳出するなどの臨機応変な作業が求められていることが示唆された。

また、情報の量や信頼性に関わる項目には、情報の量、忠実さ、日本語の伝達、正確さなどがあり、項目によって得点のばらつきが大きかったが、特に「必要な部分を落とさず

に伝えてほしい(4.52)」「情報に間違いやずれを生じさせないでほしい(4.42)」などの通訳の正確さに関わる内容が高い値を示し、脱落や誤りなく起点談話の内容を正確に伝えてほしいとの期待が強く示されていた。

また、「通訳者が情報を選ぶのではなく、原文に忠実に訳してほしい(4.12)」「講演者が日本語として何といったのかをきちんと伝えてほしい(4.13)」という原文に対する忠実さに関する項目でも比較的高い得点が得られていた。しかし、これを実現するための手段である口形の表示に関しては、「ひとつひとつ日本語にそった口形を表わしてほしい(3.47)」など期待が低く、また「原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい(3.83)」に対しても得点が高くはないことから、形式上の忠実さではなく、原文に対する内容的な忠実さを求めていることがうかがえる。

一方口形に関しては、日本語に対応したものが求められていないのと同時に、先に述べたように手話にあわせた口形に対する期待も低くなっていた(「手話にあわせて日本語に対応していない口形を用いてほしい(3.27)」)。手話を表出する際に用いられる口形には、「日本語に対応した口形」や「手話に独特な口形」、あるいは「強調表示に用いる口形」などいくつかの種類があることが知られているが(関根・赤堀・福島・福田, 1998)、聴覚障害者全体の期待としては、これらの口形のうち 1 種類のみを訳出全体にわたって用いるのではなく、訳出している内容や重要度など臨機応変に使い分けることの必要性が示唆される。この使い分けの方法については、インタビュー調査の中で「日本語借用部分や強調したい部分では日本語に対応した口形を用い、それ以外では日本手話文法としての口形を使用してほしい」との記述が得られているが、これが聴覚障害者全体に共通するものであるかについては調査の範囲では明らかではなく、さらに詳細な調査が望まれる。

以上のことから、聴覚障害者全体の手話通訳に対する期待の傾向として、手話がはっきりしていて、安心して見ることができ、情報の量や日本語に対する形式的な忠実さ以上に、起点談話に対して内容的に忠実であり、より正確な通訳が求められていることがわかった。また、通訳の方法としては原文に対する意味的な忠実さを保ちながらも、重要な部分ははっきりと強調してかつ忠実に伝え、そうでない部分では必要に応じて省略や言い換えなどの技法を用いながら適度にまとめて訳出していくことが求められていた。通訳中の使用手話に関しては明確な示唆が得られなかったが、これは対象者によって期待の内容が異なる部分であると考えられるため、対象者の属性と絡めてより詳細に検討していく必要があるだろう。

3) 対象者の属性による期待内容の違い

手話通訳に対する期待の内容は、対象者の属性によって異なると考えられる。ここでは、対象者の違いによる期待内容の違いについて分析するため、コミュニケーション手段、教育歴、通訳利用頻度、通訳利用場面のそれぞれの属性において、対象者を群に分け、手話通訳に対する期待内容がどのように異なり、また共通しているかを明らかにした。対象者の属性については、このほかに聴力を尋ねたが、対象者のほとんどが聴力 90dB 以上の高度聴覚障害を有していたため、グループ化して比較することは不適當であると考え、今回の分析からは除外した。また、群間差の有意差検定にはピアソンの χ^2 検定をもちいた。以下に、期待内容に群ごとの偏りが見られた項目を中心にその結果を列挙する。

(1) 手話通訳の利用状況による違い

対象者の属性のうち、手話通訳の利用頻度による違いでは、頻繁に用いているものとそうでないもので期待内容が異なる考え、週に数回以上通訳を用いている対象者と年数回以下しか用いない者に分けて比較した。この結果を図 5-6 に示す。図中頻度の高い群の各項目に対する期待の平均を四角、低い群の平均を菱形で表わし、見やすさのためそれぞれ直線で結んだ。この結果、利用頻度の高い聴覚障害者の方が、少ない聴覚障害者に比較して、手話の間違い ($\chi^2=13.0, df=4, p<.01$)、癖 ($\chi^2=10.9, df=4, p<.05$) など、手話の見やすさや全体的印象に関わる項目でやや高い要望を示し、その偏りは統計的に有意であった。また、圧迫感やオーバーな動きといった項目においても比較的高い要望を示していたことから、見ていて疲れない表現を好む傾向にあることがわかった。これは日常のごく頻繁に通訳を用いているために、通訳を通すことによる疲れやストレスをできるだけ減らしたいと考えているものと考えられた。

次に、通訳の利用場面による違いとして、それぞれの場面において通訳を利用するものとそうでないものに分け、その差について分析を行ったが、このうち職場などの研修で手話通訳を用いている対象者とそれ以外の対象者の間で結果に偏りが見られた。この結果を図 5-7 に示す。図中職場などの研修で手話通訳を用いているとする対象者を菱形、それ以外のものを四角で表わした。ここから、職場などの研修で手話通訳を用いている聴覚障害者は、全体を通して高い期待を示す傾向にあることが示された。特に「雰囲気伝達 ($\chi^2=16.2, df=4, p<.01$)」や「リアルタイムな情報の伝達 ($\chi^2=17.2, df=4, p<.01$)」「原文に対する忠実さ ($\chi^2=13.1, df=4, p<.01$)」などの差は統計的にも有意であり、誰がどんな内容を話したかといった、その場の雰囲気をリアルタイムに伝える通訳を望んでいた。職場におけ

る研修や会議場面では、現在直面している問題やそれに対するディスカッションなど、最新的话题や議論取り上げられることが多いが、これらの情報を通訳を通して受け取るためには、情報に対する信頼性や、その場に居合わせた参加者の話ぶりを伝える通訳が必要であると考えられ、このことが聴覚障害者の期待内容にも反映されたものと推測される。

(2) コミュニケーション手段による違い

対象者のコミュニケーション手段としては、特に使用手話の違いによって日本手話を使用するものと日本語対应手話を中心に用いるものでは通訳に対するニーズが異なると考えられた。そのため、聴覚障害者同士、あるいは手話のわかる聴者とのコミュニケーションにおいて日本手話を用いるとした対象者と、そうでない者をそれぞれ比較したところ、聴覚障害者同士の会話で日本手話を用いる者と日本語対应手話を中心とするそれ以外の手段を用いるもので結果に偏りが見られた。この結果を図 5-8 に示す。図中日本手話を用いている対象者を四角、そうでないものを菱形で表わした。なお、回答は用いることが多いものから順に 3 つを挙げてもらったが、ここでは第 1 に挙げられた手段のみをグループ化の変数とした。対象者の属性の分析においても明らかにされたとおり、聴覚障害者の多くはコミュニケーションを行う相手によって使用手話や手段を変更しているが、手話の使用という側面から考えると、聴覚障害者同士の会話がもっとも手話の使用に制限が少ないものと考えられ、ここで挙げられた使用手話は、おそらく本人が最も快適に使用できる手話を指しているものにとらえられるだろう。

この結果、聴覚障害者同士の会話において日本手話を用いるとした対象者はそうでないものと比較して、やはり「表情を使って程度や感情を表してほしい($\chi^2=11.2$, $df=4$, $p<.05$)」「たくさんの手話語彙を身につけてほしい($\chi^2=14.0$, $df=4$, $p<.01$)」「日本語にとらわれずに手話として自然なスピードで表してほしい($\chi^2=13.0$, $df=4$, $p<.05$)」など通訳時の手話表現に対して高い要望を示していた。これはおそらく本人が日常的に使用しているような日本手話あるいは日本手話文法を多く借用した中間的手話を求めているものと考えられ、こうした期待に対応できる通訳者を養成する必要性が示唆された。ただし、情報のゆがみのない忠実な通訳を求めている点では両者一致しており、使用手話が変わっても求める情報の内容は同一であることが推察された。

(3) 教育歴による違い

手話通訳に対する期待の内容と教育歴との関連については、特にろう学校出身者と難聴

学級を含むインテグレーション出身者との間で期待内容に違いがあるものと考え、各教育段階においてこれら二つの群を設定してその偏りを分析したところ、いずれも期待内容に違いが見られ、特に高等部段階ではその差がより明確に見られた。この結果を図 5-9 に示す。図中ろう学校出身者を四角、インテグレーション出身者を菱形で示した。この結果、ろう学校に在籍していた対象者は、コミュニケーション手段として日本手話を用いていた対象者と同様、手話表現に対して比較的高い要望を示していたが、「手話に強弱やリズムをつけてほしい($\chi^2=18.1$, $df=4$, $p<.01$)」以外は統計的には有意ではなかった。他に、「その場の雰囲気漏れを漏らさず伝えてほしい($\chi^2=11.5$, $df=4$, $p<.05$)」「話し手がどういう雰囲気話しているのかを伝えてほしい($\chi^2=11.0$, $df=4$, $p<.05$)」などの雰囲気の伝達に関する項目で、ろう学校出身者が比較的高い値を示しており、よりその場で話し手が話している雰囲気を伝える通訳を望んでいることがわかった。また、統計的には偏りが認められなかったが、インテグレーション出身者は手話の訂正や間違い、不自然な間、オーバーな動きといった項目で、ろう学校出身者に比べてやや高い値を示す傾向があり、訂正や不自然さの少ない見やすい手話を望んでいることが示唆された。

一方、教育歴のうち、高等教育段階の属性の違いとしては、一般大学で学んだ経験のある対象者と経験のない対象者と比較したところ、期待内容に偏りが認められた。この結果を図 5-10 に示す。ここでは一般大学で学習した経験のある対象者の回答を四角、それ以外を対象者を菱形で示している。この結果、一般大学で学んだ対象者は、「文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい($\chi^2=24.3$, $df=4$, $p<.01$)」「難しい言い回しや用語を噛み砕いて伝えてほしい($\chi^2=14.2$, $df=4$, $p<.01$)」等の項目で他と比べて低い値を示し、統計的にも有意であった。ここから、談話内容をなるべく忠実に伝える通訳を望んでいることがわかる。しかし、「空間を活用して主語や目的語を明確に示してほしい」「話の中の登場人物を演じ分けてほしい」などの項目で期待の度合いが高いなど、手話表現に対する期待の内容はこれ以外の聴覚障害者と変わりがなく、他の聴覚障害者と同程度に日本手話の文法的要素を取り入れてほしいとの期待が示されていることから、必ずしも日本語対应手話によって原文をそのまま伝えることを望むものではないと考えられる。これらの対象者が求めている忠実さや、またその期待を満たすために必要な通訳作業の内容は、本研究の範囲からは明らかではないため、実際の通訳作業とこれに対する期待の充足度とを対応させて、さらに詳細に分析する必要があるだろう。

第5節 手話通訳に対する期待の内容

本章では聴覚障害者に対するインタビュー調査および質問紙調査によって、通訳の受け手となる聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待の内容を明らかにするとともに、聴覚障害者の属性によって期待内容がどのように異なっているのかを検討した。

この結果、まずインタビュー調査より聴覚障害者の手話通訳に対する期待の内容は非常に多岐にわたり、これまで特に重視されてきた手話表現に対する評価以外に、起点談話を聞いて手話に変換する際に通訳者が加えている変換作業の内容や、全体的な印象、情報の量や信頼性なども重視されていることがわかった。また、手話表現についても、手話通訳の評価ポイントとして手話通訳士育成指導者養成委員会(1998)が提示した「豊かな語彙とその選択」、「表情」、「主語の明確化」、「代名詞化」、「時間・空間表現」、「写像的表現」、「同時的表現」などの指標以外に、これまではこれらの指標の中に包含され、抽出して取り上げられたことのなかった文章の統語構造を示す文法マーカーとしての非手指動作や全体的印象なども重要なポイントとして挙げられていた。

次にこれらの手話通訳に対する期待内容のうち、各項目がどの程度重視されているかという視点から質問紙調査を行ったところ、予備調査の結果採用された55項目に対しては、いずれも中程度以上の期待が示されていたが、「安心してみていただける通訳をしてほしい(4.28)」、「見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい(4.21)」などの項目では期待度が高く、「文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい(3.24)」、「文の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい(3.29)」などの通訳者による文章のアレンジに関しては、期待の度合いが低くなっていた。

また、各項目に対する期待の高さを総合的に解釈すると、聴覚障害者全体の手話通訳に対する期待の傾向として、特に手話の訂正や間違いが少なく、自然に内容が頭に入ってくるような見ていて疲れない通訳で、かつ起点談話に対して忠実な通訳が求められていることがわかった。ただし、必ずしも起点談話の日本語をそのまま忠実に伝えることが求められているものではなく、意味的な忠実さを保ちながらも、重要な部分ははっきりと強調し、そうでない部分では必要に応じて省略や言い換えるなどの柔軟な対応が求められていた。

手話通訳に対する期待の内容は、対象者の属性によって異なり、週数回以上ごく頻繁に通訳を用いている対象者は、年数回以下と利用頻度が少ない対象者と比較して、手話表現の間違いや癖のない、見ていて疲れない通訳を好む傾向にあった。また、職場の研修場面

で通訳をよく用いるとした対象者は、談話内容を伝えるだけでなくその場の雰囲気やリアリティを伝える通訳を求めている。

対象者が日常的に用いるコミュニケーション手段の違いによる偏りについては、聴覚障害者同士の会話で日本手話を用いるとした対象者が、そうでない対象者よりも通訳においても日本手話や日本手話文法を多く借用した中間的手話を求めていることが明らかになった。しかし、情報の量や信頼性に関しては対象者のコミュニケーション背景による回答の違いはなく、手話が異なっても同じ程度の情報を求めていることがわかった。

また、教育背景の違いでは、聾学校出身者はインテグレーション出身者に比較して、日本手話による通訳を求める傾向が強く、同時にその場の雰囲気や話し手の雰囲気を伝えてほしいという期待を示していた。これに対してインテグレーション出身者は、手話の訂正や間違いといった無駄な表現をできるだけ減らし、はっきりと見やすい手話で通訳してほしいとの要望を持っていることが示唆された。

一方、一般大学で学んだ経験のある対象者は、談話内容を忠実に伝える通訳を望んでいた。しかし、手話表現に対する期待内容は他の対象者と特に代わりがないことから、「忠実に伝える」ことが日本語対応手話を用いて日本語の内容を忠実に伝えることを望むものではないと考えられた。

これまで手話通訳の養成場面では、日本手話を用いる対象者には、日本手話でまとめながら通訳を行い、日本語のわかる対象者には日本語対応手話で原文の内容を忠実に伝える必要があるという考え方が一般的であった。しかし、本研究の結果からは、聴覚障害者全体のニーズとして日本手話の文法を借用した表現に対する期待が示され、日本語の形式をそのまま伝えるなどの期待は見られないことが明らかになった。また聾学校出身者や日常的に日本手話を用いる対象者が、通訳場面においても日本手話や日本手話文法を多く借用した手話を望んでいることは確かであるが、これらの対象者も「必要な部分を落とさずに伝えてほしい」「情報に間違いやずれを生じさせないでほしい」「原文に忠実に表してほしい」などの項目で他の聴覚障害者と同程度に高い期待を示していることから、談話内容を要約するなどまとめながら通訳を行うことを望んでいるわけではなく、日本手話を用いた場合であっても、そうでない場合と同程度の情報を求めていることが示されていた。一方、大学経験のある対象者の場合、起点談話に忠実な通訳を求めているが、これは必ずしも日本語対応手話によって原文との形式的な一致を求めるものではなかった。またインテグレーション出身者の場合は、聾学校出身者と比較して手話通訳者の用いる手話に対して異なるニーズがあることは示されたが、そのことは必ずしも日本語対応手話使用への要望と結

びつくものではないことが示唆された。

以上のことから、従来実施されてきた手話通訳の養成の方針には、聴覚障害者、特に現在増加しつつある職場や大学等の専門機関で通訳を用いる聴覚障害者の期待の現実に沿わない部分もあることが示唆される。手話通訳に対する期待内容は最終的には通訳を受ける個人によって異なるものであるが、本研究の結果、全体的な回答のばらつきは少なく、聴覚障害者の属性によってある程度の傾向が把握できることが示された。そのため、今後はより詳細に聴覚障害者のもつ期待内容を明らかにしていくとともに、期待の充足度を高めるための通訳作業の内容を明らかにし、これを基盤にした養成カリキュラムの開発を進めていく必要があると考えられる。

表 5 - 1 聴覚障害者のプロフィール

良耳 平均聴力	教育歴					手話通訳の 利用頻度	手話通訳を利用する場面
	幼	小	中	高	大		
110dB	ろ	ろ	イ	イ	イ	週に 2~3 回	職場研修、会議、学会、講演、 式典、PTA、福祉交渉など
130dB	ろ	イ	イ	イ	イ	週に 2 回	会議、講義、学会、講演など
115dB	ろ	ろ	ろ	ろ	イ	週に 1 回	講義、講演など
100dB	ろ	難	イ	イ	イ	週に 1~2 回	職場研修、講演、福祉交渉など

ろ：聾学校、イ：インテグレーション、難：難聴学級

表 5 - 2 手話通訳者のプロフィール

	通訳歴	資格	通訳頻度	手話通訳をする場面
1	3年	登録手話通訳	週に 2~3 回	会議、講義、講演など
2	5年	手話通訳士	年に 5 回程度	講義、講演、式典など
3	10年	手話通訳士	月に 5 回程度	職場研修、講演、式典など
4	19年	手話通訳士	月に 1 回程度	講演、式典など

表 5 - 3 手話通訳に対する期待の内容

手話表現 (58件)	非手指動作(18)	ろう者の手話からうまく表現を借用している(2) イントネーションがある 手話のリズム、イントネーションがある(4) 上体や頭が動くがそれぞれの動きに意味がある うなずき、間、表情、瞬き、状態のそらしといった非手指動作の使い方が上手(4) 非手指動作などの日本手話文法を持っている(2) うなずきや間がはっきりしていてわかりやすい(2) 手話文法として正確である(2)
	癖(13)	全体的に見ていて疲れない(3) 不必要な目線の動きが少ない 手話が安定している 無駄なぶれがない 長く見ていられる オーバーアクションになっていない(3) 手話が小さくスリムにまとまっている(2) 手話の数が少ないわけではないがゆったりしている
	表現の工夫(9)	たくさんの語彙のバリエーションを持っている 写像的な表現ができる 空間の利用ができています ろう者の手話に似ている 表情が豊かである(3) 表現の工夫がある(2)
	ロールシフト(7)	登場人物の違いを明確に表すことができる ロールシフトを用い、直接話法的に表示できる(3) どういう立場で通訳しているのかが良くわかる 格の変化が伝わってくる、ずっと正面を向いているのではなく変化がある(2)
	流暢性(7)	手話を読み取りやすい(3) 文中に不自然な間が生じない(2) 手話がはっきりとしている 非流暢な部分が目立たない
	手話口形(4)	口形が必要以上に大きすぎない 無理に口形をなくそうとしている様子が見られない 日本語借用部分にのみ日本語口形を用いそれ以外は手話口形を用いている 強調したい単語にのみ日本語口形を用い、それ以外は手話口形を用いている
通訳上の技法 (53件)	通訳者によるアレンジ(14)	難しい言い回しや用語にこだわり過ぎない 相手に合わせて必要な情報を選択できる 通訳者自身が文章をアレンジしてくれる 多少ゆがみがあっても楽しく見ていられるほうが良い その場を盛り上げられる通訳をしてほしい 言語以上に演技力が加わっている、エンターテイナーのよう 少しぐらい演技が入ってもかまわない 原文の日本語にこだわり過ぎない(2) 通訳者自身が手話として分かりやすく伝えるために補足している情報がある(2) ろう者にとって理解しやすい方法を見につけている 語りかけるような雰囲気がある ひとつひとつ情報を投げかけてくれるような感じを受ける
	ポイントの強調(14)	省略すべき情報の判断ができています(2) 省略する際の優先順位のつけ方が適切 手話で表さなくてもいい部分の省略が上手 重要な語句を強調して通訳している 重要な語句と例文などの補足的な部分の区別ができる(3) 強調すべき部分をはっきりと表せている 文中に強弱がある 話のポイントをつかんでいる 全体的に単調でない(2)

	通訳テクニック(5)	状況に応じて省略や圧縮的な表現や言い換えができる 逐語的な翻訳と句や文レベルでの翻訳を使い分けられる(2) 通訳者自身がスピードをコントロールできている ポイントとなる用語に良い手話をあてられる
	文章構造の表示(4)	テーマごとの切れ目がはっきりわかる 場面の転換が伝わってくる 文の構造や話の展開がわかりやすい(2)
	まとめ方(4)	通訳者が文章をきちんと理解している 通訳者に日本語力がある 日本語を聞いてすぐに理解できる 手話の技術にあったまとめ方ができる
	間のととり方(4)	文末に間がある(2) 文の切れ目がはっきりとわかる(2)
	臨機応変(4)	場に応じて臨機応変に対応できる(2) いろいろな場面や聴覚障害者に合わせられる 通訳のパターンにバリエーションを持っている
	確認(4)	わかりにくい部分で確認作業がある アイコンタクトがある きちんと通じる手話になっているかの検証ができる 表した手話を通じたかどうか判断できる
全体の印象 (34件)	おちつき(16)	自然に見ていられる(2) 堂々と前を向いて通訳している そわそわしていない 不安を感じさせない(3) ゆったりした姿勢で通訳している 気持ちに余裕が感じられる(2) 見栄えがする にこやかに通訳している 見ていてイライラしない 見ていてホッとする 落ち着いてみていられる 手話や通訳の技術を気にかけることなく、安心して内容を見ていられる(2)
	抑圧(7)	距離が近すぎない 押し付けがましくない おせっかいな面を感じない 圧迫感がない 通訳を見るように強要しない ときどき視線をそらしてくれる ろう者の確認/同意を必要以上に求めない
	通訳に対する態度 (6)	一生懸命さが伝わってくる 自分の世界に浸るのではなく相手に合わせて通訳してくれる 伝えようという気持ちが見える 目を見て通訳してくれる(3)
	パーソナリティ(5)	年代が同じである 気持ちが通じる 対等に話せる 気軽に頼める 謙虚な姿勢を持っている
情報量や信頼性 (31件)	情報量(11)	追従しきれずに脱落したりしない 省略が少ない 情報の漏れが目立たない(2) 大事な語句を省略しない 細かい情報まで伝えてくれる 文章が途中で途切れず文のはじめとおわりがつながっている(2) 手が止まっている時間が短い 全部伝えようとしてくれる 「ただ聞いている」という間がない

	情報の正確さ (7)	通訳者の判断で情報量を操作しない 通訳者が勝手に解釈して伝えることがない 説明をあれこれ付加しない(2) うそやごまかし、情報の漏れがない 情報が信頼できる 通訳者個人の感情を表に出さない
	日本語の伝達(7)	専門用語などを日本語として伝えてくれる 日本語にそって口形をつけてくれる 日本語が忠実に伝わってくる(2) 日本語を聞いているような通訳ができる(2) ひとつひとつははっきりと口形を表してくれる
	忠実さ(6)	原文に忠実である(3) 専門的内容まで忠実に伝えてくれる 原文を正確に反映している
わかりやすさ (28件)	自然に読める(12)	読み取った内容を頭の中でもう一度再構成しなくても良い(2) 読み取って理解するのに時間がかからない 手話を読み取った後、ポイントが何であるか改めて考える必要がない 頭の中で日本語を考えなくても良い 内容について考える余裕がある 思考が途切れない 自然に頭に入ってくる(2) 手話として頭に入ってくる 口話に頼らなくても内容が伝わってくる(2)
	理解しやすい (6)	何が言いたいのかが良くわかる(2) 主題がはっきりとつかめる(2) 話に引き込まれる(2)
	考えられる(6)	内容について考える余裕を与えてくれる 情報を受け取って考えることができる(2) 考え、理解する間を与えてくれる 通訳を見ている間に聴覚障害者が反応できる(2)
	わかりやすい(4)	わかりやすい(2) 主題から発展してふくらみが感じられる 主題以外に細かいところまで内容が伝わってくる
	雰囲気	雰囲気
件 の 伝 達 (11)	雰囲気	話し手や話の雰囲気が伝わってくる(4) 例と本題で表情などの変化がある 冗談なのか本気なのかわかる その場の雰囲気に合った通訳をしてくれる
	リアルタイム(2)	その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてくれる(2)
	聴者と同等の参加(2)	周りの聴者と同じように話の内容を楽しめる 通訳を見ているろう者と聴者が同じような印象を受けられる

表 5 - 4 期待の内容を問う 55 項目

1. 安心してみていられる通訳をしてほしい
2. その場の雰囲気を読らさず伝えてほしい
3. その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい
4. 見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい
5. 話し手がどういふ雰囲気と話しているのかを伝えてほしい
6. 圧迫感を与えない通訳をしてほしい
7. 親しみやすさが感じられる通訳をしてほしい
8. 謙虚な姿勢をもって通訳をしてほしい
9. ひとつひとつの表現をはっきりと表してほしい
10. 訂正、手話の間違いを減らしてほしい
11. 見ていて疲れない表現をしてほしい
12. 一生懸命さが伝わってくる通訳をしてほしい
13. 文の途中で不自然に止まらないでほしい
14. 文ごとの切れ目をはっきりと表してほしい
15. 手話表現の無駄な癖をなくしてほしい
16. オーバーアクションにならないでほしい
17. まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい
18. 同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい
19. 手話に強弱やリズムをつけてほしい
20. 表情を使って程度や感情を表してほしい
21. 物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい
22. 空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい
23. 重要な部分と補足的な部分の表現に強弱をつけてほしい
24. 手話にあわせて日本語対応でない口形を使用してほしい
25. たくさんの手話語彙を身に付けてほしい
26. 日本語にとらわれずに手話として自然なスピードで表してほしい
27. 通じているかどうかろう者の表情などを見て判断してほしい
28. 話の中の何人かの登場人物を演じ分けてほしい
29. 文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい
30. 講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい
31. 細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい
32. 難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい
33. 語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい
34. 長い文章は途中で切ったり、2 つ以上の文をまとめて表してほしい
35. 原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい
36. 手話として理解しやすいように語順を入れ替えてほしい
37. 忠実に訳したり、まとめながら訳すなど臨機応変に使い分けてほしい
38. 話の要点を強調して伝えてほしい
39. 日本語にこだわらずにその場に合った手話表現を使ってほしい
40. 手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えてほしい
41. 話されている情報を 100%漏らさずに伝えてほしい
42. 文章の途中で途切れないでほしい
43. 通訳者が情報を選ぶのではなく、原文に忠実に訳してほしい
44. 原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい
45. 必要な語句を省略しないでほしい
46. 話の要点以外に細かいところまで内容を伝えてほしい
47. ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい
48. 講演者が日本語として何と言ったのかをきちんと伝えてほしい
49. 意味をよりはっきり伝えるために接続詞や語句を付け加えてほしい
50. 必要な部分を落とさずに伝えてほしい
51. 情報に間違いやずれを生じさせないでほしい
52. 通訳者自身が自分の解釈を付け加えたりしないでほしい
53. 専門用語などは日本語として伝えてほしい
54. 場面や話題が変わったことをはっきり伝えてほしい
55. 必要以上にたくさんの手話をあらかさないでほしい

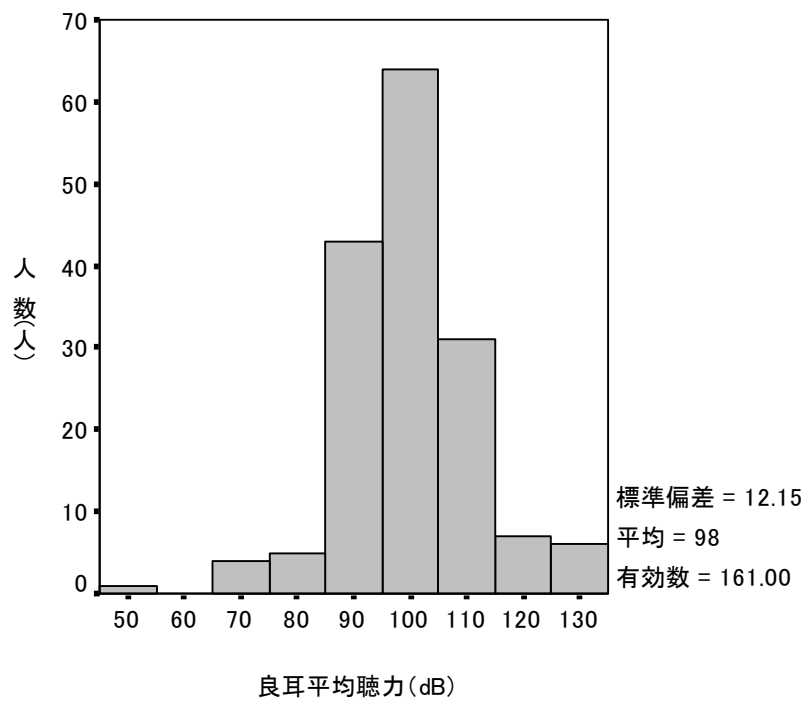
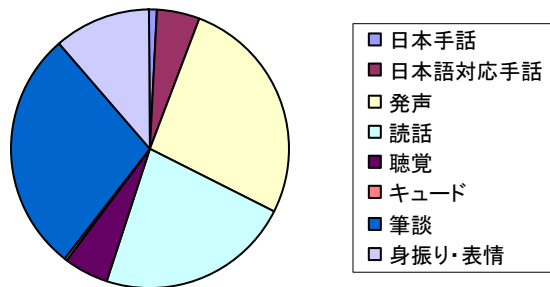
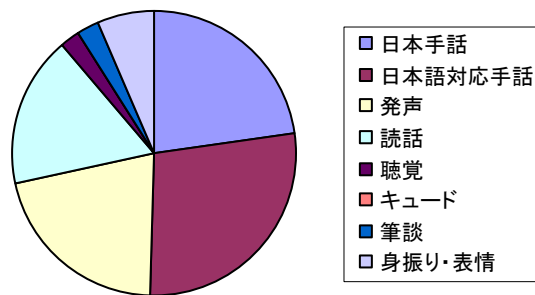


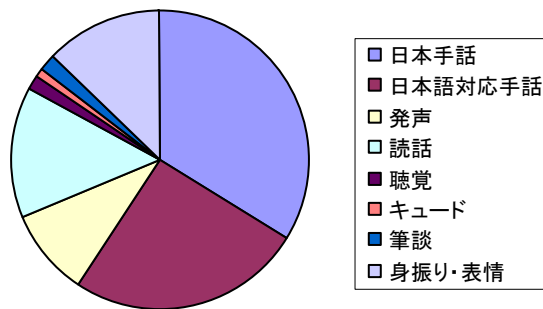
図 5 - 1 回答者の良耳平均聴力



手話のわからない健聴者に対するコミュニケーション手段



手話のわかる健聴者に対するコミュニケーション手段



聴覚障害者に対するコミュニケーション手段

図 5 - 2 回答者が用いているコミュニケーション手段

表 5 - 5 回答者の教育歴（教育段階ごとに百分率で表示）単位：％

教育機関	教育段階					
	教育相談	幼稚部段階	小学部段階	中学部段階	高等部段階	大学
ろう学校	33.1	52.4	45.2	52.4	62.7	39.8
地域の学校等	7.8	25.9	38.0	35.5	33.7	19.3
難聴学級	3.6	1.8	12.7	8.4	0.6	0.0
医療機関	10.8	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0
その他	6.0	0.6	0.6	0.6	0.6	12.0
なし	38.6	18.7	3.6	3.0	1.8	28.3

聴覚障害者のための高等教育機関である筑波技術短期大学を含む。

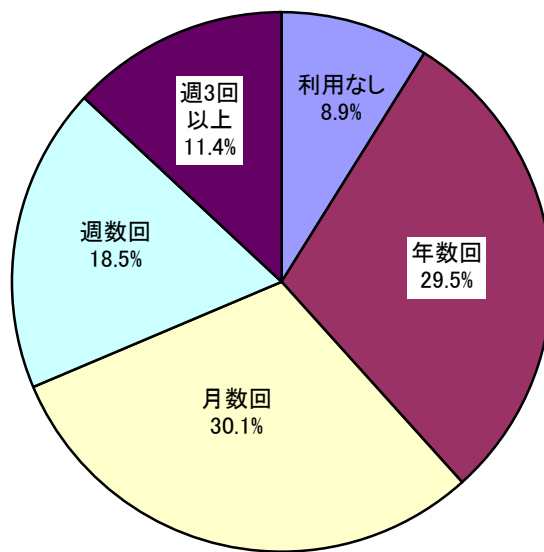


図 5 - 3 手話通訳の利用頻度

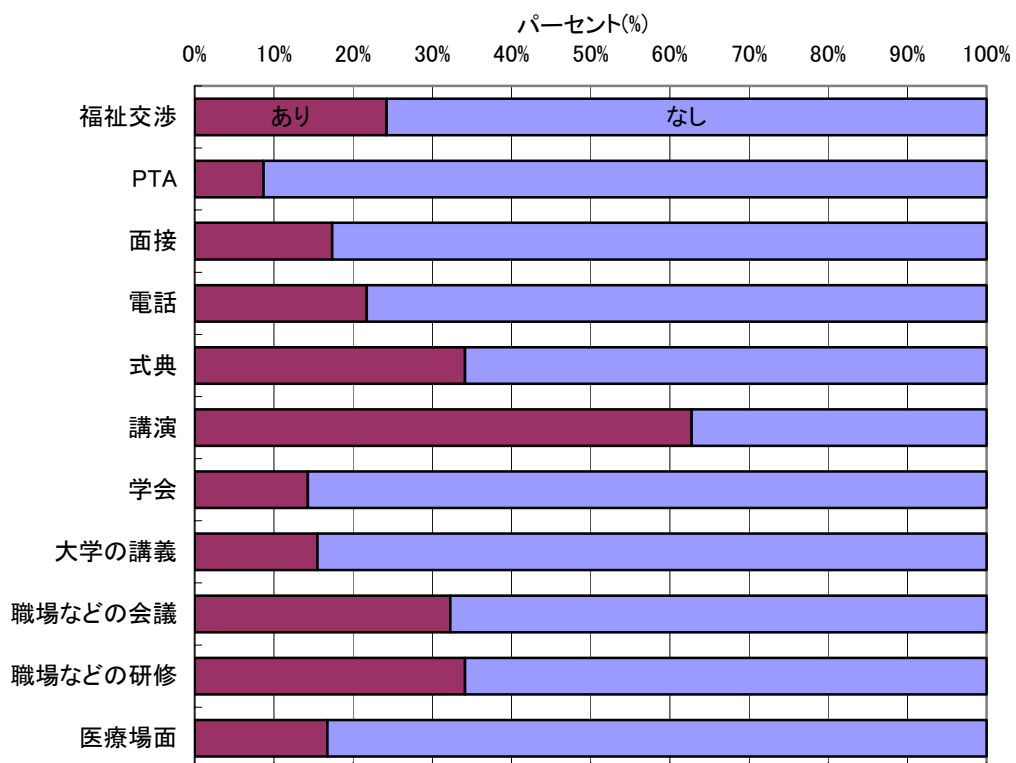


図 5 - 4 手話通訳の利用場面

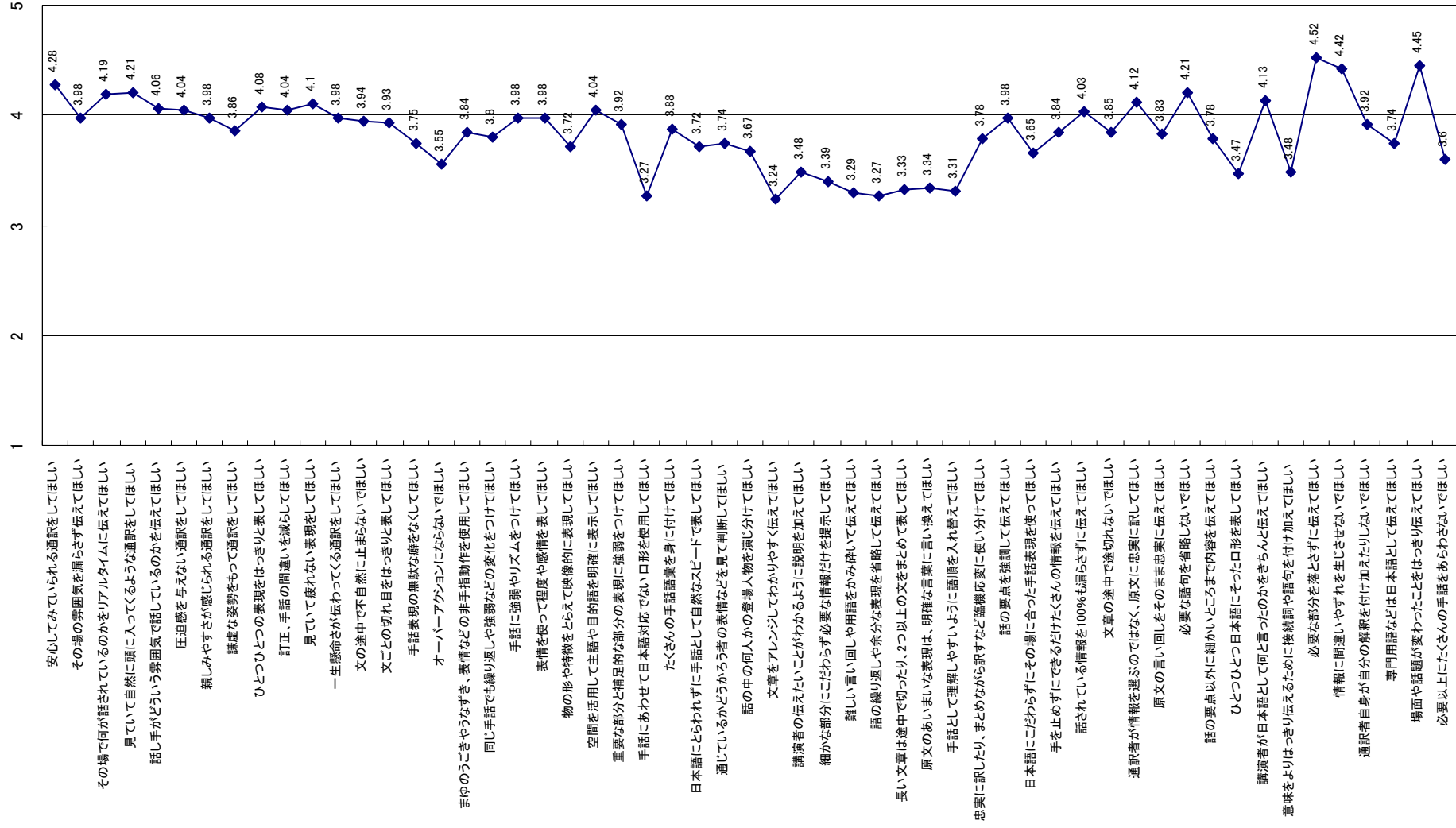


図 5 - 5 手話通訳に対する期待の全体的傾向

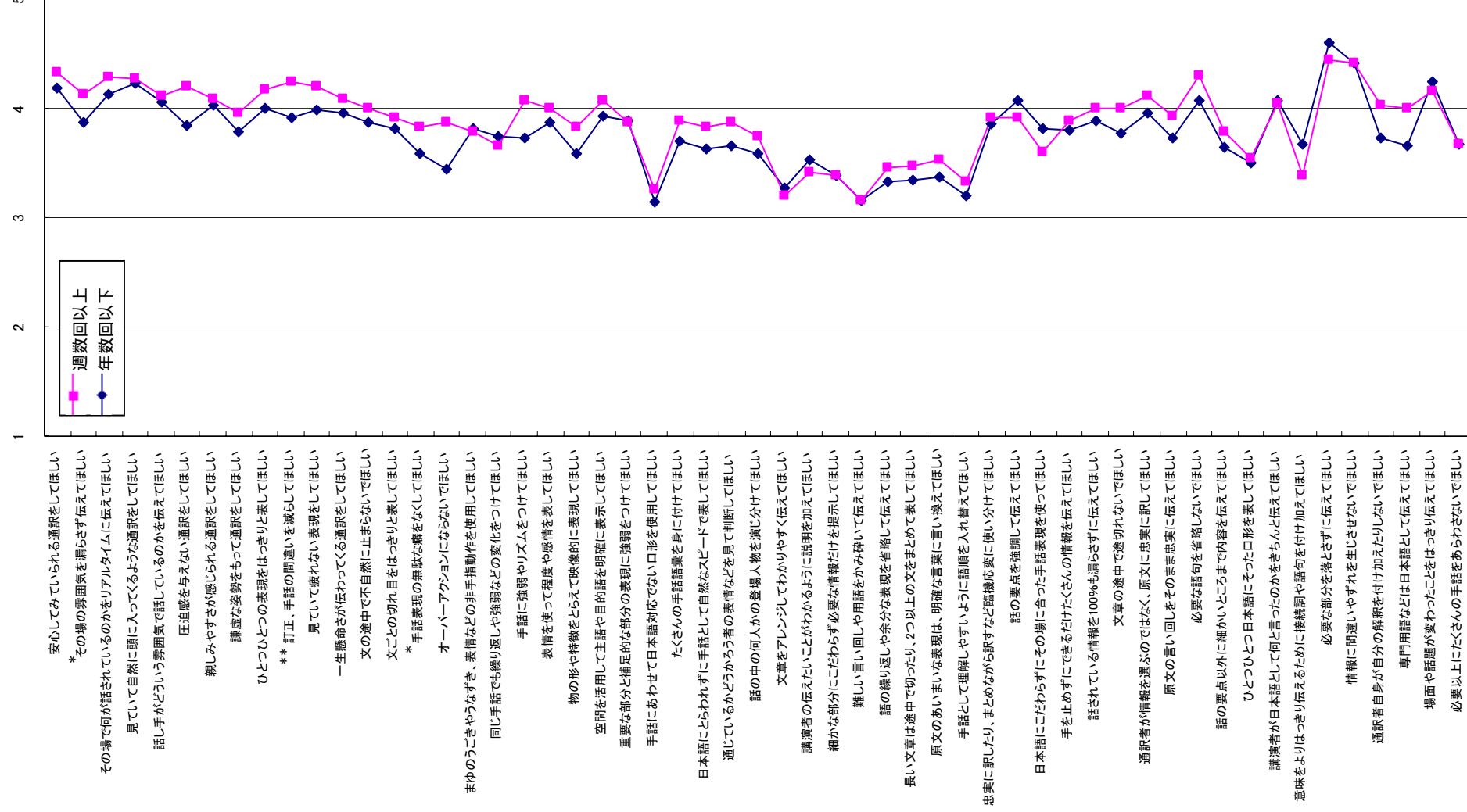


図 5 - 6 手話通訳の利用頻度による期待内容の違い

(*p<.05, **p<.01)

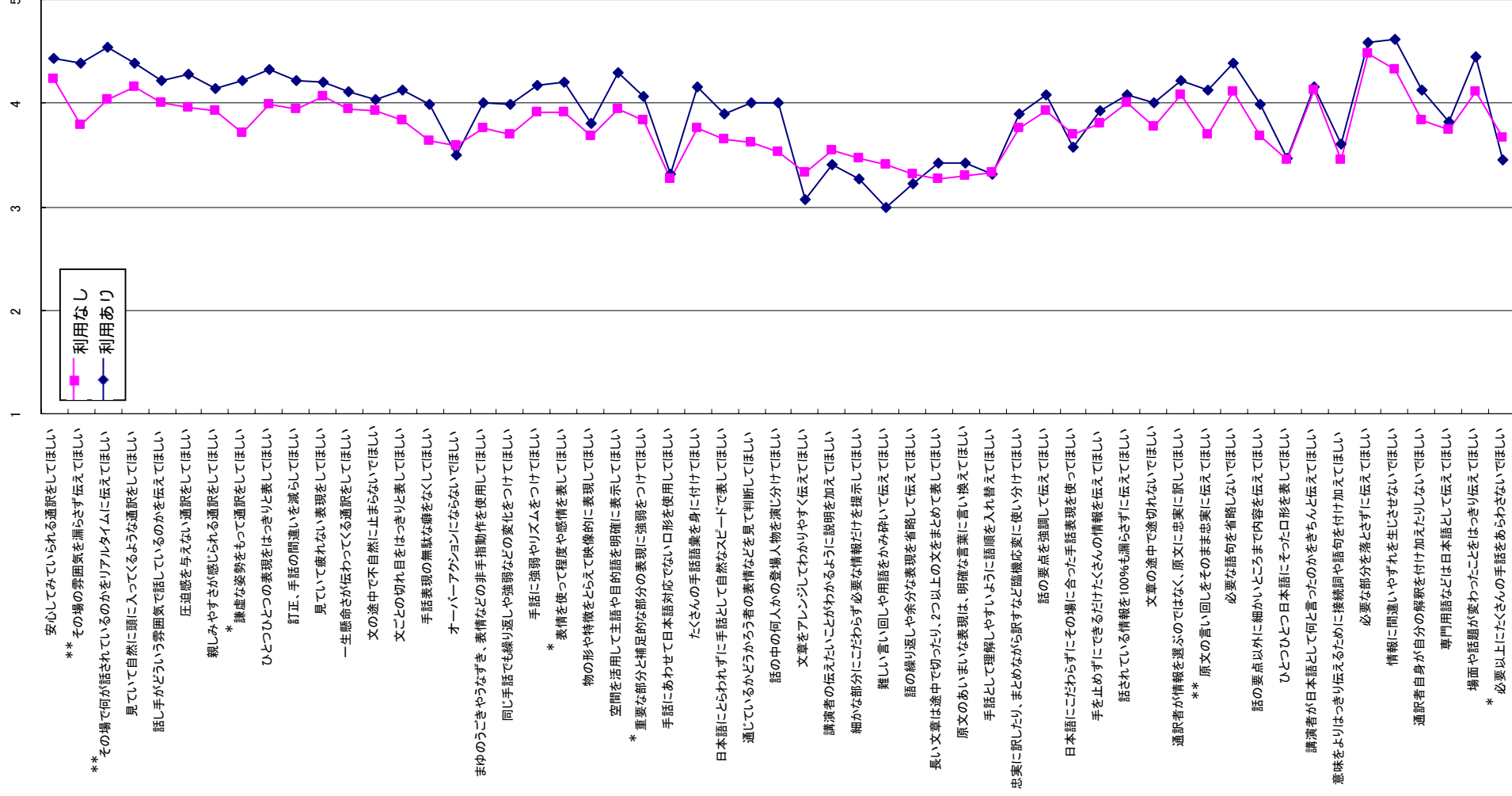


図 5 - 7 職場の研修場面での通訳利用有無による期待内容の違い

(*p<.05, **p<.01)

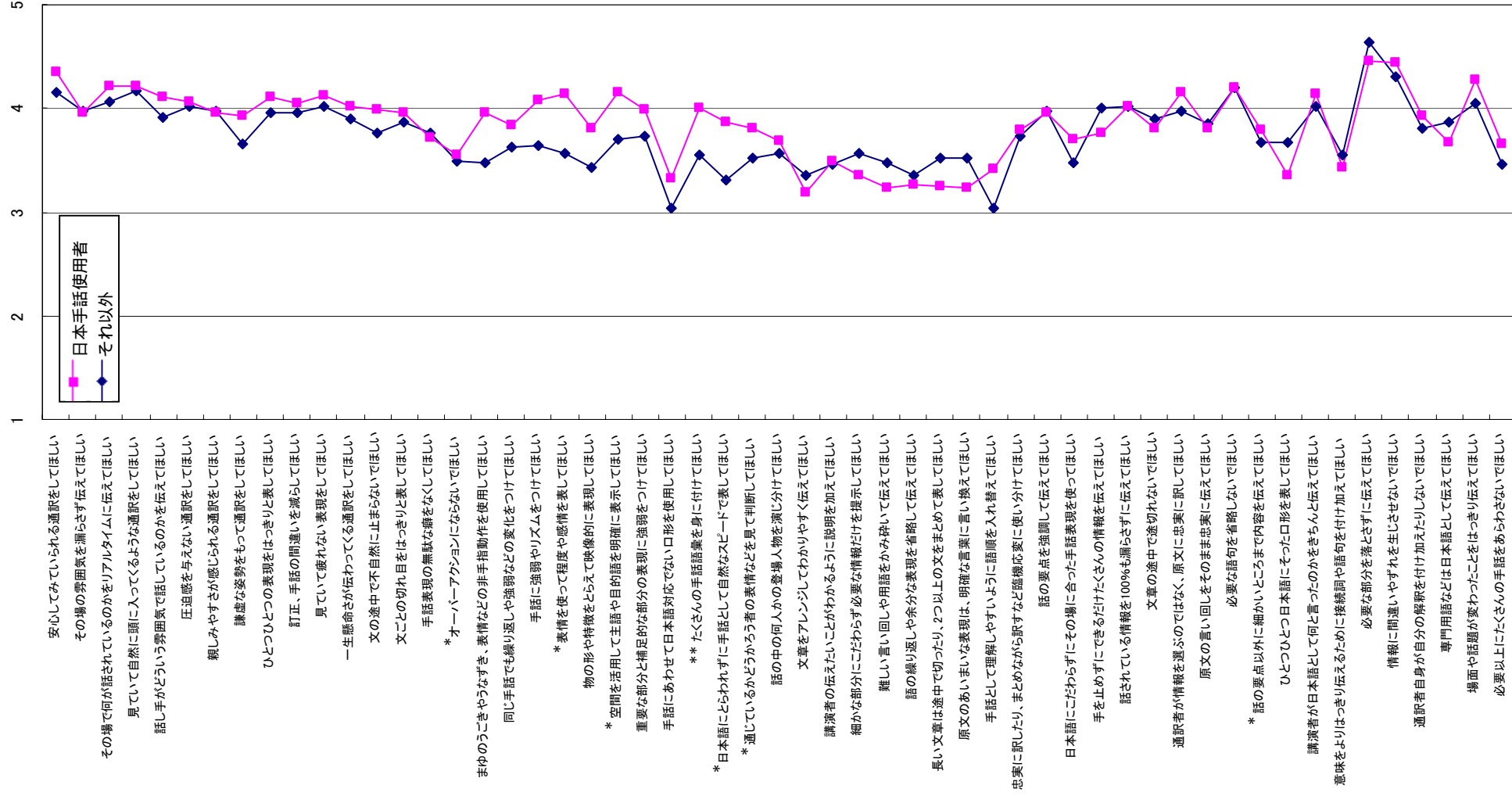


図 5-8 コミュニケーション手段による期待内容の違い

(*p<.05, **p<.01)

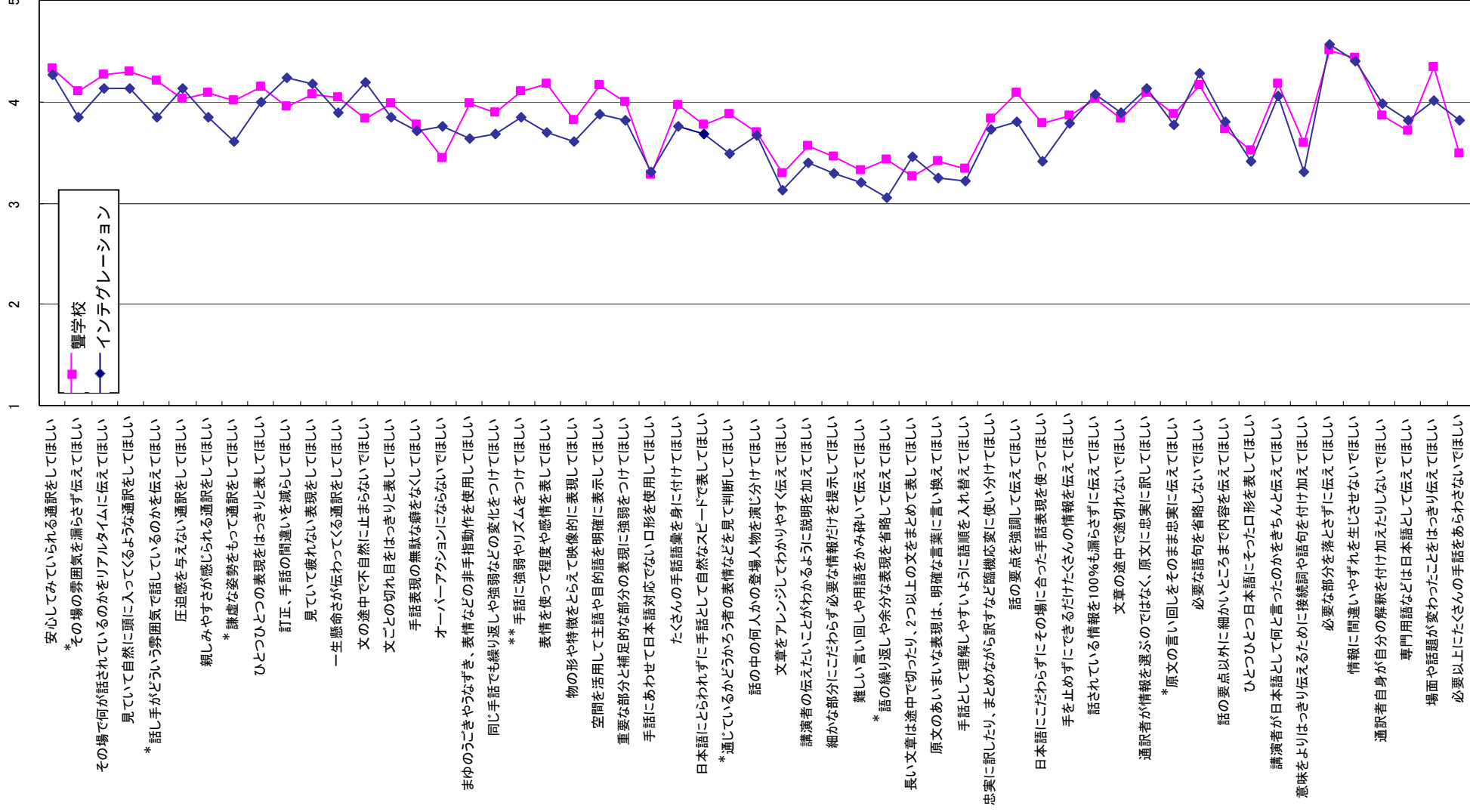


図 5 - 9 高等部段階における教育背景による期待内容の違い

(*p<.05, **p<.01)

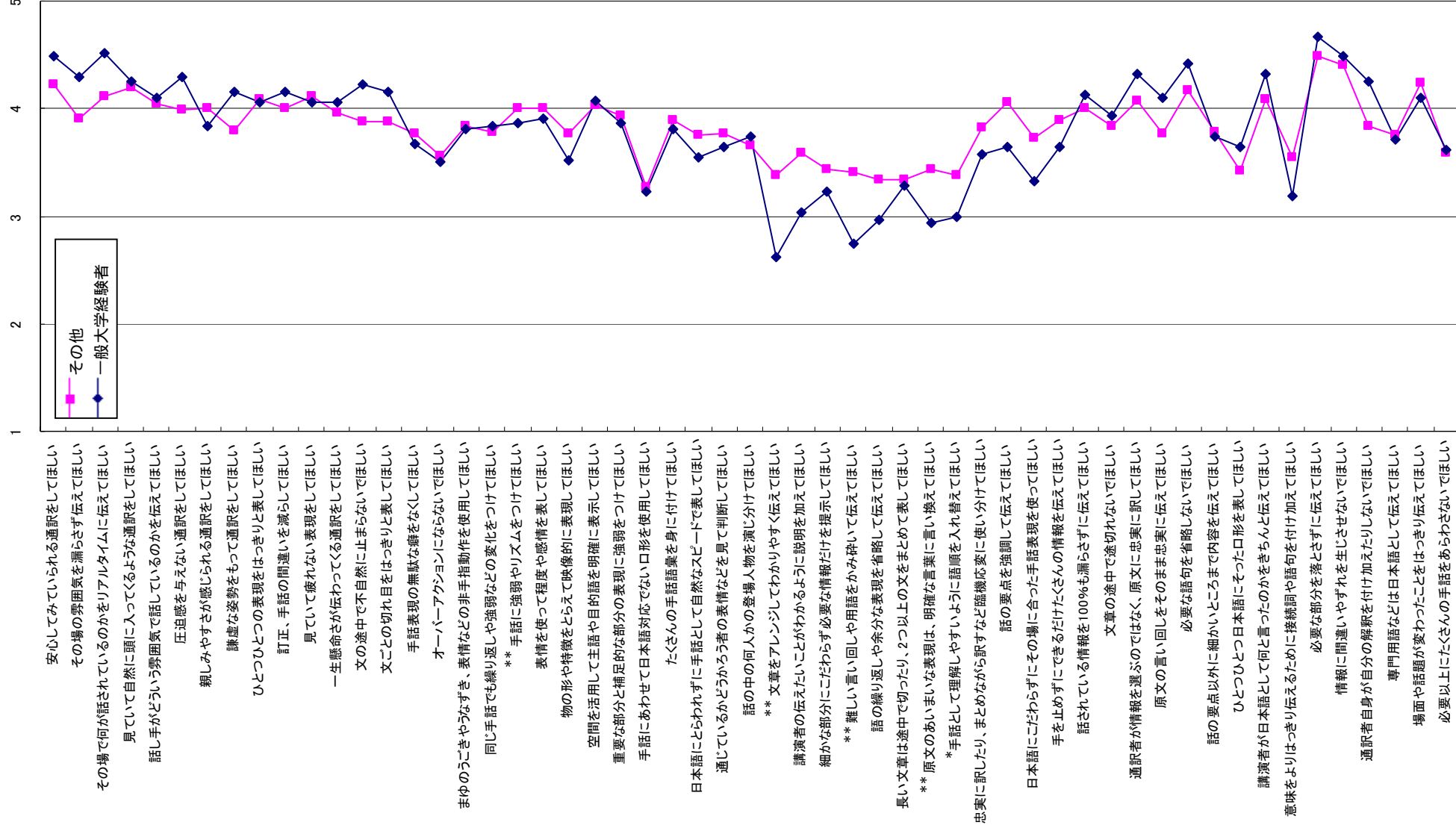


図 5 - 10 一般大学経験の有無による期待内容の違い

(*p<.05, **p<.01)

第6章 期待充足度尺度による手話通訳評価と客観的指標の関係

第1節 目的

手話通訳の評価に聴覚障害者の期待を反映し、なおかつ客観的に評価を実施するための方法として、Strong and Rudser(1992)はまず手話通訳作業自体の客観的評価を行った後、聴覚障害者の主観的評価を測定し、両者の間の相関を調べることで、客観的評価の有効性を検証している。しかしながら、ここで用いられた主観的指標は「十分な手話の技術を持っているか」「読み取りやすいか」「通訳を受けていて快適であるか」といった3つの項目(5段階評価)および総合評価(3段階評価)の全4項目からなるごく簡単なものであり、聴覚障害者の手話通訳に対する評価を総合的に把握するものではなかった。そのため、本研究では第5章で得られた結果を元に、手話通訳に対する聴覚障害者の期待内容を網羅し、なおかつ単純化された尺度を作成し、これを元に聴覚障害者の期待充足度という側面から手話通訳の主観的評価を試みることにする。さらに、各通訳事例に対する聴覚障害者の評価と、それぞれの通訳事例が用いている作業内容の関連を分析することで、聴覚障害者の評価に影響を与えている通訳作業の内容を具体的に明らかにすることを目的とする。

第2節 方法

第3節では、第5章の結果を元に手話通訳に対する期待の構成因子を抽出し、これを用いて期待の充足度を測定するための尺度を構成する。その後第4節において、作成した尺度を手話通訳事例に適用し、実際に充足度を測定する。さらに第5節において、期待充足度得点と第4章で得られた客観的評価指標との関連性について検討する。

第3節 手話通訳に対する期待充足度尺度の構成

1. 目的

第5章で得られた結果を元に、実際の手話通訳事例に対して聴覚障害者の期待が充足されているかどうかを問う期待充足度尺度を構成する。期待に関する質問紙調査で採用した55項目は、いずれも手話通訳に対する期待を反映しているものであるが、実際の評価のためには項目数が多く、非実用的であると考えられる。そのため、このうち聴覚障害者の期待をよりよく反映していると考えられる項目を抽出し、手話通訳に対する期待充足度尺度を構成する。

2. 方法

手話通訳の期待に関する55項目に対して、主因子法 - プロマックス回転による探索的因子分析を行い、固有値、累積寄与率、因子負荷量、因子の解釈可能性を考慮に入れて因子を抽出する。その後、因子の解釈と妥当性を検討するとともに、得られた因子構造をもとに、因子負荷量の高い項目を中心に手話通訳の評価として適当な項目を精選し期待充足度尺度を構成する。

3. 結果と考察

1) 因子構造の検討

調査で用いた55項目は、非常に多岐にわたっており、各側面ごとにいくつかの下位次元が区別される可能性が示唆されていた。そこで、これら55項目すべてに対して探索的因子分析を行った。因子の抽出には主因子法を用い、軸の回転には、各因子に相関があると考えられたためプロマックス法による斜交回転を用いた。因子数を2から6に設定して、固有値、累積寄与率、因子負荷量、因子の解釈可能性を考慮した結果、4因子を採用するのが妥当であると考えられた。各項目の因子に対するパターン行列を表6-1に示す。それぞれの因子について、0.4以上の因子負荷量を持つことを第一条件とし、これに解釈可能性を考慮して各因子の項目を決定した。この結果、どの因子に対しても因子負荷量が0.4以下でかつ解釈が困難であった2つの項目を除外した。その後、再度因子分析（主因子法 - プロマックス回転）を行い、最終的に53項目が4つの因子に分類されることになった。修正後の

パターン行列を表 6-2 に示す。

各因子は以下の方法で命名および解釈することができた。まず、パターン行列から「全体的印象因子」と「手話技術因子」のふたつは手話表現に関する因子であり、「変換技術因子」と「情報量・忠実さ因子」は通訳作業に関する因子であると判断した。このうち「全体的印象因子」は、通訳者の表現する手話の中でも、安心感や圧迫感、不自然な動きのなさといった全体的な印象をとらえる項目が中心となっており、「手話通訳者が与える印象に関する因子(以下「全体的印象因子」とする)」と命名することができた。また「手話技術因子」は、手話の繰り返しや強弱、表情、空間活用など、手話の表現に関わる項目が中心となっており、特に手話の技術や文法的な正確さといった項目に高い因子負荷量を持っていたことから、「手話技術および文法的正確さに関する因子(以下「手話技術因子」とする)」とした。通訳作業に関わる因子のうち「変換技術因子」は、説明の付加や言い換え、省略など、通訳作業の中でもより分かりやすい通訳にするために、通訳者が加えている操作に関する項目が中核となっており、「日本語から手話への変換技術に関する因子(以下「変換技術因子」とする)」ととらえることができた。さらに「情報量・忠実さ因子」は、情報の量や起点談話に対する訳出表現の忠実さといった側面を強く反映しており、「情報の量や忠実さに関する因子(以下「情報量・忠実さ因子」とする)」と命名することができた。

長南(2000)は、ろう学校生徒の手話表現に関して研究する中で、17項目にわたる手話表現の評価尺度を構成している。これら17項目は1因子構造をなしており、その内容は「うなずきは適切か」「視線の方向は適切か」などといった、本研究の「手話技術因子」に相当するものであった。また、手話通訳士育成指導者養成委員会(1998)は、手話通訳技術認定の客観的評価方法および基準として、「表情」や「時間・空間表現」「写像的表現」といった7項目を挙げている。これは、現在一般的に手話通訳の評価項目として広く用いられているものであるが、これらの項目も本研究の結果で得られた「手話技術因子」に属するものといえる。

これに対して、本研究の結果から、従来より指摘されてきた「手話技術因子」以外に、その見やすさや通訳者全体が与える印象、しいては「安心感」や「親しみやすさ」「一生懸命さ」といった観点も重視されていることがわかった。同時に、通訳という作業の特性上、原文の内容をよりよく反映してほしいという期待も存在し、その内容は特にできるだけ多くの情報を原文に忠実に伝えてほしいとするものと、よりわかりやすく伝えるために通訳者自身の工夫を加えてほしいとするふたつの因子に分かれて存在することが示唆された。

そのため、手話通訳の評価にあたっては、これら 4 つの側面から把握していくことの必要性が明らかになった。

2) 尺度の構成と信頼性・妥当性の検討

得られた因子構造をもとに、因子負荷量の高い項目を中心に手話通訳の評価として適当な項目として 26 項目を選択した。その後、聴覚障害の専門家 3 名により手話通訳に対する期待の充足度を問う項目として妥当であるかを検討し、最終的に 25 項目にわたる期待充足度項目を決定した。尺度の内容および各項目が属する因子に対する因子負荷量を表 6-3 に示す。再度、これら 25 項目において主因子法プロマックス回転による因子分析を行ったところ、もとの因子構造が保たれていることが確認された。回転後のパターン行列を表 6-4 に示した。

各因子の関係性を明らかにするため、各因子に属する項目の得点をそれぞれ因子ごとに合計し、ピアソンの相関係数を求めたところ、表 6-5 に示すように「変換技術因子」と「情報量・忠実さ因子」の間を除いて相互に相関が見られた。また、「全体的印象因子」と「手話技術因子」の間には比較的強い相関が見られ、手話に対する印象が全体的な安心感や信頼感につながっているものと考えられた。逆に「変換技術因子」と「全体的印象因子」の間の相関は比較的低かったが、これは変換作業が聴覚障害者にとっては最も見えにくいものであるためであろうと考えられる。

また、尺度の信頼性を検討するため、4 つの因子ごとにクロンバックの α 係数を求めたところ、「全体的印象因子」0.8152、「手話技術因子」0.8878、「変換技術因子」0.8566、「情報量・忠実さ因子」0.7830 で、いずれも高い値が得られ、尺度項目間で一貫性があることが示された。

以上の手続きを経て、25 項目からなる手話通訳期待充足度尺度が構成された。完成した尺度を表 6-6 に示す。

第4節 手話通訳に対する期待充足度の測定

1. 目的

前節で作成した尺度を使用し、聴覚障害者の手話通訳に対する期待充足度を測定し、聴覚障害者の求める手話通訳の具体像を客観的に提示するとともに、聴覚障害者の属性による期待充足度の違いについても検討する。さらに手話通訳事例に対する聴覚障害者の期待充足度と、手話通訳の客観的評価の結果の関連を明らかにすることで、手話通訳作業のうち特に聴覚障害者の期待充足度に影響を与えている要素を客観的指標と関連付けて明らかにすることを目的とする。

2. 方法

1) 対象者

日常的に手話通訳を用いている聴覚障害者で、特に職場や大学の講義、研修会といった職業や専門に関わる場で手話通訳を用い、通訳に対するニーズが高いと考えられる者 33 名を対象とした。

2) 通訳事例

ここでは、研究 1 で収録した 6 名の手話通訳者の通訳データを事例として用いた。いずれの通訳者も同一の起点談話を聞いて日本語から手話に同時通訳を行っており、そのレベルはまちまちであった。収録に用いた起点談話は 8 分 50 秒のものであったが、対象者にはこのうち研究 1 で分析に用いた部分（4 分 53 秒）のみを抽出し提示した。尚、実際の通訳場面では、聴覚障害は手話通訳者と講演者の両方から情報を得ていることが多いため、提示の際にはビデオをあらかじめ編集し、図 6-1 に示すように画面の左下に講演者を、残部に手話通訳者を映し出すこととした。

3) 期待充足度尺度

先に構成した期待充足度を問う 25 項目に、各通訳事例に対する総合評価を問う項目 1 つを加えた 26 項目からなる評価用紙を作成し使用した。評価用紙は通訳者ごとに 1 枚、全部で 6 枚用意した。また、対象者の属性を問う項目として、性別、年齢、聴力、コミュニケ

ーション手段、教育歴、手話指導経験、通訳利用頻度、通訳利用場面を尋ねた。さらに、通訳事例の評価とは別に各対象者が手話通訳一般に対して抱いている期待の具体的内容を把握するため、期待充足度尺度と同様の項目を用意し、各項目に対する期待度について回答を求めた。使用した質問紙を資料として巻末に添付する。

4) 手続き

部屋の前方に置かれたスクリーンに、ビデオデッキおよびプロジェクタを通して通訳事例を投影し、これを見て各通訳事例に対する期待充足度を評定し、評価用紙に記入してもらった。

手続きとしては、まず評価の趣旨や方法を説明した後、同意書および対象者の属性を尋ねる項目に必要な事項を記入してもらった。その後、対象者を5~6名の小グループに分割し、1グループずつ順に部屋に入ってもらい評定を実施した。

事例の提示は1名ずつ順に行い、対象者が評価用紙に記入し終わったことを確認した後、次の事例を提示した。ビデオデッキの操作は実験者が行い、必要に応じて他の事例と通訳作業の内容について比較検討したり、同一箇所を繰り返し見るなどの調整を行った。また、評価項目の内容を十分に理解してもらうため、途中質問があった項目については全体にその内容を説明し、対象者によっては補助者がそばについて随時質問に答えながら評価を進めた。また、評価項目として挙げられている以外に何か通訳事例について感じたことがあれば、用紙の余白部分に記入してもらうよう依頼し、すべての通訳事例に対する評価が終了した後、通訳に対する期待の内容を問う項目に対象者の考えを記入してもらった。

他のグループにも同様の手続きで実施したが、事例の提示順序による順序効果が出ないよう、グループによって提示順序を変えカウンターバランスを取った。評価全体の流れを表6-7に示す。

なお、対象者には、通訳者個人に対する評価ではなく、あくまでも通訳方法の一例だととらえて評価してもらうよう教示するとともに、通訳事例となった方々へのプライバシーに対して十分配慮してもらうようお願いした。

5) 分析方法

評価項目のうち、期待充足度を測定する25項目については「とてもよくあてはまる」を5点、「あてはまらない」を1点とし、総合評価については「大変よい」を5点、「よくない」

を1点として得点化した。対象者の属性を調べたところ年齢が10~20代の若年層と30~60代の中高年層に2分する結果となったため、全体として分析を行うとともに、必要に応じて若年層と中高年層に分けて分析を行った。

3. 結果と考察

1) 対象者の属性

(1) 性別、年齢、聴力

対象者の属性を聞く項目として、性別、年齢、聴力を尋ねた結果を図6-2、6-3、6-4に示す。ここから、性別は男女の比率がほぼ同じで、いずれも約50%であった。年齢については20代と40代に対象がやや偏っていた。これは、通訳の評価を日ごろ大学の講義等で通訳を用いる可能性のある学生と、地域の聴覚障害協会等で活躍し、通訳の指導等にも関わっている成人を中心に依頼した結果であると思われるが、年齢によって教育歴等の個人的条件や通訳の評価に差があることも考えられるため、以下の分析については全体の分析に加え、二つの異なる年齢群についても結果も求めることに下。また、聴力については19名が100dB程度と回答しており、1名を除いてほぼ全員が90dB以上の重度聴覚障害があると回答していた。

(2) 教育歴

次に回答者がこれまでに受けてきた教育について尋ねたところ、図6-5に示す結果となった。全体的に普通学校出身者に比較して聾学校出身者が若干多く、小学部、中学部段階では約70%、高等部段階では約60%が聾学校の出身であった。また、教育相談を受けた経験があるとした者は全体の50%を下回っており多くはなかった。他に、聴覚障害者のための短期大学であるつくば技術短期大学を含め、約半数が大学を経験していた。

これらを対象者の年齢によって10~20代と30~60代に分けて見たところ、図6-6、6-7に示すように10~20代の対象者の50~60%が小学部から高等部段階を難聴学級および普通学級で教育を受けてきており、全体に比較してやや聾学校出身者の比率が低かった。特に高等部段階では地域の学校にインテグレーションしていた者が60%を占めており、聾学校出身者よりも割合が高かった。また、大学教育を受けた者が全体の90%以上おり、教育相談、幼稚部段階の教育についても受けたとする比率が高かった。

これに対し、30~60代の対象者はインテグレーション経験者に比べて聾学校出身者が多

く、小・中学部段階で 90%の回答者が聾学校を卒業していた。また、教育相談や大学教育を受けた者の数は 20%に満たず、幼稚部経験者の割合も 60%と 10~20 代の対象者と比較してかなり低い値であるなど年齢的な差が顕著に見られたが、いずれもわが国のろう教育の歴史的背景を反映している結果であると考えられた。

(3) 手話指導経験

手話通訳にはさまざまな要素が関係してくるため、その評価のためにはある程度手話通訳技術を分析的にとらえる力が求められるものと考えられる。ここではそうした力量を推し量るための材料のひとつとして手話の指導歴を取り上げ、対象者が手話や手話通訳を指導した経験があるかどうかを尋ねることとした。現在日本の各都道府県には、厚生省の定めた福祉事業(「障害者の明るいくらし」促進事業,1997)として実施されている、手話通訳者の養成のための「手話通訳者養成講座」と、この前段階として手話を指導し、手話が使えらるボランティアを育てるための「手話奉仕員養成講座」が存在し、これらが手話通訳養成のための大きな基盤となっている。また、これ以外に手話の指導場面として、地域や大学の中にある手話サークルの場があり、定期的に手話の指導や聴覚障害者と健聴者の間の交流が図られている。本研究ではこれら 3 つの場における手話及び手話通訳の指導経験をとらえ、それぞれについて各回答者に経験があるかどうかを尋ねた。

この結果、まず全体的には図 6-8 に示すように、手話通訳者養成講座で手話通訳を指導した経験があるとする者が 10 名、奉仕員養成講座において手話の指導に携わった経験のある者が 15 名、サークルにおける指導経験があるとする者が 19 名で、サークルで指導した経験がある回答者が比較的多く見られた。ただ、この中には単発で数回教えたことしかないとする者も半数近くおり、定期的・継続的に指導に関わっているわけではないものも含まれていた。ただし、複数の講座に関わっている者はそれぞれにカウントしているため、母数は全体の人数を上回っている。

次にこれを年齢別に分けて見たところ、図 6-9、6-10 に示すとおり、10~20 代の対象者では手話の指導経験がまったくないとするものが全体の 65%程度を占めていた。このほかに、サークルや通訳者養成講座で何度か教えたことがあるとする者も数名いたが、いずれもほとんどが単発で数回教える程度で、定期的に関わっている者は 1 名と少なかった。

これに対して 30~60 代の対象者の場合、全員が何らかの形で手話もしくは手話通訳を指導した経験を持ち、定期的・継続的に指導に関わっている人の数も多かった。また、サー

クルでは定期的に指導してきた者と単発で指導に関わった経験がある者の比率はほぼ半数ずつであったが、手話通訳者養成講座や手話奉仕員養成講座では定期的に指導に関わる人の比率が多くみうけられた。

ここから手話通訳者を養成するために各地域で開催されている各種講習会では、10~20代の若年層の聴覚障害者の関与はほとんどなく、30~60代の中老年層の聴覚障害者の方が指導経験は豊富であることがわかった。なお、手話通訳者の養成のためには幅広い聴覚障害者の期待が反映される必要があると考えられるが、こうした講習会において若年層の聴覚障害者の意見がどのように反映されているのか、あるいはいないのかといった実態をより詳細に調査する必要があると考えられた。

(4) 手話通訳の利用状況

手話通訳の利用状況として、手話通訳を利用する頻度と利用場面について尋ねた結果を図6-11、6-12に示した。ここから、通訳の利用頻度としてはほとんど利用しないと回答した者が34%とやや多く、月に1回以上利用する者は33%と全体の3分の1程度であった。また、利用場面としては主催者側であらかじめ通訳が用意されていることが多い講演や式典で「利用する」と回答した者が全体の60~70%と多く、このうち講演場面では「頻繁に利用する」と回答した者も比較的多かった。このほか、医療場面や福祉交渉などの場面でも比較的多く利用されていたが、大学の講義や学会、職場などでの利用率は低かった。

これらの結果を年齢別に見たところ、図6-13、6-14に示すとおり10~20代の対象者のうち約70%が通訳は「ほとんど利用しない」と回答しており、「年数回利用する」とした者も13%いた。しかし、「週に1回以上利用する」と回答した者も約15%おり、頻繁に利用する者とまったく利用しないもので極端に分かれる傾向が見られた。

これに対し、30~60代の対象者の場合、全員が何らかの形で通訳を利用していると回答しており、年数回利用する者が47%、月に数回利用する者が同じく47%とこれら二つで大半を占めていた。しかし、週数回以上利用すると回答した者の比率は10~20代の対象者と比較して少なく、全体的に皆通訳を利用しているものの、その回数は多くはなく、日常的にごく頻繁に通訳を依頼するといった状況にはないことが明らかにされた。

一方手話通訳の利用場面については、図6-15、6-16に示すようにいずれの対象者も講演会や式典で通訳を多く用いていることは変わらないが、30~60代の対象者が福祉交渉、PTA、面接、電話、医療など日常生活の中で通訳を利用するのが多いのに対して、10~20代の対

対象者は学会や大学の講義、職場の会議といった比較的、学術的あるいは専門的な場面で通訳を使用していることが明らかになった。

2) 手話通訳に対する期待の内容

対象者が手話通訳一般に対してどのような期待を抱いているのかを確認するため、通訳事例に対する評価とは別に期待充足度尺度の 25 項目を、文末を「～してほしい」の形に書き換え、第 5 章で行った調査と同様に「とてもよくあてはまる」から「あてはまらない」の 5 段階で回答を求めた。得られた結果を「とてもよくあてはまる」を 5 点、「あてはまらない」を 1 点とし、各項目に対する回答者の平均を求めたところ、図 6-18 に示すような結果となった。

この結果、「全体的印象因子」や「手話技術因子」に対する期待の度合いが全体的にやや高く、「変換技術因子」に属する項目に対しては全体的に得点が低い傾向が見られた。また、「情報量・忠実さ因子」では、項目によってややばらつきがあり、「ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい」とする項目では全項目のうちもっとも低い値を示したのに対して、「必要な語句を省略しないでほしい」「情報に間違いやずれを生じさせないでほしい」などの情報の正確さに関する項目では 4.5 以上の高い期待度が示された。このことから、対象となった聴覚障害者は、全体的に日本手話の多様な文法を借用した見やすく、安定した通訳で、特に間違いや脱落のない正確な情報を求めていることがわかった。また、文のアレンジや変換については、必要に応じて用いてほしいとの要望はあるものの、あまり多用されることには抵抗を示しているように見受けられた。また、通訳の際の訳出率に関しても、必ずしも 100%を求めるものではなく、ひとつひとつ日本語にそった通訳というよりは、その場の雰囲気や必要な情報を漏らさずに伝える通訳を求めているようであった。

これらの結果を、第 5 章において聴覚障害者約 350 名に対して質問紙調査を行った結果と比較してみたところ、今回の結果の方が全体的に得点が高いことを除いては、「全体的印象因子」、「変換技術因子」、「情報量・忠実さ因子」に対する回答の相対的な傾向はほぼ同様であった。しかし、今回のデータでは、「手話技術因子」に属する項目得点が、他の項目に比べて高くなる傾向にあり、この点では第 5 章の結果と違いが見られた。この理由は定かではないが、第 5 章の結果では、聾学校出身者はインテグレーション出身者と比較して、手話表現に対するニーズが高いことが示されているため、本研究の対象者に聾学校出身者が比較的多く含まれていることが影響しているものかもしれない。また、本研究では実際

に手話通訳の事例を視聴した後に通訳に対する対象者の意見を尋ねたため、このことが何らかの影響を与えたことも考えられる。

また、手話通訳に対する期待の内容を年齢別に 10~20 代と 30~60 代の聴覚障害者に分けて比較したところ、図 6-18 に示すように、「全体的印象因子」、「手話技術因子」についてはほぼ同様の傾向にあった。しかし、「変換技術因子」の各項目および「情報量・忠実さ因子」の「ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい」については、統計的には有意ではなかったものの（ピアソンの²検定、 $\chi^2 = 1.71 \sim 7.62$ 、 $df = 2 \sim 4$ ）若年層の聴覚障害者が中高年層の対象者に比較して低い値を示していた。ここから、30~60 代の中高年層の聴覚障害者と比べて、若年層のろう者の方が、より文章に即した通訳者による変換作業があまり多く加えられていない通訳を好んでいる傾向があることがうかがえた。ただし、訳出方法として単純に原文をそのまま忠実に口形をつけて表現するものではなく、手話に必要なリズムや表情を保ったままで、なおかつ原文の内容が正確に伝わる表現を希望しているものと読み取れ、これが実際の通訳場面においてどのような訳出表現と対応しているのか興味深い点であった。また、この傾向は、第 5 章において一般大学で学習した経験のある聴覚障害者が、文章のアレンジに関する項目で低い値をとっていたことと共通するもので、本研究の若年層の聴覚障害者も大学の講義などの専門的な場面で比較的多く通訳を用いているとの回答があったことから、これらの場面に共通した通訳ニーズととらえることができるかもしれない。

3) 手話通訳に対する期待充足度

ここでは実際の通訳事例に対して、聴覚障害者の期待充足度を測定し、通訳事例および聴覚障害者の属性による違いを検討した。この結果を各通訳事例に対する総合評価と、期待充足度尺度の下位項目に対する得点の二つに分けて述べる。

(1) 各通訳事例に対する総合評価

ここでは通訳事例を視聴した後、それぞれの事例に対する総合的な評価を「大変よい」「よい」「どちらともいえない」「あまりよくない」「よくない」の 5 段階で評定してもらった。その後、各回答者の回答を「大変よい」を 5 点、「よくない」を 1 点として得点化し、表 6-8 に通訳事例ごとの総合評価の平均および標準偏差を、図 6-20 に通訳事例ごとの評価の内容を度数で示した。

この結果、通訳事例によってかなり異なる評価が得られた。まず通訳事例 C に対しては、2 名を除いてほぼ全員が一致した評価を下しており、この値は 6 事例の中でもっとも高く、ばらつきも少なかった。次に通訳事例 A と D については、平均値が 3.82 および 4.24 と近い値にあったが、通訳事例 A に対する評価はばらつきが大きく、4 を中心として 5 から 2 まで幅広い評価を受けていた。また、通訳事例 B に対しては 3 を中心に前後に広がりがあり、通訳事例 E は B と同様 3 と回答した者が最も多かったが、B に比較して下方に広がる傾向があり、回答者によるばらつきが最も大きかった。通訳事例 F に対しては 2 あるいは 1 と評定した回答者が多くみられた。

これらの結果を年齢別に分けて比較してみたところ、全体的に 10~20 代の対象者の方が若干低く評定する傾向にあり、特に通訳事例 D、E、F についてはその差が比較的強く現れた。また通訳事例 E に対しては、10~20 代の対象者の評価が分かれ、1 と応えたものが比較的多い中、4 と回答するものもいた。しかし全体的には年齢による顕著な差は見られず、若年層の聴覚障害者の方が多少通訳を厳しく評価する傾向にあるが、全体的な評価は安定していて、聴覚障害者の属性によって大きく変わるものではないのではないことが推察された。また、全体の総合評価が分かれた通訳事例 A に対しては、どちらの年齢群においてもやはり同じように評価がばらつく傾向があった。そのため、この差が少なくとも年齢によるものではないことは明らかにされたが、対象者の属性のうち何によってもたらされるものなのか、あるいは属性とはまったく無関係な個人による好みの違いなのかははっきりわからなかった。

(2) 各通訳事例に対する下位項目得点

各通訳事例を期待充足度尺度の下位項目を用いて評価した内容を、それぞれ「大変あてはまる」を 5 点、「あてはまらない」を 1 点として得点化し、項目ごとに平均点を算出して図 6-23 から 6-28 に示した。なお、グラフ上の点線は手話通訳に対する対象者の期待の内容を示している。この点線が、実際に通訳として理想的なラインであるかどうかについては議論の余地があるが、各通訳事例の下位項目得点を評価するための目安として、同一グラフ上に示した。

この結果、全員の評価がほぼ一致して高かった通訳事例 C については、下位項目に対する得点も全体的に高く、また、「変換技術因子」、「情報量・忠実さ因子」の中で聴覚障害者の期待が低くなっている部分については同じように得点が下がる傾向にあり、ほぼ聴覚障

害者の期待通りの通訳を行っていると考えられた。

また、通訳事例 C について総合評価の高かった通訳事例 D でも、全体的には下位項目得点が、聴覚障害者の期待を示すラインに沿う形になっていた。また、下位項目得点の中では「情報量・忠実さ因子」に属する項目の中の「手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている」「話されている情報を 100%漏らさずに伝えている」といった情報量に関する部分が比較的高くなっており、できる限りたくさんの情報を伝えてくれる通訳者として評価されていることがわかった。ただ、「手話技術因子」の手話表現に関する部分では、求められている期待の度合いが高いのに対して、評価は他の因子と同等の値となっており、得点が低いわけではないが、この点において期待を十分に充足していないことが推測された。

これに対して、通訳事例 D と同程度の総合評価を示した通訳事例 A は、下位項目に対する評価が 3.5 から 4 の間の範囲でほぼ横一直線となり、因子間で目立った差が見られなかった。

また、通訳事例 B は、「繰り返しや余分な表現の省略」「難しい言い回しや用語の言い換え」「日本語にそった口形の使用」などの項目で比較的高得点が高くなっており、説明の付加や情報の量に関する項目では低い値をとっていた。このことから、全体的に情報の量は多くはなく、まとめながら日本語に対応した口形を用いて通訳を行っているとの印象を与えていることがわかった。ただ、「全体的印象因子」のうち雰囲気伝達に関する項目や、「手話技術因子」に対する評価は比較的高かった。これを聴覚障害者の期待を示すラインとの関係でみたところ、「全体的印象因子」はどちらともいえないが、「手話技術因子」ではちょうど期待が高い部分で比較的高い得点が示されており、「変換技術因子」、「情報量・忠実さ因子」では、逆に期待の高い部分の得点が低い傾向にあった。ここから、通訳事例 B の評価内容は全体的に聴覚障害者の期待の度合いに比較して低くはなっているが、手話の表現技術は聴覚障害者の期待の方向に沿う形にあることが推測される。逆に日本語から手話への変換方法や情報量に関しては、聴覚障害者の期待とは質的に異なる方向で行われており、この部分を改善することで評価が高まる可能性があると考えられた。

通訳事例 E は、全体的に聴覚障害者の期待を示すラインと逆のパターンを描く傾向にあった。特に「手話技術因子」の手話表現に関する項目に対する評価が低く、とりわけ非手指動作や表情を用いた表現が乏しいと受け取られていることがわかった。そのためか、他の通訳事例、特に下位項目に対する得点が比較的類似している通訳事例 B と比較して、通

訳事例 E の場合、下位項目得点に対する総合評価の得点が低いように見受けられた。ただ、「手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている」「話されている情報を 100%漏らさずに伝えている」といった情報の量に関する項目では、比較的高い評価を示しており、必要な情報はきちんと伝えられているとみなされていた。

通訳事例 F も通訳事例 E と同様、期待を示す曲線とちょうど逆のパターンを示しており、「手話技術因子」に属する項目の評価が低い傾向にあった。また、「変換技術因子」の中の「繰り返しや余分な表現の省略」、「二つ以上の文をまとめて表す」といった項目に対する得点が高く、このような通訳作業を多く用いているととらえられていた。

(3) 対象者の年齢による期待充足度の違い

図 6-29 から 6-34 には、各通訳事例の下位項目における評価得点を、対象者の年齢によって分けて表示した。図中 10~20 代の対象者の回答の平均を菱形、30~60 代の対象者の回答の平均を四角で表し、わかりやすさのためそれぞれを実線で結んだ。また、ピアソンの²検定を用いて年齢ごとの差が統計的に有意であるかどうか判定を行った。

この結果、全体的にそれぞれの通訳事例の下位項目における評価得点は、総合得点と同様にさほど差は見られず、特に「全体的印象因子」に属する項目については、ほぼ同じような回答となっていた。また、30~60 代の対象者の回答は因子による差が少なく、横に一直線であるのに対して、10~20 代の対象者は項目によって得点が異なっており、通訳をより分析的に見る傾向があることが示唆された。

通訳事例ごとには、事例 D に対する評価が年齢層によって分かれ、若年層の回答者が中高年層の回答者に比べて全体的に低い得点をつける傾向にあった。このうち、「手話に強弱やリズムがある($\chi^2=9.7$ 、 $df=3$ 、 $p<.05$)」「文章をアレンジしてわかりやすく伝えている($\chi^2=11.8$ 、 $df=3$ 、 $p<.01$)」「長い文章は途中で切ったり、2 つ以上の文をひとつにまとめて表している($\chi^2=11.6$ 、 $df=3$ 、 $p<.01$)」などの項目では統計的に有意な差が認められた。

これ以外の通訳事例ではさほど優位な差が見られなかったが、通訳事例 A では、30~60 代の中高年層の対象者がどの項目に対してもほぼ平均して「あてはまる」を示す 4 と回答しているのに対して、10~20 代の若年層の対象者では、手話表現に関する項目や文章の言い換えや付加などの「変換技術因子」に関する項目で低い得点をつける傾向にあった。しかしこの差は統計的には有意ではなかった。

また通訳事例 B では、「手話技術因子」「変換技術因子」に属する項目で 10~20 代の若年

層と 30～60 代の中高年層の対象者の評価が分かれ、10～20 代の若年層の対象者は「細かな部分にこだわっていない」「言い回しや用語を噛み砕いている」「余分な表現を省略して伝えている」などの項目でより「あてはまる」と回答していた。また、手話表現については若年層の対象者の方が若干評価が高かったが、いずれも統計的には有意ではなかった。

通訳事例 C については、全体的に 10～20 代の若年層のろう者の方が「変換技術因子」、「情報量・忠実さ因子」に属する項目で低い得点をつける傾向にあった。特に「文章をアレンジしてわかりやすく伝えている($F=7.1$, $df=2$, $p<.05$)」「ひとつひとつ日本語にそった口形を現している($F=9.4$, $df=4$, $p<.05$)」などではその差は統計的に有意であったが、その値がちょうど若年層の対象者の期待値に近づく形となっており、得点の低さが低い評価に結びつくものではなく、むしろ対象者が望む程度の減訳が行われていることを示していると考えられた。

さらに、通訳事例 E、F では対象者の年齢による差はほとんど見られず、「変換技術因子」、「情報量・忠実さ因子」の中の「細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示している」「難しい言い回しや用語を噛み砕いて伝えている」「必要な語を省略していない」等の項目で若干 10～20 代の対象者が「どちらともいえない」との回答をしている他は共通した結果となっていた。

4) 総合評価と下位項目得点の関係

本節では、通訳の受け手となる聴覚障害者が、期待充足度尺度を用いて 6 件の通訳事例の評価を行うことで、実際の通訳が聴覚障害者の期待をどの程度満たしているか、聴覚障害者の期待充足度を高める通訳事例はどのようなものであるかを明らかにしてきた。この結果、通訳事例に対する期待充足度は事例によって幅があり、ほぼ全員が一致して高い評価をつけた例から、そうでない例など幅広く存在することが明らかになった。また、期待充足度尺度の下位項目得点により、通訳事例ごとに高く評価されている点や、総合評価により影響を与えていると考えられる項目の存在が示唆された。すなわち、6 件の通訳事例のうち、通訳事例 C に対する評価が最も高く、この意見はほぼ全員が一致していた。通訳事例 C に対する下位項目の得点は、期待充足度尺度において、すべての得点が高いというよりむしろ、回答者の期待内容を示すラインにちょうどそう形になっていたことから、期待充足度尺度に対する下位項目得点は、回答者の期待値に近づくほど理想的な通訳と言えると考えられた。

一方で、聴覚障害者の期待をあまり充足していない通訳事例 B、E の場合について見てみると、各因子における得点傾向と総合評価との関係から聴覚障害者の期待の方向について示唆を得ることができた。すなわち、通訳事例 B に対する評価は、「手話技術因子」に関するものが期待曲線と同じパターンを示し、「変換技術因子」、「情報量・忠実さ因子」に関する項目で期待から遠い評価を示していた。これに対して、通訳事例 E に対する評価は「手話技術因子」が期待から遠く、「変換技術因子」、「情報量・忠実さ因子」はより期待値のパターンに近かった。そして、一部項目によっては通訳事例 E の方が得点が高い部分があるにもかかわらず、総合評価として通訳事例 B に対する得点が高いという結果が得られた。このことから、聴覚障害者の期待を構成する 4 因子の中で「手話技術因子」が総合評価に最も強く影響していることが示唆された。これは、本章第 1 節において期待充足度尺度を構成した際、第 1 因子である「全体的印象因子」に最も大きな相関を示したのが「手話技術因子」であったことと同様、聴覚障害者にとって最も目に付きやすい情報が総合的な評価に結びつきやすいことを示していると言えよう。

一方本研究では、10~20 代の若年層の回答者が、通訳事例 D、E、F に対して低い評価をつける傾向がみられた。これら 3 つの事例に対する若年層の回答者の評価を見ると、いずれの通訳事例も「手話技術因子」に対する評価が低く、このことが総合評価を低くしている可能性が示唆された。つまり、若年層の聴覚障害者もまた手話らしい表現への期待がかなり大きいということを意味しているものととらえられる。先に述べたとおり、手話通訳の養成現場では一般的に若年層の聴覚障害者に対しては対应手話で通訳を行うことが奨励されているが、今回の結果では、むしろ若年層の回答者の方が手話に対する評価を重視している可能性があり、今後より多くの回答者を対照として検証していく必要があるといえる。

また、本研究の範囲では聴覚障害者の年齢によって、尺度にそって求めた通訳評価の結果が大きく変わることはなかった。従来手話通訳の養成現場では、通訳に対する期待内容の年齢による違いが指摘されることが多かったが、本研究の結果は必ずしもこれを支持するものではなかった。ただし、今回の研究では期待充足度尺度による評価という形態を用いたため、尺度による評価が可能な聴覚障害者のみを対象とせざるを得ず、また回答者の人数も少数であったため、この結果が聴覚障害者全体の評価傾向を反映しているものとはいえない。特に、日本語で書かれた尺度の実施が困難な中高年聴覚障害者は対象としなかったため、今回の結果は日本語力がかなり高い聴覚障害者のグループにあてはまるもの

と限定的にとらえるべきであろう。

第5節 期待充足度と通訳作業の客観的評価の関係

1. 期待充足度尺度と客観的指標の対応関係

聴覚障害者によって示された期待充足度の値が、通訳事例の行っているどの通訳作業と対応しているのかを明らかにするため、期待充足度の各下位項目とこれに関係すると考えられる客観的評価指標の値を比較することで相互の関係性を探った。

まず、「全体的印象因子」に所属する項目のうち、はじめの4項目は非常に総合的な評価視点であるため、単純に客観的指標との結びつきを探ることはできないと考えて除外した。次に「訂正、手話の間違いない」「手話表現の無駄な癖がない」の2項目については、いずれも手話の流暢性に関わる項目であるため、「あてはまる」との回答を得た通訳事例ほど、非流暢な動きの出現回数が少なくなっているという仮説を元に、これらの関係を明らかにするために、手話表現中のいいよどもみや不要な間などの非流暢な動きの出現頻度と期待充足度得点との対応関係を図6-35にグラフで示した。このうち非流暢な動きの出現頻度は通訳事例ごとにそれぞれ棒グラフで示し、期待充足度得点は点で示して見やすさのためにそれぞれを線で結んだ。また、期待充足度に対応する軸は右軸に取り、軸を反転させている。この結果、通訳事例Eを除いてはほぼ回答者の評価は客観的指標と一致していたが、このグラフのみでは十分に対応関係が示されたとはいいがたい結果となった。これについては、客観的指標で数値として表しきれなかった別の要素も関係していると考えられるため、さらに精練された指標を考案する必要があると考えられる。

次に、「手話技術因子」に属する項目のうち「同じ手話でも繰り返しや強調などの変化がある」は手話の相による変化、「物の形や特徴をとらえて映像的に表現している」は類辞による変化、「空間を活用して主語や目的語を明確に表示している」は一致による変化と対応していると考えられる。そこで、個々の表現の出現回数と期待充足度との対応関係を図6-36、6-37、6-38にグラフに示したところ、いずれも厳密に一致するものではなかった。しかしながら、図6-39に示すように相や類辞による変化を含めた手話全体の異なり語の量と、先にあげた3項目の期待充足度得点はほぼ対応しているため、これらの項目は、個々の訳出表現というよりむしろ手話全体のバリエーションの豊かさを反映しているのではないかということが示唆された。

また、同じく「手話技術因子」に属する項目のうち、「まゆの動きやうなずき、表情など

の非手指動作を使用している」は手話表現にともなう非手指動作のうち、特に統語構造に関与することの多い要素に関する項目であった。このうち、うなずきについては非手指動作の客観的分析の際に、句の区切りを示すうなずきが明示されているかどうかを指標としたため、対応する可能性があるとして分析を行った。また、こうした句の区切りが手話全体のリズムやイントネーションにつながることから、「手話に強弱やリズムがある」についても同時に対応関係を調べた。この結果、図 6-40 に示すように以上の 2 項目で「あてはまる」と評価された通訳事例ほど、うなずきなどの区切りの表示が明確であり、逆に期待充足度の低かった 2 名の通訳事例では、全体的に区切りやリズムのない表現がなされていた。

一方「手話技術因子」に属する「表情を使って程度や感情を表している」は、副詞的な非手指動作が表示されているかどうかを問う項目であるが、本研究の範囲ではこれを示す客観的指標を抽出することができず、期待充足度の結果が実際の訳出表現と本当に対応しているのかがどうかを明らかにすることはできなかった。この項目は、聴覚障害者の期待の程度を問う質問の結果において最も高い得点が得られたものであり、通訳事例の中でも他の項目に比較して低い期待充足度が示されているものもいることから、動詞の程度を示す副詞的な非手指動作を数量的に記述できる指標を早期に導き出し、期待充足度との関係を明らかにすることが求められる。

次に「変換技術因子」に属する項目では、総合的な内容を問う項目である「文章をアレンジしてわかりやすく伝えている」を除外し、残された個々の項目と語レベルあるいは文レベルの変換作業の出現頻度との対応関係をグラフによって明らかにした。まず、「講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えている」では、語レベルの変換作業のうち、付加の出現頻度が期待充足度得点に影響を与えていると考え、両者の関係をグラフに示した。この結果、図 6-41 に示すように通訳事例 A を除いて得点の傾向が一致しており、付加をたくさん行っているものほど、この項目に対する期待充足度が高くなっていることがわかった。また、付加のうち特定の作業が期待充足度に貢献していることも考えられたため、「顕在化」「整理・修正」「説明の付加」「上位概念の提示」の各作業における出現頻度と期待充足度の得点を比較したところ、図 6-42 のように起点談話の内容をよりよく伝えるために、「～つまり」などの接続詞等を付加して文章全体の構造をはっきり伝えようとする「整理・修正」の出現頻度と対応しているように見受けられたが、この関係は明らかとはいえなかった。

これに対して「細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示している」「語の繰り返し

や余分な表現を省略して伝えている」はいずれも意図的省略に関する項目であり、「あてはまる」と評価された通訳事例ほど意図的な省略を訳出方略として多用している可能性があった。そのため、意図的省略の出現頻度と期待充足度の関係をグラフに示したところ、図 6-43 に示すとおり両者の間に仮説を実証する関係は見られず、むしろ「省略して伝えている」とされる通訳事例ほど、意図的省略の出現回数が少なくなっていた。また、項目の内容から非重要語を訳出せずに省略している率の高い通訳者ほど、期待充足度の得点が高いことも考えられたため、起点談話のうち重要語として選出された以外の語句で、各通訳事例によって訳出されている語句の数と期待充足度の対応を図 6-44 に示したところ、これも「余分な表現を省略して伝えている」とされる通訳事例ほど、非重要語を訳出している率が高いという矛盾した結果となった。そのため、これらの項目については、余分な表現を省略しているとする意図的省略ではなく、逆に必要な情報をきちんと伝えているとする訳出率あるいは重要語訳出率に対応するものであるととらえた方がよいのではないかと考えられた。

「長い文章は途中で切ったり、二つ以上の文にまとめて表している」とする項目は、文レベルの変換作業のうち、分割や統合の出現頻度と対応していると考えられた。そのため、これらの対応関係を図 6-45 に示したが、これらの関係は明らかではなかった。しかし、「文をまとめて表す」ことを示す指標としては、句レベルの圧縮や句全体を言い換え要約して訳出するといった作業も含まれると考え、文レベルの変換作業のうち脱落を除くすべての作業の出現頻度と期待充足度の得点を比較したところ、図 6-46 に示すとおり、通訳事例 E を除いてほぼ対応した結果が示された。ただ、通訳事例 E の訳出は文レベルの変換が頻繁に使用されており、それが 1 つの特徴となっていたことから、その結果が期待充足度に反映されていないことは不自然であるともとらえられ、本研究の結果のみでは一概に結論付けることができないものと考えられた。

また、「難しい言い回しや用語を噛み砕いて伝えている」や「原文の曖昧な表現は、明確な言葉に言い換えている」は、語レベルの変換作業のうち言い換えと対応していると考えられたため、言い換え全体の出現頻度と期待充足度の得点を比較したところ、図 6-47 に示すように通訳事例 E を除いて期待充足度の高い通訳事例ほど言い換えを多く用いる傾向はあったが、その傾向は明らかとはいえなかった。そのため、言い換えのうち特定の作業が期待充足度の得点に反映されているのではないかと考え、「説明」「類似代用」「指示語の内容」「変容適合」のそれぞれの出現頻度と期待充足度の関係を図 6 - 48 に示したところ、こ

れも明らかではなかった。そこで、言いかえを行った結果、原文の指し示す意味がより明確になったと考えられる語句の数と期待充足度の得点の関係を分析した。この結果、図 6-49 のとおり両者の値に対応関係が見られ、明確な言い換えが多く出現している通訳事例ほど、「用語を噛み砕いて伝えている」「曖昧な表現を明確な言葉に言い換えている」という印象を与えていることが明らかになった。

次に「情報量・忠実さ因子」に属する項目のうち、「手を止めずにできるだけたくさん情報を伝えている」「話されている情報を 100%漏らさずに伝えている」はいずれも情報の量に関する項目である。そのため、各通訳事例の訳出率と、これらの項目に対する期待充足度の関係を比較したところ、図 6-50 に示すように通訳事例 C と D の関係が若干違っているものの、ほぼ対応する形にあった。

また、情報の正確さのうち重要語の脱落を示す「必要な語句を省略していない」は、重要語訳出率と関係が深いと考えられ、対応関係を調べたところ、図 6-51 に示すよう重要語訳出率の高い通訳事例ほど、先の項目で「あてはまる」との回答を得ていることがわかった。

さらに、原文に対する忠実さを示す「原文の言い回しをそのまま忠実に伝えている」は、原文で用いられている語をそのまま訳出する原語借用の出現頻度が関係していると考えられたため、図 6-52 に同一グラフ上に出現回数およびこれに対する期待充足度得点を書き込んだところ、グラフ上では対応関係が見られなかった。そこで、原語借用のうち特定の作業との結びつきを明らかにするため、「代用」「原語表示」「手話なし」の 3 種類の作業の出現回数と期待充足度との関連を図 6-53 に示したところ、原文で用いられている語で日本語として伝えた方がよいと考えられる語に対し、口形や視線などの強調表示を付加して指文字などで表現する「原語表示」との関連が見られ、原語表示を多く用いている通訳事例ほど、「言い回しを忠実に伝えている」との評価を得ていることが明らかになった。

このほか「ひとつひとつ日本語にそった口形を表している」「情報に間違いやずれを生じていない」については、それぞれ原文に対する忠実さや正確さを示す項目であったが、本研究の範囲ではこれに対応する客観的評価指標が得られなかったため、実際の通訳作業との対応を見ることはできなかった。

以上の内容を総合的に把握するために、表 6-9 には期待充足度尺度の各下位項目と対応関係の見られた客観的指標を一覧にまとめた。本研究の範囲では一致する指標が見出せなかった項目もあるが、これについては今後より詳細な検討が必要であろう。

2. 通訳事例ごとの検討

先にあげた分析で得られた期待充足度尺度の各階項目と客観的指標との対応関係を元に、各通訳事例ごとに結果を表 6 - 10 にまとめた。これを元に各通訳事例の訳出を再評価してみたところ、まず通訳事例 C では訳出率の高さや手話のバリエーションの豊かさ、付加や明確な言い換え、文レベルの変換作業の使用といったいずれの指標においても高い値を示しており、このために期待充足度のどの因子においても高い評価を得ることになっていると考えられた。

これに対して通訳事例 D は、客観的指標の多くにおいて C に次いで高く、特に訳出率の高さが「情報量・忠実さ因子」の評価の中にも反映されていると考えられた。しかし、全体的に逐語的な表現が多く、文や句レベルで処理を行う部分が少ないことや、原語借用のうち原語を強調表示する部分が少なく、このことが「変換技術因子」や「情報量・忠実さ因子」の一部の項目で若干低い評価につながったのだろう。また、「手話技術因子」の手話に対する評価が、C のレベルにはいたっていないが、これは手話表現のバリエーション、とりわけ辞書形以外の表現のバリエーションがあまり多くないことが関係しているのではないだろうか。つまり、訳出率も高く、情報量も多い堅実な通訳者に対し、今一步の手話表現の工夫が求められているという印象である。

通訳事例 A の場合、通訳技術の各分野によって技術の程度に差がなく、どの指標においても全体的に比較的安定した結果が得られていた。聴覚障害者の評価にも因子間の差が見られず、やや高めの評価で一定していた。

通訳事例 B では、全体的な訳出率の低さや付加や明確な言い換え、文レベルの変換作業などの客観的指標ではあまり高い評価ではなく、このことが「変換技術因子」に属するいくつかの項目で若干低い評価と関係付けられている。しかし、手話表現のバリエーションが中程度であり、手話全体の区切れも明確であることから、全体に比較して「手話技術因子」の評価が若干高くなっており、総合評価も中程度となっていた。聴覚障害者の評価が手話表現に比重がかかっていることを示しているといえる。

手話経験の比較的短い通訳事例 E、F は、いずれも手話表現のバリエーションが少なく、文や句の区切りを示す間があいまいであったため、このことが「手話技術因子」の手話に対する評価の低さにつながっていると考えられた。特に通訳者 E については訳出率が 80% 程度、重要語訳出率も 85% 程度と比較的高く、このことは「情報量・忠実さ因子」におい

で十分評価されていたにもかかわらず、手話の技術不足から総合的な評価が低くなっているとみることができる。

3. 聴覚障害者が求める手話通訳と客観的指標

本研究では、実際の手話通訳事例に対する聴覚障害者の主観的な評価と、客観的指標によって記述された通訳の作業内容の対応関係を明らかにすることで、聴覚障害者の手話通訳に対する評価の詳細を明らかにしてきた。ここでは得られた結果に基づいて、本研究の対象となった聴覚障害者の期待が客観的指標としてはどのように表現されるかを検討することとする。

第6章第2節で本研究の対象者は、「全体的印象因子」、「手話技術因子」、つまり全体的印象や手話表現に対する期待の度合いが全体的に高く、「変換技術因子」の文章のアレンジに関する項目に対しては相対的に期待が低い傾向が見られた。また、「情報量・忠実さ因子」に属する項目では、「ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい」では全項目のうちもっとも低い値を示したのに対して、「必要な語句を省略しないでほしい」「情報に間違いやずれを生じさせないでほしい」などの情報の正確さに関する項目では高い期待が示されていた。このことを、通訳者の行っている作業内容と関係付けてみると表6-11に示すとおり、いくつかの項目で客観的指標に結びつけることができる。すなわち聴覚障害者の期待を客観的指標の示される範囲で表現すれば、これ以外については、手話表現のバリエーションが豊かで、非流暢な動きが少なく、リズムやイントネーションがはっきり現れており、起点談話のうち特に重要語訳出率の高い通訳を求めていることがわかる。また、原文のあいまいな部分を明確に言い換える作業や説明などの付加といった、語あるいは文レベルの変換作業については、あまり多用しすぎず必要に応じて用いることが求められているといえる。

一方本研究の結果から、手話通訳に対する期待の内容は聴覚障害者の年齢や教育歴によって異なることが示された。

まず、第6章第2節より、若年層の聴覚障害者の方が中高年層の対象者に比較して文の操作が少ない通訳を好んでいる傾向があり、第5章でも一般大学に在籍経験のある聴覚障害者が同様の期待を示していた。しかし「手話技術因子」の手話に対する期待はいずれも他の聴覚障害者と同様の結果であったことから、表6-12に示すように手話のバリエーションやリズムは保ったまま、言い換えや付加などの作業は若干控え目にすることが求められ

ているものと推測された。さらに、一般大学の経験のある聴覚障害者の場合、特に原文に対する意味的な忠実さを求めていることから、原語借用中の原語表示によって、原文で用いられている用語やポイントとなる言葉を日本語として伝えることで忠実さを高める作業が求められているものと考えられた。

また、第 5 章では聾学校出身の聴覚障害者や日常的なコミュニケーション手段として日本手話を用いるとする聴覚障害者が、特に「手話技術因子」に対して高い期待を示していた。このことは通常の通訳よりもより一致による空間の代名詞化や類辞、相による変化といったバリエーションの豊かな手話で、かつ手話独自のリズムやイントネーションのある表現を望むものであり、本研究では分析できなかったが、おそらく副詞的非手指動作やロールシフトといった表現もこれに含まれるものと考えられる。これらの表現はいずれも日本手話に特有の文法的要素であることから、通訳の際にも日本手話、あるいは中間的手話であっても日本手話の文法的要素を多く借用した表現が求められているといえよう。

手話通訳をめぐる議論の中には、手話通訳の目的は眼前の聴覚障害者に情報を提供することであって、その際に使用する手話は日本手話である必要がない、口話教育の影響で若い世代の聴覚障害者が日本語対応手話を用いているため、今後は日本手話の必要性が薄れるなどといった考え方がある。しかし、本研究の結果は対象者のうち一部ではあるが、特に聾学校出身の聴覚障害者を中心に日本手話に対して強いニーズがある事実を指摘しており、この傾向は年齢に関わらず認められた。また、若年層の聴覚障害者や日本語の使用に長けていると考えられる一般大学経験者についても、程度の差はあるものの、日本手話文法を借用した表現を求めているという傾向は変わらなかった。このことから、情報保障手段として手話通訳を選択する聴覚障害者は、基本的に日本手話文法の使用を求めていると言え、その上で通訳対象となる聴覚障害者の期待の程度によって、より日本手話として自然な形で言い換える形態から、空間モダリティを活用し、統語構造を示すマーカーとして非手指動作を用いる日本手話の文法に則りながらも、原語の借用頻度を増やし、起点談話の内容をより忠実に伝える形態まで、幅広い対応が求められていると言えるであろう。

4. 期待充足度を高める通訳作業内容

本節では期待充足度尺度の下位項目得点と客観的指標を用いて記述された手話通訳作業との量的な対応関係から、通訳作業の各要素が聴覚障害者の期待充足度に与えている影響を探った。この結果、各通訳事例に対する期待充足度得点が、それぞれの通訳事例が用い

ている通訳作業の何によってもたらされているのか、また、聴覚障害者が一体どのような通訳を求めているのかをある程度対応付けて明らかにすることができた。

しかし、手話通訳を構成する作業のひとつひとつは、いずれも相互に複雑に関係しあっていることから、各通訳作業が単独で聴覚障害者の期待充足度に直接的に影響を与えているということとはできないだろう。また、6名の通訳事例に対して期待充足度を測定した結果、どの通訳事例に対しても総合評価と下位項目得点の間に大きな差がなく、因子間で多少変動することはあっても下位項目得点がほぼ総合評価と同程度の値を示した。そのため、期待充足度の下位項目がどの客観的指標と対応しているのかについては、本研究で示した対応関係は、まだ仮説的な範囲に留まるものだろう。

ただこのことは逆に、総合的評価の高かった通訳事例が多く用いている作業の内容は、いずれも聴覚障害者の評価を高める形で機能している可能性があることを示唆している。表 6-13 にはその可能性を考慮して、期待充足度を高める方向に機能していると考えられる通訳作業の内容と、逆に総合評価の低かった通訳事例で多く用いられていた通訳作業で、期待充足度を低くめる方向に機能していると考えられるものを列挙した。これらの関係を検証するためには、複雑に絡み合っていると考えられる手話通訳作業のうち一部を変化させ、これに対する聴覚障害者の期待充足度を測定するなどの実験的研究が求められると考えられるが、そうして得られた結果は実際の手話通訳者養成場面においてより具体的で実際の指導を展開していくための貴重な資料となると考えられ、今後さらに分析を進めていく必要があるといえる。

表 6 - 1 回転後のパターン行列

安心してみられる通訳をしてほしい	0.751	-0.004	0.112	-0.083
圧迫感を与えない通訳をしてほしい	0.674	-0.159	0.100	0.051
見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい	0.639	0.080	0.158	-0.095
その場の雰囲気を読み漏らさず伝えてほしい	0.614	0.214	-0.130	0.003
その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	0.602	0.238	-0.282	0.007
謙虚な姿勢をもって通訳をしてほしい	0.589	0.107	-0.096	-0.137
話し手がどのような雰囲気で行っているのかを伝えてほしい	0.588	0.178	-0.006	-0.027
見ていて疲れない表現をしてほしい	0.559	-0.028	0.267	0.134
親しみやすさが感じられる通訳をしてほしい	0.544	0.141	0.179	-0.118
手話表現の無駄な癖をなくしてほしい	0.529	-0.170	0.086	0.147
ひとつひとつの表現をはっきりと表してほしい	0.527	0.117	-0.065	0.252
一生懸命さが伝わってくる通訳をしてほしい	0.508	0.115	0.067	-0.043
オーバーアクションにならないでほしい	0.500	-0.209	0.010	0.155
訂正、手話の間違いを減らしてほしい	0.486	0.093	-0.033	0.296
文の途中で不自然に止まらないでほしい	0.466	0.092	-0.026	0.277
文ごとの切れ目をはっきりと表してほしい	0.451	0.055	0.013	0.092
必要以上にたくさんの手話をあらかずしないでほしい	0.428	-0.348	0.292	0.073
通訳者自身が自分の解釈を付け加えたりしないでほしい	0.408	-0.023	-0.253	0.283
まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい	-0.048	0.899	-0.120	-0.077
同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい	-0.060	0.806	-0.078	0.020
手話に強弱やリズムをつけてほしい	0.188	0.703	-0.063	-0.026
物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい	-0.149	0.701	0.261	0.033
表情を使って程度や感情を表してほしい	0.217	0.640	0.029	-0.038
手話にあわせて日本語対応でない口形を使用してほしい	-0.296	0.633	0.089	0.164
空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい	0.234	0.572	0.087	-0.005
重要な部分と補足的な部分の表現に強弱をつけてほしい	-0.008	0.551	0.087	0.071
たくさんの手話語彙を身に付けてほしい	0.185	0.521	-0.048	-0.014
通じているかどうかろう者の表情などを見て判断してほしい	0.014	0.469	0.217	0.033
日本語にとらわれずに手話として自然なスピードで表してほしい	0.120	0.465	0.053	-0.035
話の中の何人かの登場人物を演じ分けてほしい	0.132	0.420	0.076	0.036
文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	-0.239	0.146	0.809	0.078
講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	-0.070	-0.030	0.736	0.188
細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	0.120	-0.199	0.724	-0.018
難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	-0.254	0.028	0.702	0.251
話の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	0.220	-0.044	0.623	-0.180
長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい	0.111	-0.027	0.610	-0.114
原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	0.093	-0.016	0.592	-0.139
手話として理解しやすいように語順を入れ替えてほしい	0.013	0.236	0.526	0.082
忠実に訳したり、まとめながら訳すなど臨機応変に使い分けてほしい	0.277	0.120	0.461	-0.177
話の要点を強調して伝えてほしい	0.273	0.152	0.454	-0.033
日本語にこだわらずにその場に合った手話表現を使ってほしい	0.033	0.376	0.420	-0.246
手を止めずにできるだけたくさん情報を伝えてほしい	-0.070	-0.063	0.249	0.765
話されている情報を100%も漏らさずに伝えてほしい	-0.101	0.099	0.165	0.749
文章の途中で途切れないでほしい	0.007	0.058	0.061	0.685
通訳者が情報を選ぶのではなく、原文に忠実に訳してほしい	0.231	-0.035	-0.177	0.560
原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい	0.151	-0.048	-0.172	0.547
ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい	0.014	-0.197	-0.047	0.528
話の要点以外に細かいところまで内容を伝えてほしい	-0.138	0.398	-0.200	0.495
必要な語句を省略しないでほしい	0.170	0.081	-0.021	0.478
意味をよりはっきり伝えるために接続詞や語句を付け加えてほしい	0.023	-0.060	0.272	0.463
講演者が日本語として何と言ったのかをきちんと伝えてほしい	0.227	-0.018	-0.203	0.420
必要な部分を落とさずに伝えてほしい	0.267	0.007	0.066	0.365
情報に間違いやずれを生じさせないでほしい	0.267	0.166	-0.077	0.333
専門用語などは日本語として伝えてほしい	0.279	-0.096	0.364	0.118
場面や話題が変わったことをはっきり伝えてほしい	0.004	0.173	-0.088	-0.044
因子負荷量 2 乗和	14.05	5.12	2.64	2.00
寄与率 (%)	25.56	9.31	4.79	3.62
累積寄与率 (%)	25.56	34.87	39.67	43.29

表 6 - 2 修正後のパターン行列

安心してみていられる通訳をしてほしい	0.753	-0.008	0.113	-0.082
圧迫感を与えない通訳をしてほしい	0.672	-0.160	0.104	0.052
見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい	0.642	0.077	0.158	-0.094
その場の雰囲気を漏らさず伝えてほしい	0.621	0.207	-0.131	0.002
その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	0.612	0.216	-0.276	0.009
謙虚な姿勢をもって通訳をしてほしい	0.594	0.098	-0.096	-0.137
話し手がどういう雰囲気で行っているのかを伝えてほしい	0.593	0.172	-0.006	-0.027
見ていて疲れない表現をしてほしい	0.558	-0.023	0.267	0.134
親しみやすさが感じられる通訳をしてほしい	0.548	0.139	0.177	-0.118
ひとつひとつの表現をはっきりと表してほしい	0.533	0.104	-0.057	0.254
手話表現の無駄な癖をなくしてほしい	0.527	-0.170	0.090	0.149
一生懸命さが伝わってくる通訳をしてほしい	0.512	0.112	0.065	-0.043
オーバーアクションにならないでほしい	0.498	-0.211	0.015	0.157
訂正、手話の間違いを減らしてほしい	0.488	0.094	-0.034	0.295
文の途中で不自然に止まらないでほしい	0.467	0.094	-0.027	0.276
文ごとの切れ目をはっきりと表してほしい	0.454	0.051	0.014	0.092
必要以上にたくさんの手話をあらかずしないでほしい	0.421	-0.343	0.297	0.076
通訳者自身が自分の解釈を付け加えたりしないでほしい	0.411	-0.032	-0.247	0.284
必要な部分を落とさずに伝えてほしい	0.367	0.011	0.067	0.334
まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい	-0.032	0.892	-0.132	-0.082
同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい	-0.049	0.809	-0.093	0.014
物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい	-0.142	0.712	0.246	0.028
手話に強弱やリズムをつけてほしい	0.201	0.695	-0.071	-0.029
手話にあわせて日本語対応でない口形を使用してほしい	-0.290	0.642	0.076	0.159
表情を使って程度や感情を表してほしい	0.229	0.631	0.023	-0.039
空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい	0.243	0.573	0.077	-0.008
重要な部分と補足的な部分の表現に強弱をつけてほしい	-0.001	0.556	0.076	0.067
たくさんの手話語彙を身に付けてほしい	0.196	0.512	-0.052	-0.016
通じているかどうかろう者の表情などを見て判断してほしい	0.019	0.474	0.208	0.030
日本語にとらわれずに手話として自然なスピードで表してほしい	0.129	0.460	0.048	-0.036
話の中の何人かの登場人物を演じ分けてほしい	0.138	0.421	0.069	0.033
文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	-0.246	0.172	0.798	0.077
講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	-0.077	-0.010	0.733	0.189
細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	0.111	-0.180	0.721	-0.016
難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	-0.262	0.050	0.697	0.252
語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	0.215	-0.030	0.617	-0.179
長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい	0.106	-0.014	0.606	-0.112
原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	0.089	-0.005	0.589	-0.137
手話として理解しやすいように語順を入れ替えてほしい	0.011	0.254	0.516	0.080
忠実に訳したり、まとめながら訳すなど臨機応変に使い分けてほしい	0.278	0.125	0.457	-0.176
話の要点を強調して伝えてほしい	0.274	0.160	0.450	-0.033
日本語にこだわらずにその場に合った手話表現を使ってほしい	0.038	0.381	0.412	-0.247
専門用語などは日本語として伝えてほしい	0.277	-0.094	0.368	0.121
手を止めずにできるだけたくさん情報を伝えてほしい	-0.077	-0.042	0.246	0.762
話されている情報を100%も漏らさずに伝えてほしい	-0.105	0.114	0.162	0.747
文章の途中で途切れないでほしい	0.004	0.072	0.058	0.682
通訳者が情報を選ぶのではなく、原文に忠実に訳してほしい	0.232	-0.037	-0.172	0.560
原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい	0.151	-0.050	-0.166	0.548
ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい	0.011	-0.194	-0.041	0.528
話の要点以外に細かいところまで内容を伝えてほしい	-0.135	0.404	-0.207	0.490
必要な語句を省略しないでほしい	0.170	0.086	-0.021	0.476
意味をよりはっきり伝えるために接続詞や語句を付け加えてほしい	0.019	-0.048	0.272	0.463
講演者が日本語として何と言ったのかをきちんと伝えてほしい	0.229	-0.024	-0.197	0.420
情報に間違いやずれを生じさせないでほしい	0.267	0.175	-0.083	0.329
因子負荷量 2 乗和	14.05	5.12	2.62	1.99
寄与率 (%)	26.02	9.49	4.86	3.69
累積寄与率 (%)	26.02	35.50	40.36	44.05

表 6-3 期待充足度尺度項目と各項目の因子負荷量

項 目	因子 負荷量
1. 安心してみていられる通訳をしてほしい	0.753
2. その場の雰囲気を読らさず伝えてほしい	0.621
3. その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	0.612
4. 見ていて自然に頭に入ってくる通訳をしてほしい	0.642
5. 訂正や手話の間違いを減らしてほしい	0.488
6. 手話表現の無駄な癖を減らしてほしい	0.527
7. 眉の動きやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい	0.892
8. 同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい	0.892
9. 手話に強弱やリズムをつけてほしい	0.809
10. 表情を使って程度や感情を表してほしい	0.631
11. 物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい	0.712
12. 空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい	0.573
13. 文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	0.798
14. 講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	0.733
15. 細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	0.721
16. 難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	0.697
17. 語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	0.617
18. 長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい	0.606
19. 原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	0.589
20. 手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えてほしい	0.762
21. 話されている情報を 100%漏らさずに伝えてほしい	0.747
22. 原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい	0.548
23. ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい	0.528
24. 必要な語句を省略しないでほしい	0.476
25. 情報に間違いやずれが生じさせないでほしい	0.329

表 6 - 4 回転後のパターン行列

その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	0.719	0.102	-0.183	0.060
見ている自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい	0.656	0.039	0.242	-0.045
その場の雰囲気漏らさず伝えてほしい	0.653	0.091	-0.004	0.137
安心してみていただける通訳をしてほしい	0.584	0.068	0.210	0.057
訂正、手話の間違いを減らしてほしい	0.435	0.123	-0.041	0.322
手話表現の無駄な癖をなくしてほしい	0.400	0.018	0.050	0.221
同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい	-0.059	0.882	-0.100	-0.032
まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい	0.029	0.824	-0.110	-0.109
手話に強弱やリズムをつけてほしい	0.183	0.728	-0.040	-0.078
表情を使って程度や感情を表してほしい	0.193	0.671	0.044	-0.051
物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい	-0.075	0.653	0.225	-0.008
空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい	0.202	0.598	0.089	-0.001
細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	0.106	-0.141	0.768	-0.012
文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	-0.208	0.161	0.760	0.047
語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	0.195	-0.018	0.697	-0.168
原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	0.237	-0.108	0.673	-0.166
講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	-0.027	-0.032	0.662	0.212
難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	-0.260	0.105	0.649	0.229
長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい	0.132	-0.041	0.611	-0.134
手を止めずにできるだけたくさん情報を伝えてほしい	-0.001	-0.095	0.162	0.768
話されている情報を100%も漏らさずに伝えてほしい	-0.091	0.158	0.044	0.738
原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい	0.238	-0.116	-0.153	0.529
ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい	0.117	-0.260	-0.084	0.506
必要な語句を省略しないでほしい	0.286	0.023	-0.048	0.432
情報に間違いやずれを生じさせないでほしい	0.157	0.291	-0.127	0.303
因子負荷量 2 乗和	6.94	3.13	1.71	0.92
寄与率 (%)	27.75	12.52	6.83	3.66
累積寄与率 (%)	27.75	40.27	47.10	50.76

表 6 - 5 因子ごとの相関マトリックス

	全体的印象	手話技術	変換技術	情報量・忠実さ
全体的印象	1.00	0.58**	0.21**	0.47**
手話技術		1.00	0.35**	0.31**
変換技術			1.00	0.08
情報量・忠実さ				1.00

**p<.01

表 6 - 6 期待充足度尺度の内容

	あてはまらない	あてはまらない どちらかと言えば	どちらともいえない	どちらかと言えば あてはまる	とてもあてはまる
その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えている					
見ている自然に頭に入ってくるような通訳をしている					
その場の雰囲気漏らさず伝えている					
安心して見ていられる通訳をしている					
訂正、手話の間違いが少ない					
手話表現の無駄な癖が少ない					
同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化がある					
まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用している					
手話に強弱やリズムがある					
表情を使って程度や感情を表している					
物の形や特徴をとらえて映像的に表現している					
空間を活用して主語や目的語を明確に表示している					
細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示している					
文章をアレンジしてわかりやすく伝えている					
語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えている					
原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えている					
講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えている					
難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えている					
長い文章は途中で切ったり、2 つ以上の文をまとめて表している					
手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている					
話されている情報を 100% も漏らさずに伝えている					
原文の言い回しをそのまま忠実に伝えている					
ひとつひとつ日本語にそった口形を表している					
必要な語句を省略していない					
情報に間違いやずれが生じていない					

図 6 - 1 通訳事例の提示方法

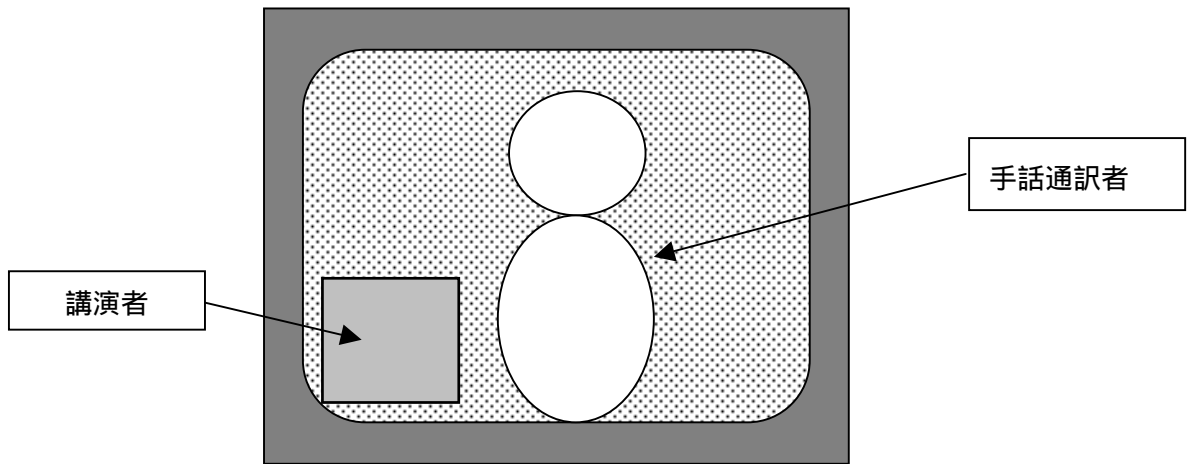


表 6 - 7 評価全体の流れ

研究の趣旨説明

評価方法の説明

(通訳事例、題材、評価方法、評価項目、プライバシーの保護について)

実験同意書記入

アンケート記入 (聾学校経験、手話通訳利用頻度など)

グループ分け

移動 (A グループは評価室へ、残りのグループは控え室で待機)

A グループ 評価実施

{	事例の提示 (一人目)
	評価用紙に記入
{	事例の提示 (二人目)
	評価用紙に記入
	: (以下繰り返し)
	手話通訳に対する考え方を記入

B グループ 評価実施

: (以下繰り返し)

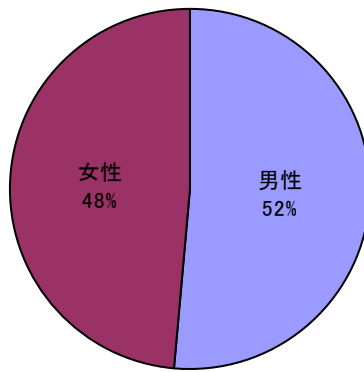


図 6 - 2 回答者の性別

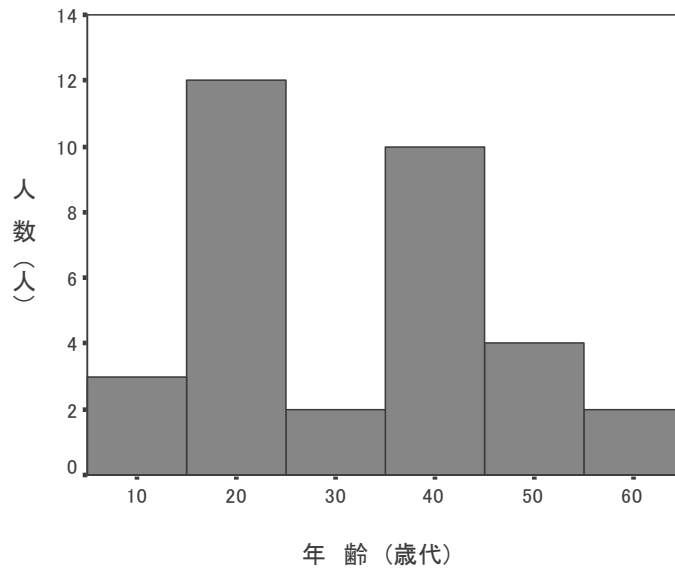


図 6 - 3 回答者の年齢

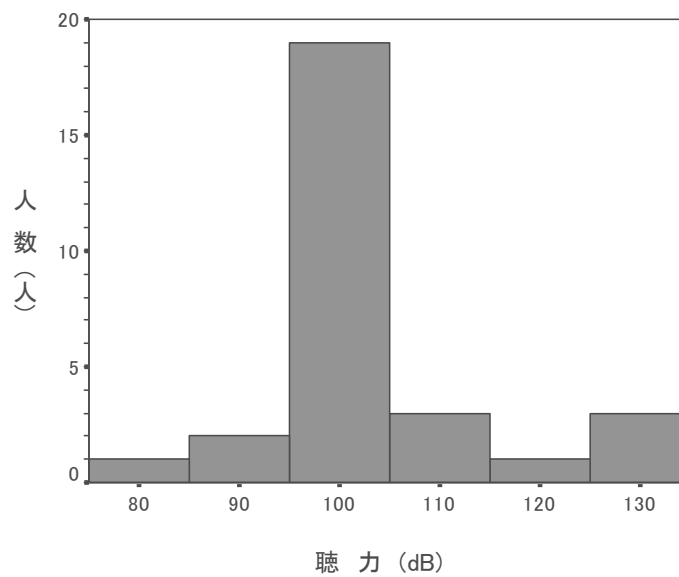


図 6 - 4 回答者の聴力

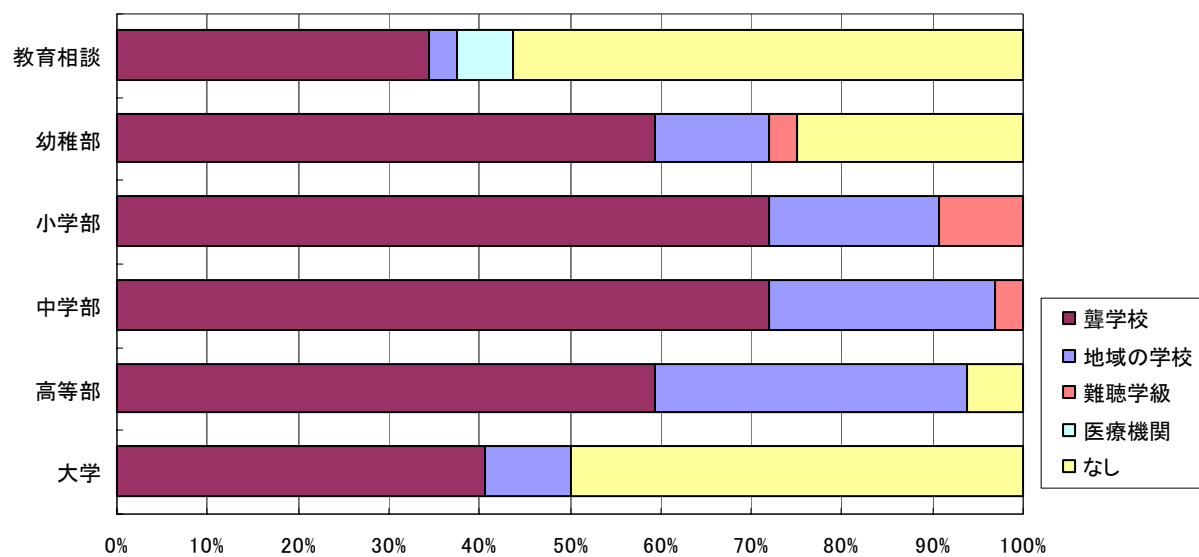


図 6 - 5 回答者の教育歴

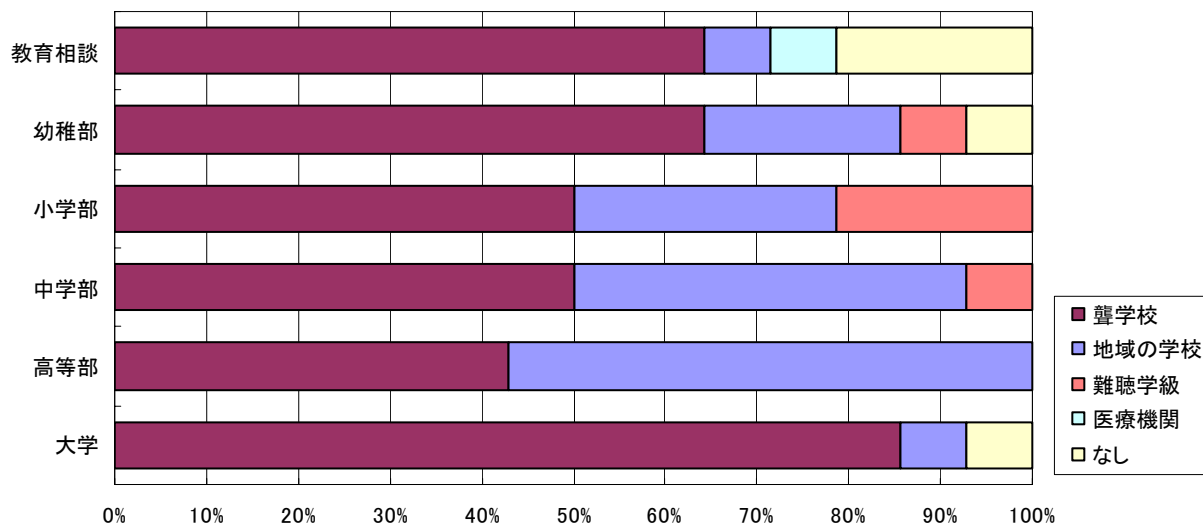


図 6 - 6 10~20 代の回答者の教育歴

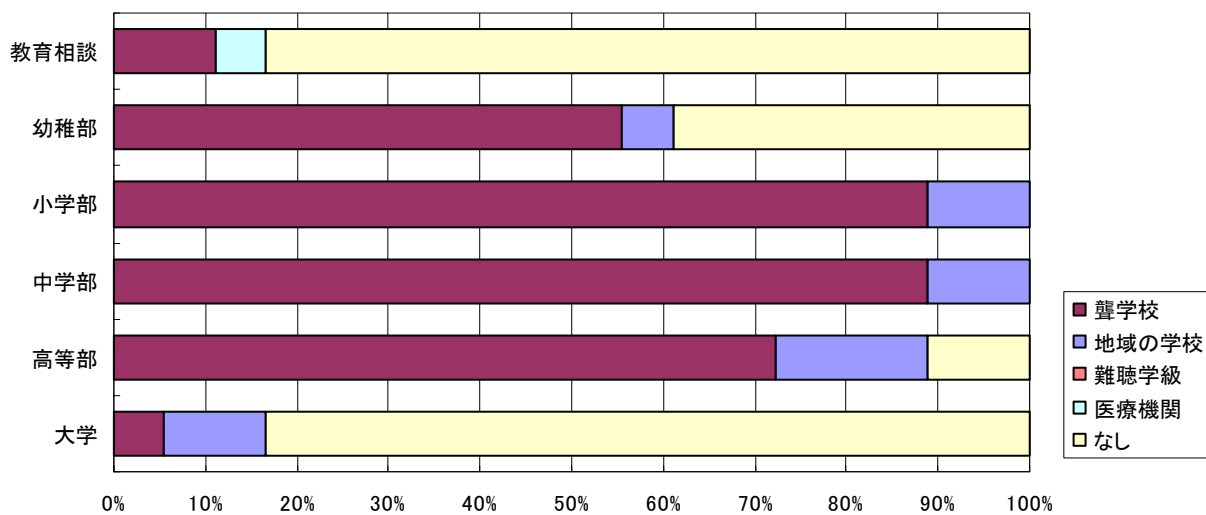


図 6 - 7 30~60 代の回答者の教育歴

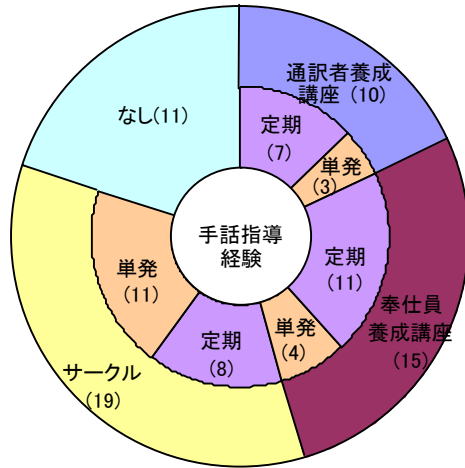


図 6 - 8 回答者の手話指導経験

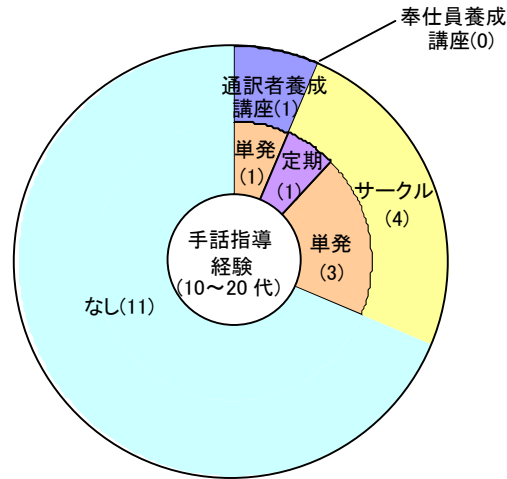


図 6 - 9 10~20代の回答者の手話指導経験

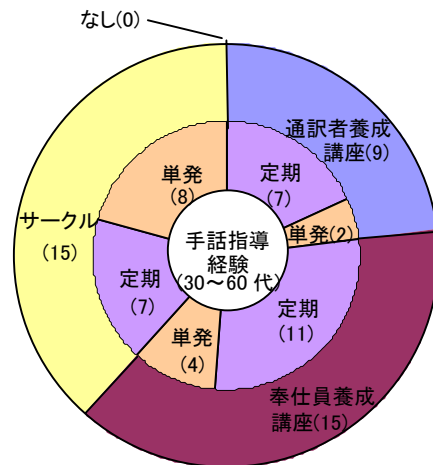


図 6 - 10 30~60代の回答者の手話指導経験

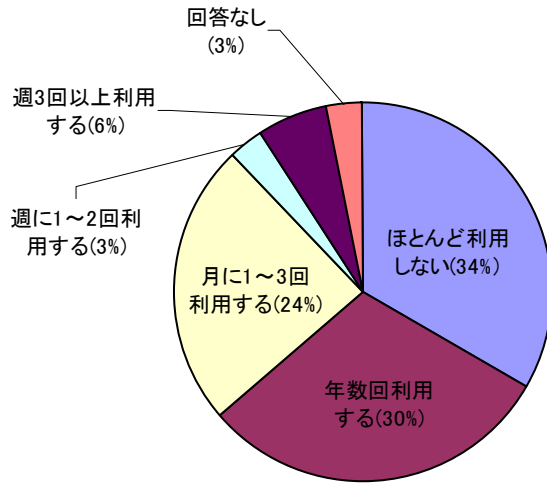


図 6 - 11 回答者の手話通訳利用頻度

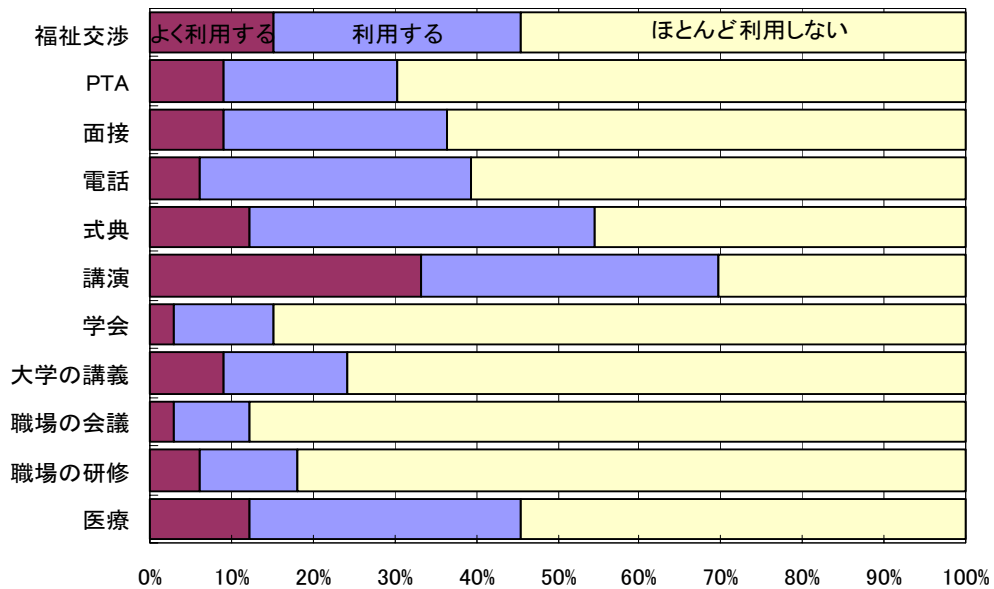


図 6 - 12 回答者の手話通訳利用場面

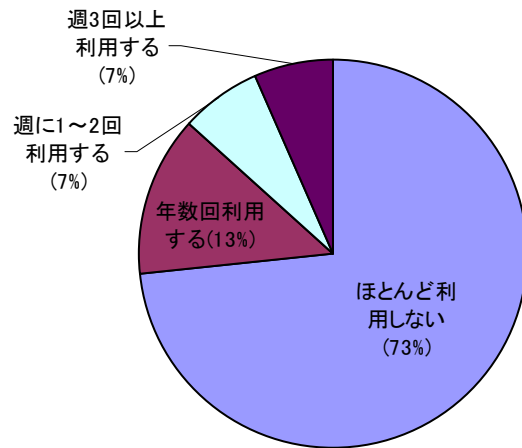


図 6 - 13 10~20 代の回答者の手話通訳利用頻度

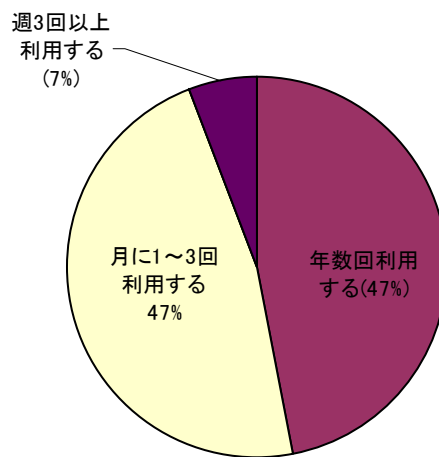


図 6 - 14 30~60 代の回答者の手話通訳利用頻度

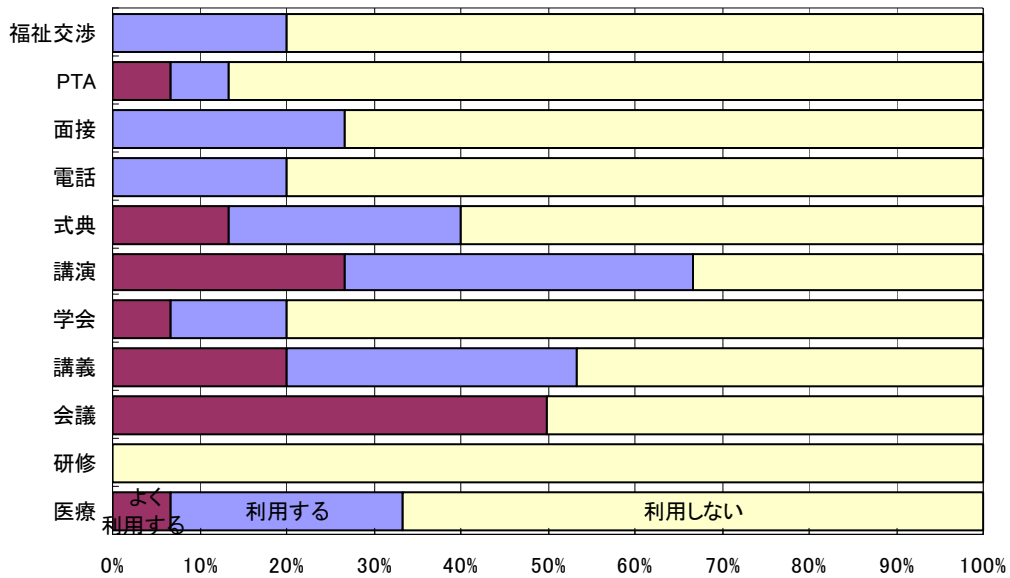


図 6 - 15 10~20 代の回答者の手話通訳利用場面

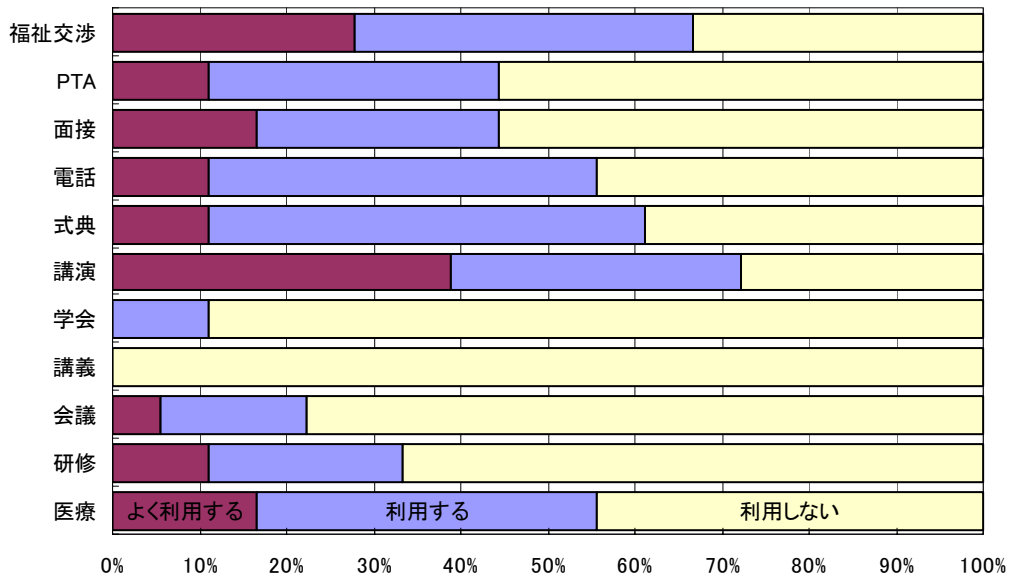


図 6 - 17 30~60 代の回答者の手話通訳利用場面

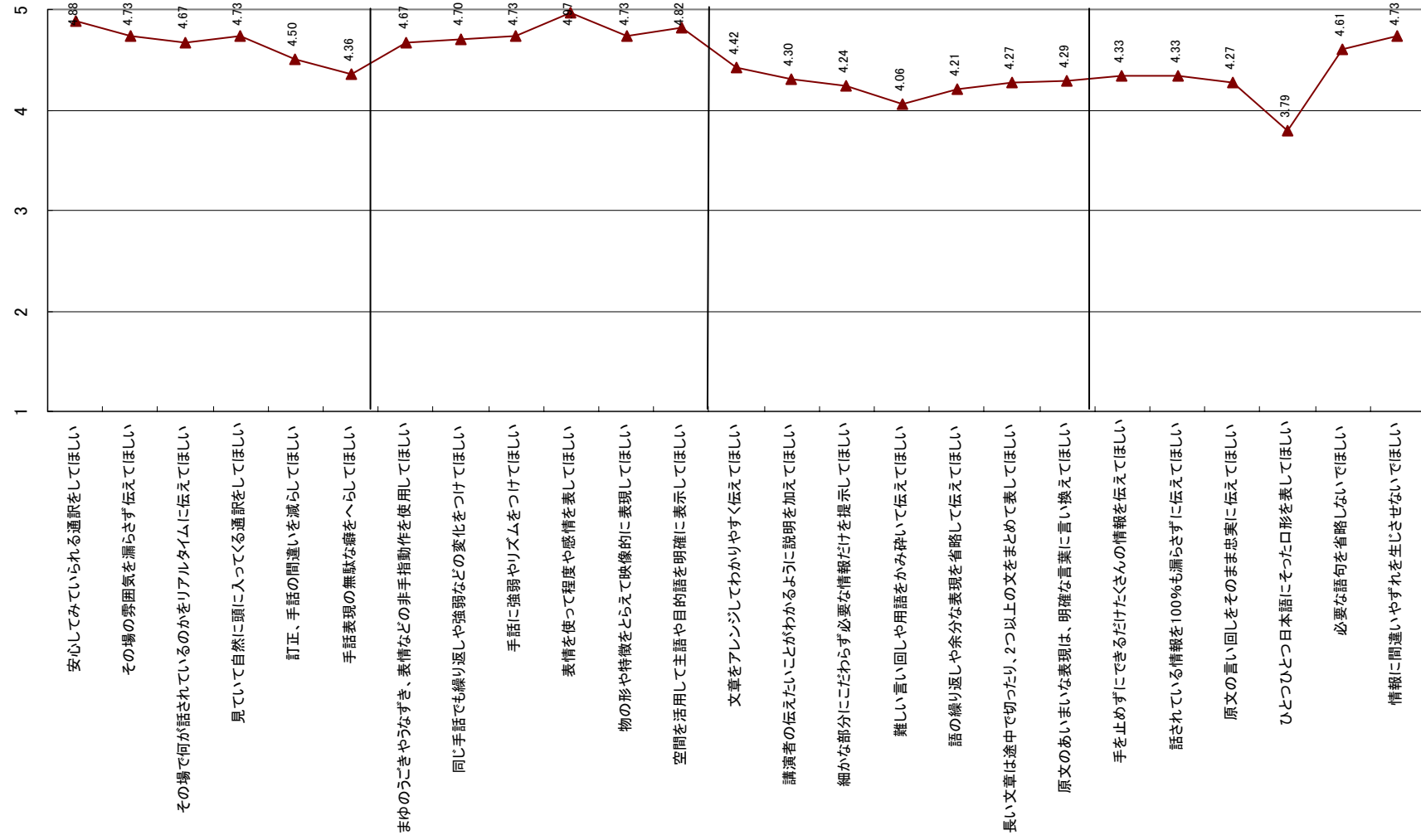


図 6 - 18 回答者の手話通訳に対する期待内容

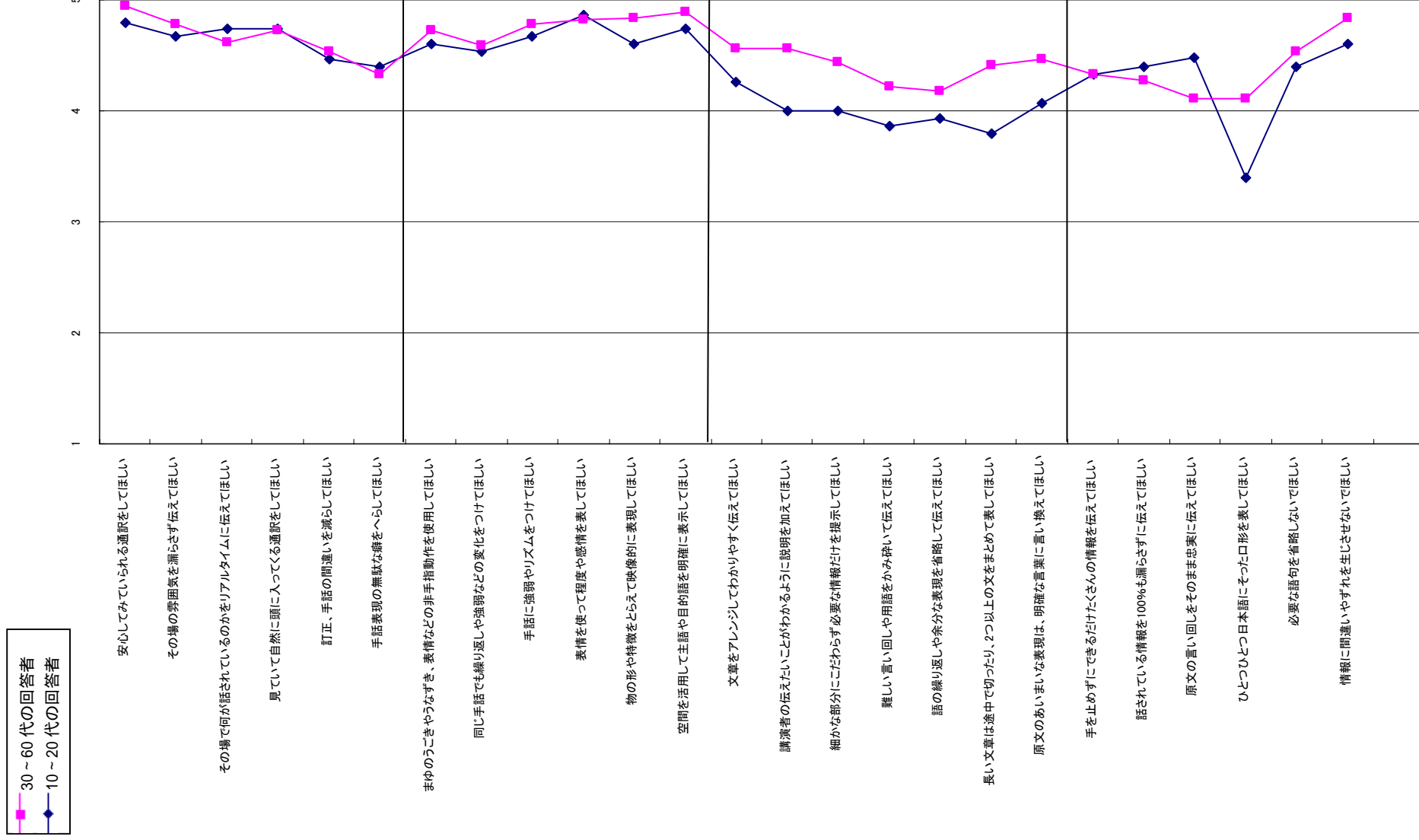


図 6 - 19 年齢別に見た手期待内容の違い

表 6 - 8 通訳事例ごとの総合評価と標準偏差

	通訳事例 A	通訳事例 B	通訳事例 C	通訳事例 D	通訳事例 E	通訳事例 F
総合評価平均	3.82	2.61	4.94	4.24	2.21	1.81
標準偏差	0.81	0.70	0.24	0.71	0.93	0.74

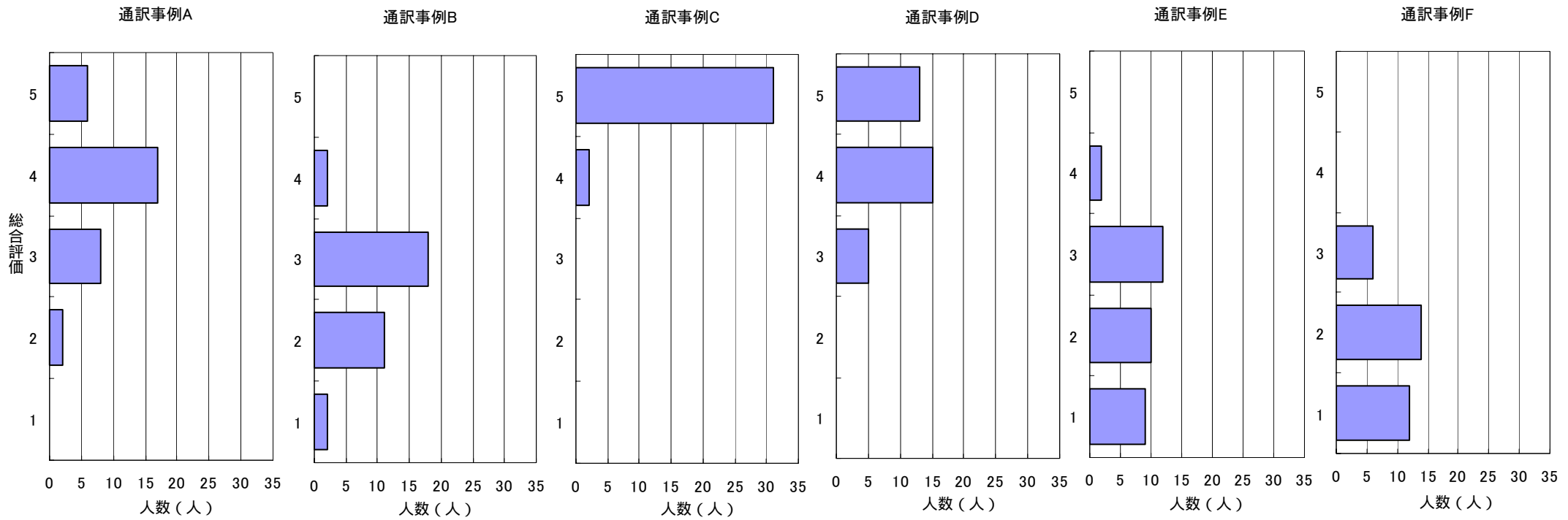


図 6 - 20 通訳事例ごとの総合評価

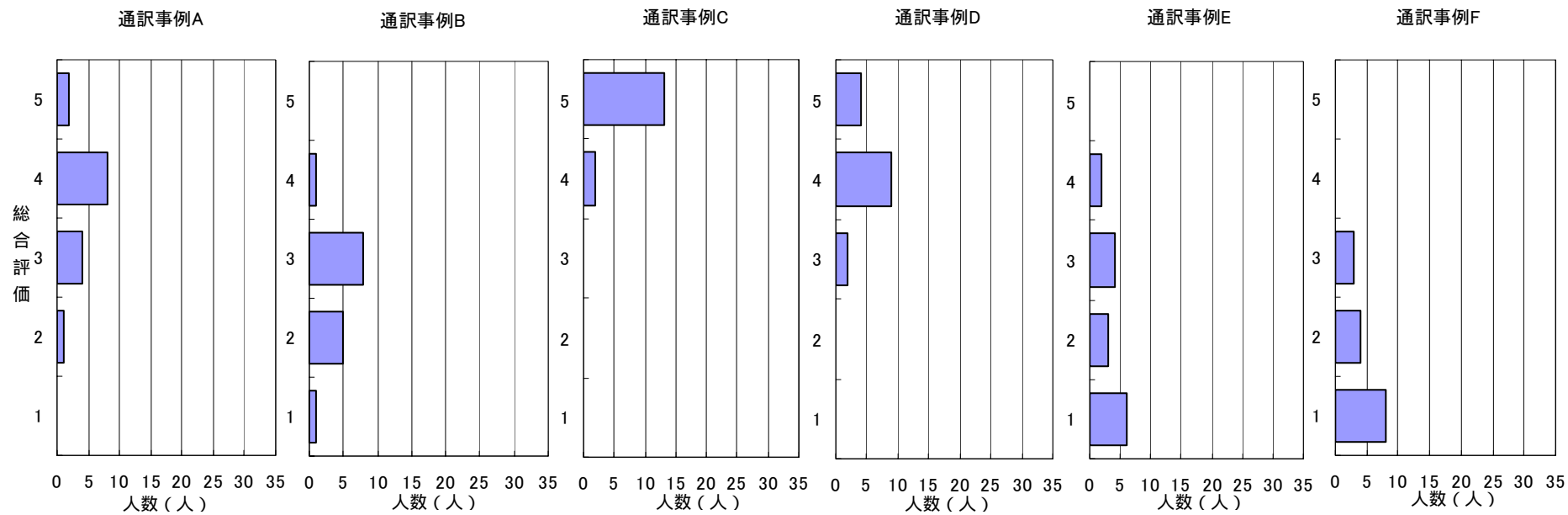


図 6-21 10~20 代の回答者の各通訳事例に対する総合評価

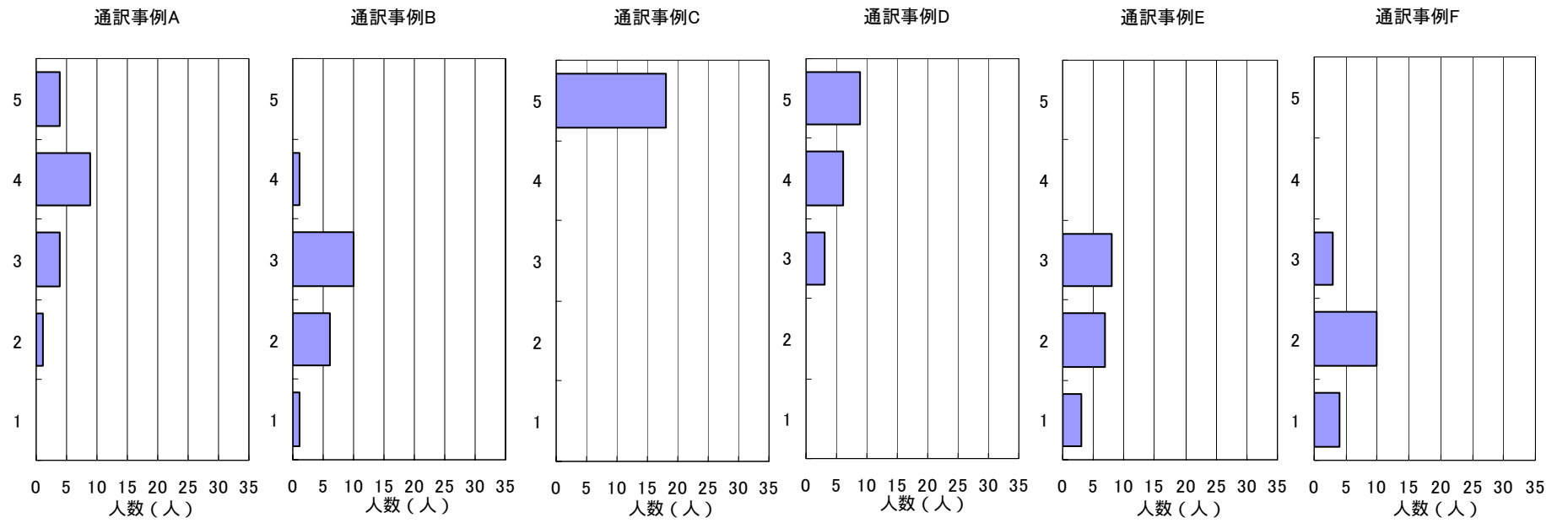


図 6-22 30~60 代の回答者の各通訳事例に対する総合評価

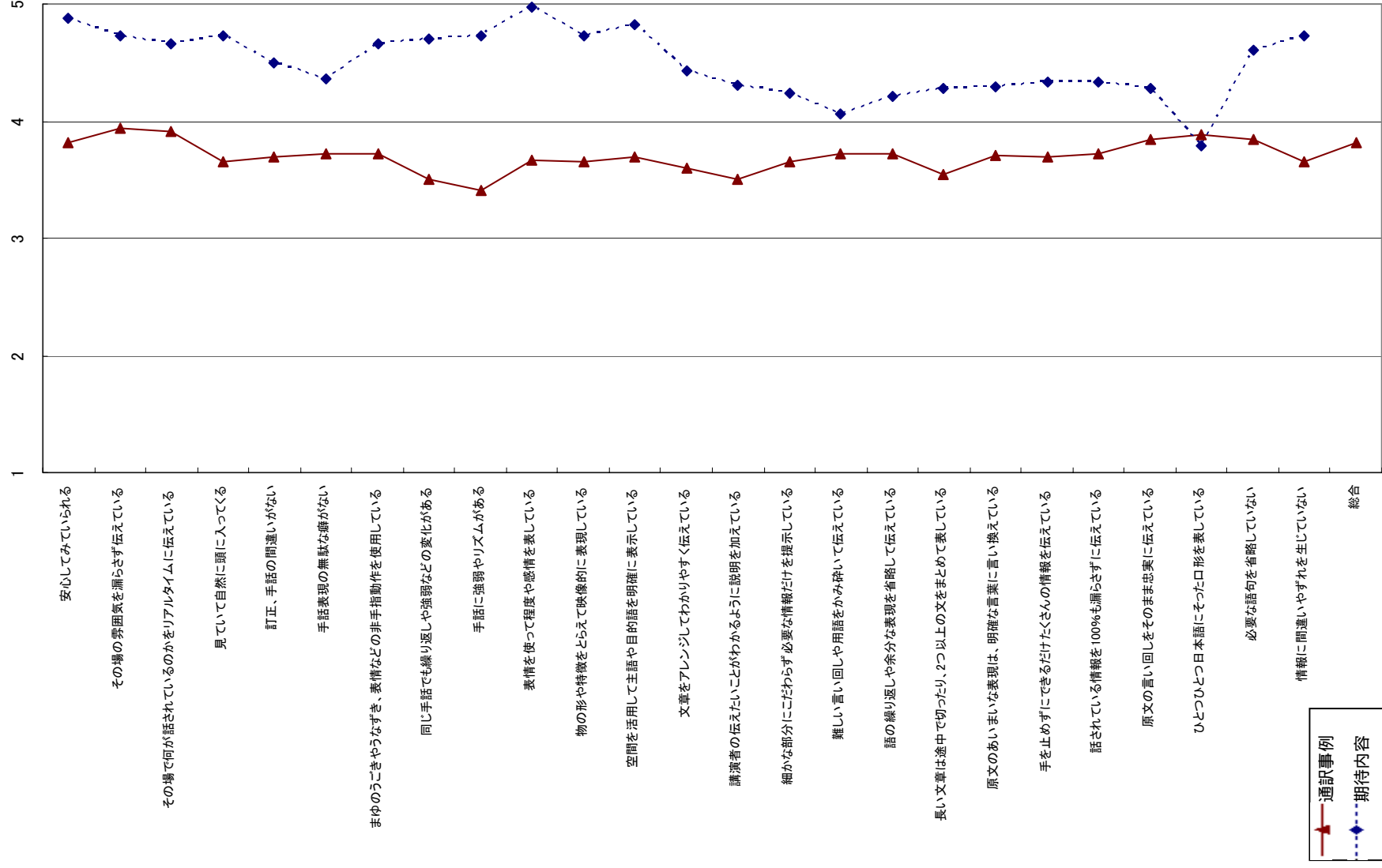


図 6 - 23 通訳事例 A の下位項目得点

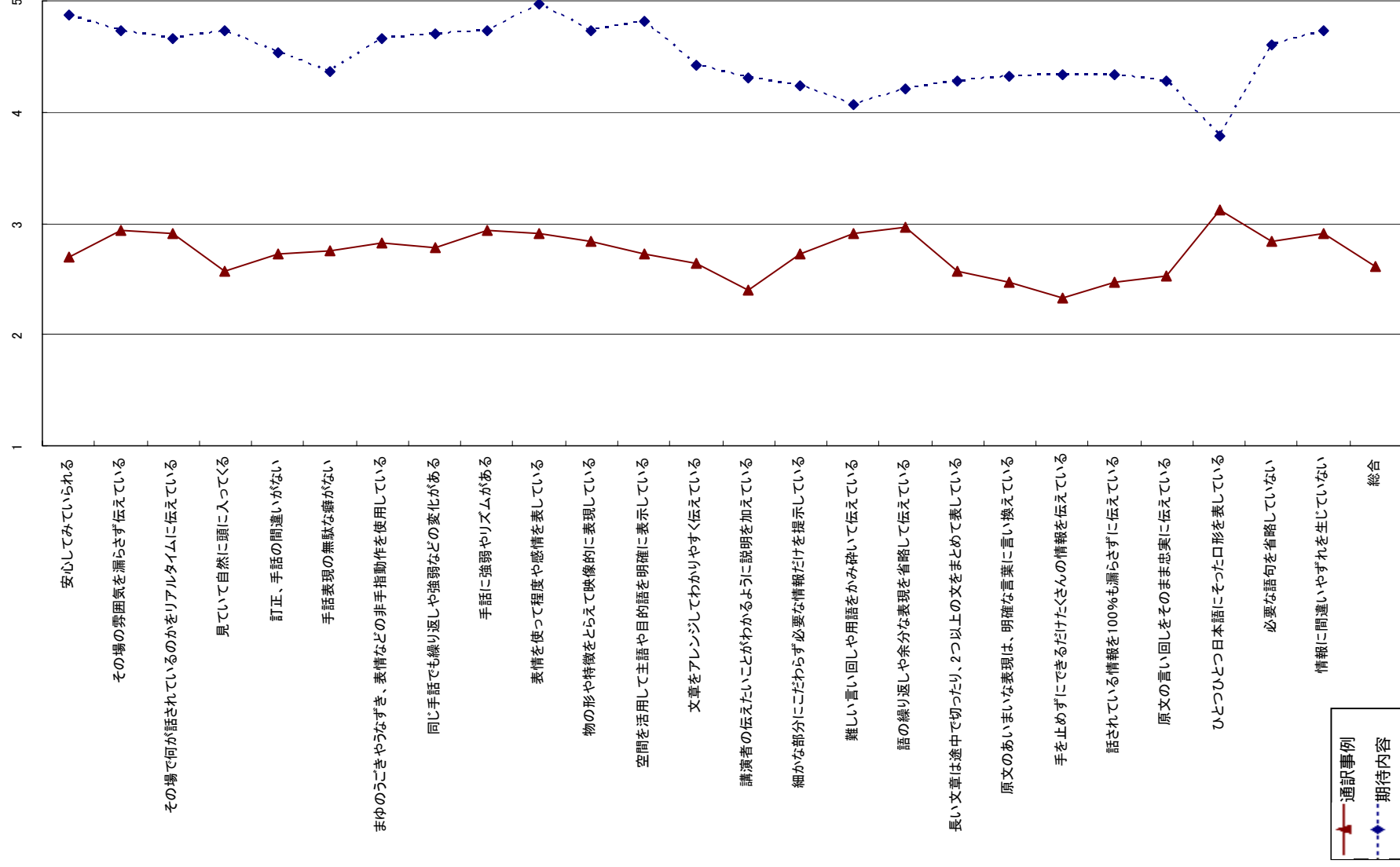


図 6 - 24 通訳事例 B の下位項目得点

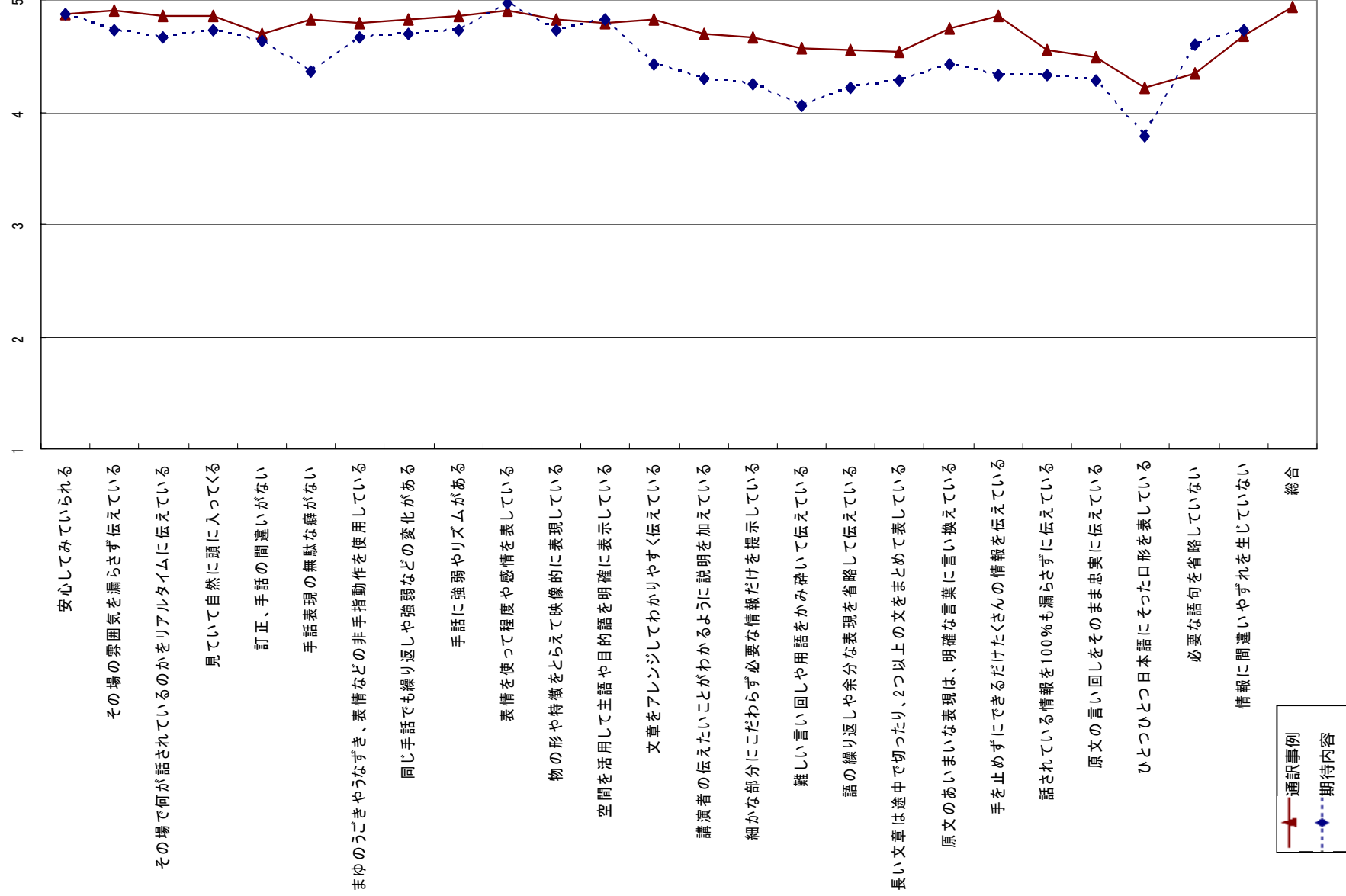


図 6 - 25 通訳事例 C の下位項目得点

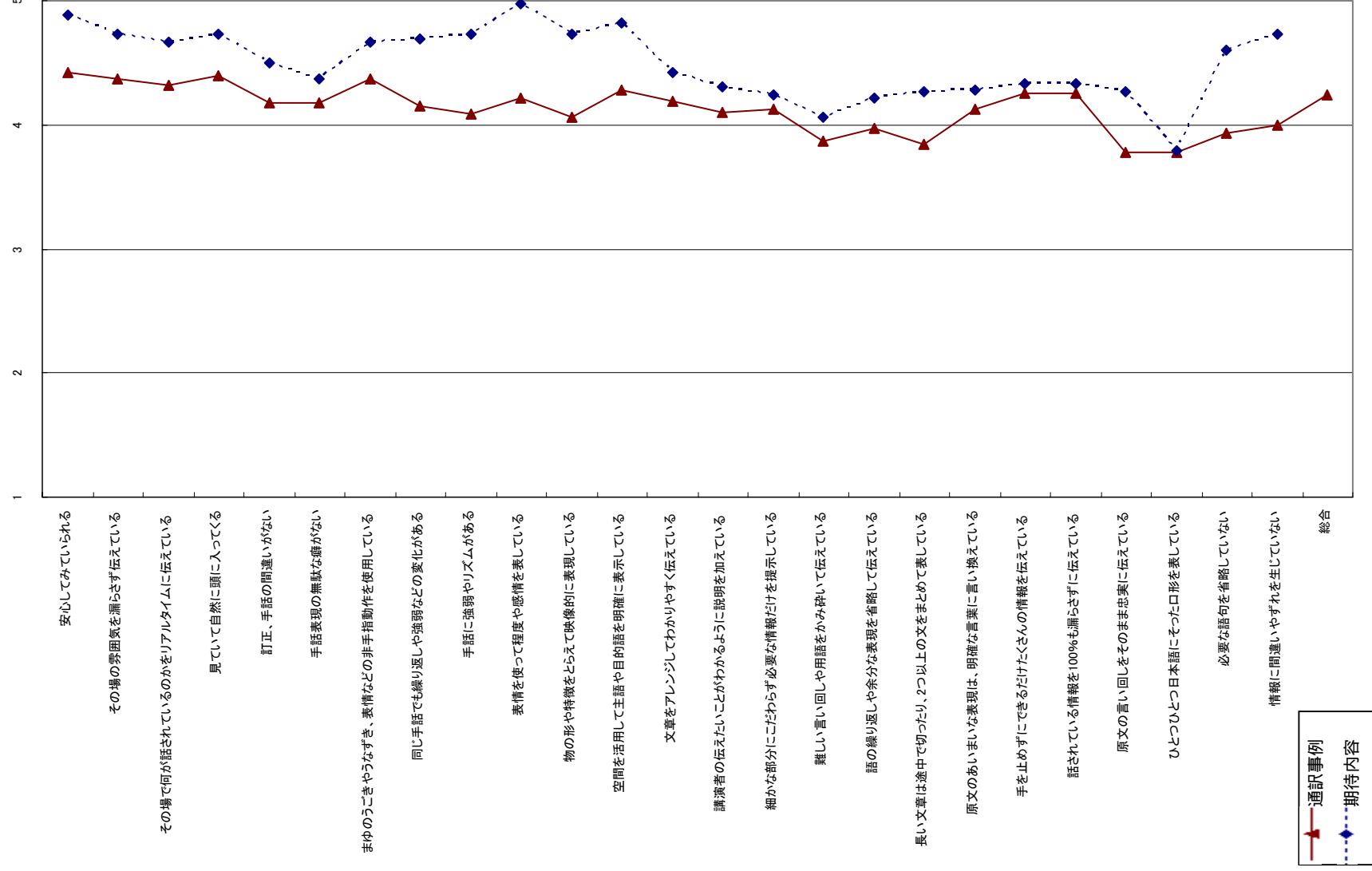


図 6 - 26 通訳事例 D の下位項目得点

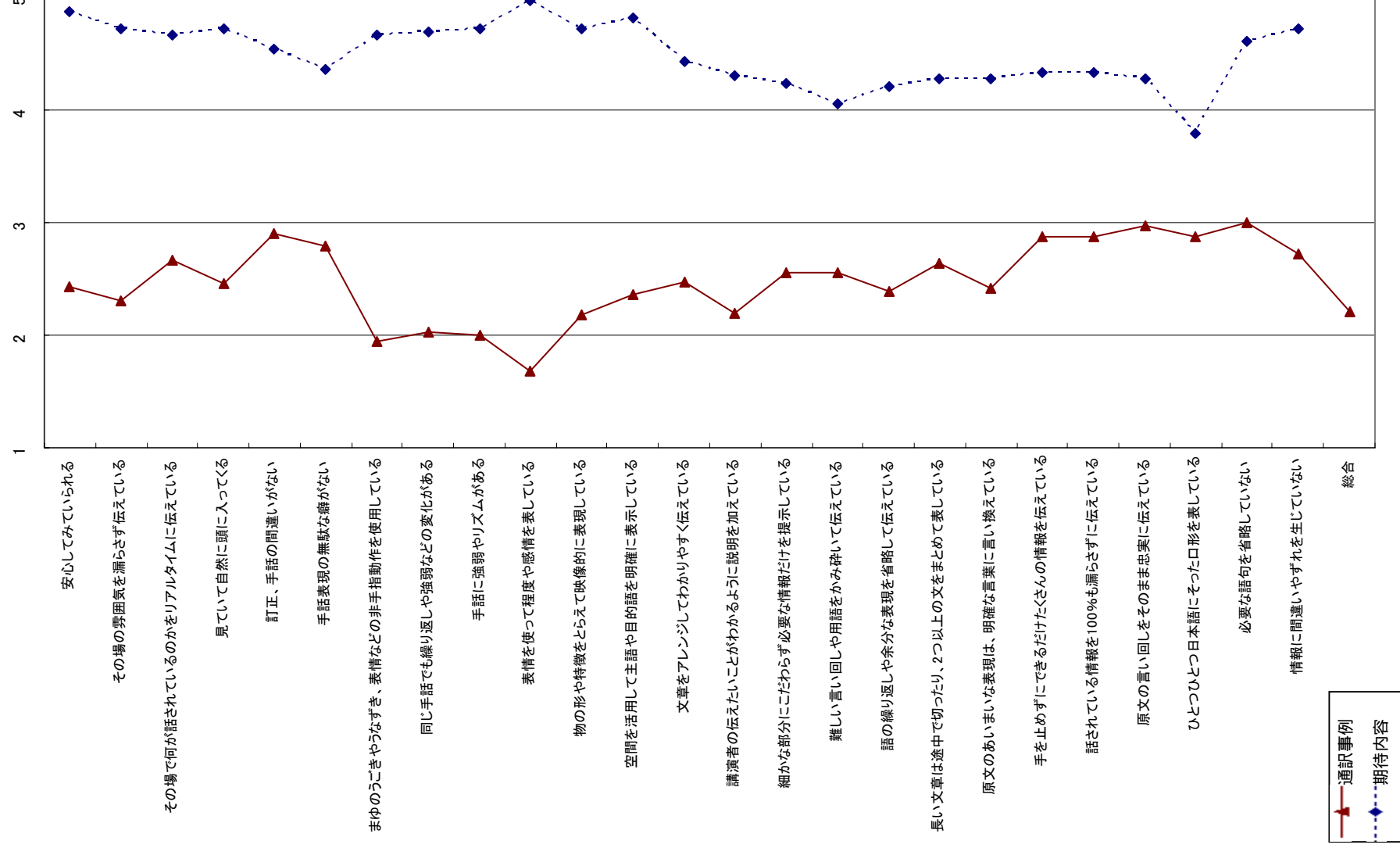


図 6 - 27 通訳事例 E の下位項目得点

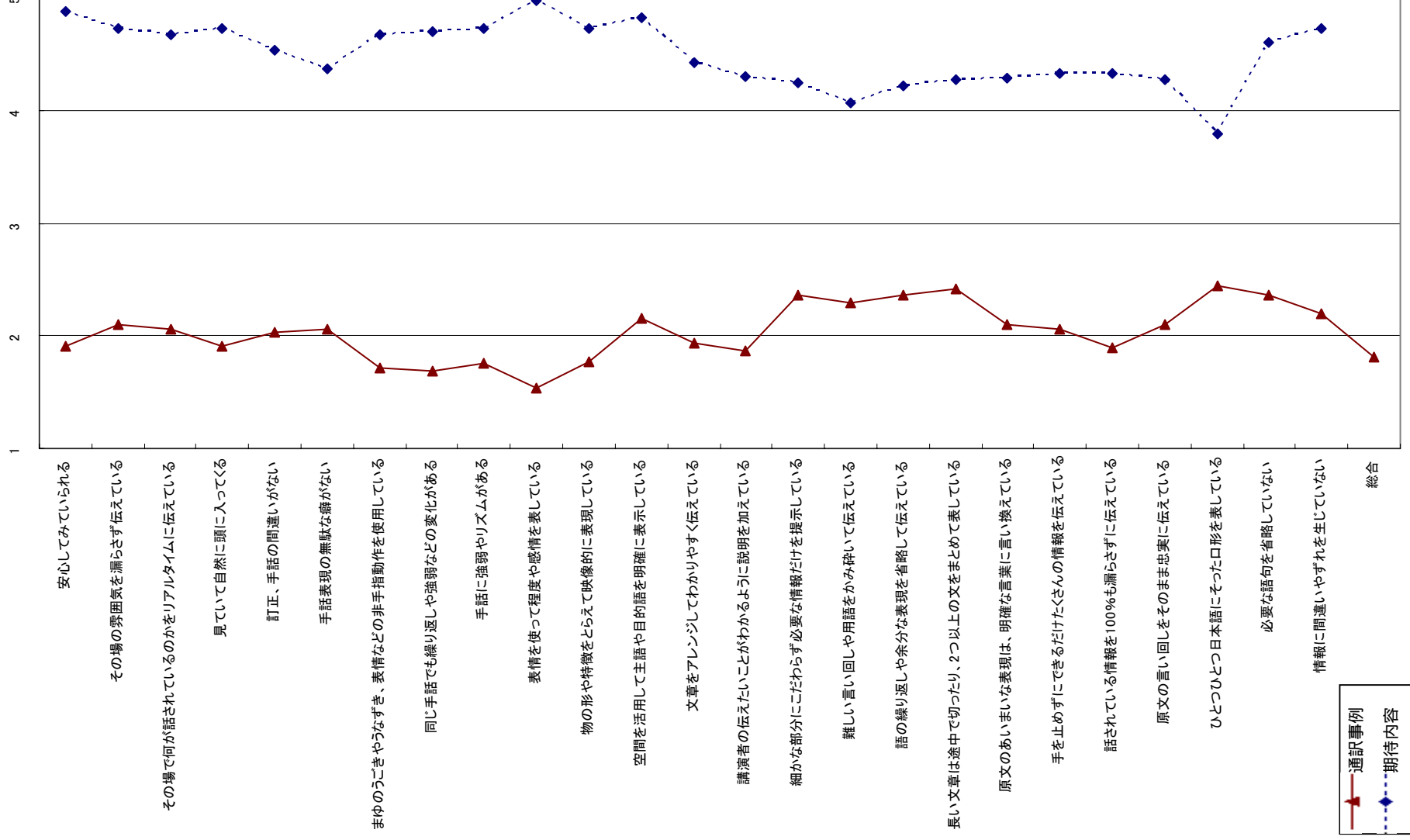


図 6 - 28 通訳事例 F の下位項目得点

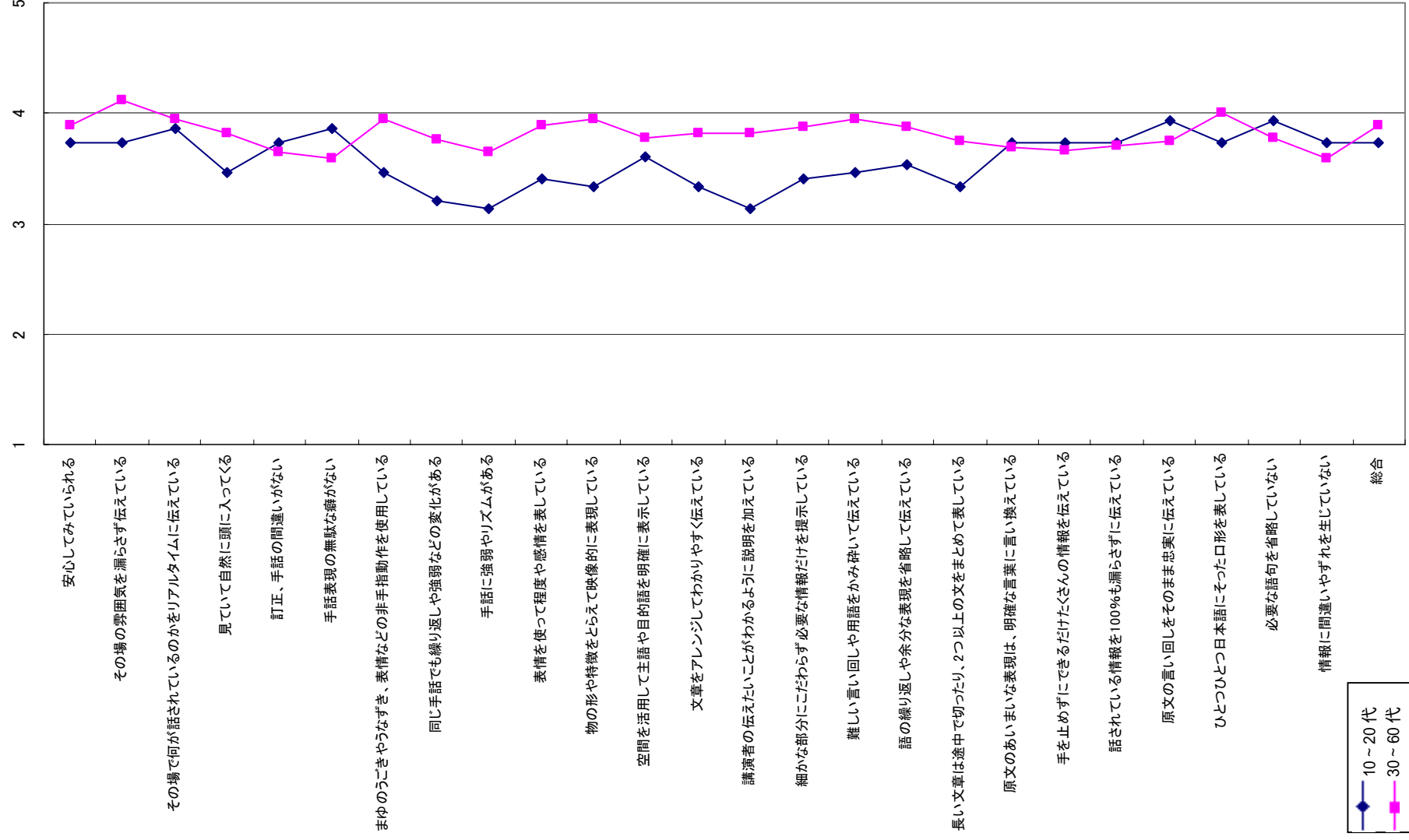


図 6 - 29 通訳事例 A に対する年齢ごとの下位項目得点

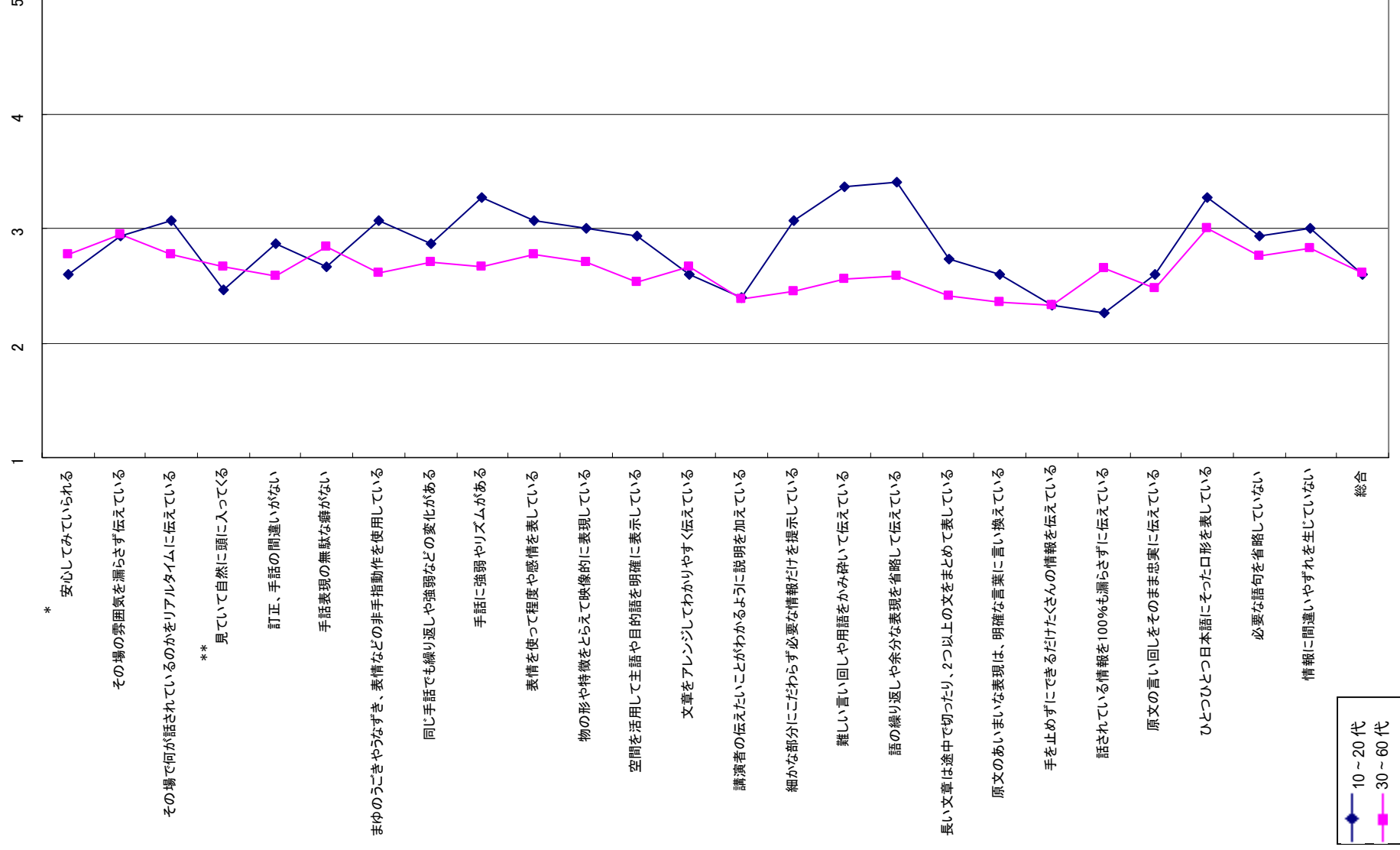


図 6 - 30 通訳事例 B に対する年齢ごとの下位項目得点

(*p<.05, **p<.01)

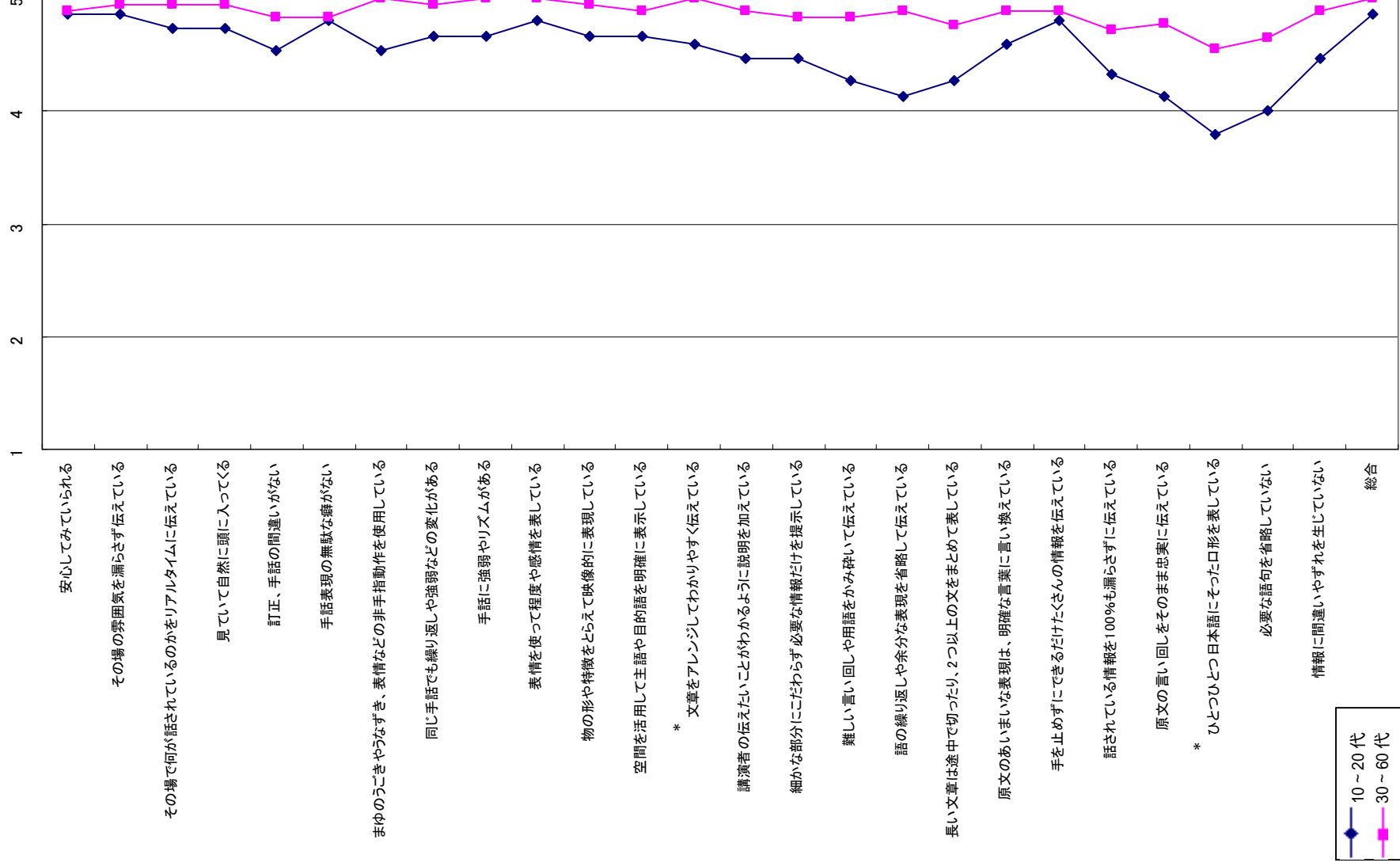


図 6 - 31 通訳事例 C に対する年齢ごとの下位項目得点
(*p<.05)

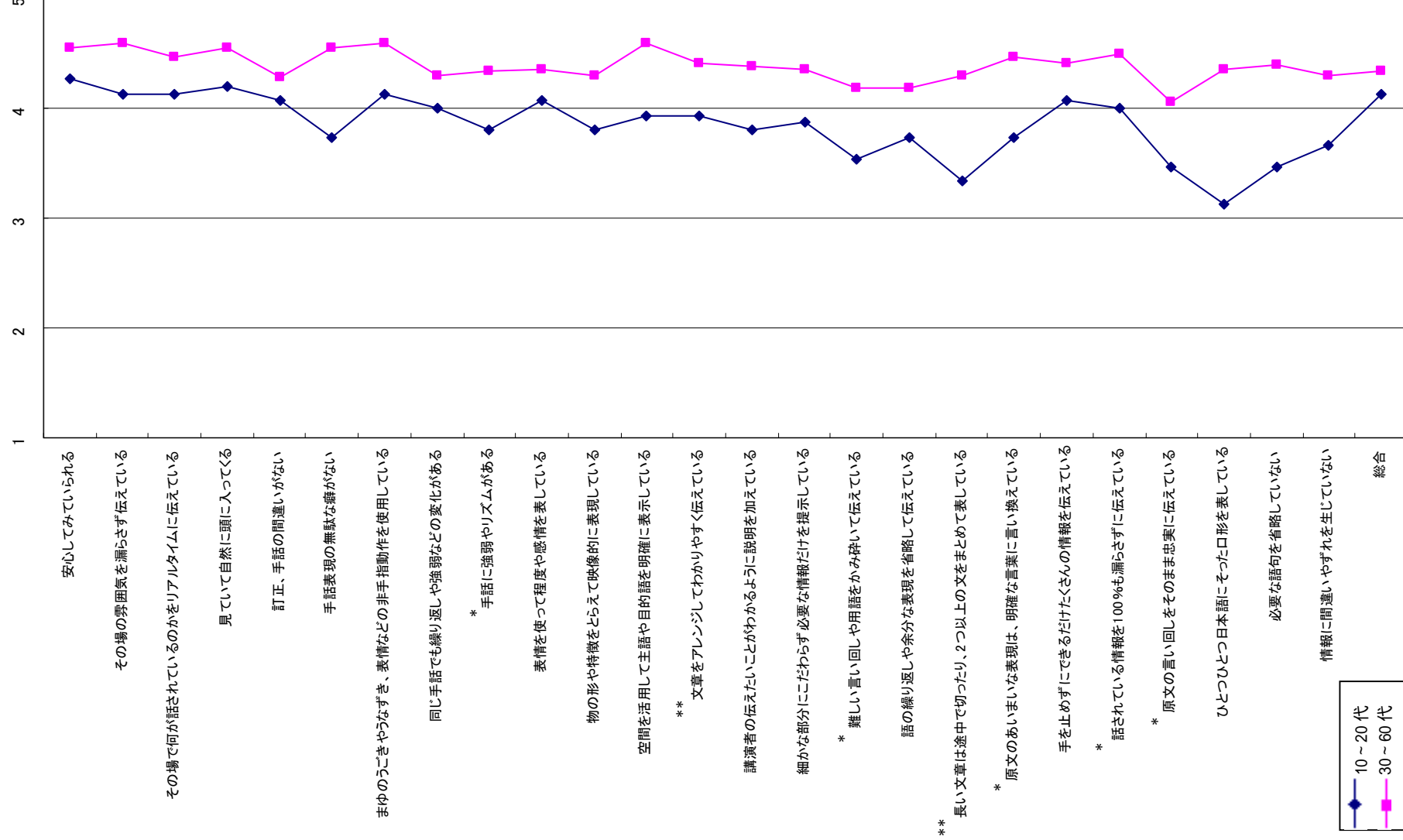


図 6 - 32 通訳事例 D に対する年齢ごとの下位項目得点 (*p0 p01)

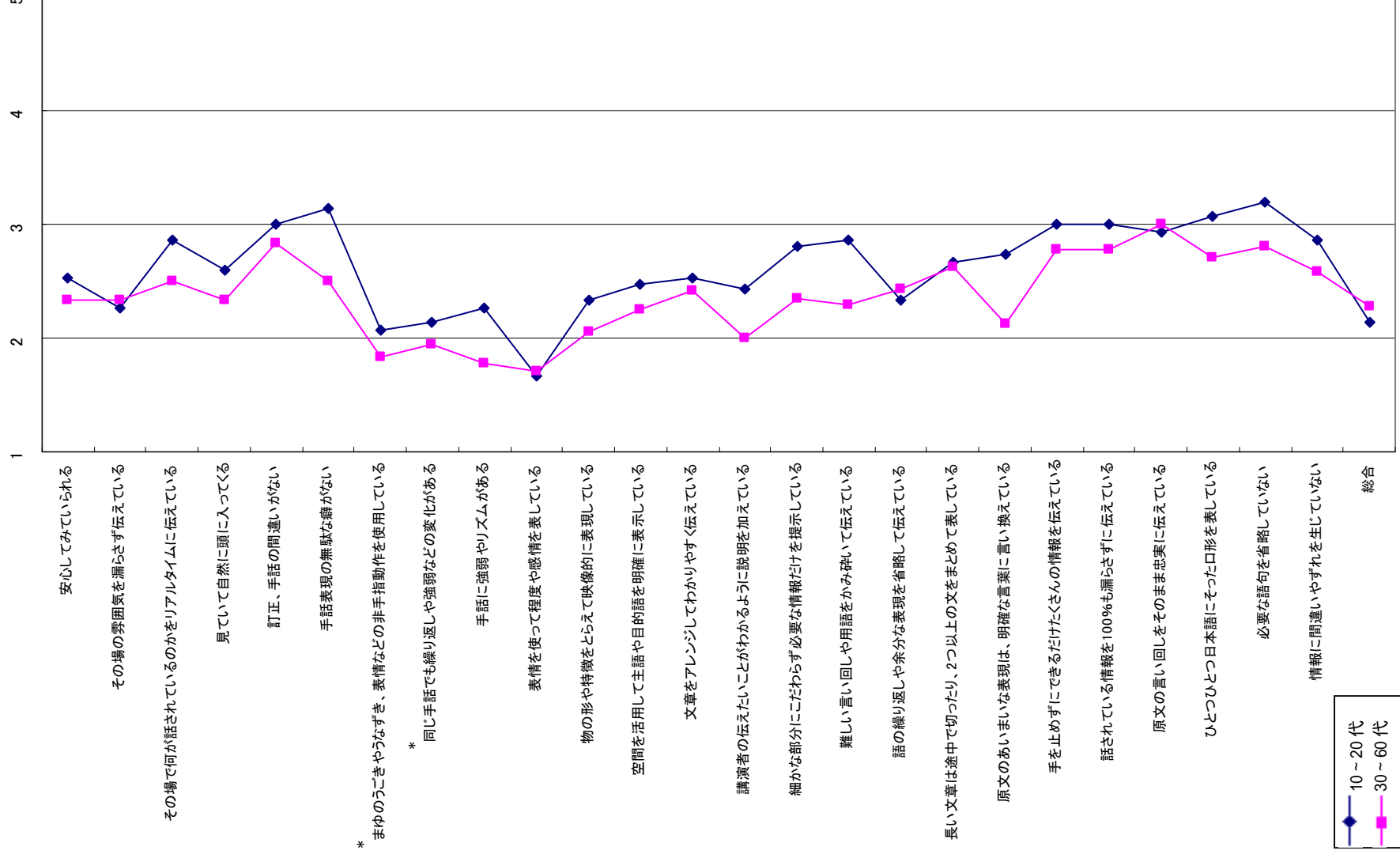


図 6 - 33 通訳事例 E に対する年齢ごとの下位項目得点

(*p<.05)

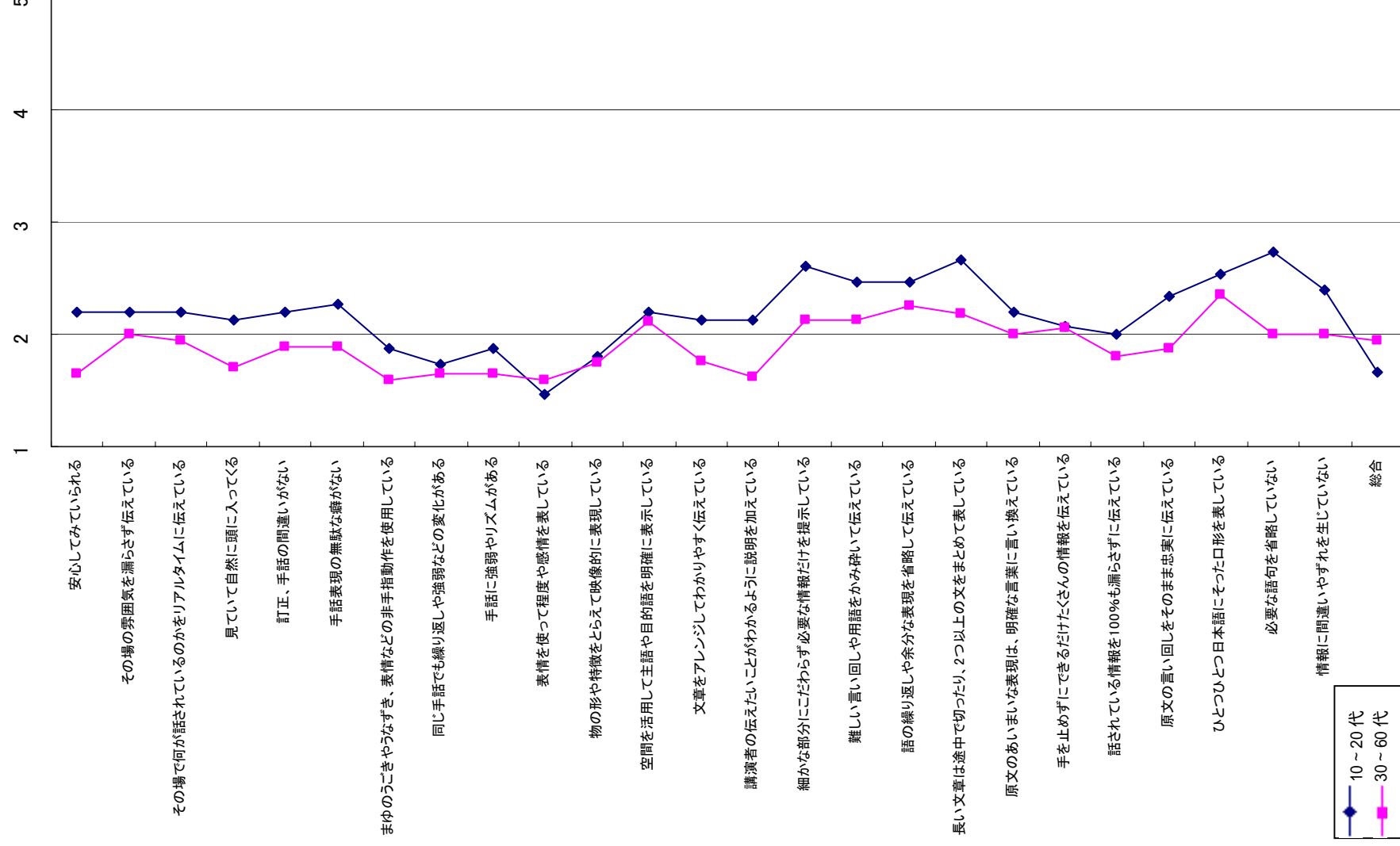


図 6 - 34 通訳事例 F に対する年齢ごとの下位項目得点

表 6 - 9 予測される期待充足度尺度と客観的指標の関係

	期待充足度尺度	客観的指標
全体的印象	安心してみていられる通訳をしている	
	その場の雰囲気を漏らさず伝えている	
	その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えている	タイムラグの値
	見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしている	非流暢な動きの出現回数(負)
	訂正、手話の間違いが少ない	非流暢な動きの出現回数(負)
手話技術	手話表現の無駄な癖が少ない	
	同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化がある	相による変化の出現回数
	物の形や特徴をとらえて映像的に表現している	類辞による変化の出現回数
	空間を活用して主語や目的語を明確に表示している	動詞の一致による変化の出現回数
	まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用している	句の区切りを示す NMS(主にうなずき)の明示
手話に強弱やリズムがある	句の区切りを示す NMS(主にうなずき)の明示	
表情を使って程度や感情を表している		
変換技術	細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示している	圧縮・統合の出現回数
	語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えている	圧縮・統合の出現回数
	文章をアレンジしてわかりやすく伝えている	語レベルの変換作業(同等、省略を除く)の出現回数
	講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えている	付加の出現回数
	原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えている	言い換えの出現回数
	難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えている	言い換えの出現回数
長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表している	分割、統合の出現回数	
情報量・忠実さ	手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている	訳出率
	話されている情報を 100%も漏らさずに伝えている	訳出率
	原文の言い回しをそのまま忠実に伝えている	原語借用のうち「原語表示」の出現回数
	ひとつひとつ日本語にそった口形を表している	
	必要な語句を省略していない	重要語訳出率
情報に間違いやずれが生じていない		

* 空白は、現段階では対応する客観的指標が見出せなかったことを示している

* (負)は両者の値が負の相関を示すと予想されることを示している

表 6 - 10 期待充足度尺度得点と客観的指標の一致度

	期待充足度尺度	客観的指標	順位 相関係数		
全体的印象	安心してみていられる通訳をしている				
	その場の雰囲気漏らさず伝えている				
	その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えている	タイムラグの値	.54		
	見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしている				
	訂正、手話の間違いが少ない	非流暢な動きの出現回数	-.77 [†]		
	手話表現の無駄な癖が少ない	非流暢な動きの出現回数	-.77 [†]		
手話技術	同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化がある	相による変化の出現回数 類辞による変化の出現回数 動詞の一致による変化の出現回数	なり手話全体の異 語の数	.96** .83* .15	} 1.00**
	物の形や特徴をとらえて映像的に表現している				
	空間を活用して主語や目的語を明確に表示している				
	まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用している	句の区切りを示す NMS(主にうなずき)の明示	1.00**		
	手話に強弱やリズムがある	句の区切りを示す NMS(主にうなずき)の明示	1.00**		
	表情を使って程度や感情を表している				
変換技術	細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示している	圧縮・統合の出現回数 (「非手指動作」の出現回数)	.94** .99**		
	語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えている	圧縮・統合の出現回数 (「非手指動作」の出現回数)	.94** .99**		
	文章をアレンジしてわかりやすく伝えている	語レベルの変換作業(同等、省略を除く)の出現回数	.83*		
	講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えている	付加の出現回数 (「整理・修正」の出現回数)	.81* .83*		
	原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えている	言い換えの出現回数 (明確な言い換えの出現回数)	.43 .90**		
	難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えている	言い換えの出現回数 (明確な言い換えの出現回数)	.43 .90**		
	長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表している	分割、統合の出現回数	.25		
情報量・忠実さ	手を止めずにできるだけたくさん情報を伝えている	訳出率	.71 [†]		
	話されている情報を100%も漏らさずに伝えている	訳出率	.71 [†]		
	原文の言い回しをそのまま忠実に伝えている	原語借用の出現回数 (「原語表示」の出現回数)	.23 .97**		
	ひとつひとつ日本語にそった口形を表している				
	必要な語句を省略していない	重要語訳出率	.83*		
	情報に間違いやずれが生じていない				

*空白は、現段階では対応する客観的指標が見出せなかったもの
([†]p<.10、*p<.05、**p<.01)

表 6 - 11 各通訳者の通訳作業と期待充足度の関係

		通訳作業（客観的指標）		期待充足度
通訳事例 A	量的側面	訳出率	89%(高)	全体的に因子による評価の変化が見られない、中高年層、若年層ともに評価が分かれた 「全体的印象」(やや高) ・その場の雰囲気をつぶやまず伝えている(やや高) ・その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えている(やや高) 「手話技術」(やや高) 「変換技術」(やや高) ・難しい言い回しや用語を噛み砕いて伝えている(やや高) ・原文の曖昧な表現は、明確な言葉に言い換えている(やや高) 「情報量・忠実さ」(やや高) ・原文の言い回しをそのまま忠実に伝えている(やや高) ・ひとつひとつ日本語にそった口形を現している(やや高)
		重要語訳出率	91%(高)	
		訳出語数	400 語	
	時間的側面	タイムラグ	1.18 秒	
		処理単位	語レベルの訳出	
	変換作業	変換方略	圧縮・統合タイプ	
		語レベル変換作業	151 回(やや高)	
		省略	42 回(意図的省略：少)	
		言い換え	29 回(明確な言い換え：多)	
		付加 原語借用	14 回(中) 15 回(原語表示：多、手話なし代用：多)	
訳出表現	圧縮・統合	93 回(多)		
	手話の種類	約 330 種類(やや多、辞書形以外の比率：高)		
	区切れ 非流暢な動き	明確 6 回(少)		
通訳事例 B	量的側面	訳出率	71%(中)	全体的にまとめながら通訳しているという評価、手話技術は期待にそっている 「全体的印象」(中) ・その場の雰囲気をつぶやまず伝えている(中) ・その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えている(中) 「手話技術」(中) ・期待の内容と質的に添う形にある 「変換技術」(やや低) ・難しい言い回しや用語を噛み砕いて伝えている(中) ・語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えている(中) ・原文の曖昧な表現は明確な言葉に言い換えている(やや低) 「情報量・忠実さ」(やや低) ・ひとつひとつ日本語にそった口形を表している(やや高) ・手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている(やや低)
		重要語訳出率	83%(中)	
		訳出語数	340 語	
	時間的側面	タイムラグ	1.79 秒	
		処理単位	語レベルだが時折遅れ	
	変換作業	変換方略	言い換えタイプ	
		語レベル変換作業	110 回(中)	
		省略	118 回(意図的省略：多、脱落：中)	
		言い換え	30 回(曖昧な言い換え：多)	
		付加 原語借用	17 回(中) 9 回(手話なし代用：中)	
訳出表現	圧縮・統合	54 回(中)		
	手話の種類	約 300 種類(中)		
	区切れ 非流暢な動き	ほぼ明確 21 回(やや多)		
通訳事例 C	量的側面	訳出率	86%(高)	ほぼ全員が一致して高い評価 「全体的印象」(高) ・安心して見ていられる(高) ・その場の雰囲気をつぶやまず伝えている(高) 「手話技術」(高) ・表情を使って程度や感情を表している(高) 「変換技術」(高) ・文章をアレンジしてわかりやすく伝えている(高)
		重要語訳出率	89%(高)	
		訳出語数	421 語	
	時間的側面	タイムラグ	2.15 秒	
		処理単位	比較的句レベル	
	変換作業	変換方略	圧縮・統合タイプ	
		語レベル変換作業	217 回(多)	
		省略	43 回(意図的省略：少)	
	言い換え	63 回(変容適合：多、明確な言い換え：多)		

通訳事例 D	付加	34 回(多、種類も多い)	「情報量・忠実さ」(ややばらつき) ・手をとめずにできるだけたくさんの情報を伝えている(高) ・ひとつひとつ日本語にそった口形を現している(やや低)	
	原語借用	8 回(原語表示：多)		
	圧縮・統合	112 回(多)		
	訳出表現	手話の種類		約 380 種類(多、辞書形以外の比率：多)
	区切れ	明確		
	非流暢な動き	4 回(少)		
	量的側面	訳出率		88%(高)
	重要語訳出率	92%(高)		
	訳出語数	486 語		
	時間的側面	タイムラグ		2.52 秒
処理単位	前半は語レベル、後半は句レベル			
変換作業	変換方略	圧縮・統合	C について評価が高い、全体的には期待のラインにそっている、中高年層に比較して若年層の評価が低い 「全体的印象」(高) 「手話技術」(やや高) ・全体に対してやや低い ・物の形や特徴をとらえて映像的に表現している(やや高) 「変換技術」(やや高) ・長い文章は途中で切ったり、2 つ以上の文をまとめて表している(やや高) 「情報量・忠実さ」(ばらつき) ・手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている(高) ・話されている情報を 100%漏らさずに伝えている(高) ・原文の言い回しを忠実に伝えている(やや高)	
語レベル変換作業	166 回(やや高)			
省略	44 回(意図的省略：少)			
言い換え	33 回(変容適合：多)			
付加	27 回(多、種類も多い)			
原語借用	11 回(手話なし代用：多)			
圧縮・統合	95 回(多)			
訳出表現	手話の種類	約 350 種類(やや多、辞書形以外の比率：少)		
区切れ	明確			
非流暢な動き	9 回(中)			
量的側面	訳出率	78%(中)		
重要語訳出率	84%(中)			
訳出語数	322 語			
時間的側面	タイムラグ	2.86 秒		
処理単位	句レベル			
変換作業	変換方略	言い換え	全体的に期待の内容と逆パターン、若年層で評価が分かれた 「全体的印象」(ばらつき) ・その場の雰囲気漏らさず伝えている(やや低) ・訂正、手話の間違いが無い(中) 「手話技術」(低) ・まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用している(低) ・手話に強弱やリズムがある(低) ・表情を使って程度や感情を表している(低) 「変換技術」(やや低) ・原文の曖昧な表現は明確な言葉に言い換えている(やや低) 「情報量・忠実さ」(中) ・手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている(中) ・話されている情報を 100%漏らさずに伝えている(中)	
語レベル変換作業	154 回(やや高)			
省略	84 回(意図的省略：多)			
言い換え	56 回(変容適合：多、上位概念への言い換え、曖昧な言い換え：多)			
付加	18 回(多、種類少ない)			
原語借用	12 回(手話なし代用：中)			
圧縮・統合	68 回(中)			
訳出表現	手話の種類	約 275 種類(中)		
区切れ	曖昧			
非流暢な動き	5 回(少)			
量的側面	訳出率	51%(低)		
重要語訳出率	63%(低)			
訳出語数	241 語			
時間的側面	タイムラグ	3.89 秒		
処理単位	句レベルだが変動が大きい			
通訳事例 E			全体的に逆パターン、まとめながら訳しているとの評価 「全体的印象」(低) 「手話技術」(低) ・表情を使って程度や感情を表している(低)	
量的側面	訳出率	51%(低)		
重要語訳出率	63%(低)			
訳出語数	241 語			
時間的側面	タイムラグ	3.89 秒		
処理単位	句レベルだが変動が大きい			
通訳事例 F				全体的に逆パターン、まとめながら訳しているとの評価 「全体的印象」(低) 「手話技術」(低) ・表情を使って程度や感情を表している(低)
量的側面	訳出率	51%(低)		
重要語訳出率	63%(低)			
訳出語数	241 語			
時間的側面	タイムラグ	3.89 秒		
処理単位	句レベルだが変動が大きい			
通訳事例 F			全体的に逆パターン、まとめながら訳しているとの評価 「全体的印象」(低) 「手話技術」(低) ・表情を使って程度や感情を表している(低)	
量的側面	訳出率	51%(低)		
重要語訳出率	63%(低)			
訳出語数	241 語			
時間的側面	タイムラグ	3.89 秒		
処理単位	句レベルだが変動が大きい			

変換作業	変換方略	省略	<ul style="list-style-type: none"> ・まゆの動き、表情などの非手指動作を使用している 「変換技術」(やや低) ・繰り返しや余分な表現を省略しながら表している(やや低) ・二つ以上の分をまとめて表す(やや低) 「情報量・忠実さ」(ばらつき) ・話されている情報を100%漏らさずに伝えている(低) ・ひとつひとつ日本語にそった口形を表している(やや低)
	語レベル変換作業	62回(少)	
	省略	196回(脱落：多)	
	言い換え	18回(変容適合：多、曖昧な言い換え：多)	
訳出表現	付加	6回(少)	
	原語借用	8回(手話なし代用：中)	
	圧縮・統合	30回(低)	
	手話の種類	約190種類(少)	
	区切れ	曖昧	
	非流暢な動き	30回(多)	

* 表中 網かけ部 は期待充足度に特に影響を与えていると思われる指標を表す。

表 6 - 12 聴覚障害者の期待と手話通訳作業の内容

	期待充足度	期待の程度	客観的指標
全体的印象	安心してみていただける通訳をしてほしい	4.88	
	その場の雰囲気を読み取らず伝えてほしい	4.73	
	その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	4.67	
	見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい	4.73	
	訂正、手話の間違いを減らしてほしい	4.50	非流暢な動きの出現回数
	手話表現の無駄な癖をなくしてほしい	4.36	非流暢な動きの出現回数
	手話技術	同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい	4.70
物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい		4.73	
空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい		4.82	異なり語数
手話に強弱やリズムをつけてほしい		4.73	
まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい		4.67	
表情を使って程度や感情を表してほしい		4.97	句の区切りを示す NMS(主にうなずき)の明確さ
変換技術		文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	4.42
	講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	4.30	付加、特に「整理・修正」の出現回数
	細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	4.24	圧縮・統合、特に「非手指動作」の出現回数
	難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	4.06	言い換えのうち「明確な言い換え」の出現回数
	語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	4.21	圧縮・統合、特に「非手指動作」の出現回数
	長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい	4.27	
	原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	4.28	言い換えのうち「明確な言い換え」の出現回数
	情報量・忠実さ	手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えてほしい	4.33
話されている情報を 100%も漏らさずに伝えてほしい		4.33	訳出率
原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい		4.28	原語借用のうち「原語表示」の出現回数
ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい		3.79	
必要な語句を省略しないでほしい		4.61	重要語訳出率
情報に間違いやずれを生じさせないでほしい		4.73	

* 表中網掛け部は期待度が比較的低い項目、二重枠部は期待度が比較的高い項目を表す。

表 6 - 13 若年層の聴覚障害者の期待と手話通訳作業の内容

	期待充足度	期待の程度	客観的指標	
全体的印象	安心してみていただける通訳をしてほしい	4.80		
	その場の雰囲気を漏らさず伝えてほしい	4.67		
	その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	4.73		
	見ている自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい	4.73		
	訂正、手話の間違いを減らしてほしい	4.47	非流暢な動きの出現回数	
	手話表現の無駄な癖をなくしてほしい	4.40	非流暢な動きの出現回数	
	手話技術	同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい	4.53	相による変化の出現回数 類辞による変化の出現回数
物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい		4.60		
空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい		4.73	異なり語数	
まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい		4.60		句の区切りを示すNMS(主にうなずき)の明確さ
手話に強弱やリズムをつけてほしい		4.67		句の区切りを示すNMS(主にうなずき)の明確さ
表情を使って程度や感情を表してほしい		4.87		
変換技術		文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	4.27	語レベルの変換作業(同等、省略を除く)の出現回数
	講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	4.00	付加、特に「整理・修正」の出現回数	
	細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	4.00	圧縮・統合、特に「非手指動作」の出現回数	
	難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	3.87	言い換えのうち「明確な言い換え」の出現回数	
	語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	3.93	圧縮・統合、特に「非手指動作」の出現回数	
	長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい	3.80		
	原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	4.07	言い換えのうち「明確な言い換え」の出現回数	
情報量・忠実さ	手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えてほしい	4.33	訳出率	
	話されている情報を100%も漏らさずに伝えてほしい	4.40	訳出率	
	原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい	4.46	原語借用のうち「原語表示」の出現回数	
	ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい	3.40		
	必要な語句を省略しないでほしい	4.40	重要語訳出率	
	情報に間違いやずれを生じさせないでほしい	4.60		

* 表中網掛け部は期待度が比較的低い項目、**二重枠部**は期待度が比較的高い項目を表す。

表 6 - 14 中高年層の聴覚障害者の期待と手話通訳作業の内容

	期待充足度	期待の程度	客観的指標
全体的印象	安心してみていただける通訳をしてほしい	4.94	
	その場の雰囲気を漏らさず伝えてほしい	4.78	
	その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい	4.61	
	見ている自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい	4.72	
	訂正、手話の間違いを減らしてほしい	4.53	非流暢な動きの出現回数
	手話表現の無駄な癖をなくしてほしい	4.33	非流暢な動きの出現回数
	手話技術	同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい	4.59
物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい		4.83	
空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい		4.89	
まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい		4.72	句の区切りを示すNMS(主にうなずき)の明確さ
手話に強弱やリズムをつけてほしい		4.78	句の区切りを示すNMS(主にうなずき)の明確さ
表情を使って程度や感情を表してほしい		4.82	
変換技術		文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい	4.56
	講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい	4.56	付加、特に「整理・修正」の出現回数
	細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい	4.44	圧縮・統合、特に「非手指動作」の出現回数
	難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい	4.22	言い換えのうち「明確な言い換え」の出現回数
	語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい	4.18	圧縮・統合、特に「非手指動作」の出現回数
	長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい	4.41	
	原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい	4.47	言い換えのうち「明確な言い換え」の出現回数
情報量・忠実さ	手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えてほしい	4.33	訳出率
	話されている情報を100%も漏らさずに伝えてほしい	4.28	訳出率
	原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい	4.11	原語借用のうち「原語表示」の出現回数
	ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい	4.11	
	必要な語句を省略しないでほしい	4.53	重要語訳出率
	情報に間違いやずれを生じさせないでほしい	4.83	

* 表中網掛け部は期待度が比較的低い項目、二重枠部は期待度が比較的高い項目を表す。

第 III 部

結 論

第4章 総合考察

聴覚障害者の社会参加促進のためには、手話通訳制度の充実が必要不可欠であるが、わが国においては質、量ともに極めて不十分であることが指摘されており、手話通訳に関する研究も極めて少ない状況にある。この理由として、これまで手話通訳に関する実践や研究では、通訳ではなく手話に焦点があてられてきたことが指摘されており、聴覚障害者のニーズに基づいた通訳の実践的分析の必要性が強調されている。そこで本研究では6名の手話通訳事例を音声同時通訳研究で用いられている指標を参考に数量的に記述評価することを試みた。次に通訳の受け手である聴覚障害者の主観的評価を期待充足度という視点から実施し、この両側面から評価することによって、手話通訳者が行っている作業内容およびこれに対する聴覚障害者の評価や聴覚障害者の期待に即した手話通訳の方法について検討してきた。本研究は3つの章(4・5・6章)から編成されているが、ここではそれぞれの研究によって得られた内容をまとめ、それらを総合して手話通訳養成に対してどのような示唆が引き出せるかを考察したい。

第1節 客観的評価指標による手話通訳作業の記述と評価

まず第4章では、起点談話から目標言語に訳出する過程において手話通訳者が行っている作業を客観的に記述分析し、通訳作業の内容および通訳者ごとの差異について「量的側面」「時間的側面」「変換作業」「訳出表現」の4つの側面から明らかにするとともに、こうした差異をより明確に示すことのできる客観的指標を抽出した。

量的側面のうち訳出率の測定では、用いられた単語の形式的な一致ではなく、実質的な意味内容を反映しつつ、かつ客観的数量的に示しうる指標の抽出について議論がなされてきた(木佐, 1997, 1998, 1999; 小栗山, 2000)。本研究では、手話の単語とほぼ対応しているとされる文節を単位とし、起点談話で話されている内容が訳出されているかを確認することで訳出率を測定し、手話および日本語の両方に習熟した評価者2名の一致度を求めることで、評価の信頼性を高める方法を用いた。この結果、訳出率は通訳事例によって幅があるが、平均して77.4%、高い事例で90%近くの訳出が可能であることが明らかにされた。

この値は、若松(1989a; 1989b)によって示された 40 から 60%程度という値に比較してかなり高くなっているが、これは若松が用いた指標が起点談話との厳密な一致を求めるものであったためであり、本研究の数値の方がより手話通訳の実態を反映しているものと考えられる。

時間的側面の分析では、タイムラグの大きさやこれを指標とした同時通訳における処理単位について分析を行った。この結果、原文と訳出表現の間のタイムラグは、通訳事例によって 1 秒から 4 秒と差があり、この差は語単位か句・文単位かといった処理単位の違いによるものと考えられた。従来手話通訳、音声同時通訳に共通して、処理単位の異なる二つのタイプが存在することが指摘されてきたが(亀井 1998; 永田,1997a; 若松 1990b)、本研究でも通訳事例によって処理単位が異なること、また同一の通訳事例内でも文章によって処理単位が変動することが明らかにされた。同時に、通訳事例の中には 1 から 2 秒未満というごく短いタイムラグで訳出を行っている例もあった。音声同時通訳では、それほど短い例は少なく、このタイムラグの短さは手話の中に日本語対应手話というバリエーションが存在し、日本語からの直訳が可能であることからきているものと考えられた。

変換作業の分析では、音声同時通訳研究において、亀井(1998)、水野(1993)、永田(1994; 1997a)、Nishio(1986)、岡野(1999)らによって指摘され、手話通訳においても存在が一部確認されていた(Cokely, 1992; Siple, 1993, 1995, 1997)、省略、付加、言い換え、原語借用、圧縮・統合、同等といった語レベルの変換作業や、分割、語順の入れ替えなどといった文レベルの変換作業が、訳出の中でどのように用いられているのかを検討し、変換作業について質的・量的に詳細に明らかにすることができた。この結果、特に圧縮・統合や省略の量が訳出率と深く関係しており、日本手話の文法とも関係の深い空間モダリティをどのように活用していくかが、訳出率を高める重要なポイントとなっていることがわかった。また、通訳事例が用いる変換作業には、その出現回数や時間的側面との関係から「省略パターン」、「言い換えパターン」、「圧縮・統合パターン」の 3 つに分類できることが示された。さらに、起点談話で用いられている日本語を原語借用という方法で日本語をそのまま指文字等を用いて訳出表現の中に取り込み、日本語と手話を結びつけながら訳出していく手法があることが明らかにされ、この手法は話し手と受け手の両者が日本語を共有している手話通訳独自の訳出方法であると考えられた。

さらに、訳出された手話表現の分析では、手話学の知見を踏まえつつも、各通訳事例が現実的に用いている手話に立脚した分析を行うことができた。指標としては異なり語の数、

句切れの明示、非流暢な動きの量などを用い、通訳事例が用いた訳出表現のうち約 70%が活用や変化のない辞書形であること、句切れの表示の明確さやいいよどみの量は通訳事例により大きく異なり、これらは手話の見やすさに影響を与えているものと考えられることなどが明らかにされた。しかし、統語面など分析しきれなかった部分も残されており、手話通訳者の多くが用いている中間的手話をどのように分析していくかが今後の課題として残された。

第 2 節 聴覚障害者の手話通訳への期待

第 5 章では、聴覚障害者に対するインタビュー調査によって、通訳の受け手となる聴覚障害者が手話通訳に対して抱いている期待の内容を明らかにすることができた。聴覚障害者の手話通訳に対する期待の内容は非常に多岐にわたり、手話表現に対する記述も多いが、これ以外の異なった要素、つまり通訳者が加えている通訳時の変換作業の内容や、自然と内容がつかめる通訳をしてほしいといったわかりやすさなども重視されていることが示された。また、手話表現についても、従来わが国で手話通訳の評価ポイントとして提示されてきた空間的表現や語彙の拡充などの項目(日本手話通訳士育成指導養成委員会,1998 など)以外に、文章の統語構造を示す非手指動作や手話表現の癖なども重要であると認識されていることが明らかになった。今回、期待内容として挙げられた項目は、手話技術の側面では Taylor(1993a; 1993b)の提示した評価観点とほぼ重なるものであったが、特に手話以外に通訳のあり方に関する期待が多く得られた点で成果があったと言えるだろう。

次にインタビュー調査によって得られた項目を元に、55 項目からなる質問紙を作成し、聴覚障害者約 350 名に対して調査を行い、手話通訳に対する聴覚障害者の期待の全体的傾向を把握することができた。すなわち特に見ていて疲れにくい、安心感を与えてくれる通訳で、起点談話に対して忠実な通訳、ただし日本語をそのまま忠実に伝えるといった形式的な忠実さではなく、意味的な忠実さを保ちながらも、よりよく内容を伝えるために必要に応じて省略や言い換えなどの柔軟な操作を行うことが求められていることが明らかになった。

さらに手話通訳に対する期待の内容は、対象者の属性によって異なり、通訳を頻繁に用いている者ほど、手話の間違いや癖のない、見ていて疲れにくい通訳を好む傾向にあること、職場の研修場面で通訳をよく用いるとした対象者は、その場の雰囲気を実感する

ムに伝える通訳を求めていること、日本手話を日常的なコミュニケーション手段として用いる聴覚障害者は、通訳場面においても日本手話を用いてほしいとの期待を抱いていること、聾学校出身者はインテグレーション出身者に比較して、日本手話による通訳を求める傾向が強く、同時にその場の雰囲気や話し手の雰囲気を伝えてほしいという期待を示し、インテグレーション出身者は、手話の訂正や間違いといった無駄な表現をできるだけ減らし、はっきりと見やすい手話で通訳してほしいとの要望があること、一般大学で学んだ経験のある対象者は、起点談話の内容やその場の雰囲気を忠実に伝える通訳を望んでいることなどの特徴が明らかにされた。

第3節 期待充足度尺度による主観的評価と客観的評価の関係

第6章では、第5章で得られた結果を元に聴覚障害者の期待の内容を反映した手話通訳の評価尺度を構成した。第5章の調査結果について因子分析を行ったところ、聴覚障害者の手話通訳に対する期待内容は、「全体的印象」「手話技術」「変換技術」「情報量・忠実さ」の4つの因子からなることが明らかにされ、これら4因子に基づいた期待充足度尺度を作成した。従来手話や手話通訳の評価には、このうち特に「手話技術」にあたる部分の評価が中心とされてきたが(日本手話通訳士育成指導養成委員会,1998; 長南, 1999, 2001 など)、本研究では情報の伝達や起点言語から目標言語へ変換、受け手の満足度といった手話通訳の特性を踏まえた尺度を作成することが可能になった。

また、ここで作成した期待充足度尺度を用い、6名の手話通訳事例に対する期待充足度を測定したところ、期待充足度得点は通訳事例によってかなり異なっており、ほぼ全員の回答者が一致して高い評価をつけた事例から、そうでない事例など幅広く存在することが明らかになった。また、各事例に対する期待充足度には、回答者の年齢による影響はほとんど認められず、若年層の回答者が全体的にやや厳しい評価をしたものの、全体的には通訳事例ごとに一定の幅に収まる形となっていた。

さらに、期待充足度尺度の下位項目に対する得点より、通訳事例ごとに高く評価されている点や、総合評価に影響を与えていると思われる内容が具体的に明らかにされ、これにより手話通訳の特徴をより深くとらえることができた。すなわち、総合評価の非常に高い通訳事例の場合、聴覚障害者の期待の内容にほぼそう形で通訳がなされていたが、通訳事例によっては「手話技術」に対する評価が低いものや、逆に「手話技術」への評価は高いが、

「変換技術」や「情報量・忠実さ」に関する項目で期待と逆の評価パターンが見られ、この部分を改善することで総合評価の向上が望めることが示唆された。また、聴覚障害者にとって目に付きやすい「手話技術」に対する評価が、通訳全体の総合評価に最も強く影響を与えていることも明らかにされた。

一方、第6章の後半では期待充足度尺度における評価得点と第4章において用いた手話通訳作業の客観的指標との関係を明らかにすることで、通訳事例ごとに期待充足度に影響を与えるに至った通訳作業の特徴を探ることができ、これを元に期待充足度を高めるために必要な通訳作業の具体的内容を提示することができた。また聴覚障害者の期待内容を客観的指標によって記述することで、聴覚障害者が求めている手話通訳像を具体的に示した。すなわち手話表現のバリエーションが豊かで、リズムやイントネーションがはっきり現れており、起点談話のうち特に重要語訳出率の高い通訳が求められていた。さらに、原文のあいまいな部分を明確に言い換える作業や説明などの付加といった、語あるいは文レベルの変換作業については、必要に応じて臨機応変に用いてほしいとの期待が示されていた。

また、聴覚障害者の年齢による期待内容の違いに関しては、「全体的印象」や「手話技術」に関する期待の高さが同様に高かったことから、聴覚障害者の年齢に関わらず、今回の対象者のように日常的に情報保障手段として手話通訳を選択する聴覚障害者は、基本的に日本手話文法の使用を求めていることが明らかになった。その上で若年層の聴覚障害者の方が「変換技術」に対して低い期待を示したことから、言い換えや付加といった文章のアレンジに関する作業を控え目にするのが求めていると考えられた。また「情報量・忠実さ」では、中高年層の聴覚障害者では正確で重要な部分を省略していないという点に期待が高く、若年層では正確さと同様、全体的な情報の量や忠実さに対しても比較的高い期待が見られたことから、対象者の年齢によって中高年の聴覚障害者には重要語訳出率が、若年層の聴覚障害者には全体的な訳出率の高さや原語の表示が求められているものと考えられた。

第4節 手話通訳の養成に対する示唆

従来手話通訳の養成の中では、通訳作業のうち通訳者の用いる手話の表現技術に焦点がおかれ、通訳の技術については個人の経験にゆだねられる傾向があった。本研究ではこうした状況に対して、通訳の作業は「訳出率」「処理単位」「変換作業」「訳出表現」の4つの側面から分析可能であること、また手話通訳に対する聴覚障害者の期待にも「全体的印象」

「手話技術」「変換技術」「情報量・忠実さ」の4つの因子が存在し、手話通訳作業をより総合的にとらえる必要があることを明らかにできた。しかし、聴覚障害者の手話通訳に対する総合評価にはやはり「手話技術因子」が強く影響していることが明らかにされ、また省略パターンや言い換え、圧縮・統合パターンなど訳出時に用いる方略を選択する際、空間モダリティの活用、すなわち手話の表現技術が深く影響してくること、圧縮・統合などの手話文法を用いた表現を活用することで効率的な訳出が可能になり、訳出率が高められることなどから考察すると、手話の技術が変換作業の選択やその結果としての訳出率、あるいは全体的印象や総合評価にまで影響を与えていることも再確認された。したがって手話通訳の質的向上と手話技術の向上はやはり切り離すことのできない密接な関係にあると言えるだろう。

これまで手話通訳の養成現場で手話技術の向上が重視されてきた背景には、このような現象を経験の長い通訳者や指導者が感じ取ってきたからではないかと考えられ、本研究の結果からもこの方向性に間違いはなかったことが示唆された。しかし、手話通訳の質的向上のためには、手話通訳技術そのものの向上とともに、手話技術によって支えられているさまざまな訳出方略の習熟が不可欠であり、今後はそうした訳出方略の具体的内容にまで踏み込んだ養成を行っていく必要があるといえる。

また本研究では通訳者が日本語から手話への変換を行う際に省略、言い換え、付加、圧縮・統合、原語借用、同等といったさまざまな作業を行っていることを指摘し、それぞれについて用いるべき方略の具体的内容を明らかにしてきた。しかし、同時通訳を実施する際にさらに重要なことは、日本語から手話への変換作業において、いつ何をどう言い換え、圧縮、付加、省略するのかという通訳作業の選択方法にあると考えられる。現在のところこうした選択は「臨機応変」に行うことが求められているのみであり、いわば通訳者に一任されている状態にある。そのため、本研究で得られた通訳作業の詳細を踏まえ、こうした作業の使用方法について、通訳養成の実践の場で聴覚障害者とともにひとつひとつ検討していく必要があるだろう。

第5節 今後の課題

本研究では日本語から手話への同時通訳を、通訳作業自体の分析と通訳の受け手となる聴覚障害者の期待充足度という二つの側面から評価を実施することで、手話通訳者が通訳

中に行っている作業の内容や聴覚障害者が求める通訳の内容、実際の通訳に対する聴覚障害者の評価、さらに期待充足度を高めるための方略などを明らかにしてきた。本研究によって得られた成果は大きいですが、今後これらの結果を実際の手話通訳の養成や質的向上につなげるために、今後なすべき課題として以下の4点が挙げられる。

まず、本研究では経験年数の異なる6名の手話通訳事例を元に分析を進めた。これらの事例は現在の手話通訳の事情を十分に反映したものであったと考えられるが、本研究で得られた結果が手話通訳一般に共通して言えることであるのかを確認するために、より多くの手話通訳事例に対して本研究の指標を適用し、検証を進めていく必要があるだろう。

また、本研究では10から60代の聴覚障害者に対して調査を行い、通訳に対する期待の内容や実際の通訳事例の期待充足度等を測定した。この結果、若年層の聴覚障害者がやや分析的で厳しい評価をしたことを除いては年齢による差はあまり見られなかった。しかし、本研究では質問紙による調査という形態を用いたため、質問紙や尺度への回答が可能な聴覚障害者のみを対象とせざるを得ず、調査の実施が困難な聴覚障害者の意見を包含することができなかった。特に日本語の使用が困難な聴覚障害者の場合は、本研究の結果とは異なったニーズがあることが予想されるため、改めて調査方法を検討し、実施していく必要があると考えられる。

さらに、本研究では分析対象となる題材として講演会場面を想定し、一方向の発話で経験を伝達している内容を採用した。しかしながら、通訳の受け手となる聴覚障害者の期待内容は、通訳を受ける場面や内容、起点談話に対する本人のモチベーション、あるいは重要度といった要因によって少なからず代わってくるものと考えられる。特に本研究の評価者となった聴覚障害者のうち、若年層の聴覚障害者の中には、状況に応じて通訳者を使い分けるとしたものも多かったことから、こうした聴覚障害者の通訳ニーズを規定する要因や状況による期待内容の変化について、さらに分析していく必要があると考えられた。また、手話通訳者が行う作業の内容は、こうした聴覚障害者からの要請と同時に、通訳場面や内容といった環境による要請の両方の影響を受けて変化するものと考えられる。近年手話通訳が必要とされる場面が拡大し、政治、法律、医療、高等教育など各種専門分野に特化した通訳が求められているが、こうした場面の特性を反映し、かつ聴覚障害者のニーズにあった形で情報伝達を行うことができる通訳作業の内容について明らかにしていくことも必要であろう。

最後に、手話通訳者が実施している作業の内容は非常に複雑で、それぞれの要素がお互

いに影響しあって成り立っている。本研究では聴覚障害者の主観的評価と手話通訳作業の客観的指標の対応関係一部明らかにすることができたが、これらの関係を実際に検証するためには、手話通訳作業のうち一部の要素を変化させ、これに対する期待充足度を測定するなどの実験的な研究が必要であろう。さらに、この結果期待充足度を高めるとされた通訳作業について、どのようにすればこれを習得できるのかを実証的に明らかにし、教育的アプローチを積み重ねることで、実際に現場で活用できる手話通訳者養成プログラムへと発展させていくことが不可欠であると言える。

引用文献

- 赤堀仁美・赤堀美里・乗富和子・津山美奈子・福田友美子（2000）手話習得の違いが手話表現に及ぼす影響. 日本手話学会第26回大会予稿集, 56-57.
- Baker, C. & Cokely, D. (1980) *American Sign Language : A teacher's resource text on grammar and culture*. Linstok Press, Silver Spring.
- Barik, H. C. (1969) *A study of simultaneous interpretation*. Unpublished doctoral dissertation, University of North Carolina, Chapel Hill.
- Barik, H. C. (1971) A description of various types of omissions, additions and errors of translation encountered in simultaneous interpretation. *Meta*, 16, 199-210.
- Barik, H. C. (1973a) Simultaneous interpretation: temporal and quantitative data. *Language and Speech*, 16, 237-270.
- Barik, H. C. (1973b) Simultaneous interpretation: Qualitative and linguistic data. *Language and Speech*, 18, 272-297.
- Battison, R. (1978) *Lexical borrowing in American Sign Language*. Linstok Press, Silver Spring.
- ビュテル延増崇子 (1997) フランスの大学期間における会議通訳者養成. 東京外国語大学大学院修士論文.
- Cokely, D. (1986) Effects of lag time on interpreter errors. *Sign Language Studies*, 53, 341-376.
- Cokely, D. (1992) *Interpretation: A sociolinguistic model*. Linstok Press, Silver Spring.
- Davidson, P. M. (1992) Simultaneous interpreting research: past, present and future. *Interpreting Research*, 3, 23-42.
- Frishberg, N. (1990) *Interpreting: An Introduction*. Registry of Interpreters for the Deaf, Silver Spring, M.D.
- Gerver, D. (1971) *Aspects of simultaneous interpretation and human information processing*. Unpublished doctoral dissertation, University of Oxford, Oxford.
- Gerver, D. (1976) Empirical studies of simultaneous interpretation: A review and a model. Brislin, R. W. (Eds.), *Translation: Applications and Research*. Gardner Press, New York.

- Gile, D. (1994) Predictable sentence endings in Japanese and conference interpretation. *Interpreting Research*, 6, 9-25.
- Goldman-Eisler, F. (1972) Segmentation of input in simultaneous translation. *Journal of Psycholinguistic Research*, 1(2), 127-140.
- 船山仲也 (1985) 同時通訳の諸側面. *視聴覚外国語教育研究*, 8.
- 池田亜希子・木村晴美・竹内かおり・福田友美子・市田泰弘 (1999) 手話を学習する上でエラーの多かった単語の音韻的特徴. *日本手話学会第 25 回大会予稿集*, 80-81.
- 石原茂樹 (1994) 手話通訳とは何か. *日本語学*, 13, 36-45.
- 市田泰弘 (1994) 日本手話の文法と語彙. *日本語学*, 13, 25-35.
- 市田泰弘 (1997) ろう者と視覚 - 手話における視線の分析を通して -. *日本記号学会(編), 感覚変容の記号論, 記号学研究*, 17, 71-86.
- 市田泰弘 (1998) 日本手話の文法. *言語*, 27(4), 44-63.
- Johnson, K. (1991) Miscommunication in interpreted classroom interaction. *Sign language studies*, 70, 120-161.
- 亀井千秋 (1998) 日英同時通訳実証研究. *通訳理論研究*, 14, 96-103.
- 上久保恵美子・比企静雄・福田友美子 (1997) 聴覚障害者による言語媒体の場面に応じた使い分け 口話・手話・筆談と手話通訳者の有効性 . *特殊教育学研究*, 34(4), 11-18.
- 神田和幸 (1994) 手話学講義 手話研究のための基礎知識 . 福村出版.
- 神田和幸・藤野信行 (1996) 基礎からの手話学. 福村出版.
- Kato, M. (1987) A study of sign language writing system. *日本手話学会論文集*, 8, 13-38.
- 河内十郎 (1998) 手話の神経心理学的基盤. *言語*, 27 (4) , 84-91
- 河野純大・黒川隆夫 (1998a) 手話ニュースにおける表情の特性分析. *Human Interface News and Report*, 13, 287-292.
- 河野純大・黒川隆夫 (1998b) 手話ニュース通訳者の表情の構成要素に関する検討. *京都工芸繊維大学地域共同センター研究成果報告書*, 7, 9-14.
- 木佐敬久 (1997) 「放送通訳の日本語」受け手調査と話す速度の研究. 文部省科学研究費「国際社会における日本語についての総合研究」報告書, NHK 放送文化研究所.
- 木佐敬久 (1998) 放送通訳の聞きやすい速度とは? ビデオ調査による視聴者の反応 ,

- 放送研究と調査, 48(3), 40-63.
- 木佐敬久 (1999) 放送通訳の聞きやすい速度の研究 ビデオ調査による視聴者の反応 . 文部省科学研究費「国際社会における日本語についての総合研究」報告書, NHK 放送文化研究所.
- Klima, E., Bellugi, U. (1979) *The signs of language*. Harvard University Press, Cambridge.
- 小林薫 (1999) 英語通訳の勘どころ 体験的通訳論 , 丸善ライブラリ.
- 小栗山智 (2000) 放送通訳の訳出率 同時通訳と時差通訳の訳出率の比較研究 . 輔仁大学修士論文.
- 近藤正臣 (1994a) 初期の同時通訳研究 Henri Barik の場合(1). 通訳理論研究, 6, 43-53.
- 近藤正臣 (1994b) 初期の同時通訳研究 Henri Barik の場合(2). 通訳理論研究, 7, 26-39.
- Liddell, S. K. (1980) *American sign language syntax*. Mouton Publishers, Hague.
- 宮本一郎 (1999a) 韓国手話の収録調査について(上). 手話コミュニケーション研究, 33,24-27.
- 宮本一郎 (1999b) 韓国手話の収録調査について(下). 手話コミュニケーション研究, 34,49-56.
- 宮本一郎 (2000) 中国での手話の収録調査について. 手話コミュニケーション研究, 37,18-25.
- 水野的 (1993) 放送通訳の理論的課題 .通訳理論研究, 4, 31-37.
- 水野的 (1995) 日英同時通訳ノート. 通訳理論研究, 9, 4-21.
- 水野的 (1997a) ヨーロッパの最新通訳理論. 言語, 26(9), 40-46.
- 中野聡子・吉野公喜 (1999) 聾幼児の 3 次元物体の形態表記における手話表現の特徴. 心身障害学研究, 23, 51-61.
- 永田小絵 (1994) 日本語から中国語への同時通訳分析. 通訳理論研究, 7, 9-12.
- 永田小絵 (1996) 通訳訓練の外国語学習への応用.通訳理論研究, 11, 45-54.
- 永田小絵 (1997a) 日中同時通訳の伝達可能性とその限界について. 東京大学大学院総合文化研究科修士論文.
- 永田小絵 (1997b) 同時通訳・訳出の比較. 通訳理論研究, 13, 4-23.
- 日本手話学研究所 (1997) 日本語 - 手話辞典. 全日本聾啞連盟.
- 日本手話通訳士協会 手話通訳士実態調査委員会 (1994) 手話通訳者・奉仕員の養成・派遣

- 制度に関する調査および手話通訳士実態調査報告. 全日本聾啞連盟.
- Nishio, M. (1986) A brief introduction to the mechanics of simultaneous interpreting with special reference to Japanese-English interpretation. *The language Teacher*, 10(2), 4-12.
- 西村知美 (1996) 大学における通訳授業の問題と今後の方向性. *通訳理論研究*, 10, 63-77.
- 野村みどり (1990) 大学におけるバリア・フリー環境 - 聴覚障害学生の受けた高校までの教育と大学におけるサポートシステム -. *日本福祉大学研究紀要*, 81(1), 101-125.
- 乗富和子・赤堀仁美・赤堀美里・津山美奈子・福田友美子 (2000) 高齢聾者と若年聾者の手話表現の違い. *日本手話学会第 26 回大会予稿集*, 32-33.
- 小田侯朗 (1987) 手話通訳における日本語情報の表現様式変容に関する研究. *国立特殊教育総合研究所研究紀要*, 14, 91-98.
- 岡野美津子 (1999) 「放送通訳」における情報の選択性 「重要性」の観点からの分析. 大阪大学大学院言語文化研究科修士論文.
- 奥野英子 (1998) 手話奉仕員・手話通訳者・手話通訳士の養成体制の構築に向けて. *ノーマライゼーション*, 18(8), 53-57.
- 大泉溥 (1994) 聴覚障害青年と高等教育の課題 - 聴覚障害学生の自立とサポート・システムの検討. *障害者問題研究*, 21(4), 332-340.
- 太田康晴 (1997) 「パソコン要約筆記」ボランティア養成の視点と方法. *スクールアメニティ*. 12, 8, 118-122.
- Oller, D. K. & Eilers, R. E. (1988) The role of audition in infants babbling. *Child development*, 59, 441-449.
- Petitto, L. A. & Marentette, P. F. (1991) Babbling in the manual mode: Evidence for the Ontogeny of Language. *Science*, 251, 1493-1496.
- Programs and Services for the Deaf (2001) Programs for training interpreters. *American Annals of the Deaf*, 145(2), 190-197.
- 佐伯哲夫 (1975) 現代日本語の語順. 笠間書院.
- 阪倉篤義 (1966) 語構成の研究. 角川書店.
- 関根智美・赤堀仁美・福島和子・福田友美子(1998)日本手話における口形表現の役割. *日本手話学会第 24 回大会予稿集*, 82-85.
- Shaw, R. (1987) Determining register in sign-to-English interpreting. *Sign Language*

- Studies, 57, 295-322.
- 新崎隆子 (1996) 通訳の評価について. 通訳理論研究, 11, 55-65.
- Siple, L. (1993) Interpreter's use of pausing in voice to sign transliteration. Sign Language Studies, 79, 147-180.
- Siple, L. (1995) The use of addition in sign language transliteration. Unpublished doctoral dissertation, University of New York, Buffalo, NY.
- Siple, L. (1997) Historical development of the definition of transliteration. Journal of interpretation, 77-100.
- 染谷泰正 (1996a) 日本における通訳者訓練の問題点と通訳訓練に必要な語学力の基準. 通訳理論研究, 10, 46-58.
- 染谷泰正 (1996b) 通訳訓練の手法とその一般語学学習への応用について. 通訳理論研究, 11, 27-44.
- 白澤麻弓・徳田克己 (1999a) 大学における聴覚障害学生に対するサポートの内容に関する研究 1. 障害理解研究, 3, 41-50.
- 白澤麻弓・徳田克己 (1999b) 大学における聴覚障害学生に対するサポートの内容に関する研究 2. 実践人間学研究, 1, 27-34.
- 白澤麻弓・徳田克己 (1998) 大学における聴覚障害学生に対するサポートの内容に関する研究, 筑波大学人間学類心身障害学主専攻卒業論文.
- Solow, S. N. (1999) Sign language interpreting. Linstok press, Silver Spring, MD.
- Stauffer, L. K. & Viera, J. A. (2000) Transliteration: A comparison of consumer needs and transliterator preparation and practice. Journal of interpretation, 61-82.
- Stewart, D.A., Schein, J.D., & Cartwright, B. E. (1998) Sign language interpreting Exploring it's art and science . Allyn and Bacon, Needham Heights, MA.
- Stoke, W. C. (1960) Sign language structure: An outline of the visual communications systems of the American deaf. Studies in Linguistics Occasional Papers 8. Department of Anthropology and linguistics, University of Buffalo, New York. (Reprinted Silver Spring, Linstok Press, 1978).
- Stokoe, W.C., Casterline, D.C., & Croneberg, C.G. (1965) A dictionary of American sign language on linguistic principles. Gallaudet College Press, Washington D.C.
- Strong, M. & Rudser, S. F. (1985) An assessment instrument for sign language

- interpreters. *Sign Language Studies*, 49, 344-362.
- Strong, M. & Rudser, S. F. (1992) The Subjective Assessment of Sign Language Interpreters. *Sign language interpreters and interpreting*, 1-14.
- Sutton, V. (1978) Sign writing for everyday use. The Center for Sutton Movement Writing.
- 手話通訳士育成指導者養成委員会 (1998) 手話通訳の理論と実践. 全日本聾唖連盟.
- 手話通訳認定基準等策定検討委員会 (1986) 手話通訳認定基準等策定検討委員会中間報告.
- 武居渡 (1997) ろうの両親を持つ乳幼児の手話言語獲得過程に関する研究. 筑波大学大学院心身障害学研究科中間評価論文.
- 武居渡・鳥越隆士 (2000) 聾児の手話言語獲得過程における非指示ジェスチャーの役割. 発達心理学研究, 11(1), 12-22.
- 武居渡・四日市章(1998)乳児の指差しの発達的变化 - 手話言語環境にある聾児と聴児の事例から -. 心身障害学研究, 22, 51-61.
- 竹内かおり・木村晴美・池田亜希子・福田友美子・市田泰弘 (1999) 学習者の手話文におけるうなずきのエラー. 日本手話学会第 25 回大会予稿集, 84-87.
- Taylor, M. M. (1993a) Development of a diagnostic assessment instrument for English to American Sign Language interpretation. Doctoral dissertation, University of Alberta.
- Taylor, M. M. (1993b) Interpretation skills: English to American Sign Language. *Interpreting consolidated*, Canada.
- 鳥飼玖美子 (1996) 日本における通訳教育の可能性. 通訳理論研究, 13, 39-53.
- 鳥越隆士 (1996) 手話学習と通訳. 神田和幸・藤野信行(編), 基礎からの手話学. 福村出版, 85-102.
- 鳥越隆士・島村聡・大湾雅雄 (1997) 地域社会における聴覚障害者の手話使用と社会参加の関わり-那覇市域聴覚障害者生活実態調査から-. ろう教育科学, 39(1), 13-24.
- 鳥越隆士・小川珠実 (1997) 手話でいかに会話が進行するか - 発話交代における発話の重なりを中心に -. 手話学研究. 14(1), 13-20.
- 長南浩人 (1999) 手話表現能力尺度作成の試み. 日本手話学会第 25 回大会予稿集, 76-79.
- 長南浩人 (2001) 聴覚障害者の日本語指導における手話の使用に関する実験的研究. 平成 13 年度筑波大学学位論文.

- Valli, C. & Lucas, C. (2000) *Linguistics of American Sign Language : An Introduction, Third Edition*. Gallaudet University Press, Washington, D. C.
- 若松利昭 (1989a) 手話の情報伝達機構について 2. 日本福祉大学研究紀要第 2 分冊, 78, 7-84.
- 若松利昭 (1989b) 手話の情報伝達機構について 3. 日本福祉大学研究紀要第 2 分冊, 79, 82-49.
- 若松利昭 (1990a) 手話の情報伝達機構について 4. 日本福祉大学研究紀要第 1 分冊, 81, 191-203.
- 若松利昭 (1990b) 手話の情報伝達機構について 5. 日本福祉大学研究紀要第 1 分冊, 84, 110-89.
- 若松利昭 (1991) 手話の情報伝達機構について 6. 日本福祉大学研究紀要第 1 分冊, 85, 100-88.
- 八島智子 (1985) 通訳術の分析.河野守夫・沢村文雄・編,Listening & Speaking - 新しい考え方,176-193.
- 米川明彦 (1984) 手話言語の記述的研究. 明治書院.
- 全日本聾啞連盟手話通訳制度調査検討委員会 (1985) 手話通訳制度調査検討報告書. 全日本聾啞連盟.
- 全国手話通訳問題研究会 (1996) 手話通訳者の実態と健康についての全国調査.
- 全日本聾啞連盟 (1998) 手話通訳の理論と実際. 全日本聾啞連盟.
- 全日本聾啞連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団 (1998) 民法 969 条改正をめざして - 公正証書遺言と聴覚障害者 - .

参考文献

- Brasel, B. B. & Brasel, K. E. (1974) The R.I.D. scoring system and how it works. *Journal of rehabilitation for the deaf*, 7(3), 76-79.
- Brasel, B. B., Montanelli, D. S., & Quigley, S. P. (1974) The component skills of interpreting as viewed by interpreters. *Journal of Rehabilitation for the Deaf*, 7(3), 20-27.
- Brislin, R. W. (1976) *Translation : Applications and Research*. Gardner Press, New York.
- Fleischer, R. & Cottrell, M. (1976) Sign language interpretation under four interpreting conditions. Murphy, H. J. (Eds.) *Selected readings in the integration on deaf students at CSUN, California State University, Northridge, Center on Deafness*.
- Gambier, Y., Gile, D. & Taylor, C. (1997) *Conference Interpreting: Current Trends in Research*, John Benjamin's Publishing Company, Amsterdam.
- Gerver, D. & Sinaiko, W. H. (1978) *Language interpretation and communication*. Plenum Press, New York.
- Gile, D. (1995) *Basic concepts and models for interpreter and translator training*. John Benjamin's, Amsterdam.
- 本名信行・神田和幸・小田候朗・加藤美保子 (1984) 手話の表記法について. *手話学術研究会論文集*, 7, 1-11.
- 船山仲也 (1996) 同時通訳における処理単位について. *通訳理論研究*, 10, 4-13.
- 船山仲也 (1997) 同時通訳と認知言語学. *言語*, 26(9), 28-34.
- Ingram, R. M. (1974) A communication model of the interpreting process. *Journal of Rehabilitation for the Deaf*, 7(3), 3-9.
- Ingram, R. M. (1988) Interpreters' recognition of structure & meaning. *Sign Language Studies*, 58, 21-36.
- 石田久美子・平井明代 (1998) シャドーイング指導上の留意点. *日本時事英語学会関西支部同時通訳研究分科会(編), シャドーイングの応用研究*, 29-35.
- 市田泰弘・木村晴美 (1998) 手話教育におけるナチュラルアプローチ. *手話学研究*, 14(2), 55-59.

- Judith, A.V., Lidia, K.S. (2000) Transliteration: The consumer's Perspective. *Journal of Interpretation*, 83-100.
- 神田和幸 (1999) 手話学の現状. *学燈*, 96(7), 8-11.
- 笠原多恵子 (1998) シャドーイング時の誤った発話のタイプについての考察. *日本時事英語学会関西支部 同時通訳研究分科会(編), シャドーイングの応用研究*, 47-61.
- 河野純大・孝橋泰信・黒川隆夫 (1996) ニュース手話通訳における瞬き、凝視、うなずきとそれらの意味の分析. *Human Interface News and Report*, 11, 435-440.
- 河野純大・黒川隆夫 (1997) 程度修飾語のついた手話単語にともなう表情の分析と手話画像への導入. *Human Interface シンポジウム論文集 13th*, 21-23.
- 河野純大・仙波和人・黒川隆夫 (1997) 手話画像への顔面運動の導入とその効果. *Human Interface News and Report*. 12, 357-362.
- 北原照代・峠田和史・西山勝夫 (1996) 連続手話通訳作業の負担に関する実験的研究. *産業衛生学雑誌*, 38, 59-69.
- Kyle, J. G. & Woll, B. (1985) *Sign language: The study of deaf people and their language*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 黒川隆夫・河野純大・孝橋泰信 (1997) 手話ニュースにおける通訳者の瞬き、凝視、うなずき、頭部運動の分析とそれらの正規規則. *京都工芸繊維大学地域共同センター研究成果報告書*, 6, 9-16.
- Livingston, S., Singer, B., and Abrahamson, T. (1994) Effectiveness compared: ASL interpretation vs. transliteration. *Sign Language Studies*, 82, 1-54.
- 松崎理恵子 (1991) 手話通訳の技法. *手話通訳の基礎 - 手話通訳士を目指して -*, 第一法規, 307-321.
- 南不二男 (1974) *現代日本語の構造*. 大修館書店.
- 南不二男(編) (1979) *講座言語 第3巻 言語と行動*. 大修館書店.
- 南不二男 (1993) *現代日本語文法の輪郭*. 大修館書店.
- 南不二男 (1997) *現代日本語研究*. 三省堂.
- 水野的 (1994a) 同時通訳動態モデルの展開(). *通訳理論研究*, 7, 13-25.
- 水野的 (1994b) 同時通訳動態モデルの展開(). *通訳理論研究*, 8, 9-26.
- 水野的 (1996) 逐次通訳の理論のために. *通訳理論研究*, 11, 16-26.
- 水野的 (1997b) [意味の理論]の批判と通訳モデル. *通訳理論研究*, 13, 53-67.

- Moser-Mercer, B., Lambert, S., Daro, V., & Williams, S. (1977) Skill components in simultaneous interpreting. In Gambier, Y., Gile, D., & Taylor, C. (Eds.), *Conference Interpreting: Current Trends in Research*, John Benjamin's Publishing Company, Amsterdam, 133-148.
- Murphy, H. J., Fleischer, R. (1976) Effectiveness compared with test score of ASL interpretation and transliteration. In Murphy, H. J. (Eds.) *Selected readings in the integration of deaf students at CSUN, California State University, Northridge, Center on Deafness*.
- 中条晶子 (1992) 健聴成人における日本手話習得過程の分析. 東京学芸大学大学院障害児教育専攻修士論文.
- Nida, E. A. (1961) *Bible translating : an analysis of principles and procedures, with special reference to aboriginal languages*. United Bible Societies, London. 沢登春仁 升川潔訳 (1973) 翻訳 : 理論と実際. 研究社.
- Nida, E. A. (1964) *Toward a science of translating*. Brill, Leiden. 成瀬武史(1972) 翻訳学序説. 開文社出版.
- 小田侯朗 (1982) 健聴者の手話学習における手話単語認知の二面性. 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 29, 255-262.
- 小田侯朗 (1995) 手話の言語発達と言語能力評価法に関する研究の動向, アメリカ聾教育と手話 実践的位置づけと研究動向 . 国立特殊教育総合研究所聴覚・言語障害教育研究部, 平成 6 年度文部省科学研究費補助金研究報告書, 19-30.
- 小田侯朗 (1995) 手話の言語力評価法試作に向けて. 国立特殊教育総合研究所聴覚・言語障害教育研究部, 平成 6 年度文部省科学研究費補助金研究報告書, 93-102.
- 小田侯朗・星名信昭 (1984) 手話単語の造語形態に関する一考察. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 11, 45-51.
- 太田康晴 (1998) 「聞こえ」を支えるボランティア パソコン要約筆記入門 . 人間社.
- 太田康晴 (1999) 要約筆記への招待 活動現場の視点から . 月刊言語, 28, 9, 73-79.
- Patrie, C.J. (1992) *Fingerspelled word recognition skills in sign language interpreters: A comparison between novice and experienced interpreters*. *Journal of interpretation*, 51-90.
- Pinkerton, Y. (1996) 通訳者には編集が許されるか 日本とオーストラリアの通訳原理の比

- 較 . 通訳理論研究, 11, 1-15.
- Riekehof, L. L. (1974) Interpreter training at Gallaudet college. *Journal of rehabilitation for the deaf*, 7(3), 47-52.
- Roy, C. B. (1992) A sociolinguistic analysis of the interpreter's role in Simultaneous talk in a face-to-face interpreted dialogue. *Sign Language Studies*, 74, 21-61.
- Rudser, S. F. (1986) Linguistic analysis of changes in interpreters' language 1973-1985. *Sign Language Studies*, 53, 332-340.
- Rudser, S. F. and Strong, M. (1986) An examination of some personal characteristics & abilities of sign language interpreters. *Sign Language Studies*, 53, 315-331.
- 佐々木健一 (1992) 翻訳原論(特集：日本文化における翻訳). *文學*, 3(1), 31-43.
- Schein, J. D. (1972) Principles of interpreting for deaf people. *Journal of Rehabilitation for the Deaf*, 6(2).
- Seleskovitch, D. (1978) Interpreting for international conferences. Pen and Booth, Washington, D. C.
- 清水久美子・高橋信雄 (1997) 通常小学校における聴覚障害児への援助 - 手話通訳を通して -. *特殊教育学会大会論文集*, 86-87.
- 冷水来生 (1980) 手話研究の概観, *東京大学教育学部紀要*. 20, 325-334.
- 白澤麻弓 (1999) 手話通訳作業に関する心理言語学的分析 その1 手話通訳作業の記述とその分析 -, *日本手話学会第25回大会予稿集*, 54-57.
- 白澤麻弓 (2000) 手話通訳作業に関する心理言語学的研究 その3 訳出パターンおよび通訳中に用いられている手話の特徴, *日本手話学会第26回大会予稿集*, 28-31.
- 白澤麻弓 (2001) 日本語から手話への変換作業の分析 言い換えを中心に , *日本手話学会第27回大会予稿集*, 56-59.
- 白澤麻弓 (2002) 聴覚障害者の手話通訳に対する期待の内容. *日本手話学会第28回大会予稿集*, 18-21.
- 白澤麻弓・斎藤佐和 (2000) 手話通訳作業に関する心理言語学的分析 その2 量的側面からみた手話通訳作業の特徴 , *第38回特殊教育学会発表論文集*, 234.
- 白澤麻弓・斎藤佐和 (2001a) 日本語 - 手話同時通訳に関する文献的考察 音声同時通訳研究との比較から . *心身障害学研究*, 25, 197-209.
- 白澤麻弓・斎藤佐和 (2001b) 手話通訳作業に関する心理言語学的分析 その4 日本語

- から手話への変換作業を中心に , 第 39 回特殊教育学会発表論文集, 262.
- 白澤麻弓・斎藤佐和 (2002) 日本語 - 手話同時通訳における作業内容の分析. 特殊教育学研究, 40(1), 25-39.
- Stokoe, W. C., Casterline, D. C., & Croneberg, C. G. (1976) A dictionary of American Sign Language on linguistic principles. Linstok Press, Silver Spring, MD.
- 玉井健 (1998) シャドーイングの背景理論と評価法. 日本時事英語学会関西支部 同時通訳研究分科会(編), シャドーイングの応用研究, 1-15.
- 玉井健・笠原多恵子・西村友美 (1998) シャドーイングによる英語の誤りに一定の傾向はあるか. 日本時事英語学会関西支部 同時通訳研究分科会(編), シャドーイングの応用研究, 37-45.
- 谷本秀康 (1995) 異文化間コミュニケーションと通訳者の役割 < 同時通訳の技法分析と実際 > . 英潮社.
- 峠田和史 (1992) 専任手話通訳者の頸肩腕障害. 総合リハビリテーション, 20(5), 385-388.
- Taylor, C. & Elliot, R. N. (1994) Identifying areas of competence needed by educational interpreters. Sign language studies, 83, 179-190.
- 長南浩人 (1994a) ろう学校高等部生徒の手話と日本語の副詞的表現の使用に関する研究. 聴覚言語障害, 23(3), 121-129.
- 長南浩人 (1994b) ろう学校生徒の手話表現に関する研究. 聴覚言語障害, 23(2), 65-73.
- 長南浩人 (1997) 手話を利用した日本語の語彙指導に関する事例研究 - 副詞の指導について -. 特殊教育学研究, 34(5), 91-98.
- 植村英晴 (2001) 聴覚障害障害者福祉・教育と手話通訳. 中央法規.
- Viera, J. A., & Stauffer, L. K. (2000) Transliteration: A consumer's perspective. Journal of interpretation, 83-101.
- 鷲尾純一 (1995) 手話の言語発達とその言語能力評定法に関する基礎的研究. 国立特殊教育総合研究所聴覚・言語障害教育研究部, 平成 6 年度文部省科学研究費補助金研究報告書.
- Wilber, R. B. (1979) American sign language and sign systems, University Park Press, Baltimore.
- 全国手話通訳問題研究会 (1993) いきいき手話通訳 ハート to ハート .
- 全国手話通訳問題研究会 (1999) 手話通訳者の労働と健康.

全日本聾啞連盟・全国手話通訳問題研究会 (1994) みんなでめざそうよりよい手話通訳.

資料 1 : 手話通訳の期待に関する質問紙調査 質問

あなたは普段、講演会や講義で情報を得るために、手話通訳を頼んだり、見たりしていることと思います。手話通訳に対する要望や好みは、ひとりひとりさまざまでいろいろな意見があると思いますが、あなた自身は、どんな風に通訳してほしいですか？ 次の項目のうち、あなた自身の考えに「とてもよくあてはまる」から「あてはまらない」まで合うものにをつけてください。

	あてはまらない	あてはまらない	どちらかと言えば	どちらかと言えば	あてはまる	あてはまる	とてもあてはまる
例) 手話が読み取りやすい							
=====							
原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい							
講演者が日本語として何と言ったのかをきちんと伝えてほしい							
ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい							
話されている情報を 100%漏らさずに伝えてほしい							
手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えてほしい							
通訳者自身が自分の解釈を付け加えたりしないでほしい							
通訳者が情報を選ぶのではなく、原文に忠実に訳してほしい							
情報に間違いやずれを生じさせないでほしい							
話の要点以外に細かいところまで内容を伝えてほしい							
必要な部分を落とさずに伝えてほしい							
必要な語句を省略しないでほしい							
文章の途中で途切れないでほしい							
講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい							
難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい							
細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい							
文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい							
語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい							
日本語にこだわらずにその場に合った手話表現を使ってほしい							
原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい							
意味をよりはっきり伝えるために接続詞や語句を付け加えてほしい							
専門用語などは日本語として伝えてほしい							
長い文章は途中で切ったり、2 つ以上の文をまとめて表してほしい							

忠実に訳したり、まとめながら訳すなど臨機応変に使い分けてほしい

手話として理解しやすいように語順を入れ替えてほしい

通じているかどうかろう者の表情などを見て判断してほしい

文ごとの切れ目をはっきりと表してほしい

場面や話題が変わったことをはっきり伝えてほしい

話の要点を強調して伝えてほしい

重要な部分と補足的な部分の表現に強弱をつけてほしい

たくさんの手話語彙^{ごい}を身に付けてほしい

話の中の何人かの登場人物を演じ分けてほしい

物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい

同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい

空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい

まゆのうごきやうなずき、表情などの非手指動作を使用してほしい

表情を使って程度や感情を表してほしい

手話にあわせて日本語対応でない口形を使用してほしい

手話に強弱やリズムをつけてほしい

日本語にとらわれずに手話として自然なスピードで表してほしい

見ていて疲れない表現をしてほしい

必要以上にたくさんの手話をあらわさないでほしい

手話表現の無駄な癖^{くせ}をなくしてほしい

オーバーアクションにならないでほしい

ひとつひとつの表現をはっきりと表してほしい

文の途中で不自然に止まらないでほしい

訂正、手話の間違いを減らしてほしい

見ていて自然に頭に入ってくるような通訳をしてほしい

話し手がどういう雰囲気^{ふんいき}で話しているのかを伝えてほしい

その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えてほしい

その場の雰囲気を漏らさず伝えてほしい

親しみやすさが感じられる通訳をしてほしい

謙虚な姿勢をもって通訳をしてほしい

一生懸命さが伝わってくる通訳をしてほしい

安心してみていられる通訳をしてほしい

圧迫感を与えない通訳をしてほしい

あなた自身のことについて差し支えない範囲でご記入ください。

1. あなたは日常的に主にどのようなコミュニケーション手段を用いていますか？下の選択肢の中からあてはまるものを選択して、番号を記入してください。答えはいくつあってもかまいません。

聴覚障害者同士の場合 () /その他： ()
手話のわかる聴者に対して () /その他： ()
手話のわからない聴者に対して () /その他： ()

日本手話	読話	筆談
日本語対应手話	聴覚	身振り・表情
発声	キュード	

2. あなたはこれまでどちらで教育を受けてこられましたか？下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選択して、番号を記入してください。

教育相談 ()
幼稚部 ()
小学部 ()
中学部 ()
高等部 ()
大学 ()

ろう学校
地域の学校
難聴学級
医療機関
その他

3. 聴力の程度はどのくらいですか？ (右： dB)(左： dB)
4. 手話通訳はどのくらいの頻度で利用されていますか？ (年/月/週に 回程度)
5. 主にどのような場面で手話通訳を利用されますか？(主催者によって通訳者が準備されている場合も含みます)？あてはまるものに をつけてください。

医療 / 職場などの研修 / 職場などの会議 / 大学の講義 / 学会 / 講演 / 式典 / 電話 / 面接 / PTA / 福祉交渉 / その他 ()

ご協力ありがとうございました。

資料2：手話通訳に対する期待充足度の測定 質問

あなた自身のことについてご記入ください。

尚、記入いただいた内容については研究以外の目的で使用されることはありません。また、回答の取り扱いについては十分に留意し、個人のプライバシーが漏れたり、個人が特定されるような形での公表は行いません。また、答えることに抵抗のある項目については記入しなくてもかまいませんので、差し支えのない範囲でお答えいただければ幸いです。

6. 性別 ()男性 ()女性

7. 年齢 () 10 歳代

() 20 歳代

() 30 歳代

() 40 歳代

() 50 歳代

() 60 歳代以上

8. 平均聴力 (dB)

9. これまでに手話講座や手話通訳者養成講座等で講師を担当されたことがありますか？

() ない

() 手話通訳者養成講座で講師を担当したことがある

あると答えた方 () 単発の講座を数回

() 10 回以上のコースを 1~2 回

() 10 回以上のコースを 3~4 回

() 10 回以上のコースを 5 回以上

() 手話奉仕員養成講座で講師を担当したことがある

あると答えた方 () 単発の講座を数回

() 10 回以上のコースを 1~2 回

() 10 回以上のコースを 3~4 回

() 10 回以上のコースを 5 回以上

() 手話サークルなどの場で講師を担当したことがある

あると答えた方 () 単発の講座を数回

() 10回以上のコースを1~2回

() 10回以上のコースを3~4回

() 10回以上のコースを5回以上

10. これまでどちらで教育を受けてこられましたか？下の選択肢の中からあてはまるものを選択して、番号を記入してください。複数の期間に在籍していた場合は、主なものを1つ記入してください。

教育相談 ()

幼稚部 ()

小学部 ()

中学部 ()

高等部 ()

大学・短大 ()

専攻科・専門学校等 ()

ろう学校(技短を含む)

地域の学校(大学を含む)

難聴学級

医療機関

なし

11. 日常的に主にどのようなコミュニケーション手段を用いていますか？下の選択肢の中から最もよく用いる順に3つずつ選択し、番号を記入してください。

聴覚障害者同士の場合 (1: 2: 3:)

手話のわかる聴者に対して (1: 2: 3:)

手話のわからない聴者に対して (1: 2: 3:)

日本手話(伝統的手話)

聴覚口話

身振り・表情

中間的手話

キュード

その他

日本語対应手話

筆談

12. 手話通訳はどのくらいの頻度で利用されていますか？（主催者によって通訳者が準備されている場合も含まます）

- ほとんど利用しない
- 年数回利用する
- 月に1～3回利用する
- 週に1～2回利用する
- 週3回以上利用する

13. 主にどのような場面で手話通訳を利用されますか？頻繁に用いるものに、ときどき用いるものに、ほとんど用いないものに×をつけてください。（主催者によって通訳者が準備されている場合も含まます）

- | | |
|----------------------------------|--|
| <input type="checkbox"/> 医療 | <input type="checkbox"/> 式典 |
| <input type="checkbox"/> 職場などの研修 | <input type="checkbox"/> 電話 |
| <input type="checkbox"/> 職場などの会議 | <input type="checkbox"/> 面接 |
| <input type="checkbox"/> 大学の講義 | <input type="checkbox"/> PTA、授業参観 |
| <input type="checkbox"/> 学会 | <input type="checkbox"/> 福祉交渉 |
| <input type="checkbox"/> 講演 | <input type="checkbox"/> その他（ ） |

これから提示する6名の手話通訳者の表現を見て、各通訳者について次の観点で評価をしてください。

	あてはまらない	あてはまらない	どちらかと言えば	どちらともいえない	あてはまる	どちらかと言えば	あてはまる	とてもあてはまる
1. 安心してみられている								
2. その場の雰囲気漏らさず伝えている								
3. その場で何が話されているのかをリアルタイムに伝えている								
4. 見ていて自然に頭に入ってくる								
5. 訂正や手話の間違いがない								
6. 手話表現の無駄な癖がない								
7. 眉の動きやうなずき、表情などの非手指動作を使用している								
8. 同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化がある								
9. 手話に強弱やリズムがある								
10. 表情を使って程度や感情を表している								
11. 物の形や特徴をとらえて映像的に表現している								
12. 空間を活用して主語や目的語を明確に表示している								
13. 文章をアレンジしてわかりやすく伝えている								
14. 講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えている								
15. 細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示している								
16. 難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えている								
17. 語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えている								
18. 長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表している								
19. 原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えている								
20. 手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えている								
21. 話されている情報を100%漏らさずに伝えている								
22. 原文の言い回しをそのまま忠実に伝えている								
23. ひとつひとつ日本語にそった口形を表している								
24. 必要な語句を省略していない								
25. 情報に間違いやずれが生じていない								

この通訳者に対して、全体的にどのような印象を持ちましたか？

(大変よい - よい - どちらともいえない - よくない - とてもよくない)

あなた自身は手話通訳に対してどのような考えをお持ちですか？あてはまるものにつけてください。

	あてはまらない	あてはまらない どちらかと言えば	どちらともいえない	あてはまる どちらかと言えば	とてもあてはまる
1. 安心してみていただける通訳をしてほしい					
2. その場の雰囲気漏らさず伝えてほしい					
3. その場で何が話されているのかリアルタイムに伝えてほしい					
4. 見ていて自然に頭に入ってくる通訳をしてほしい					
5. 訂正や手話の間違いを減らしてほしい					
6. 手話表現の無駄な癖を減らしてほしい					
7. 眉の動きやうなずき表情などの非手指動作を使用してほしい					
8. 同じ手話でも繰り返しや強弱などの変化をつけてほしい					
9. 手話に強弱やリズムをつけてほしい					
10. 表情を使って程度や感情を表してほしい					
11. 物の形や特徴をとらえて映像的に表現してほしい					
12. 空間を活用して主語や目的語を明確に表示してほしい					
13. 文章をアレンジしてわかりやすく伝えてほしい					
14. 講演者の伝えたいことがわかるように説明を加えてほしい					
15. 細かな部分にこだわらず必要な情報だけを提示してほしい					
16. 難しい言い回しや用語をかみ砕いて伝えてほしい					
17. 語の繰り返しや余分な表現を省略して伝えてほしい					
18. 長い文章は途中で切ったり、2つ以上の文をまとめて表してほしい					
19. 原文のあいまいな表現は、明確な言葉に言い換えてほしい					
20. 手を止めずにできるだけたくさんの情報を伝えてほしい					
21. 話されている情報を100%漏らさずに伝えてほしい					
22. 原文の言い回しをそのまま忠実に伝えてほしい					
23. ひとつひとつ日本語にそった口形を表してほしい					
24. 必要な語句を省略しないでほしい					
25. 情報に間違いやずれを生じさせないでほしい					

謝 辞

論文の執筆に際し、終始熱心にご指導してくださった指導教官の斎藤佐和先生に心から感謝いたします。ご多忙中にもかかわらず、いつも懇切丁寧にご指導ご助言を下さり、手話通訳研究という新しい領域を手探りで進む私の道標となって下さいました。本当に有り難うございました。

副指導教官の四日市章先生、鳥山由子先生、および中間評価論文執筆の際に副指導教官を担当して下さった鷺尾純一先生には、折に触れ貴重なご意見を頂きました。先生方の温かい激励のお言葉には幾度となく励まされ、本研究を遂行する自信を与えていただきました。また、心身障害学系の諸先生方には、発表会をはじめ様々な機会にご指導をいただきました。先生方のご支援に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

データの収集にあたって快くご協力をいただいた筑波大学付属聾学校の浅野史行先生、筑波技術短期大学の石原保志先生、千葉県聴覚障害者連盟の増田伸也様はじめ多くの聴覚障害者の皆様には、研究を進める上で多くの励ましと貴重なアドバイスを頂きました。また、長時間にわたるインタビュー調査にご協力いただいた8名の聴覚障害者および手話通訳者の皆様、日常的に手話通訳を使用している立場として、あるいは同じ茨城の地で通訳活動をしている立場として、率直に語ってくださった鋭い意見は、本研究の重要な基盤となりました。それから論文執筆にあたって、精神的な支えになってくれた、同輩、先輩、後輩の皆さん、特に、同じ「手話」を基盤として研究を進めている中島亜希子さん、秋島康範君、菅原あさみさん、中熊朋也君には、研究の開始時から現在に至るまで、質問紙の印刷や発送作業、データ収集、分析とさまざまな形でお世話になりました。本当にどうも有り難うございました。

最後になりましたが、本研究に多大なるご理解と御協力をいただいた、手話通訳者の方々に心から御礼申し上げます。ここに博士論文が完成したのも、皆様のご協力があってこそと実感しております。手話通訳という分野は、まだまだ発展途上の状態にあります。本研究の結果が、手話通訳者の地位向上と、聴覚障害者に対する情報保障の質的向上のために、何らかの形で寄与できることを切に願っております。

平成 14 年 2 月